

F r o m d a w n t o d u s k .

蒼井綾

『幼馴染を見守るため。』

そう言って今井リサは手放したベースを再び握る。

いつも笑顔で陽だまりのような存在の彼女。

だが、そんな彼女には一部の人間しか知らないとある秘密を抱えていた。

——彼女の夜は、まだ始まったばかり。

目次

B e g i n n i n g of a n e w y e a r 3	351
B e g i n n i n g of a n e w y e a r 2	298
B e g i n n i n g of a n e w y e a r	237
p e c t i v e	186
Y o u r f i r s t i m p r e s s i o n f r o m m y p e r s	133
M e r r y C h r i s t m a s i n 2018	106
F o r g i v e n e s s i n b l u e	72
T h e s e c r e t s p r i n g b e g i n s	41
H a p p y b i r t h d a y d e a r m y s i s t e r	1
A m i s c h i e f p r e s e n t of a g e n i u s g i r l	1
第0章 T h e m e m o r a b l e p i e c e s 番外編	1

Happy Setu bun and small mischief : 406
A dream come true an unreacha ble dr
eam 436

第1章 Emotional Daybreak

夜はまだ、始まったばかり 499
時間は止まったまま 511
傍にいない 529
The shank of the evening 546
Second hand inclined 562
The day the sound disappeared 584
Anguish of twins 604
The appearance of ultramarine 630
Sunflower with hering 653

sister	899
Hidden real intention wandering	899
第2章	
Bluish color that goes muddy	867
Everything started	828
The first time to be spoken	801
第1.5章 Beyond the ultramarine sky Ak	801
Emotional Daybreak	772
Dawn of ultramarine and crimson	749
Concerto played by 25 girls	720
Disappearing ultramarine blue	698
Tenderness of the sunlight	679

Call my name with your voice. 《リクエスト》	1116
It laughs by my side at any time.	1084
From sunny doll to ultramarine.	1048
The curtain of the game rises.	1017
Misunderstandings between my sister	990
The sky is always connected.	964
Battle of girls playing music.	937

第0章 The memorable pieces -番外編-

A mischievous present of a genius girl

1

番外編第1話！

番外編ではリサ姉視点だけでなく、各キャラに分かれます。

今回は日菜ちゃん視点と紗夜ちゃん視点。

それでは『A mischievous present of a genius girl』

どうぞ！

※次回の話が更新される時に番外編枠を作成します。

！追記！

日間ランキング5位、ありがとうございます！

アキちゃんが退院してから数ヶ月経った今日、目の前にオレンジ色の液体が入っている2本の瓶がある。

これを手に入れたのは、単なる興味本位で始めたガールズバンドがきっかけだった。

そのガールズバンドで知り合った子に前に頼んでおいた物を貰って、あたしはとっても気分が良かった。

いつも、おねーちゃんに怒られる事が多いけど今回はきつと褒められると思うんだよねー。

あたしはオレンジ色の液体が入っている瓶を2本持ち、会う約束をしてるから家を飛び出した。

今日は確かおねーちゃんとりサチーはバンド練習だから帰りが遅いって言ってた。まあ、最悪の場合スマホで呼んで来てもらえば問題ないね。

「おーい、アキちゃん！」

クラスメイトのリサちーの双子であるアキちゃんが視界に見えて、あたしは手を大きく振りながら名前を呼ぶ。

リサちーよりも赤っぽい髪の毛で、短目に切り揃えられてるアキちゃんは気付いたみたいで笑って待っている。

あたしも双子だけど、おねーちゃんとは性格とか正反対だからリサちーと似てるアキちゃんはちょっとだけ羨ましい。

「日菜ちゃん、元気だね〜」

「うん！だって、アキちゃんに良いもの持ってきたんだ！絶対るん♪ってするよ！」

「良いもの？」

きよとんつと首を傾げるアキちゃんに、あたしは満面の笑みを浮かべてとりあえず近くのベンチに座る。

アキちゃんが入院してる間、あたし達は双子の妹って事で結構話したりして仲良くなった。

あたしとアキちゃんは性格とかが綺麗に反対だ。

あ、アキちゃんがおねーちゃんみたいってわけじゃないよ？

あたし達はお互いに羨ましかった、だから交代してみたいねーなんて話題が上がった時があった。

だからその願い、あたしが叶えてあげよう！って事だ。

「そう！これ、美味しいオレンジジュースなんだけどアキちゃんオレンジジュース好きだよね？」

「うん、好きだよ！」

「2本買って持ってきたからさ、一緒に飲もうよ！」

「おー、ありがとう！でも、私ゆきちゃんにスタジオに来るように呼ばれてるけど良かったら日菜ちゃんも来る？」

「え、いいの!？」

「うん、私が日菜ちゃんと会う約束してるって話したら『それなら一緒に来ればいいわ、紗夜には言っておくから』って」

予想外の事が起きてるけど、あたしにとっては一石二鳥だね！

これならおねーちゃんとりサチーをわざわざ呼ばずに済む。

「じゃあ2本しかないから今飲んじゃおうよ！」

「そうだね、零したりしたらせつかくくれたのに勿体ないね。じゃあ頂きます！」

「かんばーい！」

あたしはオレンジ色の液体が入っている瓶をアキちゃんに渡して、コツんつとぶつけて口に含んだ。

これをくれた本人、こころちゃん曰く『これを飲んだら飲んだ同士の意味が反対になるわ！これで笑顔になるなら嬉しいわよ！』って言ってた。

口を含むとオレンジジュースのような味が口に広がって、飲み込んでからアキちゃんの方を見ると何かを探るような顔をしてあたしに目を向けている。

多分、オレンジジュースじゃないってバレたみたい。

「……日菜ちゃん……？これって……」

けど、そこまでしか聞き取れなくてあたしは襲ってきた睡魔に身を任せた。

それから暫くして目を開けると、隣には眠ってるあたしの姿。

おお、成功したんだ！

「わあ、アキちゃんって背が高いとは思ってたけどすっごく高いんだ。いつもと違うや、でもやっぱりるん♪ってする！」

「……ん…日菜ちゃん…？」

「おはよう、アキちゃん！」

「おはようって……え、私が2人!？」

あちゃー、そっち方向に思考が行っちゃったかあ。

あたしは鞆から鏡を出して混乱してるアキちゃんに向けると、アキちゃんは声に

もならない悲鳴を上げてパクパクとあたしに何かを訴えてる。

可愛いなー！リサちーと同じぐらいるん♪ってする！

「な、何が起きてるのかな!？」

「さっき飲んだのは、こころちゃんから貰った葉なんだけ。効力自体はまだ試作品だから1日しかもたないってのが残念だけどね」

「し、試作品!？待って、え、じゃあ私達1日中入れ替わったままなの…?？」

「そーだよ！あ、それとねアキちゃん」

「…：何かな、日菜ちゃん」

「入れ替わったままって事を誰かに伝えたら、一生戻れないから気を付けてね?？」

「……………は？」

凄く低い声が出たね、アキちゃん。

因みに今言ったのは大嘘で、誰かに伝えても何の問題もないんだけどね。
ただこうした方がもっとなるん♪ってする気がするんだ！

「てことで、行こっか日菜ちゃん！」

「う、嘘でしょ…………。私が日菜ちゃん、日菜ちゃんが私って訳分からないよ…………」

大混乱してるアキちゃん（姿はあたし）の腕を引っ張って、おねーちゃん達が
いるCircleに向かう。

行く途中は運がいいのか悪いのか、知り合いには会わずにただ歩いていくだけ。
アキちゃんは何かをずっと考えてて何にも話してくれないからつまんない。

あ、でも普段とは違う目線の高さはすっごく楽しめた。

Circleの中に入ると、いつも通りに受付で立ってるまりなさんと目が合う。早速バレないようにしなきゃね。

「あら、日菜ちゃんとアキちゃん！今日はスタジオの予約入ってないからお姉さん達かな？」

「そうだよー！」

「ふふ、アキちゃん機嫌がいいね。何かいい事でもあったの？」

「うん！今ね、すっごくくるん♪ってしてるんだ」

「ちょ、日菜ちゃん…！私の話し方…！」

「…え？るん♪ってアキちゃんもするの？」

あ、やば。いつものように言っちゃったけど、あたしは今アキちゃんだった。まりなさんも不思議そうな目で見てくるし、隣にいるアキちゃんは慌ててる。普段のアキちゃんってどんな感じだったっけ。

「あ、あーアキちゃんは疲れてるんだと思います！お姉ちゃん達って何番ですか
!？」

「へ？あ、3番だよ。日菜ちゃんも何か普段と違う気がするけど、何かあったの？
？」

「な、何でもないよ…？お姉ちゃんの所に行こっか、アキちゃん…！」

「うん、そうだね。またね、まりなさん！」

完全に引き攣ってるアキちゃんに腕を引つ張られ、あたし達はまりなさんから離れる。

凄い疲れてるね、アキちゃん。あたしって体力あつたはずだけど、大丈夫かな？

「アキちゃん大丈夫？」

「……日菜ちゃんのせいだからね。はあ、バレないようにしなきゃ……」

「あ、3番の部屋だー。おねーちゃん！」

「ちよ、日菜ちゃん!？」

あたしは思いっきりドアを開ければ、中では何事かと固まってるRoseliaの皆の姿。

リサちーなんて自分の妹（中身はあたしだけど）が、こんな事するなんて思っ
てなかったみたいで驚いて手に持ってたペットボトルを落としてる。

「あ、アキ…？ど、どうしたの…？」

「ちょっと日菜ちゃん!? いったいどういうつも…り…。」

「あ、ごめんごめん。いつもの癖でさ。」

「気を付けてよ！今はいつもと違うんだから！」

「ちよ、ちょっと待って。日菜何か変だよ？いつものテンションは何処に行ったの…？」

「リサ…ちー、何でもないよ…？」

「……日菜、貴方熱でもあるんじゃないの？」

おねーちゃんは溜息をつきながら、リサちーと話すあたしの姿をしたアキちゃん
の元に駆け寄って額に手を当てる。

アキちゃんは突然の事で頭がパンクしてるみたいで、顔が真っ赤だ。

「さ、紗夜ちゃん!? 私は大丈夫だから！」

「……紗夜……ちゃん……？」

「日菜が紗夜にちゃん付けした……??」

「……アキ、日菜はさっきからこんな感じなのかしら？」

「あ、友希那ちゃん。こんな感じだったよ、あたしも変だと思っただけどね」

「……友希那ちゃん……？」

あ、これ不味いかも。

あたしもアキちゃんの話し方とか覚えてないから、いつも通りに話しちゃう。

そんな変なあたし達に、互いの姉は何かを感じたらしく楽器から離れてアキちゃんの前におねーちゃんが、あたしの前にはリサチーが立つ。

「日菜、貴方に質問があるの」

「ど、どうしたのおねーちゃん？」

「私が好きな物は何かしら？」

「ポテト…?」

「そうね、じゃあ苦手なもの?」

「にんじんだよね?」

「……どうやったら日菜って分かるのかしら」

え、おねーちゃん嘘でしょ。

好き嫌いだったら、Roseliaの皆だって分かるよね!
あのリサちーでさえも苦笑しちやってる。

「じゃあ、今度はアタシの番ね! ねえ、アキ」

「何ー?」

「…アタシとアキが好きなアーティストの名前は？」

「それ「遠藤ゆりかさん」……」

「日菜？」

「だったよね、アキちゃん…！」

無意識に答えたんだ、アキちゃん。

焦ったアキちゃんはあたしに同意を求めるように、目を向けてくるから頷いてリサちゃんに目を向けるけど、やっぱりまだ疑ってるっぽい。

今のは答えられたけど、あの速さは無理だね。

「…ねえ、本当にアキなの？」

「そうだよ、お姉ちゃん」

「うん、違うね。貴方は誰？」

え、待って。何で分かったの。

普段じゃ見ないリサちーの鋭い目が、あたしに突き刺さる。

あたしはアキちゃんに目を向けると、口パクで何かを伝えてきた。

なんだろうと思って読み取ると『私はリサと二人きりじゃない限り、お姉ちゃんって呼ばない！』との事。

これは、あたしの予想外だ。

「あちゃー、リサちーにバレちゃうか」

「……え？」

「あたしは日菜で、おねーちゃんの前にいるのがアキちゃんだよ」

「どういう事か説明してもらおうわよ、日菜」

傍から見たら氷川紗夜が今井アキに詰め寄ってるって感じなんだけど、全くもって逃げれそうにない。

あたしは全てを話すことにした、その結果目の前にいるおねーちゃんの顔はどんどん怖く険しくなっていく。

それから長い長いお説教が始まり、やっと終わった頃には一時間も経っていた。

「…ごめんなさい、アキさん。日菜の変な事に付き合わせてしまっ…」

「ううん、大丈夫だよ。何か、リサとは違う新しいお姉ちゃんが出来たって感じだから」

「それはそれで、アタシは複雑なんだけどなー…」

「それで今日はどうするのよ、日菜の話だと1晩は変わらないのでしょうか？」

「りんりん、漫画みたいだね！」

「そうだね…でも、大変そう…」

「あはは。じゃあ、今日は日菜がうちに来てアキは紗夜の方でお世話になったら？」

「アキさんがそれで大丈夫でしたら…」

「大丈夫だよ、宜しくね紗夜お姉ちゃん♪」

「あたしも宜しくね、リサちー♪」

アキちゃんはふにやつと笑ってそう言い、あたしは普段おねーちゃんにやるように抱きつきながら言う。

リサちーは「わぁ!?!もう、日菜ー!」なんて言いながらもしっかり受け止めてくれた。

おねーちゃんと言うと、あたしの姿でそんな風な態度を取られたことがないからどうすればいいのかわからないみたいで戸惑ってる。

可愛いおねーちゃん♪やっぱり、るん♪ってきた!

それから、Roseliaのバンド練習にあたし達も混ざったんだけど。

「日菜が…ベースを……」

「アキが…ギター弾いてる……」

何て言いながら、おねーちゃんとりサちーは練習してたけどね。

友希那ちゃんは溜息をついて、あちゃんと燐子ちゃんの2人もあたしとアキちゃんが異なる楽器を持っている光景に慣れてないから休憩毎の動揺が面白かった。

それからバンド練習が終わって、あたしはリサちー家に行くためにCircleで皆と別れて、友希那ちゃんとりサちーに着いていく。

因みにおねーちゃんと言うと、スタジオに出るまですごく怖い顔をしてたけど、あたしとはまた違ったアキちゃんという妹がいるから普段より怒られなかった。それから暫く歩いて、リサちーの家に着くと分かったのは友希那ちゃんって本当にリサちーの家と隣同士だった事。正直、冗談かと思ってたよ。

その後はお泊まり会的な感じで楽しんだ。

リサちーのお母さん達は仕事みたいだから、リサちーがご飯を作ってくれて予想してたより美味しくて、つつい食べ過ぎちゃったけどそれ以外は普段とそんな変わらなかった。

「おー、アキちゃんの部屋ってこんな感じなんだ」

「変な物はないはずだから、好きに使っても大丈夫だと思うよ？ 変なことさえしなればね」

「あたしの事をなんだと思ってるのさ、リサちー」

「今日こんな事しといて良く言えるね、日菜」

痛い所付いてくるなあ、まあでも新鮮な事が多くてるん♪ってしたから良いよね！

その後は、慣れない身体だからかすぐに疲れちゃって起きた時には自分の身体に戻ってた。

ただ、疑問なのは何であったしは自分の部屋じゃなくておねーちゃんの部屋で、し

かも抱き締められたまま寝てたのかだけは分からなかった。

おねーちゃんも顔を赤くして教えてくれなかったし、アキちゃんに今度聞いてみよっと♪

＊

日菜の悪ふざけに巻き込まれたアキさんと一緒に、私は今自分の家に帰っていた。今日は両親どちらも遅いからご飯もないし、何処かで食べて帰ろうかと悩んでいた時トントンっと肩を叩かれる。

「アキさん、どうかさされましたか？」

「あのね、ご飯ってどうするのかなくて」

「本当は母がいたら既に出来上がってるのですが、今日は帰りが遅いみたいで……。私もあまり料理は……その……」

「そうなんだ、じゃあ私が作ろうか？」

「え？」

「身体は日菜ちゃんだけど、中身は私だもん。1日お世話になるから駄目かな……？」

正直、料理のできない私としては有難い話だけれどアキさんにはこれ以上迷惑をかけたくないのが本音。

でも、このままファミレスに行くというのも申し訳なく感じる部分はある。

私は悪く思いながらも、アキさんをお願いする事にした。

「すみません、お願い出来ますか？」

「うん！リサみたいに上手くはないけれどね……」

「大丈夫ですよ、私も日菜も全くと言って料理は駄目なので。ここが我が家です、どうぞ」

「あ、お邪魔します」

鍵を開け、中にアキさんを入れてリビングに通してソファに座ってもらう。

お茶をコップに注いで持っていくと、慣れていない場所だからかソワソワしているアキさんを見て普段ではあまり見慣れない姿について笑ってしまう。

「アキさん、大したものではありませんがどうぞ」

「そんな、わざわざありがとう。紗夜ちゃんは人參以外に苦手なものってある？」

「いえ、特にありません」

アキさんは「良かったあ……」と、リサさんが1番好きだと言っていた笑顔で笑ってる。

日菜とはまた違った妹である彼女はともしっかりとされていて、日菜にも見習って欲しいなと密かに思ってしまったのは私の中で内緒にしておこう。

暫くはお互いの話やバンド練習の話に花を咲かせ、気付けば19時過ぎてしまっていた。

「紗夜ちゃん、キッチン借りるね」

「はい、どうぞ。では私はお風呂の準備をしてきますね」

「うん、お願いします！」

私はそれからお風呂の準備を済ませ、アキさんの様子を見ようとキッチンに向かえば鼻歌を歌いながら料理をするアキさんの姿。

この曲は…私達 Roselia の『Determination Symphony』じゃないかしら？

「あ、紗夜ちゃん。お願いがあるんだけどいいかな？」

「私ができる事でしたら」

「じゃあ、はい。あーん」

「……はい？」

「味見してほしいなって」

突然の慣れない行為に私は固まる。

小皿を片手にスープを掬ったスプーンを、私の口元に寄せてくるアキさんの姿。普段なら身長は私と差ほど変わらないが、今は日菜の身体だからか恋人感が凄い。

「あ、もしかしてこういうの初めて…?」

「え、ええ。リサさんとはいつもこのような事を?」

「うん、お互いに作ってお互いに味を確認したりしてるの。一応、紗夜ちゃんの口に合うかなって確認したかったんだけど……」

「そうでしたか、でしたら」

私はアキさんの手を優しく掴み、スプーンを口に含む。

口の中に広がるトマトの風味……ミネストローネかしら。

私の行動に予想外だったのか、アキさんはきよとんっとして固まっている。

アキさんでも余裕の表情がなくなる時はあるのね。

「ミネストローネでしょうか？とても美味しいです」

「うん！良かった、苦手だったらどうしようかと思ったんだ。あ、人参は入れてないから安心してね？」

「ええ、ありがとうございます」

「いえいえ、さて後は卵を焼くだけで終わるから待っててね」

「卵…ですか？」

邪魔にならないようにお皿を用意して、すぐに料理を盛れるように準備を進めていく。

テーブルにコップやフォーク、スプーンなどを並べてアキさんを待っているとキッチンから声が聞こえた。

「紗夜ちゃん、出来たよー！」

「オムライスですか？」

「そ！運んで食べちゃおっか」

「はい」

テーブルに運び、アキさんも座ったことを確認してから私は目を合わせる。

お互いに手を合わせて、軽く頷いてから「頂きます」と口にしてからスプーンを取って口に運ぶ。

口の中に広がるケチャップとふわふわの卵がとても美味しい。

「……どうかな？」

「とても美味しいです、今度料理を教えてくださいませんか？」

「もちろん！でも、リサの方が……」

「リサさんは確かに上手です、ですが私はアキさんにこのオムライスの作り方を教えてもらいたいのですが駄目でしょうか？」

「……うん、じゃあ今度作ろうね！」

それからテレビを見ながらご飯を食べ、お風呂が沸いたことを確認してから交互に入ってから、とりあえずで私の部屋へと招き入れた。

アキさんはソファに座った時と同じようにキョロキョロしていて、つい笑ってしまった。

「紗夜ちゃん？」

「いえ、何でもありません。ただ少しアキさんの見慣れない姿が沢山あって」

「あはは、私結構家にいる時とかはこんな感じだよ？良く、お姉ちゃ……リサに頼りきりだしね」

「そう言えば、どうしてリサさんの呼び方を変えているんですか？」

前から疑問に思ってたことを口にしてみた。

アキさんは少し困ったような表情を浮かべながらも、窓から星空を眺めながら口を開いた。

「……前まではお姉ちゃんって呼んでたんだけど、双子なのにお姉ちゃんって呼ぶのおかしいって言われた事があった」

「…:そうですか」

「だから、ちょっとだけ日菜ちゃんが羨ましい」

「え?」

「お姉ちゃんに甘えられて、我儘が言える日菜ちゃんが羨ましい。私に出来ないことを沢山出来るから」

「……アキさん」

そう言って星空から私へと視線を向けるアキさんの表情は、とても悲しそうで普段の笑顔とは掛け離れていた。

そんなアキさんを見て、私は少し恐怖を感じて目を離せなかった。

「なーんてね、リサには今も沢山迷惑かけてるからこれ以上の我儘は言わないけどね」

「……アキさん」

「うん？」

「今はアキさんではなく、外見は氷川日菜です。いつも我慢してる事を私にしてく

ださい」

「紗夜ちゃん、でも……」

「姉は妹の我儘に付き合うものですよ、妹は姉に甘えるのが普通でしょう？」

普段なら言わないし、日菜相手なら絶対に言わない。

ただ、いつも我慢したり自分を二の次にしてるアキさんは今日ぐらい甘えてもいいと思う。

リサさんでないのはあれかもしれないが、私だって姉なのだから。

「リサさんと違って、私は姉らしくないですが」

「そんな事ないよ、じゃあ我儘言ってもいい？」

「ええ、私ができる事でしたら」

「じゃあ一緒に寝たい！」

「ふふ、少し狭いかもしれませんがどうぞ」

私が先にベッドに入ってから奥に詰めて、アキさんが中に入るのを確認したら上に布団をかける。

外見は日菜なのに、意思はアキさんだからか普段見慣れてる表情なのに少し違う気がする。

「アキさん」

「はい？」

「もう少し近寄れますか？」

「へ？うん、寄れるけど狭くなるよ？」

「こうすれば問題ありません。……日菜みたいですが」

私はアキさんの頭の上に、自分の頭を乗せるように抱き締める。

アキさんは突然だったので驚いて「ひゃっ」と可愛い声を上げてる。

日菜はいつもこんな恥ずかしい事を、公共の場で私にやってたのね……。

「ふふ、温かい」

「そうですね」

「日菜ちゃんにバレたら嫉妬されちゃいそ」

「私はリサさんにバレたら怒られますね」

「……内緒だね」

「ええ。…アキさん眠くなってきましたか？」

「……うん」

反応が悪いなと思ったら眠くなってきたようだ。

無理させるのも悪いから、このまま寝かせてあげた方がいい。

私は慣れないものの頭をゆっくり撫でてあげる。

「おやすみなさい、アキさん」

「…おやすみ、お姉ちゃん」

「…ふふ、私は姉じゃないですよ」

規則正しい寢息で寝るアキさんに、私は静かに微笑みながら私も襲ってきた睡魔に身を任せた。

次の日、アキさんではなく日菜へと戻った日菜に普段以上にくつつかれてリサさんに妹を交換しようと申し出たぐらいに疲れた。

初の番外編ありがとうございました。

Twitterの方で『ガールズラブのタグがあるのに、イチヤイチャがないです。欲しい!!』と言われたので番外編の方で書きました。

紗夜ちゃん軽くキャラ崩壊。あかん。

では、また次回もよろしくお願いします！

Happy birthday dear
my sister

——今日という日がお姉ちゃんにとって

これからも幸せな日でありますように。

今日は私にとって一番大切な日。

自分にとってもそうだし、大好きな姉にとってもそうであって欲しいなと思う。

本当は、2年前のお祭りがあった1週間後に渡す予定だったプレゼント。

当時の事を考えると良く買えたなーなんて思ってしまうものだけど、高校2年生である今ではアルバイトをすればすぐに買えてしまうような物。

でも、私は入院してるからリサのようにアルバイトが出来る訳が無いから今の私

にとってもこのプレゼントは当時と同じ価値があると思う。

渡された本人がどう思うかは別だけど。

「……うーん、何か物足りない」

2年前にリサに渡していたなら充分かもしれないけど、今の私から渡すとなると何処か物足りない気がする。

だからと言って無断で病院を抜け出したりなんてしてら、リサが恐ろしい顔で来るのもわかってる。

本当は抜け出そうと何回か試みたけど、タイミング良く看護師さんたちが来るんだもん。抜けるに抜けられない。

時間を変えたってそうなんだから、抜けるなって神様から言われてるんじゃないかな。

「はあー、お姉ちゃんはバイトしてるから何でも買えるんだよね……。これだけ

じゃ喜ばないよなあ」

うーんと唸っていると、扉がノックされて私は「はい。」と返事をすると思って入ってきたのは主治医の黒崎先生。

この先生も良く来るよなあ、私はそこまで重症患者じゃないと思うんだけど。

「アキさーん、調子はどうだい？」

「特にいつもと変わりませんよ」

「そっか、それが一番だよ。あ、誕生日おめでとう」

「……黒崎先生が一番最初って何か悲しい」

「最近、僕の扱い変わってないかい!？」

命の恩人だから最初は凄く気を使ってたけど、黒崎先生と同僚の桜井先生と看護師の五十嵐先生が「アイツは友達感覚で話していい、というかそれが楽だ」と言われてから友達感覚で話してたら癖になってしまった。

この病院での黒崎先生の扱いは小さい子供達に舐められきってて医者として扱われず、友達感覚な医者らしい。

「そんな事ないですよ？命を助けてもらったので恩人です」

「それにしても言葉に棘があった気がするけどね……」

「まあまあ、それでどうしたんですか？」

「あ、そうそう。伝え忘れる所だったよ、そろそろ退院後の事を考え始めないとって事を伝えようと思ってね」

「あー、高校ですか？」

「うん。まあでも、それよりもアキさんは何かあるんだよね？」

バレてるー……。。

黒崎先生の言葉に私は思わず、顔に出ないように笑顔を向けるけど引き攣ってる気がする。

これじゃあ、もう抜け出すなんて無理じゃん!!

もう、物は試しに言ってみるとか？当たって砕けろって言葉もあるし！砕けちゃダメだけど。

「……黒崎先生、お願いがあるんです」

「なんだい？」

「……その——」。

私の言葉に黒崎先生は目を見開かせた。

それから何かを考える素振りを見ると、今度は笑顔になって私に視線を向けてきた。

何か、この数秒間で黒崎先生の顔が百面相だった。表情豊かだなあ。

「うん、いいよ。リハビリも頑張ってるからね、今日は特別だ」

「やったー！」

「但し！無理はしない事、いいね？」

「もっちらーん！」

黒崎先生が病室から出たことを確認してから私は急いでスマホを取り出して、電話帳を開いて連絡先をタップして耳に当てる。

因みに、私の病室は個室だから電話したりするのは何の問題もない。

ただ、医療機器があったら駄目なんだけど今の私に医療機器は取り付けられないから大丈夫だそうだ。

何コールかした時、電話の相手が出てくれた。

私は思わず嬉しくなってきた、声が普段より大きくならないように注意するけど多分無理。

「もしもし？ごめんね、突然電話かけちゃって。お願いがあるんだけど」

電話が終わり、私は次の人の名前をタップして同じように電話をかける。

それを何回か繰り返してから、私は何とか重たく感じる足をベッドから出してゆっくと床に置く。

冷たい、水に足を浸けるみたいに冷たく感じる。

「……大丈夫、私は歩ける」

何故か少しだけ不安が頭を過ぎってしまう。

リハビリの時は誰か一人が一緒に居てくれるから感じないけど、いざ自分だけとなると少しだけ怖い。

どうしてだろう、でも今日だけは私は頑張らなきゃいけない。

リサ……お姉ちゃんのために私ができること。

「——よし！」

思いつきり力を入れて、ベッドの横に設置されてる柵に掴まりながら立ち上がる。深呼吸してからゆっくりと右足を前に一歩出して、左足も次に出してみる。うん、問題もない！

そのまま私はゆっくり歩いて、柵から服を出して着替えをしてからある場所へと向かうために、病室を後にした。

*

今日は8月25日、アタシとアキの誕生日だ。

本当はバイトがあったんだけど、モカが店長に何か言ってくれたみたいで休みにしてくれた。

いや、ほんと有難いよ。

そんなアタシは、アキをどんな風に驚かせようか考えながらショッピングモールを歩いていた。

うーん、服とかプレゼントする？

でも、アタシとアキの身長が違いすぎてどのサイズを買えばいいか分かんない。

じゃあ、バスケの物？

入院してる人に対して傷付けてしまうような行動そのものじゃん。

間をとってベースの物か、アタシが得意なクッキーとかを焼いてあげる？

「うーん、結構難しいなあ……。双子でも好みとか全く別だしな」

「あれ、リサ先輩？」

「お、沙綾！久しぶり☆」

「お久しぶりです！あ、誕生日おめでとうございます」

「ありがと☆沙綾は何か探し物？」

「はい、リサ先輩とアキさんの誕生日プレゼントを見に来てたんです。でも、リサ

先輩には今バレちゃいましたけど」

あはは、なんて苦笑いする沙綾を見て少し申し訳なくなる。

去年までは全然関わりがなかった沙綾と、こんな風に話せたりするのはアキのお陰なんだなって改めて感じる。

そうだ、沙綾に相談してみようかな？

「ごめんね、タイミング悪くてさ……。あのね、沙綾に相談があるんだけど時間大丈夫？」

「いえいえ。時間は大丈夫ですけど、何かあったんですか？」

「ううん、大した事じゃないんだけど。アキへ何をプレゼントしたらいいかなーって悩んでて」

「あー、私も悩みました。アキさんの好きな物をあげたいって思ったんですけど、入院してる人には酷なものばかりで……」

「だよなー……、アキは気にしないと思うんだけど渡す側としてはキツイよね」

「あはは……、はい」

んー、これは予想以上に結構難しい問題かも。

アタシと沙綾で「うーん」と唸っていると、のほほんとした声で名前を呼ばれる。視線を向けると、いつもの Aftergrowメンバーと共に何やら袋を沢山持ったモカが立っていた。

「リサさんとさーや。すっごい怖い顔してますけど、どうかしたんですか〜?」

「あ、モカ! それに皆も、モカとはバイトで会うけど他の皆は結構久しぶりだよ

ね？」

「お久しぶりです。それと、お誕生日おめでとうございます」

「おめでとうございます！」

「おめっしたー！」

「ありがとー！モカの言葉には突っ込まないでおくよ」

「ええー、少しは突っ込んでくださいよー。まあ、改めておめでとうございますり
サさん」

おめっしたー！なんて言葉、初めて聞いたよ。

モカだからこそ思い付く言葉なんだろうけどね、『ツグってる』とか『モカって

る』って言葉もバイト中に良く聞くし。

唯一、1回で分かったのって『エモい』だけだよね。

そんなことを考えていると、ひまりに名前を呼ばれて一旦思考に浸っていた頭を動かす。

「リサ先輩、もしかしてアキさんの誕生日プレゼント選びですか？」

「そうそう、ただ何を渡せばいいのか悩んでるんだよねー。それを偶然会った沙綾にも相談したけど、お互いに分からないって感じでさ」

「あ、それならこういうのはどうですか？」

「つぐみ、何かいいの思い付いたの？」

「うん！これならきつと、アキさんも喜んでくれると思うよ！」

「え、なになに！教えて、つぐみ！」

アタシはつぐみに近寄って聞くと、つぐみは元気に「はい！」と答えて皆に聞こえるように話してくれた。

それは、『ネックレスなどのアクセサリはどうだろうか？』という提案。

うん、確かにそれならきつと問題ないかも！

アキにプレゼントしても、アタシ側としても微妙な気持ちで渡さずに済むからお互いいいよね。

アタシ達はさっそく、つぐみの提案でアクセサリショップへと向かう。

来てはみたものの、アタシの好みで選べばアキの好みとは全く違うものになってしまうから気をつけなければいけない。

あー、待って！このピアス超可愛い！って、アキはピアス付けられないじゃん!?

「あー、ダメだ。アタシの好みで選ぶと、アキの好みと正反対になっちゃう……。」

「アクセサリーなんて、あたし付けないから分かんない」

「……蘭はもう少しお洒落に興味持った方がいいと思うぞ？」

「うーん、アキさんって結構ボーイッシュな感じだよね。つぐ？」

「そうだね、前に付けてたのも星とか十字架だったね！」

「リサさん、これモカちゃんのおすすめー」

「え？……パンの形をしたネックレス……？」

「あはは、モカもブレないねー……」

皆とそんなモカに苦笑いしてしまう。

いや、まあバイト中もあの国民的ヒーローであるパンのヒーローのオープニングを普通に歌ってるからパンが本当に好きなのは分かるけど。ここまでパンに影響されるものかな…？

なんて思いながら、奥から手前へと棚をスーッと目を通していくとある一点に目が留まる。

青色の小さな宝石がはめられて、隣には小さい鍵のチャームと真っ黒な羽が付けられてるネックレス。

そのネックレスを見た瞬間、あの子が笑って身に付けてるのがすぐに想像出来てしまう。

——うん、これだ。

「——プレゼント決めたよ、これにする」

アタシがそう言って手に取り、皆に見えるようにすると皆が頷いてくれた。

何か、凄く久しぶりにいい買い物をした気がする。

そのあと、皆で帰ろうかと話した時に沙綾の携帯が鳴って電話が終わるのを待っている、電話が終わった沙綾がニコニコしながら少し離れた場所で待っていたアタシ達の元に駆け足で寄ってきた。

「沙綾？ いったいどうかしたのか？」

「ふふ、ちょっとね！ 皆、このあと時間ある？」

「あるよ」

「あたしもー」

「大丈夫だよ！」

「私も大丈夫！」

「あたしも大丈夫だ！」

「リサ先輩はどうですか？」

このあとは、アキの病室に行ってプレゼントを渡したら家に帰るだけだったはず。まあ、少しだけなら大丈夫かな？

念の為、ママとパパが準備してるかもしれないから連絡だけ入れとこ。

アタシも大丈夫だと伝えれば、沙綾がアタシの腕を掴んで突然走り出した。え、ちょっと待って！どこ行くの!?

「さ、沙綾!?!」

「早く行きましょう！時間が迫っちゃってますから！」

「何となく分かった気がする、モカ行くよ」

「はいー。ほら、ともちん達も早く早くー」

「ま、待って皆！理由わからないよ！」

「あたしも何となく分かったぞ、とりあえず急ごう！」

「うん！」

待って待って、アタシもひまり状態なんだってばー！

アタシの心の叫びなんて誰にも聞こえてないかのよう、皆は気にせず走っていき、アタシはただひたすら沙綾に引っ張られながら走る。

あれ、この道ってCircleに向かっている？

受付に入れば、まりなさんが笑顔で迎えてくれる。

アタシは本当に訳が分からず、首を傾げてるとまりなさんがニコニコしながら口を開いた。

「リサちゃん、誕生日おめでとー！それと、皆もう集まってるよ！」

「ありがとうございます！って……皆？」

そのまま、まりなさんは入口に立てかけてる『OPEN』の看板を取り外して一枚の紙を貼り付ける。

その紙には『本日貸切！』と、まりなさんの字で書かれた文字。
更にアタシは頭が追いつかず、その場に立ち尽くしてしまふ。

そんなアタシを見て、まりなさんは背中に回って肩に手を置き、アタシをゆっくりと前に押し始める。

「リサちゃん楽しんでね！」

「えっと、何の話で…っ!？」

まりなさんに押されながらライブ会場に入るために、扉を開けた瞬間パーンと大きな音が鳴り響く。

突然の大きな音にアタシは驚いて、目をぱちぱちと瞬きさせてしまう。

「せーの！」

『リサ先輩お誕生日おめでとうございます！』

「…へ？」

「あはは！リサちゃん、目が点になってるー！」

「リサ先輩おめでとうございます！」

「…もう、びっくりしたなあ！ありがとうございます！」

アタシは笑って、あまりに嬉しくて泣きそうになるのを堪える。

今日は、Roselliaの皆はもちろん、沙綾やAftergrowの皆に会うまで誰にも言われなかったから正直、誕生日を忘れられてるかと思った。

隣に住んでる友希那でさえ、一言も無かったんだよ!?

もう、嬉しすぎるよ。

「今井さん、泣くのは早いですよ」

「…紗夜？」

紗夜が優しく微笑みながらそう言うと、タイミング良くピアノの音が聞こえ始める。

この曲、どこかで聞いた事あるのに思い出せない。

確か、アニメの主題歌だったけどすごく人気で良く音楽番組とかでも聞いてたのに。

「——君が大人になってく、その季節が。悲しい時間で溢れないように」

「……え」

この場で聞こえるはずのない声。

アタシが見間違えるはずのない、あの子の姿が。ピアノを弾きながら歌う、髪が短くなったアキの姿が視界に映ったんだ。

*

その後、病院を出てすぐに電話をかけておいた燐子ちゃんとゆきちゃん、そして仲良くなった美咲ちゃんと合流した。

流石に髪の毛を切る事は出来ないから、美咲ちゃんが薫さんに頼んでくれてウィッグを被る事で、とりあえず2年前の怪我する前の私へと外見を変えることが出来た。

燐子ちゃんは、今回のサプライズパーティとは別件で『私のタキシード姿が見たい』という謎の意見が燐子ちゃんの元にあつたらしく、そのために作っておいてくれたタキシードを持ってきてくれた。

ぶっちゃけ、ピアノ演奏に女性がタキシードってと思ったけど、ゆきちゃん曰く『アキはかっこいいから似合うわ』だそうです。

まりなさんへの連絡は、ゆきちゃんがしてくれて快くまりなさんもOKしてくれました。

後日何かお礼をしよう。

そんなこんなで沢山の人のお陰で、私は今2年前に出来なかったサプライズパーティを実行することが出来た。

ピアノを弾ききって、私はステージから降りて涙を目尻に溜めている姉の元へと向かう。

もう、泣かないでよー。

「どう？驚いた？」

「っばか！嬉しすぎて、驚きが消えちゃったじゃん！」

「ええー!?私があそこにいるってだけでサプライズになっちゃった…?」

「だから、そうなるって言ったじゃない」

ゆきちゃんが苦笑いを浮かべながら、私へと視線を向ける。

そう、衣装に着替えてる時にゆきちゃんに驚いてくれるかなと相談した時にそう返されたのだ。

まさか、本当にそうなるとは思わなかった。

「アキ！」

「は、はい！」

「誕生日おめでとう！」

「…っありがとう、リサもおめでとう！」

それから、他の皆が持ち寄ってくれたご飯などをテーブルに並べてビュッフェのような形で食べ始め、もの凄く盛り上がった。

Aftergrrowの特別ライブや、ハロー、ハッピーワールドのダンスショー（ライブだけどね）があったり。

紗夜ちゃんと日菜ちゃんが、日菜ちゃんの企みで憐子ちゃん特製のドレスを着たりと、普段出来ないことが沢山出来た。

それから最後にプレゼント渡しが行われる時間になった。

私がリサに贈るのは、2年前に渡し損ねてしまったプレゼント。

皆からプレゼントを貰って、最後に私とリサが向き合う。

何か、緊張してきた。

「せーので開けあってみる？」

「う、うん」

「せーのー！」

渡された袋を開ければ、中に入ってるのは私がプレゼントしたネックレスの片割れ。

思わず驚いて、リサへと目を向けるとリサも同じような顔で私を見ている。

「え、嘘!？」

「……双子ってここまでシンクロするもの……？」

皆も驚いて、私とリサと右往左往してる。

そんな予想外な事に私は笑って、リサも私に釣られて笑った。

凄い、こんな奇跡あるんだ。

私は青色の宝石で、鍵のチャームに黒色の羽。

リサは赤色の宝石で、錠のチャームに白の羽。

「ねえ、リサ」

「なーに？」

「やっぱり私達最高みたい」

「そうだね！」

その笑顔を見て、私は少しだけ思ってしまった。

いつの日か、誕生日にプレゼントを渡してこんな風に笑ってくれるのは終わってしまう。

私じゃない、人生では必ず出会う別の大切な人にリサは向けるだろう。それでも。

「——お姉ちゃんは、私のロードナイトだよ」

リサが向けてくれる陽だまりの笑顔は、どんなプレゼントよりも私にとってかけがえのない。

最高の誕生日プレゼントなんだ――。

ギリギリ間に合わなかったあああああ!?!?!?

初のアキ視点だったのに、大変申し訳ありません…!

ちょっと暫く後悔しそう…。

しかも急いで書いたから文がやばいかもしれない、後で訂正します。

それでは、また次回も宜しくお願いします。

次回。重大発表があります。

The secret spring begins

——この気持ちは気付いてはいけない物。

でも、隠し続けるのは辛くて悲しいんだ

いつからアタシは、この子への見方が変わったんだろ。

そう考えてしまうのは、きっと今日の前で起きてる状況のせい。どうしてこうなったんだろうか。

普段より近い距離と熱を感じる唇に、互いに吐き出された吐息が顔に当たる。背中にエアコンの空気による冷たさを感じる反面、顔が熱くなる。

アタシの手があの子の顔の横に置かれて所謂床ドンしてて、身長差がある分普段から見上げてたけどこうやって見下ろすのは初めてだ。

キミのアタシよりも赤が混ざった茶色の瞳に映る、アタシの顔は赤くなっていて何処か艶っぽい気がする。

どうして、こうなったんだっけ——？

それは、今から12時間前に遡る。

今日は特に予定なんてなかったから、久しぶりの休日だしゆっくりしようと思っ
てた。

だから起きるのも9時とかでもいいかなーなんて思って、時計を見てからアタシは二度寝に入ったんだけど次起きたらアキと目が合う。

「……………へ…?」

「おはよ、お姉ちゃん。もう9時過ぎてるけど疲れてる？」

「あー、ちょっとだけ！でも大丈夫だよ☆」

「うーん、じゃあ止めとく？出かけるの」

「……え？出かける？」

アキは、アタシの反応に「あれ？」と首を傾げる。

ちよっと待って、今日は何も無いはずだよね？起き上がって、スマホの画面を開いてスケジュール帳を開けば、《予定 1件》の文字。

あれ、まさか。アタシ……？

「……ごめん、すっかり忘れてた」

「ふふ、大丈夫だよ。まだ時間あるし、朝ご飯食べよ！」

そうだ、今日はアタシが久しぶりの休日だからアキと出かけようって約束をしたんだった。

アクセサリーショップに行つてアクセを見て、お気に入りのカフェに行こうって約束してたのに最低だなあ、アタシ。

アキは怒らず、そのまま笑つてアタシの部屋を出ていく。

すつごく申し訳ないなあ……。あ、じゃあカフェでのお会計をアタシが払お！お詫びだって言えば、アキも引き下がるはずだしね。

クローゼットから服を何着か取り出してから考え、これだ！と思った服に着替える。

鏡の前に立ち、軽く身支度を整える。髪の毛とメイクは洗面所でやろつと。

リビングに降りればアキとママが準備してくれてたみたいで、朝ご飯はテーブルに並んでる。

パパはいないから、休日恒例のジョギングにでも行ってるのかも。

「いただきます」

「いただきますーす。ねえ、お姉ちゃん」

「うん？」

「今日はアクセサリーショップ行って、カフェでいいんだよね？」

「うん、そーだよ！あ、カフェのお金はアタシが払うからね☆」

「え!? 何言ってるの!?!」

「アタシが誘ったのに忘れてたからそのお詫びだよ！」

「悪いよ……あ、でもさ」

「ん？」

アキは何かを思い出したのか、ポケットからスマホを取り出して何かをタップするとアタシに見せてくる。

それは、カフェのサイトのようで大きく見出しに《カップル様限定メニュー！》と書かれてる。

え、抹茶スイーツ!? 食べたいけど、アタシに彼氏なんていないからなく。

「お姉ちゃん、これ食べたいんでしょ？」

「へ？」

「あれ、これ食べたいから私を誘ったんじゃないの？」

「ううん、そのメニューは今初めて知ったよ。それに、カップル専用じゃん？アタシとアキは双子の姉妹だから無理だよ」

「……ふふ、それが無理じゃないんだな」

アキはいつの間にか食べ終わったのか、「ご馳走様」と言ってから階段を走って駆け上っていく。

そんなアキを見て、ママは何処か面白そうに笑ってから仕事へと向かった。

アタシは訳が分からず、ポカーンとして待っていると髪が短く、男の子用の服を来たアキが戻ってきた。

あまりにも予想外で、アタシは持っていた箸を落としてしまう。

「どう？俺、カッコいいっしょ？」

「え、ええ!？」

「ウィッグは薰さんからで、服は憐子ちゃんが作ってくれたんだ。私、昔から男子に間違われる事あったし男装してみたかったんだ」

いや、あまりにも格好良すぎて何も言えないんだけど！

確かに女の子だって言われなきゃ分からないぐらい、完成度が高いから今のアキと歩いたら、絶対彼氏彼女だって思われるとは思うけどさ。

まあ、姉としては複雑な気持ちだけど。

「……本当に男の子みたい」

「ふふん、こんな事されたらドキドキしたりする？」

「こんな事?……ひゃっ!？」

突然、背中と膝裏に手を伸ばされたと思えば抱き抱えられてソファに連れてかれる。

待って待って、何が起きてるの!?

アタシの心はパニックを起こしてて、アキに必死に掴まる事しか出来ない。

そんなアタシをみて、アキは新しい玩具を見つけた子供のように面白そうに笑う。

ソファに座らされるのかと思えば、後ろにそのまま倒されて床ドンのような体勢になる。

アタシ自身、こういうのに耐性が何も無いし目の前にいるのがアキなのに一人の男の子と今からイケナイ事をしてしまうような雰囲気。

「顔真っ赤だけど、ドキドキしてるの?」

「な、なわけないじゃん!相手はアキだよ?女の子なんだしドキドキするわけ……」

「ふーん、じゃあ俺がこれから触れてもドキドキするなよ？」

「っ——！」

バスケをやってる時やベースを弾いてる時しか見れない格好良い表情を向けられて、アタシの鼓動が加速していく。

慣れない口調と普段より低い声による言葉責めが、アタシの耳の傍で行われるから吐息が耳に当たる。

それと加えて優しく頬を触れられて、その部分が熱く熱を感じる。

アタシはせめてもの反抗として、アキの服をギュッと掴むけどアキは全く止まらない。

「どうした？——やっぱり、妹でも格好が男だったらドキドキしちゃう？」

「……あ……き」

「うん？」

「……ドキドキ……しちゃう」

「……っ、ごめんごめん。意地悪しすぎたよ、早く出かけに行こっか！」

アキはアタシの言葉に驚くと、すぐに離れていつものようにふにゃっと笑うとアタシを起こしてくれる。

でも、さっきまでの事が完全にアタシは頭に浮かんできて咄嗟に離れてしまうアキに抱き着く。

急だったのに、アキはしっかりと受け止めてくれて心配そうにアタシの顔を覗く。けど、アタシは今自分がどんな顔をしているのかが大体分かっている、見られるのが恥ずかしいからアキの胸元に顔を埋める。

「お姉ちゃん？ごめん、やり過ぎた？」

「……ドキドキが収まらない」

「……え」

「アタシ、ああいうの初めてだったし……。アキが本当に男の子みたいで、その……」

「じゃあ、俺はお姉ちゃんの初めてを貰ったって事だ☆」

「は、初めっ……!?」

アキの言葉に驚いて、顔を上げると嬉しそうに笑うアキ。

姿と口調が男の子だからか、アタシは元々早かったのに更に鼓動が早くなって心臓が苦しくなる。

駄目だ、全然落ち着かせるどころか酷くなる気がする。

「なーんてね、お姉ちゃんにはもっといい人いるよ。そういう大切な人に初めてを渡さなきゃ」

「……え」

「人生で1度は必ず出会う人に、ね！あ、お姉ちゃんが選んだ人なら私は安心して送り出せるから心配しないでね？」

「……アキ……？」

「ん？どうしたの、そんな世界が終わってちゃうような顔して」

「……ううん、何でもない」

「大丈夫？ やっぱり疲れてるなら辞める？」

「大丈夫だよ！ 時間無くなるし、準備終わったら行こっか☆」

さっきまでの鼓動が嘘みたいに静かになる。

アキに言われた言葉の一つ一つが、心に突き刺さるようで痛い。アタシを思っ
言ってくれた言葉なのに、何でこんなにも痛くて泣きたくなるんだろう。

髪の毛を整えて、メイクしてから自分の顔を見る。

今日のアタシは少し変だ、自分でもそう思うからよっぽどだと思う。

「お姉ちゃんまだー？」

「今行くー！ って、本当にその格好で行くの!？」

「もちろん、カップル限定メニュー気になるし。何より、女子2人じゃ変な人が来るかもしれないじゃん？」

「変な人って……」

「ほら、私はバスケと合気道やってたしお姉ちゃんは女の子なんだから守られる立場だしね。私がお姉ちゃんを守るよ」

「アキも女の子でしょ！」

「細かい事はいいの！ほら、リサ行こうぜ？」

「っ、うん！」

今日は妹とショッピング。ではなく、男装した妹偽物彼氏とデートする事になったアタシは

少しだけ出された手を見て心が温かくなるのを感じてその手を握った。

アクセサリーショップに最初向かうために、アタシ達は電車に乗って揺られる。アキは普段からそうだけど、アタシを必ずドア近くにある壁際にする。何でも、痴漢に遭わないようにするためだつて。

アキが遭ったらどうするのさと反論したけど、「え？遠慮なく潰すよ？」って笑つて言うんだから頼もしい反面怖い妹だと思うよ。

電車に揺られてショッピングモールの最寄り駅で降りて、私はアキの隣を歩く。背が高いから見つけやすいんだし、それに赤茶色の髪の毛なんて滅多にいないしね。

そう思つてると、アキがアタシの肩をトントンと叩いてくる。

「どうしたの？」

「はい」

「……ん？」

「カップルなんだろ？なら、手を繋ぐのは普通かなって」

突然の男の子口調。未だに慣れそうにないや。

アタシは急に恥ずかしくなってきたけど、周りから見たら初々しいカップルで彼女さんが恥ずかしがってるようにしか見えない。

ええい！相手はアキ、そう双子の妹！だから手を繋ぐのは普通だい！

「かーわい、照れてるリサ」

「……あう」

「ちょ、大丈夫？」

「…だ、だいじょぶ」

「…不安だ」

頑張れ、アタシ。今日のアタシは本当におかしいと思うけど、隣にいるのは彼女じゃなくて妹。男装してるアキなんだから。

全ては抹茶スイーツのためなんだから…！

アクセサリーショップに入ったものの、周りには女の子ばかりで外見が男の子であるアキは注目の的。

本人は何とも思っていないみたいだけど、さっきからコソコソ色んな人がアキを注目してるのがアタシは気になる。

「…ねえ、あの子カッコよくない？」

「でも、隣に彼女っぽい子いるじゃん」

「そうだけどさー……、もしかしたら彼女じゃないかもしれないじゃん！」

そんな会話が聞こえてくる。

彼女……か。嬉しく思っている自分もいれば、少し受け入れ難いと思ってる自分もいて複雑だ。

アキにもそんな声が聞こえたのか、突然アタシの後ろから腕を伸ばしてアタシを後ろから抱き締めて来たと思えば、顎を頭の上に乗せてくる。

「リサー、まだか？」

「……まだ！」

「んー…、俺はリサは元々可愛いんだからどれを付けても可愛いと思うぞ？」

「っ!？」

近くにあった桜のピアスを手に取って、アタシの耳に当てるようにして笑うアキ。言葉の一つ一つに、アタシは顔に熱が集まってくるのを感じてしまう。そう感じるのはアタシだけじゃないらしく。

「ほら！あんなにラブラブなのに邪魔しちゃ悪いって」

「だよなー…、カッコいい子には可愛い子が既にいるもんかあ」

「…あの人カッコイイ」

「え、俺がいるのに!? 彼氏だよね!？」

アキも聞こえたみたいで、クスクス笑ってる。

アタシもついその笑顔につられて、笑ってアタシはそのままアキが持つてる桜のピアスを買う事にしたんだけど。

アキもお会計について来たと思えば、アタシの代わりにお金を払っている。

……ん？払ってる？

「ちょ、アキ！アタシが払うって」

「いいから、こういうのは彼氏のする事だろ？」

「アキは別に、アタシの彼氏じゃ……」

「あはは、すいません。俺の彼女、ツンデレさんなんです」

なんて店員さんに言いながら、アタシの頭を撫でるアキ。何でこーなるのかな!?!
それから桜のピアスをアキが買ってしまい、アタシの手の上にポンつと置かれる。

「今日のデートに来たプレゼント」

「……ばか」

「えー、酷いなあ。でも似合ってたよ、そのピアス」

「……ありがとう」

「どういたしまして、さてカフェ行こうぜ！」

「うん！」

手を繋いで、何気ない会話をしながらカフェへと向かう。けど、そのカフェは人気なのか列が出来ていてすぐには入れなさそうだ。

「アタシとアキは名前を書いて、適当に時間を潰してたけどアキが「トイレ行ってくるね」と行ってアタシは頷いてアキを待っていると、知らない人から話しかけられた。」

「ねえ、君。もしかして一人？」

「いえ、一緒に来てる人がいます」

「でも今一人だよね？お兄さん達と遊ぼうぜ？」

「大丈夫です、すぐに戻ってきますしこのお店に入るために並んでるんで」

「そんなつままない事言うなよ、もしかして彼氏と来てる感じ？」

彼氏。ではないけど、今日は彼氏だからいいのかな。

あんまりアキを巻き込みたくないから、帰ってくる前にアタシ一人で追いつかないと。

「はい」

「でもさあ、君みたいな可愛い彼女をほっとく奴なんて大したやつじゃないと思うんだよね？何なら俺がここの奢ってやるからさ、遊ぼうよ」

「だから結構ですって！」

「……んだと、女が調子にのんじゃねえ！」

やばい、手を出されるかも。

アタシは直感的にそう思って、咄嗟に目を瞑ってしまおう。

怖い、誰か助けて。そう願うだけで、声に出せない。

『私がお姉ちゃんを守るよ』

願ってもいいのだろうか、そう言ってくれたあの子に助けて欲しいって。

いつまで経っても何も衝撃が来ない、恐る恐る目を開けるとそこには右手をがっしり掴まれた男と――。

「俺の彼女に何してんの？」

「っなんだお前！」

「何だはこっちの台詞だっつーの、人の彼女に勝手に声掛けといて挙げ句の果てに手出すとか」

「っ！ふざけんな、どうせお前なんかすぐに倒れんだろ！」

「……やってみなきゃわかんねえじゃん？」

男の人はアタシから一気にアキへと視線を変えて、殴りかかる。

だめ、アキに手を出さないで！

そう叫びたいのに恐怖に負けて、アタシはアキの名前を呼ぶ事しか出来なかった。

「アキ……！」

「大丈夫だよ、言ったじゃん。守るよって」

アキはアタシに向けて笑ってから、何食わぬ顔で男の人の手を受け止めるとそのまま合気道で習った技を使ってカウンターで倒す。

あつという間に倒されて、アタシや周りにいた人達はポカーンっとしてしまう。

「……また俺の彼女に手出してみろ、原型留めねえぞ？」

「ひっ!!」

「はあ、最初からやらなきゃいいのに。リサ、大丈夫……?」

アタシはすぐにアキに抱き着く。

いつもと同じように受け止めてくれて、アキは背中に腕を伸ばして撫でてくれる。怖かった、男の人に詰め寄せられたのも。アキが殴られかけたのも。

緊張で張り詰めていた糸が切れたのか、アタシの目からは止めどなく涙が溢れてくる。

「ごめん、怖い思いさせて。もう大丈夫だよ」

「アキ、ごめんね。ごめんね……!」

「何で謝るのさ、リサは何も悪くないじゃん! だから安心して?」

それから落ち着くまでアキは背中を摩ってくれた。

その後は特に何もなく、カフェにも入る事が出来て限定メニューを頼むことも出来た。

本当は証拠を見せなきゃいけないんだけど、さっきの騒動を店員さんが見てたみたいであれで十分らしい。

それから沢山遊んで、そろそろ帰ろうとなったアタシ達はまた電車に揺られて家に着く。

色々あったけど、楽しかったなあ。アキの男装してる姿も写真に収められたし、満足満足☆

今はどうと、お風呂とご飯を終わらせてテレビで放映されてる恋愛映画をアキと見てる。

ウィッグは何故か付けたまま、何でもママが男装したアキを気に入っちゃって今日は1日男装して欲しいんだって。

映画の内容は、主人公くんのクラス1の地味男くんがクラスの人気者である女

の子の病気を知ってから始まる話。

余命が残り僅かの女の子と、残された時間を過ごす日々が主な内容だった。

「……凄いなあ」

「うん？」

「あの女の子、最後の最後まで自分らしさを貫いてて強い子になって」

「そうだね、アタシもそう思うよ」

「んー、何か喉乾いちゃった」

「あ、いいよ。アタシが持って……っ!?」

「リサ!？」

立ち上がって歩きだそうとしたとき、足が滑ってアキが座ってる方へとアタシは倒れていく。

アキは、そんなアタシを受け止めようとしてくれるけどタイミングがズレたのか2人とも床に倒れる。

目を開ければ、目の前はアキの顔で。唇には何か当たってるような柔らかい感触とほのかに感じる熱。

手は床に置いてて、すぐ傍にアキの顔がある。アキの表情は、状況が分かってないのかポカーンっとしてるけどすぐに把握したのか驚いてる。

アタシ、今アキとキスしてる……？

「っ!？」

「……………」。

咄嗟に離れると、小さくりップ音が鳴る。

更にアタシは恥ずかしくなるのと同時に、今起きた事が現実なんだと感じさせられる。

さっきまで触れてた唇に触れてみると、熱くて何かに熱せられたと思うほどに熱を感じる。

アキの顔が見れない。

朝のように身体が熱くなってくる。

そして、アタシはふと頭に過ぎてしまった。

——アキに触れられたい、と。

「お姉ちゃ……わっ！」

「……ごめん」

名前を呼ばれる前にこの気持ちを落ち着かせたくて、顔を見られたくなくてアキの胸に飛び込む。

鼻を擦るシトラスの香りが、肺いっぱいに入ってくる。

アキに触れられる背中や身体全体が熱くなってくるけど、別に嫌な思いはしない。それどころか幸せな気分になってくる。

きっと、この気持ちは気付いちゃいけない物。

気付いてしまえば、認めてしまったらアタシの心を時には温かくしてくるけど、突き刺すような針にもなる。

この気持ちは隠さなきゃいけない。名前をつけてはいけない。

「……お姉ちゃん？大丈夫？」

「……うん、大丈夫。ねえ、アキ」

「ん？」

「今日、一緒に寝てくれない？」

無意識の内に流れてしまった涙をアキが指で掬う。

アタシは、その手を握って自分の頬へと寄せる。

この気持ちがキミに届くことはない、届いたらきつとこの関係は終わってしまうから。

そう。

この気持ちに名前を付けるとしたら——

人はこの気持ちを♡恋♡と呼ぶんだ。

イチャイチャさせたかった。(真顔)

本当はもっと大人の階段を登らせたい所なんですけど、来年にならないと書けないという……。 (現在17歳)

いつか、この続きで夜のお楽しみVer.も書いてみたいなっと思っちゃうんですけどね。

それでは次回も宜しくお願いします！

F o r g i v e n e s s i n b l u e

——どうか忘れないで。

私はずっと君を愛してた事を。

珍しく、目がスッキリと覚めた。

カーテンの隙間から零れる日光を眩しく思い、手で目元を覆って光を遮る。

机に置いている時計をみれば、5時というあまりにも早すぎる時間帯で起きてしまった自分に呆れる。

そしてすぐに、ああ、ついにこの日が来てしまったのか。そう落胆しながら私はカレンダーへと目を向ける。

2025年と表記されたカレンダーを見て、そのまま月日へと視線を下げていく。

「……今日……か」

《8 / 25 リサの結婚式》と書いてある部分を見て、溜息をついてしまう。

まだ自分は納得がいてないのだろうか、いつの日か言ったではないか。

リサが認めた人なら自分も認める、と。

重たい体を起こして、日々の疲れを何とか振り切りながら昨夜のうちに用意しておいた服装に着替えて鏡の前で確認する。

前まではリサと2人で暮らしていたけど、ある日を境にリサはこの家に住まなくなり、私の一人暮らしへと変わった。

まあ、度々モカや沙綾が勝手に家にいたりするから寂しいと感じた日は全くなかったけど。

高校を卒業後、リサは看護師になるために看護学部のある大学へ進学して看護師になった。

正直、美容師とかファッション系に進みそうだなって勝手に思っていたけど「アタシ、困ってる人を助けたいんだ」と笑って言っていた事を昨日の事のように覚えてる。今思えばリサらしい。

Rosealiaの活動は今の所、活動休止中。

ゆきちゃんはシンガーソングライターとして歌唱力を上げていき、紗夜ちゃんは高校の先生らしい。

今考えると人気バンドのギタリストが高校の先生って、凄いやね。「氷川先生のお陰で生徒が増えた、これからも応援してるよ！」って校長に褒められたって複雑そうに言ってたなあ。

あこちゃんと燐子ちゃんは、一緒にゲーム会社を立ち上げて何と大手ゲーム会社にまでなってしまった。

Rosealiaも幾つかゲームに曲を提供して今では大人気ゲーム。私も楽しくやっています。

そんな事を考えながら、私は朝いつも飲むコーヒーを用意して朝ご飯を作ってテレビをぼーっと眺めながら食べ進め、身支度を整えてマスクを付けてから鞆を持つ

て靴を履き玄関を出てから鍵を閉める。

エレベーターに乗って降りてからマンションのエントランスを出てすぐに手を挙げると、タイミング良く走ってきたタクシーに止まってもらい乗り込む。

私は職業柄、色々タクシーを使わないと不便なのだ。

「すみません、ここまでお願いします」

私はそう言ってスマホの画面を運転手さんに見せると、「わかりました」と答えてアクセルを踏んだ。

タクシーの窓から見える景色がどんどん変わっていく、タクシーなんて乗り慣れているのに仕事に向かう時は何度もこの景色を見ているのに、どうも落ち着けない。私はイヤホンを靴から探して適当に曲を聴いて紛らわそうと思いい曲をかければ、何ともまあ別の意味で落ち着けなくなってしまう。

「……選曲間違えた」

聴いてる曲名は、Roselliaの『軌跡』。

選りにもよって何でこのタイミングなのだろう、普段なら今までのことを思い出すけど今日は少しだけ駄目だ。

そう思ってスキップし、また適当に曲を変えるもののまた曲を間違えたらしい。

「……陽だまりロードナイト」

いや、本当に泣かせに来てる。

そうとしか思えないこのスマホに溜息を吐きつつも、今度は最後まで聞いてシャッフルに切り替えればRoselliaの曲ではなく、私の憧れであり、希望の人が残した曲が流れ出す。

その曲を鼻歌しながら外の景色を眺める。

そんな事を何度か繰り返していれば、タクシーが目的地に止まり運転手さんに声をかけられる。

私はイヤホンを外して、鞆の中にしてからICカードを取り出してピピッと音が鳴るまでかざす。

音が鳴ってから一言お礼の言葉を告げてから、タクシーを降りれば目の前は結婚式場。

さて、どうしようか。そう思っていたら何処かから聞き慣れた声が聞こえてきた。

「これはこれは、大人気声優アーティストであり女優さんのアキさんじゃないですか？」

「……モカ、外でそういうの止めてって言うてるでしょ？」

「すいませーん、冗談ですって〜」

「もう、人がいないから良かったけど冗談じゃ済まないんだから……」

そう、現在の私は声優アーティストであり新人女優の藤咲アキという芸名で活動中。

大好きで憧れのあの人と同じ舞台に立てるように努力し、オーディションを受けて何度も何度も壁にぶつかりながらも何とかここまで登りつめた。

今では有難い事に沢山のお仕事を貰えて、休みが滅多に無いけど楽しくやってる。まあ、ただあんまり皆と遊んだり話したりする時間が取れなくなってしまったのは残念だけど。

それからモカと一緒に中へ入れば、既に殆どの友人が集まっていた。中には、テレビで良く見る人や勿論リサのお相手の方の知り合いの方々らしき人達もいる。

ただ、色んな意味で沢山の視線を感じるこの瞬間だけはどうも好きになれない。

「……お、おい。見ろよ、アイツの彼女さんの妹ってガチで藤咲アキなのかよ……！」

「やべえ、テレビで見るより本物の方が可愛くて綺麗すぎる。てか、パスパレまでいるじゃねえーか！」

「ちよ、ちよつと藤咲アキよ！サイン貰えるかな!?」

そんな声がちらほら聞こえてくる。

いや、まあ有難いんだけど今日の主役は私じゃなくて姉だから止めてほしいな。それに気付いた千聖ちゃんが、こほんつと咳を一つすると私を守るように立って日菜ちゃんなどパスパレの皆に視線を向ける。

すると、皆にこつと笑って千聖ちゃんの隣に立った。

「すみません、本日は私達のご友人にあたる今井リサさんとそのお相手の方の結婚式です。藤咲さんへの配慮をお願い申し上げます」

「そうそう、あたし達もリサちゃんの友人として呼ばれてるしアキちゃんは家族なんだからねー?」

助けられてしまった。

でも、私より芸能界で生きて来たパスパレの皆の方がこの場を沈めるのはきっと慣れているのだから私がやるよりは良かったかもしれない。

そう思っていたら、隣からポンっと肩に手を置かれて誰だろう？と思いい目を向ければ彩ちゃんの姿。

「大丈夫？アキちゃん！」

「うん、ありがとう。少し困ってた所だった」

「ふふ、今日はリサちゃんにとってもアキちゃんにとっても大切な日だもん。今日ぐらい芸能人だって事忘れてもいいと思うよ？」

「んー、それはちょっと難しいかも。仕事のスイッチが入ると自分じゃきれないから」

「みただね、リサちゃんから聞いてるよ。『アキ、役者スイッチ入ると役に入りきっちゃって自分の限界を超えても止まらないから家に帰ってくるとボタンって倒れるから心臓に悪いんだよね〜……』って」

「……反論出来ないのが悔しい」

そう、私は役者スイッチと呼ばれるものというか仕事で役に入りきっちゃうと完全に人が変わるタイプらしい。

だから、演技中の記憶はあんまり無い。自然な演技じゃない時だけ記憶に残って、何度もOKを貰っても納得が行くまで撮り直させて貰ったこともある。

そのお陰なのか、『実力派新人女優』なんて呼ばれたりするけど私なんかよりもっと素晴らしい役者さんは沢山いるから申し訳ない。

「アキ、無事に来れたようね？」

「ゆきちゃん、おはよう。タクシーに乗ったからね、まあここに着いた時は予想通りって感じだったけど千聖ちゃん達が助けてくれたよ」

「そう、リサが奥で待ってるわ。アキに会いたってうるさいから早く行ってあげて頂戴」

「おっけー、でも紗夜ちゃんとかは？」

「もう少しで着くそうよ、山吹さんと羽沢さん、牛込さん、上原さんは既に準備に取り掛かってるから後で全員集まったらそっちに行くわ」

「はーい」

私は、千聖ちゃん達にお礼を言ってからその場を離れて奥へと進む。

進んで行けば途中で何人かのスタッフさんが何度も見直してくるけど、もうこの
際気にしたら負けだ。

私は『今井リサ様』と書かれてる扉の前まで来て、付けていたマスク類を全て外
してからコンコンっとノックする。

いくら姉でも、これぐらいはしないとね。

「はい？」

「私だよ、リサ」

「どーぞ☆」

そう言われて中に入れば、椅子に座ってメイクをして貰ったのか普段よりも更に
綺麗になった姉の姿。

近くに視線を向ければ、真っ白なウェディングドレスと逆に真っ赤なウェディン

グドレスが用意されていて近くには何故か、リサの深紅のベースが置かれてる。

「あはは、ベースが気になる？」

「うん、だって結婚式にしかも新婦の部屋にベースなんて本来置かれないうじゃん」

「まあね、アタシが置きたいって言って特別に置かせてもらってるんだ。何だか緊張してきてもその子といれば大丈夫な気がしてさ☆」

「ふーん、平気ならいいんじゃない？それにしても真っ赤なウェディングドレスって意外なものを選んだね」

「あー、それ友希那にも言われたよ。黒と迷っただけど、やっぱりアタシは赤かなって。変？」

「ううん、驚いたけどリサらしくていいと思うよ」

私がそう言えば、リサはホッと息をついて「良かったあ……、似合わないって言われたらどうしようかと思った」なんて言葉を零す。

似合わない物なんてあるわけないじゃん、リサは何を着ても綺麗で似合うと思う。だから、このドレスを着ているリサの隣に別の人が立つと思うと複雑な気持ちになる。

そこは私の場所なのに、と無性に吐き出したくなる。

「アキ？」

「ん？」

「……その、今日は仕事大丈夫だったの？」

「ぷっ、あはは！そんな事気にしなくていいの、姉の結婚式に参列しない妹なんていないから！」

「だって、最近アキ凄く忙しそうで疲れてそうだったし本当は無理してるんでしょ？やっぱり一緒に住む？」

「いやいや、リサはこれから旦那さんと住むんだよ？そんな家に部外者は一緒に住めませんって」

「部外者じゃないよ、それに心配なの。アキが一人暮らししていると何かあった時に困るじゃん？それに、アタシ妹の不調とかには気付く姉なただけど？」

「……もう、大丈夫だって！マネージャーにもちゃんと考えてもらいながら仕事の調整してるから、それに芸能界はいつ駄目になるか分からないだもん。貰える内は幸せなんだから」

「そうだけど……」

「ほらほら、今日はお祝いの日なんだからこんな辛気臭い話は置いて。改めて、おめでとうリサ」

「……うん、ありがとうアキ」

言えない、この気持ちはずっと隠しておくもの。

今日という日は私は色々な意味で忘れることは無いだろう、ある意味大切なものが消え、ある意味で失った日であり、永遠に届かぬ思いが残る日。

あれから暫くして全員が集まり、結婚式は開かれた。

リサの相手さんとは何度も顔を合わせてるし、何度も話をしてるから良い人なのは知ってる。

私が「リサを幸せにしてくれなきゃ、マジで殴るから」って言ったら「大丈夫で

す、そんな事があつたら俺がまず自分をボコボコにしないと気が済まないのその後にお願ひします」って言ってきたからね。凄い人だと思ふ。

それからブーケトスが行われるため、一旦外へと出る。

本当はケーキ入刀とか、ご飯を食べるとかが先なんだけどリサがブーケトスは最初にやりたいって言ったんだって。

「アキさん」

「あ、紗夜ちゃん。お仕事どう？」

「ぼちぼち、という所でしょいか。アキさんは久しぶりなはずなのに、テレビで良く見るのでそんな気がしないです」

「あはは、それ皆に言われるよ」

「ブーケトス、参加されないんですか？」

「……んー、参加しないかな」

「それはどうしてなのか、聞いても？」

気付いてるくせに、良く言うよ。

そういう意味で紗夜ちゃんに目を向ければ、わざとらしく首を傾げられた。

もう、何だか氷川姉妹にはやられっぱなしな気がする。学生時代では日菜ちゃんに、大人になったら紗夜ちゃんにっね。

「……私の幸せはもう届かない場所にあるんだもん、それなら幸せが届きそうな人にブーケトスを受け取ってほしいじゃん？」

「……そうですね、なら私も参加しません」

「へ？何で？」

「私もまだ届きませんから」

チラッと私の顔を見てから紗夜ちゃんはそのまま、ブーケトスを始めようとしてるリサに目を向ける。

紗夜ちゃんにも思い人がいるのか、何だかどんどん皆に置いていかれていくなあ。そう思いながら、ブーケトスをぼーっと見てる。

「それじゃあ行くよー！せーの！」

「っ！！」

リサから投げられたブーケは、綺麗に円を描きながら空中に投げられる。

ふわっと飛んでいくブーケは狙っている女性の手元には届かずに、何故かある人物の手元にぽすんっと落ちた。

まるで、君は幸せを手にしななければならないと言われてるかのよう。

「アキさん、ナイスキャッチです」

「……………何で」

「アキさん、おめでとうございます」

「今度はアキが結婚するのね、姉妹揃ってお祝い事まで」

「アキさん、私の事呼んでくださいね！」

「ちょ、香澄！私達の間違いだろ！」

何で自分の元に落ちてしまったのだろうか。

他にも沢山いるのに、どうして幸せが届かない私にブーケが届いてしまったのだろうか。

そう思っていたら、沙綾に腕を引かれてリサの元に行く。

リサは何処か幸せそうだ。

「アキに届いて良かった」

「…へ？」

「アタシ、ここに居る皆に幸せになってもらいたいよ？でもやっぱり、一番は大好きで大切な妹だから！」

「……ふふ、ありがとう。でも残念ながら今の私の恋人は仕事ですから」

「もー、そうやってはぐらかすんだから！アタシも、アキの認めた人なら認めるからね？」

「…うん」

「リサさーん、お腹が空いたんでそろそろ中に入りましょーよー」

「はいはい、じゃあブーケトスは終わったし入ろっか！」

スタッフさんの案内の元、皆はどんどん中へと入っていく。

私はと言うと投げられたブーケトスをじーっと見つめ、その場に立ち尽くす。幸せになって欲しい、か。

「アキさん」

「燐子ちゃん？」

「……その、大丈夫ですか？」

「……え？」

「……知って……ますから……」

その言葉に私は目を見開きながらも、あははと苦笑いしてしまう。

まあ、紗夜ちゃんが分かってたって事は燐子ちゃんも気付いててもおかしくないか。

私はただ笑って、空を見上げる事しか出来なかった。

「大丈夫……ではないけど、好きな人の幸せを願うのも一つのケジメだから」

「……アキさん」

「隣子ちゃんも頑張ってるね？」

「……え？」

「バレバレ、だよ？」

「——っ！」

「ふふ、大丈夫。他の皆にはバレてないから、ただ偶然あちちゃんと話してる隣子ちゃんの顔を見たら私と同じだなんて思っちゃって」

「……そう、なんですネ」

「一応、役者ですから☆」

「ふふ、ですね。……あの、アキさん」

「うん？」

「もし良ければ、その……ゲームのキャラクターボイス担当してくれませんか……？」

「もちろん、友達の頼みは何でも乗るよん！」

私がそう言うと台本らしきものを私に渡してから、少し先を歩くと燐子ちゃんは今までで一番綺麗で大人らしい笑顔を向けて私に振り返った。

「アキさんの想いは、きつと届きます。……遠藤さんにも、リサさんにも」

「——っ！あり……がと……」

それから燐子ちゃんが中へと入ったのを見送ってから、私は近くにあった椅子に座り込む。

きつと、燐子ちゃんが中にいない私の事はなんとか理由をつけてはぐらかしてくれているはずだ。

だから、少しだけ許して欲しい。

「——リサ、愛してる」

ブーケトスは、真っ赤なバラが何本か入ってる。

それを見ながらポツリと言葉をこぼす。

もう、二度と届かない。この気持ち、この瞬間の感情。

今日は私の恋が終わった日で、愛しい人が私のすぐ傍から離れてしまった少し切ない日であり、愛しい人の人生で最高の晴れ舞台の日だ。

「——どうか、私を忘れないで」

私が愛し、大好きだったロードナイトが私を忘れてしまわないように。

この気持ちを歌にするなら、貴方はどんな詩を書くのかな？

大変遅くなりました。

まだ納得出来てない部分がありますので、後ほどまた訂正しようかと思っています。今回は非恋なのかな……。全員を登場させられずすみませんでした。では、また次回も宜しく御願います。

Merry Christmas in 2018

番外編、第5話！

クリスマス終わったというのに、クリスマス編です。

そして初の沙綾 said ですが違和感があるような気がするので、訂正などが入ったりすると思います。

シリアスであり、イチャイチャだったり……何が書きたかったんだ。(初の一万文字越え)

それではどうぞ！

今日は年に1度の特別な日、クリスマス。

私の実家はパン屋だから勿論大忙しの日であるけど、私の心の中は違う意味で大忙しだ。

さっきからレジをやっではいるものの、ミスしちゃったりパンを専用の袋に入れてから持ち帰り用の手提げに入れるのに、何故か専用の袋に入れずに持ち帰り用の袋に入れちゃいそうになったりと、パン屋の娘としてあるまじき事ばかりやってしまってる。

そのせいで、お母さんとお父さんから凄く心配されてる。

本当に何やってるんだろと思いつつも、今日だけはって自分を甘く見ちゃう面もあるから何とも言えない。

「……………はあ」

「ため息ついたら幸せが消えちゃうよ〜？」

「そうなんですけど……………って、ええ!？」

「え、どうしたの？」

「あ、アキさんいつからうちに居たんですか!？」

「ついさっきクリスマス限定のパンを買いにね。やっぱり、2年も経つと変わるものだね。前に来た時は急いでたけど改めて見ると私、本当に2年も昏睡状態だったんだ」

苦笑いしながらキョロキョロと辺りを見渡すアキさん。

2年前も良く来てくれてたけど、目を覚ましてから前より頻繁に来てくれる気がするなあ。

でも、確かに2年前とは少し変わったかもしれない。私がバンドを辞めてから本格的に家の手伝いをして、ポップなども書き始めたから前とは変わったと言われたらそうだと思う。

理由は話してないけどアキさんはきつと気付いてる、お姉さんである Rosei ia のベーシストのリサさんも相手に聞かずとも察してしまうし、何よりアキさんとリサさんを良く知る友希那先輩が「……ほんと、双子よね」って言ってたのも見ててそう思う。

自分の思考に完全に浸ってた私は急いで思考を戻して、アキさんに目を向けるとそこには少し寂しそうな悲しそうな表情を浮かべてるアキさんの姿。

何だか、そんな姿を見たら胸がギュッと締め付けられた気がしてそんな私の気持ちに気付かれないように口を動かす。

「アキさん」

「んー？」

「何のパン食べますか？」

「うーん、そうだなあ。クリスマス限定のパンは決まってるでしょ？」

そう言いながらトングを持って悩むアキさん。

さっきまでの表情が嘘だったかのように笑ってパンを見つめているのを見ると、本当に隠すのが上手いなあと思ってしまう。

アキさんは私に良く「沙綾は隠すのが上手いから気付いたりするの大変なんだよ？」なんて笑いながら言うけど、アキさんの方が分からない。

女優さんのようにコロッと変わる表情と雰囲気、潰れかけていたとしても気付かせない。

「……沙綾？」

「…あ、はい？」

「ふふ、ポーツとしてたね。ずっと私を見てるからどうしたのかなって思っちゃっ

たよ」

「楽しみだなーって思ってたんです」

「それは良かった、私も楽しみだったから！」

ふにゃっと笑う姿を見て、楽しみにしてたのは私だけじゃなかったんだと思えたら嬉しくなってくる。

アキさんは演技が上手い、隠すのが上手い。

だけど本当に嬉しい時のこの笑顔だけは本物、2年前から変わらないこの笑顔が私は好き。

何だか胸が暖かくなってきて、今でもパンとパンを右往左往していて普段の大人な雰囲気じゃなく子どもっぽくて笑ってしまう。

「む、沙綾。何で笑ってるのかなー？」

「ふふ、いえ。ちょっと可愛いなって」

「もう先輩をそうやってからかっちゃダメだぞ〜？」

「あ、今の凄いリサさんに似てました」

「ほんと？私、あまりリサに似てるって言われないから嬉しいかも」

「凄い似てると思いますよ？流石双子だなーっていつも思いました」

「やった、リサに言っておこ〜」

ご機嫌なアキさんは、ニコニコしながらトングでパンを次々と選んではお盆に置いていく。

モカもかなり買っていてくれるけど、アキさんも負けないぐらいの数を買っていく。

いつの日かなんて、どっちが多く食べれるかって謎の対決をしてアキさんが勝った時はモカが全額を払ってて、お店側に立つ私としても驚きで何も言えなかった記憶がある。

「アキさん、私としては嬉しいですけど食べきれますか…?」

「え、うん。こんなのまだまだだよ?」

「……………え?」

「モカと食べ比べした時なんてこれの5倍? 10倍だったかな、そんなぐらい食べたもん。まあ、その日の夜ご飯におかわりしなくて、やたらとりサやお母さん達に心配されてから自重してるけどね」

「……アキさん、凄い食べますもんね」

「バスケット部ですからね〜?」

「バスケット部のベ이스ト……」

何だろう、アキさんって凄い完璧な人じゃないかな。

今更だけど成績も優秀で常にトップ、運動神経が良くて強豪校からスポーツ推薦を沢山受ける。

スタイルも良くて身長も高い、顔面偏差値だってリサさんもだけど凄く高い。

……パーフェクトだよね、これ。

「バスケット部って言っても、今は所属してるだけでレギュラーメンバーじゃないけどね」

「でも、期待されてるじゃないですか」

「そうかな、昔みたいに動ければ話は変わるかもしれないけど今は違うからさ」

「アキさんの試合姿、また観たいなあ……」

「えー、この前羽女と花女の対抗球技大会でバスケットしたじゃーん」

「そうですけど……、でもアキさんのバスケットを楽しくやってる姿はどれだけ観てもカッコイイですから」

「……サラッと恥ずかしい事を」

「ふふ、アキさん顔真っ赤ですよ？」

「うっさいよ、沙綾っ！はい、これで！」

「あはは、ごめんなさい。じゃあすぐにお会計しちゃいますね」

「お願いしまーす」

アキさんからお盆とトングを受け取って、私はパンの数分だけ袋を取り出してレジを打ちながら入れていく。

クリスマス限定のパンと、メロンパン、塩パンにバターフランスパン。ビターチョコレートパンにカレーパン。

うん、やっぱり多いよね。私じゃ絶対食べきれない、でも私が考えた甘さ控えめにするために選んだビターチョコレートで作ったチョコレートパンを食べてくれるのは嬉しい。

ここだけの話、甘いのが苦手なアキさんでも食べられるようになって必死にアキさ

んが眠っている間に考えたなんて言えないよね。恥ずかしいもん。

「このビターチョコレートパン、沙綾が考えたんでしょ？」

「へ!？」

「ふふん、私がわからないとでも思った？」

「え、え、何で知ってるんですか!？」

「あ、本当に沙綾だったんだ」

「アキさん!？」

「そうかなー? って思ってたけど、本当に当たるなんて思ってなかった」

クスクス笑ってるアキさんに、私は何も言えずに口を閉じられない。

え、完全に私は騙されたってこと？それとも最初から気付いてたの？

頭が追いつかなくて、私は固まっているとアキさんは笑いながら説明してくれた。

「このパンを食べた時、最初は甘いかなって思ったんだけど全然甘くなくて。沙綾のお母さんやお父さんは私が甘いのが苦手なの知ってるのに、前に来た時に『オススメだから食べてみて？』って言われたから変だなんて思ってたけど、食べてみたらもしかして？って思ってた。ごめんね、騙しちゃって」

「……お母さん」

「ありがとね、沙綾。このパン、凄いい好き」

「……っい、いえ！お気に入りになって良かったです」

凄いい好きなんて言われると思わなかったから、直接言われると恥ずかしくなってくる。

それから急いで恥ずかしさを忘れるために、せっせとパンを袋に詰めてからお会計を済ませて、アキさんを部屋に招き入れてから私はアキさんが食べている間に最終準備を済ませていく。

今日はこれからアキさんとお出かけだ。

「ねえ、沙綾？」

「はい？」

「本当に良かったの？家族の皆とクリスマスパーティーしなくて」

「ふふ、アキさんこそ平気なんですか？」

「うちは平気だよ、昨日リサとお母さんが張り切ってご飯作ってくれたしお父さんも凄い力入れてたから。今日は両親どっちも仕事でリサは Roselia の皆とずるみたい?」

「え、尚更大丈夫なんですか? アキさん、Roselia に入ったんじゃ……」

「ううん、入ったって言っても私はバンドメンバーじゃないよ。Roselia のベーシストはリサ、私はあくまでただのベーシストだよ」

「……ポピパに来ませんか?」

「え?」

「……その、アキさんとまたバンドしたいなって」

「……………」

しまった、私は言った後に気付いてアキさんへと目を向ける。

だけど、既に遅くてアキさんは少し悲しそうな目で自分の手を見つめてるけどすぐに私の視線に気付いたのか困った顔をしながら笑った。

違う、そんな顔を見たかったわけじゃない。

「……沙綾、ポピパのベーシストはりみちゃん。私はもう、沙綾と同じバンドメンバーじゃないよ」

「っ、でも……………ごめんなさい」

「ううん、一緒にやりたいって思ってくれるの凄く嬉しい。でも私はもう何処のバンドのベーシストにもならないから」

「……え」

「あはは、ごめんね。いつでもサポートはするからさ！そんな事より、ほら急いで急いでー！私、もうパン食べきっちゃうよ？」

そう言われてパンの袋へと目を向ければ、本当に残り僅かしかなくて今食べてるビターチョコレートパンもあと一口で終わりそう。

私は慌てて身だしなみを確認しながら、さっきのアキさんの言葉を思い出す。

※もう、何処のバンドのベーシストにはならない※……か。

「さーやっ」

「ひゃ!？」

「時間無くなっちゃうよ、行つくぞー！」

「ま、待ってください！というか、アキさん見た目男子高校生ですけどいいんですか!？」

「いいのー、そういう風に見えるようにしてきたの。悪い虫が沙綾にくつつかないようにってね？」

「わ、悪い虫って…！アキさんだって女の子…っ!？」

人差し指を私の口元に持ってきて、アキさんは顔を近付けてから「しーっ」と口で小さい子に静かにと言うかのような素振りをする。

突然過ぎたのと、あまりにも顔が近くて私は内心パニック状態だ。

それにしても睫毛長いなあ、髪の毛も2年前と同じように短めに切られてるけど昔よりも大人っぽいから雰囲気とか違って別の髪型に見える。

「ここからはアキさんじゃなくて、アキくんね？」

「……へ？」

「だーかーらー、これから沙綾と私はデート。おっけー？」

いやいやいやいやいや、全然OKじゃないですっ！

私は伝わるように全力で首を横に振るけど、アキさんは何だかご機嫌が斜めになっちゃいます。

むっとしてる顔も可愛い……じゃなくて、どうしてアキさんを男の子として見るのだろう？

「……はあ、沙綾いい？」

「は、はい」

「沙綾はすっごく可愛い子なんだよ、そんな子が近くに男の人を連れて歩いてなかつたらナンパしようとか思ってる人はすぐに話しかけてくるよ？」

「え、私よりもアキさんの方がすっごく綺麗で可愛いと思いますよ？」

「そんな事ないけど、あっても私はやられたら倍返しで潰すからいいの」

「今、凄く物騒な言葉が出ましたよね!？」

「まあまあ、私はそういうそっち系が得意なのは沙綾も知ってるでしょ？でも、沙綾は得意じゃない」

「……それは」

アキさんが武術系統を得意としてるのは知ってる、というより見た事がある。もう何年も前だけどバンドを組む以前、そういう面を偶然にも見てしまったから。

それに、私は中学から女子校に通ってるからあまり男の人に対して耐性というものが無い。

でも、アキさんは中学は共学に通っていた事もあって男の人に対しての耐性は私と比べたら一目瞭然だと思う。

「それにさ、私は前から男の子に間違われやすかったしリサと出かける時はいつもこんな感じの服着て彼氏役してるんだ。だから、もしもの場合に対処出来やすくするためにも、ね？」

「……わかりました」

「うんうん、沙綾は彼氏が出来た時のリハ・サルって思ってくれば大丈夫だよ」

リハーサル。

その言葉にズキッと胸が痛くなってきて、苦しくなる。

何でなのかは分からない、でも凄く嫌だって事だけは分かる。

嫌だ、どうしてかアキさんのお出かけをリハーサルと呼びたくない。

アキさんの言葉は尤もだ、私は実際に恋愛の経験がないから彼氏なんて出来てもどうすればいいか分からない。

あれ、じゃあ逆にアキさんは経験があるのかな？

私と違って共学に通っていた事があるから恋愛をした事があっても何一つ可笑しくない、それにルックスも全て整っているのだからモテても変じゃない。

「…沙綾？大丈夫？」

「……あ、はい。ごめんなさい、少し考え事してました」

「無理してたら怒るからね、今度こそ」

「え？」

「…もう、起きてるから」

「……アキ……さん……？」

「私は沙綾の傍にいる、隠せると思っなよ？」

アキさんはニヤツと笑いながら突然の男の子口調で私告げてきた。そんな表情に私は固まる。

やばい、こんな無理だよ。耐性があるとか無いとか置いといて直視出来るわけがない。

そんな私に不満を感じたのか、アキさんは手で優しく掴んでからまるで、キスで

もするかのようにぐいっと私の顎を持ち上げて視線を合わせようとする。

「……アキさん!？」

「俺の事、ちゃんと見て」

「……あ」

「かーわい、顔真っ赤だよ。沙綾☆」

アキさんはクスツと笑って、コツつんと顎を合わせてきてからポンポンと頭を撫でてきた。

やばい、絶対に顔赤い。アキさんに言われて尚更熱くなってきてるのを感じる。もうだめ、こんなの誰も耐えられないよ……。

私は倒れるようにアキさんの胸に飛び込む、もちろんアキさんは驚くけどしっか

り支えてくれる所がアキさんだ。

ああ、改めて思うけど久しぶりのアキさんの香りを感じた気がする。

「……沙綾？」

「……ちょっとだけ、甘えさせてください」

「ふふ、いいよ。時間が無くなると困るから少しだけね」

「…アキさん」

「もう、今日はアキくんだったってばー。まあ今は、いっか」

ギョツとアキさんの服を掴めば、少し皺になってしまいうけど私は気付かないふりをして力を込める。

久しぶりだ、この温もりも匂い、体温、何もかもが久しぶりなもので私の心は幸せで満たされていく。

ずっと、リサさんから教えて貰ってからずっと待っていたんだよアキさん。口ではもう沢山言ったから今は言わないけどね。

「沙綾、大丈夫？」

「…あ、すみません！突然抱き着いたりなんかして……」

「大丈夫だよ、びっくりしただけだから。よし、じゃあ行こっか！」

「はい！」

部屋から出て私は鞆を持ち、お母さんに一言告げてから今日のために買っておいした新しい靴を履いて外で待ってるアキさんの元へ向かう。

外はクリスマスシーズンだから、いくら暖かくしても肌寒さは残ってしまう。

アキさんの格好はと言うと、黒のジャケットの下に赤のフード付きパーカーを着て下は黒の長ズボン。

十字架のネックレスを首から下げて、靴は黒に白いラインが入ったスニーカー。

「それじゃあ、沙綾」

「はい？」

「デート、行こっか？」

「ふふ、はい！」

伸ばされた手を私は少し恥ずかしさを感じつつも、自分の手を重ねれば恋人繋ぎされる。

流石に予想外だったからアキさんに目を向ければ、イタズラでも仕掛けようとしてる子みたいにニヤッと笑って口を開いた。

「俺達恋人だから当たり前だろ？」

「っアキさん！」

「あはは！んじゃ行っくぞー！」

「わあ!?急に走らないでくださいよー！」

「早く早く！」

普段よりも何だか子供っぽいアキさん、じゃなくてアキくんには私は笑いながら手を引っ張られながらも背中を追いかけた。

そうして、私は偽物恋人アキさんと一緒にクリスマスデートに向かった。

電車の中ではリサさんにも同じ事をしてるようで、痴漢されないために私はいつも壁側にされる。

私の身長的に、アキさんは見上げる形になるのだけど2年前よりも大きくなっ
たと思う。

私の視線に気が付いたアキさんは、クスッと微笑んできて私は少し見つめていた
事に恥ずかしくなった。

ショッピングモールについて、大きなクリスマスツリーの場所を確認してから服
屋さんを見に行く。

もちろん、お互い女子高生だけどアキさんは今男装してる状態だから周囲からは
カップルと見られてるわけで。

「あ、あのアキ…くん？」

「ん？」

「……すっごく見られてますよね」

「あー、だよな。俺も気になってた」

「……完全にきりきりしてる」

「沙綾も早く慣れた方がいいと思うぞ？リサはすぐに慣れたから」

「…頑張ります。あ、この服着てきてもいいですか？」

「うん、いいよ」

頑張りますとは言ったものの、慣れるわけがなく。私は少しでも意識を変えるべく、気になる服を着て試着してはアキさんに見てもらったりしてみるけどアキさん

の言葉の一つ一つがあまりにも恋人っぽくて逆効果だった。

「どう…ですか？」

「すっごく可愛い、沙綾は元々可愛いしスタイルいいから何着ても似合うと思うんだよね」

「……っ」

「んー、でも何か物足りない」

「そ、そうですね？」

「うん、何だろう。俺の服の趣味とは違う系統だから上手く言えない、リサなら一発なんだろうけどなあ……」

アキさんの口から自分の名前以外を呼ばれる度に、胸が張り裂けそうなくらいに痛くなる。

私はどうしてもそれが嫌で、ずっと悩んでいるアキさんの腕を掴んで試着室に連れ込んでから人の目が無いうちにカーテンを完全に閉める。

「うわぁ!?!」

「しーっ」

「しーって、突然引っ張った沙綾が…!」

「アキさん」

「う、うん？」

「今の私に何が足りませんか？」

「え、えーっとね。ずっと考えてるんだけどさ……私はリサみたいに可愛い服とか着ないし、紗夜ちゃんみたいに清楚でも無いから上手く言えな……っ!?」

リサさん、紗夜先輩。

私以外の女の人の名前がアキさんの口から出てくるのが嫌で、私は口にするよりも先に自分の口でアキさんの口を封じた。

もちろん、アキさんは驚いて私を離そうとするけどアキさんを壁の方へと追い詰めてから私は更に角度を変えてキスをする。

「……さあ……っ!?」

「……ん」

口を開いて私の名前を呼んで止めようとしたのかもしれないけど、私はその少しでも開いた口内を見過ごすわけもなく、そのまま攻めたてる。

アキさんの抵抗もだんだん無くなってきて、私の肩を掴んでいた手の力が緩くなってくる。

アキさんは確かに強くて、武術も基本的に何でもできてしまう。でも、私達には手を出せないって前に言ってたから私を無理やり離すなんてしない。

それから少しして離れば、アキさんと私の口には銀色の橋が出来ていてお互いに呼吸を荒くする。

「……………さあ…や…」

「……………嫌いに…なりましたよね」

「……………え？」

「……ごめん…なさい。ごめんなさい、ごめんなさい…！アキさんの気持ち、考
えずに私…！」

アキさんの顔を見た瞬間に罪悪感が溢れる。

最低だ、その場の気持ちでこんな事してアキさんが私には手を出さないことを逆
手に取ってこんな事。

嫌われる、嫌だ。アキさんに嫌われたくない、もうあの笑顔が見れないなんて嫌
だ。

ずっと傍にいたい、他の誰でもなくリサさんでもなく紗夜先輩でもない。

私だけが

「……………あ」

「大丈夫、嫌いになんてならないから落ち着いて」

「…アキ…さん、私…:…!」

「大丈夫だって、驚いちゃっただけ。ごめんね、私は沙綾とデートしてるのに違う女の子の名前ばかり呼んでたね。ごめん」

アキさんに抱き締められて、私はそのまま抱きつく。

私は気付いてしまった、どうしてアキさんにリハーサルと言われて嫌だったのか。他の人の名前を聞くだけで胸が張り裂けそうだったのか。

そして、どうしてアキさんの一つ一つの表情や雰囲気、動作に自分がこんなにも動揺するのかも。

私は、アキさんが

「……………好き」

「え？」

「…ふふ、いえ。何でもありません」

「ん??」

もう少しだけ、この気持ちは閉まっておこう。

だから、アキさん。もし、叶うなら。

私は微笑みながらアキさんの肩に手を添える。アキさんはびくっと震えるけど、嫌そうな素振りは見せないからそのまま続行。

私は少し背伸びして耳元に口を近付ける。

「アキさん、今は私のアキさんでいてくださいね？」

「——っ！…うん、いいよ沙綾」

「ふふ、嬉しいです」

顔を真っ赤にして顔を逸らしながら答えるアキさんが、とっても珍しくて少しだけ勝った気持ちに浸る。

それからすぐに試着室を出てから気に入った服だけを買って、時間を見れば結構いい時間だったから夜ご飯に行く事になった。

お店はアキさんが元々予約していてくれてたお店で、とても高校生が入るような場所にはまた見えない豪華なレストランで私は思わず固まってしまふ。

「ここからのイルミネーションが綺麗なんだよ？お父さんに前にオススメされて来てからお気に入りなんだ」

「そうなんですか、…：…因みに誰と来たんですか？」

「リサだから落ち着こ!？」

「ふふ、冗談です」

リサさんとかー、やっぱり羨ましいな。

でも、双子なんだからしょうがないよね。こんな豪華なレストランに2人で食事ってなかなか無い気がするけど……。

メニュー表をウェイトレスさんから受け取って、中を見れば値段が書かれてない。
……え？

「あ、あのアキくん」

「ん？」

「値段が書かれてないんですけど……」

「あー、俺が払うから好きな物選んで？」

「ええ!? そんな事できませんよ!」

「——2年前のお詫び、だから」

「…え?」

アキさんは苦笑しながら、私の目を見つめてくる。

2年前のお詫びって本来なら私がするべきじゃ……、そう思ったのがバレていたのかアキさんは首を横に振ってから左手の小指を立てながら私の前まで持ってきてゆっくりと口を開いた。

「2年前、私は沙綾のもとへ行くって約束したのに結局事故に遭って守れなかった。目を覚ますまでずっと長い夢を見てたの」

「……夢、ですか？」

「そ、長い夢。私がない世界で皆がどんな風に生活してるのかを、まるで1枚のガラス越しに観てるような感覚だった。一人っ子のリサ、私のいないCHISA、私が教えずに独学で楽器を学ぶAfterglowの皆」

次は手のひらを開いたり、閉じたりしながらアキさんはポツポツと言葉を紡いでいく。

その話は、アキさんがいないIFの世界。

「私がない、一歩違えば十分に有り得た世界をずっと見てきた。もちろん、沙綾にあの日約束した私はいない。私がない世界だから、2年間リサが悲しむ事も

ゆきちゃんがどこにも向けられない気持ちになる事も、沙綾が私の事故を自分のせいだと思わなくていい未来」

「……アキ……さん……？」

「今日は、沙綾に2年前の約束を守れなかったお詫びであり私のせいで追い詰めてしまったお詫び。だから気にしないで選んで？」

「……それなら、私もお詫びしなきゃいけないです」

「え？」

「……私、アキさんが事故に遭って昏睡状態だった事をつい最近になるまで知らなかったんです。あんなにも身近なアキさんを、私は気付くことさえ出来なかった。それどころか、約束は？って疑ってる自分がいたんです」

アキさんは1度も私の約束を破る事は無かった。

でも、あの日アキさんは病院に来る事はなくて翌日ナツに聞いたたら、凄く言いづらそうにしながら『……アキさん、家の事情ですぐに帰っちゃったんだ』って聞いた時、私はどうして？約束は？って思ってしまった。

RAINを送っても既読は付かない、電話をかけても留守番電話。実家のパン屋に顔を出すことも無くなった。

すぐに気付けたはずなのに、私はあの時自分の事でいっぱいだった。

「沙綾は悪くないよ。リサから聞いた、凄く自分のせいだって気にしてたって」

「……でも、私は!!」

「沙綾」

「…っ、はい」

「私ね、沙綾が病室に走ってきてくれた事嬉しかった。リサ達に会えた事もそうだが、何より眠っている間自分がいない世界を見てきた。でも、起きて帰るギリギリに沙綾は泣きながら言ってくれたよね」

—— 『アキさんが生きてくれて良かった…！』

そう言われて、私は力強く頷く。

だって、本当の事だから。アキさんが起きてくれて、生きていてくれたから今がある。

私にとってアキさんはかけがえのない、大切な大切な存在。

「だからもう十分だよ、待っていてくれてありがとう沙綾」

「……っはい……！」

「ふふ、それじゃあそろそろご飯食べよっ！」

アキさんは、ふにゃつと私の大好きな笑顔を浮かべてからメニュー表に目を通しながら「どれにしようかな」なんて言っている。

そんな姿を見て、やっぱり私はアキさんがいない世界なんて有り得ないなって思った。

だって、こんなにも愛しくて暖かい人がいないなんて私には考えられないから。それから、アキさんはハンバーグを私は普段より高級そうなペロンチーノを頼んで2人で食べ比べをしてみたり、デザートを頼んでアキさんが「甘いー…」と言っているのを私はクスクス笑ったり、逆にコーヒーを私よりも平然と飲むアキさんに嫉妬したり。

凄く楽しい時間を過ごした。

「さて、イルミネーション見に行こっか」

「え？ここで見るんじゃないんですか？」

「なーに言ってるのさ、何のためにクリスマスツリーの場所を確認したかなー？」

「あ、そうですね」

「あはは、それじゃあ行くぞ？沙綾」

「はい！」

もう1度手を重ねて、私達はクリスマスツリーへと歩く。

クリスマス当日だからかカップルは多いけど、学校の友達とも会ったからポピパの皆もいるのかも。

そんな事を思いながら、アキさんと2人でイルミネーションを見て回っていると突然アキさんが止まった。

なんだろう？と思ってアキさんが見ている方に視線を向ければ、そこには驚いてるリサさんや友希那先輩などRoseliaの皆さん。

「アキ！」

「……リサ」

「もう、沙綾と遊びに行くなら言ってよね。何にも言わずに家飛び出して心配したんだよ？」

「リサこそ、Roseliaの皆とクリスマスパーティーするんじゃないの？」

「

「してたよ、その途中であこが大きなクリスマスツリーが見たいって言うて見に来たの」

「…へえ、そっか」

「あ、沙綾さえ良ければさ！アタシ達も一緒に見てもいい？」

「え!? え、えーっと……」

「リサ、今日はダメ」

気のせいかな、アキさんの機嫌が悪い気がする。

顔には出てないけど、さっきまでと雰囲気も変わってるし何より口調に刺があるような感じ。

それには、私だけでなくRoseliaの皆さんも気付いたみたいで紗夜先輩や

隣子先輩は少し申し訳なさそうな顔をしてる。

何かあったのかな…？

「アキ、何か怒ってる？」

「別に怒ってない、私は沙綾とクリスマス過ごすって決めてるから行くよ」

「…待って、怒ってるでしょ？アタシ、何かした？」

「…怒ってないから。ゆきちゃん、もう行っていいかな？」

「…アキ、もう1度答えて頂戴。その後なら構わないわ」

「…何度聞かれても答えは変わらない、私は Roselia だけのバンドメンバーにはならないよ」

「……アキさん？」

「ごめんね、沙綾巻き込んで。すぐに向こう行こっか？」

さっきのベアシストにはならないって話と、私の中で全てがやっと繋がった。だから、アキさんは……。

そう微笑むアキさんの顔とリサさんの少し傷付いた顔を見たら私はその手を止める事しか出来なかった。

アキさんはもちろん驚いていて、Roseliaの皆さんも驚いてる。

「……沙綾？」

「アキさん」

「……っ!?」

私は背のびをして、今度は優しくキスをする。

リサさん達が息を飲んだのを感じつつも、ゆっくりと離れてから Roselia の皆さんへと視線を向ける。

これは、ちょっととした宣戦布告……かな？

「これだけは譲りません、リサさん。紗夜先輩」

「っ！」

「……っ」

それから私はアキさんの手を引っ張ってクリスマスツリーの正面が見えるけど、少し人気がない場所に移動してからアキさんを抱きしめる。

アキさんは嫌がる素振りは見せずに、ただ腕をどうしようと思っている感じ。何だか、こんなにも余裕のないアキさんは久しぶりかも。

「アキさん、私はずっとこれからもアキさんの傍にいます。だから——」

——貴方の一番でいさせてください。

大変お待たせいたしました。

クリスマス次の日に出すという、前代未聞をやらかすという本当に申し訳ないです。

本編もプロットは出来ているので近々（前から言ってる気がする）更新しようとする。

思っています。

それでは、また次回もよろしくお願いします！

ur first impression from my perspective.

Your first impression from my perspective.

番外編第6話！

今回は新しい有咲視点です。

それではどうぞ！（本編どうした↑）

最近、うちのドラママーがおかしい。

いや別に具合悪いか霧囲気が悪いか、そういうわけじゃない。何というかアキさんが退院を迎えた日が過ぎてから本当におかしいのだ。

ずーっと、惚気けてやがる。

あのりみでさえも、苦笑いを浮かべてるレベルだ。おたえや香澄は『教えて教えて〜!』と聞きまくってる、正直あんなにも聞いているのに何故飽きないのか私からしたら不思議でしかない。

「ねえ、有咲聞いている?」

「あー、聞いている聞いている。アキさん大好きーだよな」

「ち、違うわけでも無いけど何か雑だね……」

「さーや、本当にアキさんの事好きだよね〜!」

「うんうん、沙綾。口を開けたずーっと、アキさんの事しか話さない」

「でも、沙綾ちゃんがアキさんを好きになる理由私分かるよ?」

「りみりん！だよね！もう、アキさんはカッコよくて優しくて何もかもが揃ってるのに全く憎めない凄い良い人なんだよ〜！」

「……沙綾、お前少しは落ち着けよ。惚気て彼氏を自慢する彼女みたいだぞ」

でも、そう言っても当の本人である沙綾には聞こえるわけがねえ。

今でさえ、ドラマーにとって命とも呼べるドラムスティックを両手に持ちながら、カツカツとカウントを刻む時のように軽くぶつけながら「アキさん〜♪」なんてわけ分からない歌を歌ってんだから重症だろ。

でも、アキさんが良い人だという事はまだ関わりが少ない私でも分かる。

何て言ったって、Roseliaのベーシストである今井リサさんの双子の妹さんだ。優しくていい人に決まってる。

それに、人に頼るなんて滅多にどころか頼るの〜た〜の字でさえ前まで知らなかったと言える沙綾にとって姉のような存在である人だ。

悪い人なわけがねえ。

「それにしても、りみ。アキさんに関わりあったのか？」

「あ、うん。パン友なんだ」

「パン友？モカちゃんも言ってたような……？」

「パン友……ウサ友みたいなの？」

「逆にウサ友が何か分かんねえよ！パン友の方がまだ分かるぞ!!」

「ウサギ大好き、ウサギを愛でよう隊だよ？有咲、そんな事も分からないの？」

「どっから友が来たんだよ、今の!!」

「あれ？どこだろう？」

「おたえが言ったんだろーが!!」

「あはは……、そっか。りみりん、うちのパンを買いに来てくれるからアキさんと仲良くてもおかしくないね」

「うん、アキさん。すっごく優しい人で、私がチョココロネを買えなかった日はまだ知り合ってもない私に譲ってくれた事があるの」

へえ、そりゃ良い人だな。

おたえへのツツコミに私は疲れつつも、りみの言葉に耳を傾けながらそんな事を思った。

りみにとって生命維持の源と呼んでも過言ではないチョココロネだ、その譲って

もらった日にアキさんと出会っていなければその日のりみは活動停止していただろう。

いつの日か、チョココロネが大好き過ぎてテスト期間中にやまぶきベーカリーのチョココロネを買いに行こうと家から出ようとしたらお母さんに怒られて買いに行けず、その次の日のりみの学校で見た姿と言ったら……酷かったな。うん。

「へえ〜！りみりんもアキさんと仲良いんだね！いいなあ……」

「うん、羨ましい」

「あれ、おたえも？」

「羨ましい、だってアキさんは何の楽器でも出来ちゃうって沙綾言ってたからギター見てみたい」

ur first impression from my perspective.

「あ、なるほどね〜」

「リサさんの話だと、すげえ上手いらしぞ。アコースティックギターでRoseliaの曲を簡単に弾いたらしいしな」

「アコースティックギターで!?!」

「アコー、スティック、ギター? あこちゃんとスティックのギター?」

「香澄は変にくぎんなよ! アコースティックギターな!?! あこちゃんは関係ねえから!」

「あー、アキさんアコースティックギター確かに上手かったな〜。昔、弾いてもらった事あるから分かるよ」

「どうだった？沙綾、どんな感じ？」

「す、凄い食い付きだね、おたえ。んー、どんな感じかぁ。何て説明すればいいかな」

「優しい感じ……なのかな？」

沙綾は、スティックを置いてからうーんと唸る。

そんな沙綾に、りみは質問するが沙綾は「そうなんだけど、それだけじゃないんだよね……」と言葉を濁してしまう。

アコースティックギターって、あれだよな。アンプ無しでも音が出るっていう、おたえや香澄が持つてるギターとはまた違う奴。

私もそこまで詳しくねえけど、ちょっととした知識ぐらいなら一応持つてはいる。

「包まれる感じで優しいんだけど、でもカッコ良さはあって……無理、説明出来

ur first impression from my perspective.

ない」

「……今度、アキさんに弾いてもらおう」

「おたえ、お前関わりあんの？」

「無いよ？」

「無いのかよ!? 良くそんな簡単に話しかけようとしたな!？」

「私も聞きたいー! 聞きたいよー!」

「アキさん、優しいからすぐ弾いてくれる気がするなあ」

「うん、アキさん。すっごく優しいよね、沙綾ちゃん」

いや、マジで最近沙綾だけじゃねえ。ポピパの会話にこんなにも出てくるアキさん、くしゃみとかしてなければいいけどな……。

何度も何度もくしゃみさせてたら申し訳ねえ、それも自分が関わってる人だけでなく会ったことが片手で数えられる程度の人達に、だ。

それから練習に意識を切り替えて、沙綾のスティックで刻まれるカウントに私は意識を集中させてキーボードに向き直ったのが昨日までの私の日々だった。

そう、私もここまでは普段と何ら変わらなかったんだ。

アキさんとは関わりがなく、バンドというもので知り合った人の妹さんというその程度。

ただ変わったというのなら。

「有咲ちゃん？」

「……何でこうなったんだ」

目の前で、アキさんがポテトを食べてるっていう今まででは有り得ない日常を送っているという事だろうな。

どうしてこうなったのかというと、数時間前まで遡る必要がある。

別にアキさんと会う約束だとかはした覚えがない、何ならその前に私はアキさんの連絡先を知らない。

私は今日、久しぶりにバンド練習が休みなのもあって新しい盆栽でも見ようかと商店街を歩いていた。

その後は沙綾の家に行ってパンを買うか、お店の手伝いでもしようかなと思いつながら歩いて、いつも盆栽を見に行く時は訪れるお店に入ろうとした時だった。

「あれ？沙綾のバンドメンバーの子？」

「え？……リサさんの」

「こうしてちゃんと会うのは初めてだよね。初めまして、今井リサの双子の妹の今井アキです」

「は、初めまして市ヶ谷有咲です……」

「有咲ちゃん！」

「は、はい!？」

突然下の名前と呼ばれて、私は驚いて盆栽ショップに入ろうと扉に手を伸ばしていたが手を離す。

すげえ、リサさんにそっくりだ。人見知りとかしない、私とは正反対のような人なのだろうか。

そう思いつつも、私は恐る恐るアキさんへと視線を向けるとアキさんはふにやつと微笑んだ。

……可愛い。沙綾が惚気けたくなるのも分かる気がする。

「リサと沙綾から良く聞いてるんだ、『有咲っていうしっかりしてる子がすっごく可愛いんだ〜!』って」

「そ、そんな事ないです……!」

「あはは、確かに可愛い子だなあって思ったよ？有咲ちゃん、もし違ったら違うでいいんだけど」

「…はい？」

「盆栽、好き？」

「……え？」

「ほら、ここ盆栽ショップでしょ？入ろうとしてたから好きなのかなーって」

どうしよう、ポピパのメンバーにさえ最初は言えなかった私の趣味。

蔵練が始まってから縁側に座ったりとかする時に知られて話したけど、今思えば普通の女子高生ならおかしな趣味でしかない。

リサさんの妹ならあくまで私の予想だが、きっとリサさんのように世のJKの本のような私とは無縁の可愛らしい趣味を持っているのだろう。

前に沙綾から聞いた気がするが、思い出せない。沙綾、これからはちゃんと聞くことにするから今は許してくれ。

「……え、えっと」

「あー、聞かない方が良かった…?」

「い、いえ。その、普通の女子高生はあまり盆栽とか好きじゃないと思いますから……その……」

「ぶっ、あはは！」

「……へ？」

どうやって誤魔化そうかと口を濁していると、突然目の前で笑い出したアキさん。何で笑っているのかとか聞きたいことは沢山あるのに、私は驚きと予想外すぎて固まってアキさんを見ている事しか出来ない。

暫くして、アキさんは落ち着いたのか『ふう、ごめんね。突然笑っちゃって』と謝ってきたのを私は首を横に振って、とりあえず大丈夫だと意思表示はする。

ただ、何故なのかは凄い気になるが。

「その、有咲ちゃんは自分の趣味を話すのがあまり好きじゃない？」

「え、あ、まあ。好きじゃないというより、変だと思われるだろうなって思って……」

「変じゃないと思うよ？」

「え？」

「だって、盆栽って日本の伝統芸術作品の一つだよ。お父さんが趣味で好きなのと私がそういう日本の伝統とか好きだから昔は話を良く聞いてたの。水のやり加減や枝の切るタイミング、数によって一つの作品となる盆栽。何より可愛いらしくもあり、美しいフォルム。日本の伝統とも呼べる一つの芸術だもん、私は好きだよ」

「…もしかして、わかりますか？あの盆栽の素晴らしさが…！」

「うん、わかる！もう、あれは植物とかで括っちゃダメだよね！」

「そうなんですよね！あれは言うなれば……！」

「日本の天然芸術作品のたまもの!!」

やべえよ、すげえ人と出会っちゃったよ!!

私の心の中は珍しく興奮状態、まさかアキさんが盆栽の魅力や素晴らしさを知ってるなんて誰が予想できる？

それから盆栽ショップの目の前で女子高生2人が盆栽の話で、花を咲かせるといふ誰もが想像出来ない状態が続いてからアキさんの提案で2人で盆栽ショップに入る事に。

それからは、まあ一つの盆栽を見ては2人で「これはあーだ」や「いやここがこーだ」とか言い合って、店主の人までその声が聞こえたのか私達の会話に入るといふ今までに無い経験をした。

そんなこんなで盆栽の話が簡単に終わるわけもなく、近くのハンバーガーシヨッ

プに立ち寄ったのが今なのだ。

「いやー！まさか、有咲ちゃんと盆栽であんなに話せるなんて思わなかったよ」

「私もです、まさかりサさんの妹さんであるアキさんとこんなに話せるなんて……」

「あはは、良く言われる。リサって見た目ギャルじゃん？」

「ギャルですね、先輩に対して言っちゃダメですけど」

「いや、あれは私もギャルだと思ってるから大丈夫だよ。だから私も結構そう思われがちだけど、バスケとか合気道、スケボー以外は基本的にインドアなんだ」

「え、そうなんですか？」

「うん。お父さんの趣味である盆栽を眺めてアコースティックギター弾いたり、あ
こちゃんや燐子ちゃんとNFOやったり、あとは音楽鑑賞とかネットサーフィン？

「……めちゃくちゃインドアですね」

「でしょ？リサはアウトドアだけだね、双子でも意外と違うんだ。それに私はリ
サと違って結構、人との繋がりとか人付き合いとか苦手だしね」

「え!?勝手な予想ですけど、全然人付き合いとか得意そうに見えました……」

「あはは、さつき有咲ちゃんに話しかけるのも結構勇気出したんだよ。正直、私
は人との関わり方とかちょっと分かんなくてさ……」

そう、苦笑いを浮かべながら言う姿は本当に意外だと思う。リサさんと同じよう

な人なのかと思ったら全然違った。

逆に、アキさんの外に対する思いとか人との関わり方や繋がりが苦手なのとか凄く共感出来た。

「……外とかさ、もう出る気無くすよね。こんな寒いと」

「わかります、私も盆栽のためじゃなかったら……」

「私も、リサに外に出なさいって言われなかったら……」

「アキさんも大変なんですね」

「まあね、リサは私のためだと思って言ってくれるんだけど寒い外に用事もないのに出るなんて鬼畜でしかない……」

「ふふ、沙綾もリサさんと同じ事言ってるそう」

「そうなの、沙綾も同じ事言うんだよー？2人してさ、『外に出なさい！』とか私を何歳だと思ってるのかな」

はあ、とため息を吐きながらアキさんはポテトを食べ進める。

何だか第一印象とは全く違って、凄く話しやすい人だと思う。リサさんに対しても私は前に思ったけど、今井家はそういう血筋なのか？

私はふと、そこで思い出した。

おたえと香澄が言っていたあの言葉、アキさんのアコースティックギターを見たいという。

「あ、あの」

「んー？」

「アキさんって、ギター弾けるんですか…?」

「うん、弾けるよ」

「え、ベーシストですよね!?!」

「うん、ベースがメインだけどね。ギター、キーボード、ドラム全部一通りは出来るよ」

「………すげえ、あ」

「あはは！いいよいいよ、楽な方で話して?」

「は、はい」

やらかした。と思ったけど、やっぱりリサさんの妹なんだな。普通なら後輩にこんな事言わねーのに、アキさんは何でもないと普通に笑って言った。

本当に尊敬する、こういう先輩に私はなれるのかな。

そう思ったと同時に私はきつと、この先輩方に勝るなんて事は出来ねえんだろうなとも思った。

ずっと追い掛けてる気がする。

「それで、ギターだけ。突然どうしたの？」

「あ、その沙綾が昨日バンド練習の休憩中に『アキさんはアコースティックギターが上手かったな』って言ったのを思い出して。バンド内でも聞いてみたいなって話になったんです」

「なるほどね、沙綾も覚えてたんだ。んー、有咲ちゃんこのあと時間ある？」

「え？私は特に無いので、大丈夫ですけど……」

アキさんはスマホをポケットから取り出すと、時間を確認したのかチラッと見てからすぐにポケットにしまってから物凄い勢いでポテトを食べ切った。

めちやくちや早え、すげえあんな速さでポテト食べた人初めて見たぞ!?

「んっと、よし！有咲ちゃんは飲み物だけだよね？」

「は、はい」

「じゃあ行こっか！」

「え!?!何処にですか!?!」

「もし良ければ私の家でセッションしない？」

「ええ!?!セッションですか!?!」

待て待て待て、そんな事してもいいのかわ?

私達は盆栽という予想外の事で仲良くはなったものの、そんな家にあがらせてもらって、更にはセッションするなんて沙綾達に知られたら私は嫉妬されるに決まってる。

あの、あの沙綾だぞ。アキさん大好きと毎日言ってるような沙綾よりも先に退院したアキさんとセッションしていいのだろうか？

「…だめかな？」

「いえ！逆にお願いします！」

盆栽に感謝して私はアキさんとセツションだ！

あんな目で見られて断られて断れる人がいるわけねえ、それにキーボードも弾けるなら一人のキーボリストとしても勉強になる事が多いと思う。

私の返事にアキさんは、ホッと息を吐いて「良かった、断られるかと思った」と微笑んだ。

いや、多分ですけどアキさんの頼み事やお願い事は全員が了承すると思います。主に、あのベーシストの先輩とドラマーの2人なら絶対。

それから、アキさんが私が緊張しないようにとコンビニに寄ってくれて好きなお菓子を買ってくれた。

本当に優しい人なんだなと今日1日だけで、めちゃくちゃ感じる。それと平行に素朴な疑問も浮かぶわけだ。

「あの、アキさん」

「うん？」

ur first impression from my perspective.

「どうして、ここまでしてくれるんですか？」

「んー、有咲ちゃんと仲良くなりたくなって思ったのと聞きたい事があったからかな？」

「聞きたい事ですか…？」

「うん、私がいなかった間の2年間。沙綾の話、教えて欲しいなって」

「…でも、私達ちゃんと関わったの高校1年からで最近ですよ」

「それでもいいよ、それに有咲ちゃんの事も知らない事が多いからさ」

ふにゃっと微笑みながら、アキさんはコンビニで買ったホットコーヒーを飲んで

いる。

すげえな、ホットコーヒーなんて私はあまり得意じゃない。あんな風にかっこよく飲めたら、大人っぽく見えるもんなのだろうか。

そう思いながら、紅茶を飲んでアキさんの話へと思考を戻す。

「沙綾がバンド抜けた理由、本当は知ってるの」

「…CHISPAの人達に聞いたんですか？」

「ううん、ただ何となく私のせい何か別の事で辞めたんだろうって最初は思ってたよ。でも、私が約束を守れなかったあの日を考えたら沙綾は自分ではなく、家族を優先するのが沙綾かなって」

「…流石ですね」

ur first impression from my perspective.

リサさんの妹だ。観察力とかは本当に凄いんだろうと思っていたけど、まさかここまで沙綾の事を分かって気付く人って私達ポピパ以外にいるか？

いや、下手したら私達なんかよりも分かっている。

「ううん、私が気付いても意味が無いよ。何もしてあげられなかった」

「…え？」

「私は約束を守れなかった先輩、それだけだよ」

「…アキさん、何言ってるんですか」

「2年間、私は沢山の人に迷惑をかけてた。本当はあの事故の日の事、はっきり覚えてる」

その言葉に私は思わず驚いてアキさんの顔を見た。

あの日アキさんが入院する病院から電話があつた時、沙綾は物凄い勢いでスマホの通話を始めてカタカタと隣で震えていたのを覚えてる。

あまりの沙綾の動揺に私は急いで背中を叩いて、ステージから下がったりサさんを確認してから声を出したんだ。

『沙綾!!』

『…あ、あり…さ…』

『早くリサさんのところ行け！話はそっからだ!』

『…っ、うん!』

それから傍にいた青葉さん——今じゃ、モカちゃんと呼ぶほど仲良くなったがモ

カちゃん達 Aftergrowの皆など既にライブが終わってる人達は沙綾とモカちゃんの後ろをついて行くような形で追いかけた。

それから、沙綾は震える手で何とかリサさんにスマホを渡したのは良かったが、少ししてからリサさんがスマホを床に落とした事さえ気付いていないのか、衣装を着たままだというのに凄く速さでステージ裏を飛び出した。

私は急いで沙綾の腕を掴んで、初めて自分があんなに必死になったなど今では苦笑する。

『行け!!ここは私達に任せろ、沙綾!!』

『……有咲、でも……!』

『さーや、行って!』

『沙綾ちゃん!』

『沙綾、行かなきゃ後悔するよ?』

『……うん、行ってきます!』

それから私達は欠けたメンバーを補う為にも全員でアンコールに応え、何とかライブは成功で終わり私達も病院へと向かった。

病院の廊下を走るなど注意を受けつつも、病室に入ってみれば沙綾が泣きながら、でも笑って赤色が多い茶髪の髪の人と話をしてるのを見て『ああ、あの人がアキさんなのか』とすぐにストンっと納得した。

沙綾から聞いていた話で、勝手に連想していたけどそのままの人で凄く優しくそうだと言うのが第一印象。

赤茶色の髪色に、平均よりも声がちょっと低めのアルト。2年も寝ていたのにしっかりと筋肉は付いていたままで、正直本当に眠っていたのかと驚く。

それから、医者からの幾つかの質問をアキさんは答えていくけどたった一つだけ

答える前に間があった。

それは『事故当時の事を覚えているか?』という質問、アキさんはチラッとバれない程度に沙綾とリサさんの顔を見てから『……覚えてないです』と答えていた。医者の話では、そういうのは別に珍しい訳でもなく衝撃が強くて覚えてない人が多いらしい。

だから、私もそうなのかと思っていたけどまさか覚えているなんて。

「あはは、びっくりだよね」

「……どうしてあの時覚えてないって言ったんですか?」

「有咲ちゃんなら分かってるんじゃない?」

「……………」

「…ごめんね、意地悪な事しちゃった」

「…いえ」

分かってるんじゃないかと言われて、正直これでは？と思うものはあるけど違いたいと思ってしまった。

もし、私が考えてる事が本当なら多分だけど私はそれを実行するなんて無理だ。それこそ、事故に遭った時にすぐに出来る事じゃない。

「あの時、私はただただ我武者羅に走ってた。一刻も早く沙綾の元に行って、押し殺してる不安を減らしてあげたかった。ずっとお姉ちゃんしている沙綾に、少しでも私は支えてあげたくて普段なら車が突っ込んでくる音も聞こえて避けられたと思う。多少の怪我はしたかもしれないけど、事故に遭う事は無かったんじゃないかって」

「……………」

「でも、私はあの時普段の私じゃなかった。信号が青になって、スマホを握り締め
て渡ろうとしたら右側から眩しい光が見えて不味いと思ったらもう遅かったんだ。
だけど、沙綾との約束だけは守りたくて必死にスマホがある場所まで這いつくばっ
て頑張って開きっぱなしにしてたトーク画面で文字を打ったけど……………」

「…………送れなかった、ですよね」

「…うん、私のスマホは衝撃に耐えられなくて文字を打っても送れなかったの。そ
れに気付いたら、一気に身体が動かなくなっちゃって」

あはは、なんて苦笑いを浮かべてるアキさんを見てるとバンドを組む前の沙綾を
思い出す。

何もかも全部一人で溜め込んで、隠して自分を押し殺す姿。沙綾から聞いていた

けど、アキさんもかなり演技が上手くて全然分からないらしい。

あの姉であるリサさんでも分からない事があるって聞いた時は本当に驚いた。

「……最低だよね、私」

「……そんなわけないじゃないですか」

「え？」

「っ、アキさんが最低なわけじゃないです!!」

「有咲…ちゃん…？」

アキさんの言葉に、つい私はカッとなる。

だって、そんな事有り得ねえよ。アキさんは沙綾の事を思って送り出してライブ

が終わった後で疲れてるのに話を聞く限りじゃ全速力で急いではずだ。

私ならそんな事出来ない、それに事故に遭って身体が動かなくてもおかしくないのに必死に這いつくばったんだ。

そこまでした人に最低なんて言葉、おかしいに決まってる。

「アキさんはあの時の沙綾を一番に考えて、沙綾が辛くないようにって沙綾を優先したんですね…？痛い身体を頑張って動かして、必死に沙綾との約束を守ろうとした人が最低なわけねえ！」

「…有咲ちゃん」

「…それに、沙綾はずっとアキさんの話を楽しそうにしてくれたんですよ」

「…私の？」

「……バンド組んでからずっと『私ね、もう1度どうしても会いたい人がいるんだ』って。いつも決まって最初は悲しそうだったけど、アキさんの話をする時は本当に姉を自慢する妹みたいだったんです」

そう、いつもだ。

最近は惚気話になってるけど、今までは本当に姉を慕う妹みたいに目を細めて凄く話してくれた。

普段は大人っぽくて優しい、でもいざって時は凄く頼れるお姉さんのような人。もう、2年も会っていなくて連絡が取れていないって事。

何よりアキさんが病院で入院してるのを知って、ドラムから離れようとした時にアキさんとのセッションを思い出して泣いていた事。

「…そっか」

「だから、最低だなんて言わないでください。沙綾やリサさん、モカちゃん、友希

那先輩は望んでないですよ」

「…あはは、うん。そうだね」

「…いえ、私こそすいません。余計なお世話ですよね」

「ううん、私さ。偶にこうやってなっちゃう時あるから、ありがとう」

「…い、いえ」

それから、アキさんが気を使ってくれたのか盛り上がる話でいっぱいだった。昔の沙綾はこんな感じだったとか、ポピパでの沙綾はこんな感じだとか。私は知らない沙綾を知る事が出来たし、何よりアキさんが凄く楽しそうに話しているのを見たら良かったと思えた。

そうこうしていたらアキさんの家に着いたらしく、アキさんはポケットから鍵を

取り出すと家の鍵を開けてドアを開けてくれた。

てか、ここら辺って高級住宅街じゃね？

「はい、どうぞ！」

「お、お邪魔します…！」

「緊張しなくても大丈夫だよ？今はリサもいないしね」

「そうなんですか？」

「うん、沙綾とデート」

「デート!？」

「そ、デート☆」

流石の私でも言葉の綾だと分かってはいるけど、突然のデート宣言に驚く。

沙綾とリサさんでデート……、絶対にショッピングモールと楽器屋さんに行ってるな。2人共手本のような女子高生だしな。

アキさんにリビングに通されて、言われた通りにソファに座って待ってみる。

正直、おたえや沙綾の家には行ったことがあるけど先輩の家とか初めてすぎて緊張する。

それに何かいい匂いするし……………。

「有咲ちゃん、オレンジジュースでもいいかな？」

「は、はい！すみません、何から何まで……………」

「んーん、全然！逆に私なんて急に誘っちゃったから。はい、オレンジジュース」

「あ、ありがとうございます……」

氷は入っていない、寒かったから有難い。

アキさんは自分の分のオレンジジュースをテーブルに置いてから、『ちょっと待っててね!』と言われて頷いてから私は失礼だなぁと思いつつもキョロキョロと辺りを見回す。

リサさんやアキさんの好きな色と言うよりは、全体的にカジュアル系でお洒落なリビングだなんて思う。

うちは和風だけど、和風ってよりは洋風な家。

そんな事を考えていたらポケットに入っていたスマホが振動して、何かと思えばRAINに通知が来ていた。

相手はさっきまで話題となっていた沙綾。

「ん？沙綾からって何かあったのか？」

ur first impression from my perspective.

リサさんと一緒にデートではなく、遊びに行ってるってアキさんが言ってたはず。不思議に思いながらもアプリを開いてみれば、何故か一枚の画像。

「……………何だこれ」

「どうしたの？……………わーお」

「うお!?!アキさん!?!」

「あはは、ごめんね。驚かせちゃって、それにしても沙綾は何つーのを送ってるんだか……………」

苦笑いを浮かべてるアキさんに私は同情する。

何故、私に新しい服を試着して照れてるリサさんの写真を送ってきてるんだ？マ

ジで謎なんだけど。

「んー?……『リサさん、すっごく可愛くないですか!?' だってさ☆」

「だってさ☆って言われても困りますから! それに何で敬語なんだ……?」

「んー、沙綾はこれ何の意味で送ってるんだろ」

「……全く分からないですよ」

「あれ、まだ続いてる。『あ、間違えてアキさんじゃなくて有咲に送っちゃった…笑』え、私に送られても困るよ!？」

「ぷっ、どうやったら私とアキさん間違えるんだ……」

ur first impression from my perspective.

「あー、なるほどね。『ArisaとAkiで間違えた…!ごめん…!』だって、じゃあこっちもやり返す？」

「なるほど…って、え？」

「ほらほら、有咲ちゃんこっちむーいて」

「あ、アキさん!？」

「はい、ちーず」

突然、アキさんは手に持っていたアコースティックギターをソファに置いたと思えば、私を後ろから抱きしめて私のスマホを私の手からスッと取ってから写真を撮る。

それから、すぐにそのまま沙綾のトーク画面で写真をタップして送信してから文

字を入力。

『アキさんと家デート中』 っと

「ちょ、ちょまま！アキさん!？」

「あはは！……沙綾、既読はや」

「ちょ、やばくないですか。『…有咲、アキさんと家デートってどういう事？』
てめっちゃん不機嫌そうなんですけど!？」

「……そうっぽいね、何で不機嫌なんだろ」

「……無自覚って怖」

「え??」

「……これ、絶対に今リサさんと作戦会議してますよ」

「あー、やばい感じ?」

「はい!とっっても!!」

アキさんって、正直日菜先輩も天才だけどそれよりタチ悪いと思うんだよな。

オールパーフェクトだったのに、性格も完璧で日菜先輩は相手の気持ちを考え
るってのは苦手だと言ってたけどアキさんはその真逆。

しかも無自覚の天然タラシ、やべえな。

「まーじかー……」

「…………どうします、これ」

「……有咲ちゃん」

「…はい？」

「セッションしようか！」

「何でそうなったんですか!？」

と言いつつも、そのまま何もしないわけにも行かずに結局セッションをする事になった。

私はキーボードを借りて、アキさんはアコースティックギターで。

それから暫くして2人で休憩していると、ガチャって音がして私達は顔を見合わせた。

ur first impression from my perspective.

そして。

「有咲ちゃん」

「…はい」

「終わりましたね
終わったね」

「有咲あ!!」

「アキ!!」

2人でこのあとの事を想像して、現実から目を背けて逃避しようとして心に決めたのだった。

また、アキさんと盆栽の話とかで盛り上がりてーな。

その後①

沙綾「有咲？これはどういうことかな？（無言の圧）」

リサ「アキもだよ？（無言の圧）」

有咲「…あ、え、えっと（アキに目を向ける）」

アキ「有咲ちゃんとお家デートしてました☆（後ろからハグ）」

リサ・沙綾「!?!?!」

有咲「アキさん!?!?お願いですからこれ以上面倒にしないでください!!」

その後②

沙綾「……セッション、ずるい」

リサ「……ホントだよ」

有咲「え、えーっとじゃあ今やります…?」

アキ「もう18時だよ?」

沙綾・有咲「え。」

リサ「泊まってく?」

アキ「じゃあ有咲ちゃんと一緒に寝る〜(イタズラ顔)」

沙綾「…有咲?」

有咲「アキさん、マジでこれ以上増やさないで!?!?!?」

結論…有咲のツツコミ間に合わない

Beginning of a new year.

あけましておめでとうございます！

今回は、お正月編を2話ご用意しております。

その1話です、2話とも地味に繋がる予定ですので宜しくお願いします。

あと、数分で2018年から2019年へと年が変わる。

私が座っているベッドの傍では、クリスマスの日に宣戦布告してからアプローチを仕掛けている大好きで、何よりも愛おしい存在である先輩がスマホゲームをピコピコとしている姿。

あれは確か、最近人気のリズムゲームだったはず。私もやってるからあの画面を見る限り、間違えはしないと思う。

あ、私が欲しかったキャラクター持ってる…！アキさん引き良すぎじゃない？！

「アキさん」

「んー？」

「……むっ」

「ふっふ〜ん♪」

私が会話を振っても、アキさんは生返事でスマホゲームに夢中。スマホゲーム楽しいのはわかるけど、私を見て欲しいんだけどなあ。

ふと思った事に、私は自分で自分の嫉妬心が強すぎる事に思わず苦笑いを浮かべ

る。

スマホゲームにまで嫉妬するって、私はどれだけ心が狭いんだろ……。

「……あ」

「どうしたんですか？」

「…フルコン逃した、ムカつく」

「あはは……。何気に難しいですよ、私もその曲苦手です」

「沙綾も？マジで、この曲はほんとにイライラするー！」

「……あの、アキさん」

「うん？どうしたの？」

本当にわからないのだろうか。

ゲームも丁度キリがいいのか、画面から目を離して私はベッドの上で座ってるから必然とアキさんは私と視線を合わせるには見上げる状態になる。

どうやってたら気付いてもらえるかな、言葉にするのが早いのもかもしれないけど私は残念ながらへタレらしく言おうと覚悟を決めても言葉を濁してしまうのだ。
覚悟、してきたんだけどな。

「沙綾？」

「…もう年越しですね」

「そうだね、あつという間だったな」

「本当にあっという間でしたね」

私は自分の気持ちを押し殺しながら、アキさんへと視線を向けて微笑む。

本当にあっという間だった、アキさんが目覚めて触れ合えるようになってからは
凄く早く時が流れた気がする。

そう考えていたら、突然冷たい何かが頬に触れてビクッと震えながら思考を戻せば何処か心配そうな表情を浮かべてるアキさんの姿。

「ねえ、沙綾？」

「は、はい」

「また隠し事してる？」

「……え？」

「また無理した笑顔だった、私を騙せると思ってる？」

ああ、やらかした。

アキさんが嘘や演技を見抜くのが得意なのを私は知っているのに、自分でそれをやってしまった。

どうやら私は、アキさんの前では普段のように自分を押し殺したり我慢するとかは出来ないらしい。

「……何も隠してないですよ？」

「ふーん、それなら言わなきゃいけないような状況にしてほしい？」

「……え？ひゃっ！」

「ベッドの上にそんな可愛く座ってるなんて、ね？」

突然、肩をぽんっと押されてベッドに倒れば上からアキさんの声が聞こえて見上げれば少し怒ってるアキさん。

それから耳元に口を近付けて、まるで私の弱点を知ってるとでも言うかのように優しく、でも私の心臓を加速させるのには十分なほどに熱を持った声で囁いた。

「言わないと、進めちゃうよ？」

「……っ、何でも…ないですから。だから、止めましょう…？」

「止めないよ、沙綾が言えば止めるけど」

「……っ」

「沙綾ってさ、耳元も弱いけど……こことかも弱いよね？」

「や、止めて……！アキ……さん！」

「じゃあ話す？」

その言葉にアキさんの肩を掴んでいた手の力が緩まる。

だって、クリスマスのは何か流れに乗ってじゃないけどキスまで出来たけど今はそんな事出来ないから完全にアキさんの方が有利。

それにクリスマスから、アキさんは何か雰囲気が変わった気がする。

「なーんてね、ごめんね。意地悪しちゃった」

「……え？」

「話してくれないのはあれだけど、こんな事してまで話させないよ」

「アキさん…？わぁ!?!」

それから、アキさんは私を押し倒した時にベッドに着いていた腕を折り曲げたかと思えば突然抱きしめられる。

ギョツと腕の力は強いけど、小刻みに震えていて私は何となくアキさんの気持ちに気付いて背中をゆっくり撫でる。

アキさんは、人を信頼するとか人との関わり方は凄く苦手な人。

でも、1度心を許した人には性別関係なくとことん尽くすし自分を二次にしないででも手を差し伸べちゃう。

だからこそ、偶にアキさんは隠すのが上手くてもこうやって行動で現れる時がある。

本当に自分の心のキャパが限界になった時だけ。

「大丈夫ですよ、アキさん」

「……………」

「…アキちゃん」

「あはは、懐かしい呼び方」

まだ、私とアキさんしか関わりがなかった頃。

バンドを組んでない、ただのお客さんとパン屋の娘だった時は私はアキさんと呼んでなかった。

小学生の時にアキさんがお母さんと一緒に買い物に来てくれたのがきっかけで、それから知り合った。

あの時から姉がいない私にとって、初めて楽器の存在を覚えてくれたのも難しい勉強を覚えてくれたのも全部全部アキさんだった。

「沙綾」

「はい？」

「前にも聞いたけど、何でアキさんって呼ぶの？」

「…アキさんは、私の先輩ですから当たり前前な事ですよ」

「一つしか変わらないじゃん」

「そうなんですけど……」

「じゃあ、私も沙綾ちゃんって呼んであげよっか？」

「そ、それは！」

「それはー？」

何だか距離が出来る感じがして嫌だ。

と言いたいけれど、口をパクパクと動かすだけで私はアキさんに伝えられない。今考えれば、私はさん付けしてる時点で距離を置いてるのも私じゃないかと思っ
て言うに言えない。

だからと言って、先輩にちゃん付けなんて常識的にアウトだし。

「…えっと」

「ふふ、冗談だよ。沙綾っ☆」

「……む。それとアキさん、偶には私を頼ってくださいね？」

「もう大丈夫だって。…沙綾？」

アキさん、気付いてないんだろうな。

ずっと私の背中に回した手が震えていて、私がアキさんから離れないようにするためのかざつと力強く抱き締められてる。

不安なのかな、いや違う。不安というより怖い？

でも何が怖いのか私にはまだ分からなくて、普段皆から「沙綾はお姉ちゃんだよね！何でも分かっちゃうんだもん」なんて言われるけど、そう言うわけじゃない。皆が言う言葉を聞いて、そこから推測して動いた結果誰かの悩みを解決する事だったりするだけ。

「アキさん」

「なーに？」

「私がアキさんとずっと一緒にいたいって言ったら、驚きますか？」

時計をチラッと見てから私はアキさんが少しでも、今感じてる不安や恐怖を拭えないかと思いつつながら優しく言葉を紡ぐ。

いつの日か、私が泣いていた時にアキさんが背中を撫でながら言ってくれた言葉を思い出しながら私は純や沙南にするように背中を撫でる。

「んー、驚かないかな」

「え？」

「だって、私がそう思ってるから」

「…………ええ!？」

「あ、あと少しで年越すね」

「え、あ、そ、そうですね…！」

「沙綾めっちゃ動揺してる」

いや、え。待って、私が頑張って振り絞った言葉のはずが簡単にキャッチされて
シユート打たれた気分。

それに私なんて言った、一緒にいたいって殆どプロポーズの言葉と一緒にじゃない
!?

一人で思考に浸っていると、上から笑い声が聞こえたと思えば私よりも少し上に
あるアキさんの顔を覗いて見てみるとずっと笑ってる。

「沙綾の顔真っ赤だよ、あはは！」

「わ、笑わないでくださいよ！」

「無理無理！それにしても沙綾、さっきの言葉はプロポーズ？」

「っ!? あ、え、それは…!!」

「テンパってりすぎだよ、落ち着いて落ち着いて」

「ぶ、プロポーズじゃないですから…!!」

「えー、残念」

「残念なんですか!?!」

「うん、だって沙綾ほど可愛い子にプロポーズされるなんて嬉しすぎでしょ。あ、でも沙綾がプロポーズってよりは相手からが普通なんだろうな」

「か、かわ!!」

アキさんって、本当に天然たらしって言葉が当てはまる気がする。

しかも、今スラって簡単に相手が恥ずかしくなるような言葉をさも当たり前のように普通に言うのだから好きになるなって言われる方が無理だと思う。

現に、私以外にもアキさんをそういう対象として見てる人を何人も知ってるから私は複雑なのだけれど。

「あ、やば! あれ始まる!」

「わあ!?! アキさん危ないで…す…!?!」

「っ!？」

私の部屋に新しく置かれたテレビを付けようとしたアキさんが、突然立ち上がった事でベッドが大きく揺れる。

もちろん、アキさんの足場は悪くなるわけでは急いで起き上がって倒れかけるアキさんを支えようと手を伸ばすけど、身長的に私よりアキさんの方が大きいのと勢いがあつて支えられず、私も一緒にアキさんが倒れる方へと引つ張られる。

ドンッと鈍い音がして私はアキさんが大丈夫かと、声を出そうとしたけど声が出ない。

何で!？と思つて慌てたせいで、口を閉じさせていた近くの何かを噛んだ瞬間にアキさんの声が聞こえて私は固まる。

え、私は何を噛んだの。

「いっ…!？」

「…………え」

「さ、沙綾。美味しくないから私の肩噛み付かないで…?」

「ご、ご、ごめんなさい!!」

「だ、大丈夫。うん、ちょっと痛かったただけだから……」

苦笑いしながらアキさんは、私が噛んでしまった場所を手でさすってる。

綺麗に私が噛み付いた痕が付いていて、更に恥ずかしくなるのと同時に申し訳なさでアキさんと目を合わせられない。

何やってるの、私は…!!

「あー、沙綾? 大丈夫だからそこまで落ち込まなくても」

「大丈夫じゃないですよね……！私思いつきり噛んじゃいましたし……」

「もう、大丈夫だって。あ、でも」

「や、やっぱり大丈夫じゃ……」

「沙綾に痕付けられちゃった☆」

「……え。っ——！」

痕付けられちゃった。

そう言われて、ゆっくり私はアキさんの肩を見ればくつきりと私の噛み付いた痕が付いていてアキさんは、ほんのり頬を赤くしながら指で頬を掻いてる。

痕付けた、私アキさんに。

改めて、冷静になって考えてみたら一気に顔が熱くなってきて私は声にならない

声を出してから急いでアキさんから視線を逸らす。

「マーキングって奴だ〜って、沙綾大丈夫？」

「……………」。

「えっとー。沙綾…さん…？」

「……アキさんって天然たらしですよね」

「え、違うけど」

「…え？」

「いや、その何を言ってるんですか？って顔しないでよ……。私は別にたらしで

も無いし、天然でも無いよ？」

「……無自覚」

「……いや何、その諦めましたって顔」

「べっつにー？アキさんはこういう人だったなあって思ったただけですよ？」

「……もういいですー、テレビ観ますから」

そう言ってふいっと私から顔を逸らしてから、リモコンを手にとってテレビを本
当に付け始めた。

アキさんが見ようとしていたのはカウトダウン・ミュージックだったらしい。私
も年越すまではこれ見てるから、いつもの年越しに戻ったみたいだ。

そう言えば、と思い出して私はアキさんの隣に座る。

アキさんは変わらず、私に視線を向けてくれない。

「アキさん、年越しなのに私の家に泊まっちゃって大丈夫なんですか？」

「……今更じゃない？」

「…そうなんですけど、リサさんとかと過ごさなくていいのかなって」

「…私から断ったの」

「………うん？」

「だから、私から沙綾の家に泊まってくるって言ったの！」

「ええ!? 何やってるんですか!?!」

「……沙綾と年越したいって思ったの、だめ？」

「いや凄く、嬉しいですけど……」

「……アキお姉ちゃん……？」

「あれ？沙南ちゃん？」

私の部屋から廊下に繋がる扉に目を向ければ、目を眠そうに擦りながらもしつかりとぬいぐるみを手を持っている沙南。

純は……って、アンタも起きてたんだ。

純の事も気付いたアキさんは、クスッと微笑んでから2人を私の部屋に招き入れる。

「どうしたの？寝れない？」

「…うん」

「そっかー、純くんも？」

「…俺は別に！」

「じゃあ、純は部屋に戻りなよ」

「うっせえ！」

「な!?! こんのー！」

「こらこら、沙綾落ち着いて。純くんも私の隣でテレビ観る？」

「観る、やっぱアキ姉ちゃんの方が優しい」

「純、アンタねえ…！」

「こーら、2人とも。夜なんだから静かに、純くんはこっちおいで。沙綾はこっちね」

「アキ姉ちゃんでっけえー！」

「あはは！まあ、確かに純くんと沙南ちゃんのお姉ちゃんよりは大きいかな？」

「沙南ね、アキお姉ちゃんみたいに大きくなるのが夢なの！」

「私みたいに？おっとこれは、沙綾さん姉としてピンチですよー？」

「うっ、私も別に小さいわけじゃ…ないもん」

「あ、姉ちゃんが壊れた」

「お姉ちゃん、壊れちゃったの？」

「壊れた!?別に壊れてないから！」

「あはは、やっぱり山吹家は可愛いなあ〜」

クスクスと私の隣で笑ってるアキさんの笑顔を見たら、私は騒がしくしてる自分が恥ずかしくなりつつも、一緒に笑う。

テレビへと目を向ければ、残り数秒とカウントダウンが始まっていた。

「あと10秒だね」

「俺数える！」

「沙南も！」

「ふふ、じゃあ皆で数えよっか？」

「沙綾名案だね、それじゃあせーの！」

10秒から皆で声を合わせながらカウントダウンをして、年が明けると盛大にテレビが賑やかになる。

純と沙南もニコニコで、アキさんは笑ってから2人に視線を向ける。

「純くん、沙南ちゃん。そして沙綾、あけましておめでとう」

「…おめでと」

「おめでとー！」

「おめでとございます、アキさん」

「また姉ちゃん、余所行きだ」

「お姉ちゃん、アキお姉ちゃんと喧嘩しちったの…？」

「ちよ、純！沙南、喧嘩してないから大丈夫だよ？」

「ふふ、沙綾も妹と弟には頭が上がらないね」

沙南を抱きしめながら、アキさんは笑って言っていて助けて！と思いつつも何だか幸せだなんて思ってる自分もいて私も一緒に笑った。

それから数分経つ頃には、純も沙南も寝ちゃっていてアキさんが私が運ぼうとしたけど「大丈夫だよ、一応バスケ部☆」と言われてお願いしてしまった。

それから少しして、アキさんは私の部屋に戻ってくると一息つくようにベッドに座った。

「はあー、本当に年を越しちゃったんだね」

「そうですね」

「沙綾、去年はどんな1年でしたか？」

「え？うーん……、色々ありすぎて一つ一つに一生懸命だったなあって感じですね」

「おー、SPACEでライブしたんだっけ？」

「はい」

「オーナー、元気だった？私、最後に会ったのが2年前だから」

「元気だったと思います、凄く厳しいけど音楽に対しては誰よりも真剣だった人でした」

「ふふ、オーナーも変わらないなあ。沙綾はさ」

「はい？」

テレビから一旦目を離すと、私の方へ視線を向けてから苦笑するアキさん。

私は良く分からず、首を傾げると頭を撫でられた。

「自分にちゃんと、優しさを向けられてる？」

「……ポピパに入ったの、咲祭のバンド演奏の時だったんです。母さんや純、沙南、それにCHISPA、ポピパの皆が背中を押してくれて」

「うん」

「その時に母さんに今、アキさんに言われた事を言われてやっとですね」

「ふふ、そっか。良かった、沙綾がドラムを辞めなくて」

「…アキさん」

「……本当は、沙綾が1回ドラムから離れた事を自分の中でもしかして？って思ったときに聞いたことがあって。もしかしたら、私のせいかもって思ってた」

「それは違います！」

「分かってる、それでも私は沙綾との約束を守れなかったから」

その一言に、私はあの2年前のお祭りの事を思い出す。

次の出番が私達CHISPAの出番で、ナツに掛け声を頼もうとしたら凄く足が震えていて緊張していた。

でも、その緊張を一瞬で消し去ってくれたのがアキさんだった。

「ほらほら、なっちゃん深呼吸！」

「あ、アキさん……」

「もう、そんな顔しないの！ライブは確かに成功するのが一番だけど、何より大切なのは私達が楽しむ事。じゃないと聞いてくれるお客さんに届かないよ？」

「そうだよ！ナツ！」

「そうそう、もしもの時は沙綾がいるしね！」

「え!?!アキさんの方がいいよ！」

「いやいや、私は受験で抜けちゃうから私が戻ってくるまでは沙綾達が支えなきゃ」

「やだよー！アキさん、抜けないでえー！」

「ナツ、無理言わないの！」

そんなナツのハグを受け止めて、アキさんは微笑んでくれてハツとした時には緊張が解れてた。

私はメンバーと顔を合わせて、やっぱりアキさんになわなないなって思った瞬間だった。

「ほーら、なっちゃんしっかり立って！お客さんの所覗いてきたら？」

「そうします！みんな行こ！」

「アキさんは行かないんですか？」

「…私は、両親仕事だし姉と幼馴染ぐらだから」

「えー、そんな事言わないでくださいよ！沙綾、連れてきて！」

「了解っ！」

「ちよ、沙綾!?!」

アキさんの手を掴んで、私は一緒に裏からほんのちよっと見える客席へと目を向ける。

予想以上の人の多さに驚きつつも、今日見に来ると行っていた家族を探す。アキさんは、すぐに自分のお姉さんと幼馴染を見つけたのか苦笑している。

「沙綾、沙綾のお母さん達いた？」

「……それが見つからないんですよね」

「……ちよっと電話してみるね、道が混んでるのかも」

「あ、それなら私がしますよ」

スマホで連絡先を探してるアキさんを止めて、私は自分のスマホをポケットから出して操作する。

♪母さん♪と書かれた連絡先をタップして、数コールしてから私はいつものように話しかけた。

「あ、母さん？今どこに……………」

『姉ちゃん!!母さんが!!』

「…………純…沙南…？母さんがどうしたの!？」

私の叫び声とも取れる声を聞いたアキさんは、母さんが身体が弱い事を知ってる

からかすぐに電話を誰かにかけて何処かへと走っていく。

ライブまで残り10分も無い、でも母さんが倒れた。

どうしようかと思っていたら、誰かに腕を掴まれてハッとする。

「ナ…ツ…」

「行って！沙綾！」

「ここは大丈夫だから！」

「お母さん達の所に！！」

「…でもっ！」

「沙綾！！」

「……アキさんっ！」

はあはあと肩で呼吸をしているアキさんが、私に無理矢理ヘルメットを被せてきて何かと思えば腕を引っ張られる。

何が起きてるんだと思えば、アキさんは全速力で走って近くの公園まで私を連れていく。

「この子をさっき説明した病院までお願い」

「……姉貴、 안타」

「今頼れるのは君しかないの、お願い」

「任してくださいえ、姉貴の頼みなんて珍しいっすからね。この子は何がなんでも無

事に届けますよ」

「ありがとう」

「……アキさん」

「沙綾、この人は私の知り合いで口は悪いけど信用出来るから大丈夫。それとライブが終わった後病院に必ず行く、ここは先輩に任せなさい！」

「……っはい！」

私はバイクに跨ってる男の人の後ろに座らせてもらって、ヘルメットを被り直す。アキさんは、私の手をぎゅっと握ってから私に皆でお揃いにして買ったシユシユを手首に付けて私の色のをアキさんの手首に付ける。

「これで傍にいられるね。俊、沙綾に何かあったらタダじゃおかないから」

「わあーってます、嬢ちゃんすっかり掴まったか？」

「は、はい！アキさん！」

「うん？」

「……私の我儘を」

「こら」

「痛っ！」

「沙綾は我儘をもっと言っていていいよ、このぐらい我儘に入らないから。それに私は

沙綾を支えられるなら何でもするから」

「……ありがとうございます……！」

「俊、行って」

アキさんの言葉に俊と呼ばれた人は頷いて、私は病院へと向かった。

病院にはあつという間について、私は俊さんにお礼を言ってから病室へと向かえば母さんが起きていて父さん達に話を聞いてからアキさんへと電話をかけたけど、出る素振りがなくてナツに電話をかけた。

「もしもし、ナツ？」

『沙綾！お母さん大丈夫!?』

「うん、大丈夫だよ。あのさ、アキさん知らない…?」

『…あ、アキさん…は、その家庭事情で向かえなくなっちゃったみたい…』

「…そう、なんだ」

ナツが何処か歯切れ悪く言っていたけど、この時の私はアキさんが約束を守れなくなったという事実があまりにも大きかった。

手首に付いてる群青色のシュシュ、本来はここにひまわり色っぽい黄色のシュシュがあったけど今はアキさんの所だ。

電話を一旦切ってから、母さん達の元に戻っていると隣を慌ただしくストレッチャーが運ばれていく。

「聞こえますか！病院着きましたよ！」

「患者さんの情報は！」

「15歳女性、居眠り運転をしていた車と接触し意識ありません！」

運ばれてる間に赤く染まったであろう手首に付いてるアクセサリーに、一瞬目が行ったけどすぐに見えなくなって私は目を逸らした。

そんなわけではない。

「沙綾、顔色が悪いけど大丈夫か…？」

「…うん、大丈夫」

「…姉ちゃん」

「…どうしたの？」

「アキ姉ちゃん、来るんじゃないのよ」

「……家の用事で来れなくなっちゃったって」

「……………」

「…お父さん？」

「……いや、何でもないよ。家に帰ろうか」

父さんと母さんの様子がおかしい気がしたけど、母さんの体調でなのかなと思いつつ私は純と沙南から少しでも不安が無くなるように優しく接していた。

家に戻れば、CHISPAの皆……いやアキさんを除いたメンバーが来ていて私は申し訳なく思いながら外に向かえば皆が笑って私の名前を呼んだ。

「沙綾！良かったね、お母さんすぐに退院出来て！」

「…うん」

「もう、今日大変だったんだよ？」

「本当だよね、アキさんがいなかったら終わってたよ」

「うっ、成功だよ！」

「アキさんがいたからでしょ、ナツ一人じゃ無理だったよ」

「…あの、さ」

「うん？」

「……アキさん、連絡付かないんだけど何か知ってる？」

私がそう聞くと、皆は泣きそうな顔を浮かべたかと思えばすぐに笑って私に皆は抱き着いてきた。

何が起こってるのか分からず、私は頭が追いつかない。

「……アキさんは大丈夫だよ」

「……ナツ？」

「……うん、大丈夫。アキさんは大丈夫」

「……ふみ？」

「……きつと、また会えるから受験勉強しろってお姉さんに連れていかれちゃってたけどね！」

「アキさん、すつごく厳しい状況だったらしいから……」

「多分、連絡付かないのは勉強してるからだと思うよ！」

「…そっか、パンを買いに来てくれた時に話そうかな」

「……うん、それがいいと思う」

ナツ達の顔を見てから私は頷いて、その場で解散した。

でも、あれから1度もアキさんはうちのお店に来る事も無ければバンド練習の時に挨拶来るかと思っていたけど1度も来る事は無かった。

ナツ達も受験勉強だとしか知らないみたいで、受験勉強が終わったであろう時期になってもアキさんの姿を私が見ることは無かった。

「姉ちゃん」

「…純？」

「アキ姉ちゃん、もう来ねえの？」

「…勉強が忙しいんだって、きつとまたすぐ来てくれるよ！」

「…ふーん」

「…そう、またすぐ来てくれる。そうだね、アキさん」

でも、それから1年経って私が高校1年になったアキさんの好きな季節が訪れてもアキさんの姿を見る事は無かった。

ナツ達との疎遠状態が終わっても、ポピパの皆と関わる機会が増えて、バンドメンバーに入れてもらっても私の傍にはアキさんは1度もいなかった。

「沙綾」

「…有咲？」

「何ひでえ顔してんの」

「え、そうかな」

「また無理でもしてんじゃねーだろうな、お前ほんとに懲りねえよな」

「…違うよ」

「じゃあ何だよ、また話せないとか…」

「…会いたい人がいるの」

「…は？」

「2年前、突然連絡が途切れちゃってずっと会えない先輩。前にナツから聞いたでしょ？アキさんって言うCHISAで一人だけ先輩がいたって」

「…ああ、ベースだっけ」

「…うん」

今思えば、どうしてこんなにも分かりやすかったのに気付けなかったのだろうか
て思う。

アキさんと連絡が着かなかったあの日、皆が私に抱き着いてきたのは涙を隠すた
めだっですぐに分かったはずなのに。

うちのお店に毎日来てくれてた人が受験終わっても来ないなんて、珍しい事なの
に。

私の視界が一気に歪む。

「沙綾」

「……っ」

「ごめんね、約束守れなくて」

「……………」

必死に首を横に振ることしか出来ない。

アキさんはゆっくりと私の背中を撫でながら、優しく声を発した。

「なっちゃん達にも、ポピパの子達にも迷惑ばっかりかけちゃった。もちろん、沙綾にも。だからこそ、私は今年やる事決めてるんだ」

「……やる事……?」

「そ、本当は明日の朝って思ってたけど沙綾は起きてるし沙綾のお母さん達に許可貰ってるから今行こっか」

「……え?」

「初詣、一緒に行かない?」

アキさんのお誘いを受けて、私達は寒い外に出てから神社へと向かう。
はあーっ息を吐けば、白くて更に寒く感じる。

「ねえ、沙綾」

「…はい？」

「はい」

「…………アキさん？」

「手繋ご？きつと混んでるから」

半ば無理やり手を繋がれて、どんどん人気が多くなっていく道を通っていけば神

社が見えてくる。

人が多くて、本当に迷子になってもおかしくないかも。

参拝するために列に並んでる間も、アキさんは私と手を離す気は無いらしくずつと繋がってる。

正直、私の心臓はとてつもなく早く動いていて爆発でもするんじゃないかとバレてないかなと思いつつもそんな事を思っていたら、いつの間にか私達の番でアキさんと手を繋ぎながら階段を上る。

それから、一旦繋いでいた手を離す。

「……誰も傷付きませんように」

「アキさん……？」

「あ、声に出てた？」

「バツチリ出てましたよ」

「…恥ず」

「ふふ、じゃあ私も」

5 円玉を投げてから、私は手を合わせてから心中で伝えられずに年を超えてしまった気持ちを呟く。

——この気持ちがいつか、届きますように。

「よしっ！」

「…：…何で私、口に出すかなあ」

「ふふ、可愛いかったですよ？」

「…嬉しくない」

「あはは！それにしても寒いですね」

「これ、あげるよ」

「え？……甘酒ですか？」

「そ、さっきおばさんに貰ったから。カップルだと思われてたけどね」

「か!？」

「まあ、貰えるものは貰っとけてお母さんが言うから貰ったんだ」

「……アキさんのばか」

「聞き捨てならない言葉が聞こえた気がするけど、飲みながら帰ろっか」

「はい、ってアキさんこれ本当に甘酒ですか？」

「へ？何で？」

「いや、何か毎年私も飲むんですけど何か味が違うような……」

「……これ、普通にお酒じゃね？」

「ええ!？」

言われてみれば、アキさんの頬がほんのり赤い気がする。

え、もしかしてアキさんって弱い方だったりするのかな。いや未成年だから分かるわけないけど！

「……沙綾」

「…はい」

「…何か、ふわふわする」

「酔ってますよね!？」

「酔ってにゃい、私これでもおつまみ好きだもん」

「…にゃい」

「……っ！帰る！」

「アキさん、ごめんなさいー！」

早歩きで私の隣から離れて行くアキさんを、私は少し走って追いかける。前までは見えなかった背中がすぐ傍にある。そう思ったら、何だか涙が出てきそう。

「ねえ、沙綾」

「はい？」

「噛まれたところ、地味に痛い」

「……すいません」

私の気持ちが届くのは、まだ先…なのかもしれない。

※本編と番外編は更新日時はバラバラですが、全て当てはまるように書いてあります。

それでは、また次回も宜しくお願いします！

Beginning of a new year.-2-

正月編第2話！

2話で終わらせるはずが、終わらなく急遽3話となりました。

本編も書き進めてるのでもう少しお待ちください、今週中には書ける…はず。
それではどうぞ！（次回はアキ視点！）

この状況、何年か前にも見た記憶あるなあ。

なんて苦笑しながら思ったのは目の前で完全にお酒に酔って出来上がった状態の先輩であり、未だに私が想いを告げられずにいるアキさん。

今日は芸能界で働いてるアキさんが何とか元日に取れなかった代わりに連続で取った休みで、私達 Poppin Party とアキさんのお姉さんであるリサさんが所属してる Roselia の皆さん全員が、冬休み休暇で重なった事もあり遠出に出かけようとなったのでスキー場に来ていた。

それから偶然にもこのスキー場は、ハローハッピーワールドのボーカルであるこころが所有する場所だった事でハロハピの皆も来てたり、Afterglow もモカと巴が中心として休みだからと遊びに来てたり、まさかの彩先輩と千聖先輩が所属してる Pastel*Palette がロケに来てたりと偶然と呼べない程に奇跡が続いて、全員大集合となったのが数時間前。

今はお風呂も上がって、こころが所有してるホテルで皆とロビーで集まってから久しぶりに皆でご飯を食べていたのだけど、途中でアキさんが完全にお酒にやられたから私とリサさんとアキさんを別室まで運んで、リサさんと交代で私が今は様子見って感じなんだけど。

「うあー…」

「アキさん、大丈夫ですか…？」

「……さあや、おさけ」

「…何言ってるんですか、もう」

私も今年で22歳。

実家のパン屋を継ぐために、食について学ぶために通っていた大学卒業が目前まで迫ってる。

アキさんは昨年卒業したけど大学を通いながら夢であった声優アーティストになったのと、出演した作品で人気に火がついた事もあって告知でバラエティ番組に始めたなら女優としてのオファーがあった事もあって、今では『実力派新人女優』と呼ばれてる。

最近、プライベートで会える回数が減ってる一方、テレビを付けたら彩先輩や千

聖先輩と同じぐらい観てる気がするから久しぶりと感じない。

でも、やっぱり仕事中の藤崎アキさんも好きだけど私としてはこうやって目の前で気を緩めてくれてるプライベートの今井アキさんの方が好き。

「……ねえ、さあや」

「はい？」

「沙綾は、やまぶきベーカリー継ぐの？」

「そのつもりですよ、急にどうしたんですか？」

「ううん、別に何でもないよ」

またそうやって隠しちゃうんだ、今の笑顔が普段見るふにやっとした笑顔じゃな

いから何か隠してるのは長年の付き合いから分かる。何でもないはずなのに。

私じゃ力不足なのかな、やっぱりお姉さんであるリサさんや同じ歳の紗夜先輩、それに昔から慕ってるグリグリのゆりさんの方が私よりアキさんは頼れるんだろ
うな。

悔しい、私じゃダメなのが。

「……何でもなくないですよね」

「……え？」

「どうしてそうやって隠すんですか、私じゃ力不足ですか？リサさんや紗夜先輩、ゆりさんのように私はアキさんを支えられないし助けられないですか……？」

「……違う、そんなつもりじゃ」

「っ、アキさんは昔から私には頼ってくれなかった…！ずっと私はアキさんに助けってもらってばっかなのに…！」

「……………ごめん」

「……………あ、違うんです…その…！」

「…私、外の空気吸ってくるね」

さっきまでお酒でやられてたはずなのに、スッと椅子から立ち上がってアキさんは本当に外へ行くために部屋を出ていった。

私も止めるために手を伸ばすけど、アキさんには届かずに何も無い場所に残る。
ああ、何やってるんだろ。私。

「おい、沙綾。すげえ声聞こえた……………ってどうしたんだよ!？」

「……有咲」

「ちよ、泣くなよ！落ち着けて、な？」

「っ、私……！」

「ちよまま！あ……、よく分かんねえけど泣きたい時は泣いとけよ。後で話は聞くから」

有咲の不器用な優しさに私は目頭が熱くなってきた、止めようと思っていた涙が止まる事を知らないと言うかのように流れてきた。

何であんな事言っちゃったんだろ、私はアキさんが大切に傷付けたくなかったのにあんな事言ったらアキさんは傷付くに決まってるのに。

私がい慢すれば、私がアキさんが頼ってくれるまで待っていればこんな事になら

ずに済んだのに。

私の背中に有咲の腕が回って、慣れない手つきで私の背中を撫でてくれるのが余計に涙腺を緩くさせてるのか私の涙が止まるまで時間が少しかかった。

「……大丈夫か？」

「…うん、ごめん」

「また出てる」

「え？」

「お前の悪い癖、すぐに謝るとこ」

「うっ……」

「はあ、ほんと変わんねえよな。少しは頼れっつーの」

「た、頼ってるよ！」

「頼ってねーよ！頼ってるなら今こうやって私が問い詰めなくたって言うだろ！」

「……それは」

「……今はいいけど、とりあえず何があったんだよ。沙綾が泣くなんて珍しいじゃん」

「……実は、アキさんとちょっと言い合いをしちゃって」

「……悪い、私の聞き間違えかもしれねえからもう1回言って？」

「その、アキさんとちょっと言い合いを……」

「……マジで？」

「う、うん。私が我慢してれば起きなかつ!？」

「何があつたんだよ！あのアキさんと喧嘩とか、沙綾じゃ有り得ねえ事じゃん！」

「……その」

突然、有咲に肩を掴まれて普段よりも気迫が強いからか私は一瞬目を見開いて固まるけど、すぐにさっき起きた事をなるべく分かりやすく有咲に説明していく。

最初は私とアキさんが喧嘩なんてと思つてたみたいだけど、すぐに有咲は何処か納得したような、でも呆れてるような顔で私を見てくる。

「……はあ、マジで焦ったのに損した」

「え、えっと……」

「前から思ってたけどさ、沙綾とアキさん似すぎじゃね？」

「……うん？」

「うん？じゃねーよ、沙綾もアキさんに対して変わんねえだろ。頼れつつても頼んねえし、逆に笑って隠そうとするし」

「……何も言い返せないです」

「はあ、アキさんもアキさんで何かあったなら頼ってくれるとは言い切れねえけど待つかないんじゃないかね？香澄みたいに沙綾は突っ込めるなら話は別だけどさ」

「…突っ込んだら怒られそう」

「私から見たら既に突っ込んでると思うけど？」

「……………」

「とりあえず、リサさんとかに何かあったか知ってますか？って聞いて謝るのが最善だと思うぞ。アキさんの性格上、リサさんにも話してなさそうだけだな」

「……やっぱり、私じゃ頼りないかなあ」

「その逆って可能性もあるけどな」

「え？」

「沙綾は頼りになるから言わないってのも有り得るだろ」

「どういうこと？頼りになるから言わない？」

有咲の言葉の意味が分からず、私は首を傾げる事しか出来ない。

そんな私を見た有咲は、「…沙綾も無自覚かよ」と呆れながら零して私にも分かるように説明してくれた。

「だから、頼りになるからこそ心配かけたくないとか色々あるんじゃないかって思っただけ」

「………どういうこと？」

「あー、まだわかんないのかよ。心を許せる人に心配かけたくないって思うのが普通だろ、アキさんにとって沙綾やりささんって大切な人だから心配かけたくないっ

て思うんじゃないかってこと」

「……大切な……人」

「沙綾はさ、アキさんに何でも相談するのかわ？」

「……ううん、多分心配をなるべくかけない事しか」

「それだよ、アキさんもそうだったら？」

「……あ」

「やっとかよ……、マジで沙綾とアキさんって姉妹だったたりしないよな」

「姉妹……。嬉しいけど、違う方が私は嬉しいなあ」

「……惚気は要らねえ」

私の気持ちを学生時代から知ってる有咲は、顔を引き攣らせながらそう吐き出す。惚気けてないんだけどなあ、と私が笑いながら言えば有咲は私の頭にポンっと手を置いて、私から視線を外しながら撫でてきた。

「……とりあえず、頑張れ」

「……うん、ありがとう有咲」

「……別に、何もしてねーし！もう戻るからな！」

「ふふ、うん。わかった」

有咲は私の頭を思いっきり撫でてから、照れてるのか顔を赤くしたまま扉を勢よく開けてから外に出ていった。

あんなに照れるなら無理しなければいいのにも思ったけど、有咲の優しさかかって思ったらつい笑ってしまった。

私はもう1度アキさんが座ってた場所に目を向ければ、そこにはアキさんが飲んでいた飲みかけのお酒。

勿体ないから飲んじやおうと思って、飲んでみたけど私は驚いてグラスに目を向ける。

「……これ、お酒じゃなくてただの水？」

本当はアキさん酔ってなかった？

でも、もしそうなら何で酔ったフリをする必要があったんだろ。

まさか、演技してたにしても理由が見つからない。

「……謝った時に聞こう」

私はアキさんに謝るために、椅子から立ち上がって空っぽになったグラスを手に部屋から出る。

もしかしたら、皆の所にいるのかな。と思って向かってはみるものの、アキさんの姿は見えない。

外に行くって言ってたけど、この時間の外は凄く寒いから体調管理を怠らないアキさんが行くとは思えない。

「あれ、沙綾？」

「あ、リサさん。アキさん見てませんか？」

「アキ？見てないよ、まさかあの子抜け出してた!？」

「ち、違うんです！私のせいで……」

「…ちょっと話、聞いてもいい？」

「…はい、実は」

有咲にもした説明をすると、リサさんは険しい表情から一気に申し訳なさそうな顔へと変わっていく。

近くにいた友希那先輩や紗夜先輩も苦笑いを浮かべながら、手に持つてるシャンパンを飲んでいる。

「…ごめんね、沙綾。完全にアキが悪いよね」

「そんな事ないです、私が我慢して待っていれば良かったので……」

「山吹さん、そんな事ないわ。アキは本当に頼る事を知らなさすぎるのよ」

「ええ、山吹さんは正しい事をしてると思いますよ。アキさんは本当にリサさんもですが、人に頼りませんから」

「ちょっと紗夜ー？聞こえてるんだけどなー？」

「事実ですから、そうですね湊さん」

「ええ、事実よ。リサも少しは学ぶべきね」

「…何でアタシも説教されてるんだろ？」

「あはは……」

「とりあえず、アキの事はアタシ達も気にしておくね。それと見つけたらさり気なく、沙綾が心配してたって事を伝えとく☆」

「すみません、ありがとうございます」

「んーん、アタシの妹が迷惑かけちゃったからね……。アタシも一緒にいれば良かったね」

「いえ、大丈夫ですよ」

「リサ、とりあえずアキが何処にいるのかは把握しておくべきじゃないかしら？」

「ええ、アキさんが何処にいるのか分からないのは色々と困りますから。あの様子ですと相当酔っていると思いますし」

「あ、その事で一つ……」

「ん？ 沙綾何かあった？」

私はさっきまで持っていたグラスをリサさんに渡して、飲んだら中身は水だった事を伝えるとリサさんは驚いてグラスに目を向けてる。

それもそうだよね、アキさんはお酒だって言っただけで持ってたんだもん。

「え、これ水だったの!？」

「はい、私が勿体ないからって飲んだら中身がお酒じゃなかったんです」

「……おかしいわね、アキはそれをずっとお酒だと言って手放さなかったわよ」

「…アキさんは、酔ったフリをしていたという事でしょうか？」

「私もそう思ったんですけど、酔ったフリをする理由が見つからなくて……」

「……あの子は何考えてんだか」

4人で悩んでいたら、私の隣から手が伸びて来て私は驚いて思わず変な声を上げてしまう。

急いで視線を向けて手を追っていけば、ビールを片手に持つてるモカの姿。

「さーや、変な声出さないでよ。モカちゃんビックリしてビール落とすところだった」

「ご、ごめん」

「いやいや、今のはモカが悪いでしょー？」

「えー、せっかくアキさんのグラスに水を淹れに来たのに酷いですよ」

「青葉さん、今何と言ったかしら？」

「え？アキさんのグラスに水を淹れに来たのに酷いですよって」

待って、モカはこの中身がお酒じゃない事を知ってたの？

私が思った疑問はこの場にいた全員が思ったらしく、皆でモカへと目を向ければモカも驚いて普段ふにゃつとしてる目が大きく見開く。

「えっと、そんなに見られるとモカちゃん照れちゃいます」

「青葉さん、今貴方はこのグラスに水を持って言いましたよね？」

「え、はい。だって、アキさん全然酔ってなかったのとお酒じゃないだろーなーって」

「……酔ってなかったって、アキさんが酔ったフリをしてる事に気付いてたの？」

「うん、アキさんは本当に酔ったら猫みたいな口調だし甘えてくるからね。沙綾も気付かなかったのー？」

「……全く気付かなかったよ」

「……え、リサさんもですか？」

「うん、全然わかんなかった……」

「……ちょっと待っててください」

モカは、私とりサさんの顔を見てからビールを私に預けてから何処かへ行ってしまった。

とりあえず、待っててと言われたから少し待っている。とモカが日菜先輩と花音先輩を連れてきた姿が見えて私達は全員でキョトンっとしてしまう。

「モカちゃん？どうしたのさ、突然」

「いやー、日菜先輩に聞きたいことがあったんですよ」

「え、えっと私もかな…？」

「そーです、リサさんお待たせしました」

「ううん、大丈夫だけど……。日菜と花音がどうしたの？」

「日菜先輩、アキさんと一緒に飲んでましたよねー？」

「うん、アキちゃんと飲んでたよ。と言っても、アキちゃんはお酒飲んでなかったけどね」

「日菜、貴方も気付いていたの？」

「うん。気付いてたって言うより、アキちゃんから酔ったフリするから乗ってって言われたんだ」

「あれ、日菜ちゃんも？」

「もしかして花音ちゃんも聞いてた？」

「う、うん。アキちゃんに『酔ったフリするからお酒飲んでるって事にしといてね』って言われたよ」

「……わけがわからないわね」

「そうですね……、日菜はアキさんが酔ったフリをする理由を知ってるの？」

「んーん、知らない」

「花音先輩は何か知ってますか？」

「ううん、聞いてみたんだけど『なーいしよ☆』って返されちゃったんだ……」

「……アタシの妹だけど、全くわからない」

本当に分らない。

日菜先輩と花音先輩にこう言うって事は、完全に酔ったフリをしていたんだ。

でも、何で酔ったフリなんてする必要があったんだろ。

全員で、うーんと悩んでいたら入口の方から凄い賑やかな声が聞こえて視線を向けた。

「あーりさああああ！」

「なんだよ!? 香澄、酒臭いから離れろー！」

「美咲ー！ミッシェルを探しましよー！」

「ちょ、こころ！ミッシェルは休憩してるから！」

「アキ姉ー！肩車してー！」

「ええ!? あこちゃん、もう20歳過ぎてるよ!」

「あこちゃん…! 無茶言っちゃ…ダメだよ…!」

「誰だよ、あこにお酒飲ませたの…!」

「え、あこって飲めなかったの? 知らなかった、ごめん」

「蘭だったのか!」

カオスって、ああいう状態を言うんだろうなあ。ってアキさんがいる!?

私が動く前に既にリサさんと友希那先輩が動いていて、あこちゃんを肩車しているアキさんは気付いてない。

それにしても、20歳を超えたあこちゃんを肩車出来るの凄い……。流石、元女

子バスケツトボール界のエース。

「アキさーん！凄いやい！」

「あはは、あこちゃん軽くない？ちゃんと食べてる？」

「アキさん…その、大丈夫…ですか…？」

「大丈夫大丈夫、私お酒飲んでないから」

「アキ!!」

「あれ、リサじゃん。……あ」

「アキ姉？どうしたの？」

「ごめんね、あこちゃん。ちょっと忘れ物したから降ろすね」

「はい！」

「アキ、説明してもらおうわよ？」

「……っ、日菜ちゃん！あとは宜しく！」

「おっけー！って事で、アキちゃんの方へは行かせないよ？」

「日菜!？」

「てことで、こころちゃん！」

「分かったわ！これでアキは笑顔になるのね！黒服さん！」

待って、本当にわけがわからない。

日菜先輩はアキさんの酔ったフリをする理由を知らないはずなのにアキさんの味方をしていて、アキさんは物凄いスピードで走って部屋を出ていく時間稼ぎをするために前に出た日菜先輩が、ここに指示を出して照明が消される。

お陰で何にも見えないのが数秒続いて、すぐに照明が戻ったけど日菜先輩もアキさんもいなくなってた。

「……何がどうなってるのかしら」

「アタシもさっぱりだよ、友希那……」

「……私、そこまで嫌われたのかな」

「ちよ、沙綾落ち着け!？」

完全に避けられてる……。

やっぱり、私が我慢すればアキさんだってここまで避けなかったよね。ほんとに私のバカ。

私はもう普通に立っている気力も無くなってきて、近くにあったテーブルの料理やお酒が無い場所に手を付いてしゃがみ込む。

好きな人に避けられるのは、幾ら何でもキツすぎる。

「……………ありさあ」

「だー!もう、泣くなつて!!」

「…ごめんね、沙綾。ほんとにさ……」

「……いえ、私が悪いんです。後で、ホテルの部屋が同じなので謝ってみます」

「…山吹さん、本当に申し訳ないわ。私達にも何かできる事があつたら遠慮なく言って頂戴」

「日菜には後で問い詰めてみます、私にも頼ってください」

「…ありがとうございます、友希那先輩。紗夜先輩も」

「沙綾、無理すんなよ。明日だって朝早えんだし」

「うん、有咲もありがとね」

私は何とか立ち上がって、有咲が持ってきてくれたお酒を少しだけ飲む。もちろん、お酒に飲まれない程度にだけ。

暫くしてから私はリサさん達と途中で別れて、有咲と泊まる部屋へと向かう。

有咲は、りみりんと同じ部屋で私のすぐ隣。

因みにこの部屋割りには、くじ引きでここに来る途中の車の中で決めたもの。

私としては本当に嬉しくて、車の中だったので舞い上がりたぐら이었다。

Roseliaの皆さんは、本来ならアキさんが運転する車に乗る予定だったけどこっちの事情があつて急遽、燐子先輩が運転する車に乗つて、私達Poppin Partyは全員免許を持つてるんだけど個々に問題があつたりして本来の予定と変わつてアキさんが運転する車に乗つた。

まあ、その問題つてのがとっても小さくて情けないことなだけだ……。

香澄は運転出来るけど、駐車するのがすごく苦手である有咲が「駐車だけで何時間かかるか分かんねえじゃん！」と言つた事で無し。

おたえは、香澄のように何かがあるつてわけじゃないんだけど洗車中で手元に無いから無理。

りみりんも、おたえのように問題は何も無いけどお姉さんであるゆりさんと共同の車で、偶然にも今日はグリグリでお出かけという事で使えないから無し。

有咲は車を持つてゐるけどこたわった結果、スポーツカーという事もあつて乗れる人数がめちゃくちゃ少ないから全員乗れないのと、ハンドルを握ると人が変わるから怖いって誰かが言った事で無理。

最後に私はと言うと、実家で使つてゐる車を普段は借りて使つてたから私が今日以降使ふと家族がその間使えないってことで無し。

その結果。

『アキさん!!車乗せてください!!』

「え、私の!？」

「…マジで申し訳ないんですけど、私達全員とも車を運転する以前に問題が……」

「あー。有咲ちゃんの車は全員乗れない、沙綾とりみちゃんは家族との共同、おたえちゃんは洗車中で香澄ちゃんは………うん」

「アキさん、今の間はなんですかあ……！」

「あはは……、ちょっと待っててね。リサー。」

それからアキさんは、リサさんと話し合ったら快く乗せてくれるという事で皆で土下座をする勢いで感謝したのが朝の事。

良く考えたら、私達アキさん達を頼りすぎじゃ……。

「おい、沙綾。聞いてるか？」

「え、あ、ごめん。考え事してた」

「はあ……、とりあえずアキさんとゆっくり話し合ってみるしかねーな。2人だけじゃ難しそうだったら、私とりみを呼んでくれていいから」

「…うん、ありがとう」

「んじゃ、頑張れよ」

有咲とハイタッチして私は入る部屋の前に移動し、深呼吸をしてドキドキしてる自分の心臓を落ち着かせてから「…よしっ」と覚悟を決めて部屋の扉を開ける。

私よりも先に戻っていたのであろうアキさんは、テレビを観てるのかドラマの音が聞こえてくる。

「…あの、アキさ…ええ」

「…沙綾ちゃん、その」

ソファに座っているはずのアキさんに名前を呼んだら、申し訳なさそうに振り返

るりみりんの姿。

待って待って、どうしてここにりみりんが？

有咲と同じ部屋だよ、もしかして部屋を間違えたのかな？

「りみりん、部屋は隣だよ？お酒飲みすぎて分からなくなった？」

「ちゃ、ちゃうねん！確かにお酒は普段より飲んだけど、アキさんに頼まれて……」

「……どういう事？」

「…そ、その。アキさんがね、『りみちゃんと有咲ちゃんに迷惑なのは分かっているんだけど、今日だけ部屋代わってくれないかな？』って……沙綾ちゃん!？」

「……あはは」

もう、泣きたい。

ここまで避けられるのなんて初めてだし、何よりそれが好きな人に避けられてるってのが本当に辛い。

部屋でなら話せるかなくなって思ったのに、私と同じ部屋も嫌なんだと思ったら今度こそ立っている気力も無くなってその場にしゃがみ込む。

それと同時に、私のポケットに入っていたスマホに通知音が鳴って誰かと思えばさつき別れたばかりの有咲から。

『Arisa……アキさんが今日はこっちで寝るって聞かねえんだけど、どうすればいい？』

「……もう泣きたい」

「沙綾ちゃん……！まだ大丈夫だよ……！」

「『…アキさんを優先でお願い』って打つよ、私」

「沙綾ちゃん、戻ってきてえー！」

それからは何とかりみりに落ち着かせてもらって、何とでもなれって普段の私なら思わない事を思っただけにお酒に飲まれた。

どうやって寝たのかも忘れて、起きれば既に朝。

頭は凄く痛くて、昨日の自分に苦笑いしか出来ない。

「おはよう沙綾ちゃん、二日酔い大丈夫…？」

「おはよ、ガンガンするけど大丈夫…！」

「酷かったら言ってね、お薬あるから」

「うん、ありがとう」

何とか頭痛を堪えながら着替えて、髪の毛やらメイクやらと身支度を整えてから部屋を出る。

それからすぐにロビーへ行こうとしたけど、りみりんに止められる。

「りみりん？」

「あのね、昨日有咲ちゃんから『朝、部屋に来てくれ』って連絡があったの」

「あー、有咲って朝弱いもんね」

「ううん、それもあるんだけど……」

「ん？」

「…その、アキさんあの後お酒を飲んだみたいで」

「……うん、何となくわかったよ」

アキさん、前よりはお酒強くなったけど飲み過ぎると次の日の朝起きれなくなるんだよね。

なのに、本人はお酒が好きだからしょっちゅう飲みすぎて朝起きれずに仕事に遅れそうになるのがあるあるで業界でも有名になったって彩先輩が苦笑いして言ったのを覚えてる。

りみりんを先頭に、有咲とアキさんが寝てる部屋へと入って行くと中は静かで何も聞こえない。

これはまだ寝てるかな？と、りみりと目を合わせて首を傾げてから寝室に進めば規則正しい寝息が聞こえてくる。

「沙綾ちゃんはアキさんをお願いしてもいいかな？」

「私はいいけど……」

「気まづいままですキーする事になっちゃうよ？」

「……うん、頑張る」

恐る恐る窓側に設置されてるアキさんのベッドに近付き、アキさんの様子を見るためにしゃがめば全く起きていないアキさん。

寝顔、可愛い。久しぶりに見たなあ、アキさんの寝顔。

普段はカッコよくて、紗夜先輩とはまた違った雰囲気です凛としてるけど寝てる時は少し幼い。

学生時代にも見た事があるけど、あの時は年相応だなあって思ったけど今は少し違う。

「……綺麗」

「……ん、さあや……？」

「あ、アキさんおはようございます……？」

「………。」

「…アキさん？」

私の声が聞こえたのか閉じていた目を薄らと開けて、窓から差し込む光を眩しそうにしている。

まだ寝ぼけてるのかな、なんて思いながらアキさんにもう一度声かけるけど、ポーツとしてるみたいで私の顔をじーっと見てるだけ。

流石に私も昨日の事があった後だけど、好きな人に見つめられて恥ずかしくないわけがないから目線を逸らす。

「…なんでそらすの？」

「…恥ずかしいから…です」

「…わたしのこと、きらい？」

「そんなこと!!」

「…だって、昨日失敗しちゃったから」

「…失敗？」

「……って、あれ。何で沙綾がここにいるの」

「あ、えっと起こしに来たんです」

ボーツとしていたアキさんは、だんだんさっきまでの自分を思い出したのか頬が赤く染まっていく。

……やばい、可愛い。

こんな余裕が無くて頑張って平然を装おうとしてるけど、赤くなった顔をどうやって隠そうかテンパってるアキさんを見れるなんて珍しい。

「……………て」

「え？」

「……………向こうに……………行って」

「っ……！」

「……ごめん、リビングで待ってて」

アキさんの声は少し震えてて、私はもうその場にいるのは無理だと判断してから「わかりました」と答えてから寝室を出れば、既に出ていたりみりんと有咲と目が合う。

有咲、起きれたんだ。良かった。

「…お前、今すっげえ失礼な事思っただろ」

「え、そんな事ないよ」

「言っとくけど一人で起きたからな!？」

「ええ!？」

「ほ、本当だよ沙綾ちゃん。私が起こしに行ったら有咲ちゃん着替え終わってたから」

「私だって大学4年だぞ？一人で起きれるっつーの」

「……有咲が成長してる……！」

「お前は私の母親か!!」

「沙綾ちゃん、そのアキさんとは話せた……？」

りみりんの言葉に思わず、びくっと身体が震える。

まさか、話すどころか距離を置かれてしまったなんて言えないよね……。

どうやって隠そうかと悩んでいたら、有咲には気付かれたようで深いため息を吐かれた。

「…はあ、アキさんに向こう行ってとでも言われたんじゃないの？」

「うっ……そんなに私、わかりやすい……？」

「アキさん絡みはな」

「うーん、でもこのままスキーするのは気まずいよね……」

「ああ、でもアキさんは今日スキーしないらしいけどな」

「え？」

「昨日、お酒飲んでる時に言ってたんだよ。『明日は日菜ちゃんに誘われてスノーボードするんだ』ってさ」

「スノーボー……」

「沙綾ちゃん、出来る……?」

「スノーボーは無理かな、母さんが身体弱かった事もあって冬のスポーツ自体経験が少ないから。スキーは中学の行事で行ったから出来るけどね」

3人で、はあとため息を吐いて考えていればガチャッと音がしてリビングに入ってきたのは準備が整ったのであろうアキさん。

結局そこから会話が続くことも無く、アキさんは有咲と私はりみりんと話しながら全員と合流して、こころが用意してくれた朝ご飯を食べて――。

「……アキさん、本当にスノーボーしてますね」

「おかしいなあ、アキってスノーボーの経験なかったはずなんだけど……」

「リサ、貴方忘れたの？アキは出来る人のを何回か見たら自分の物にしちゃうぐらい記憶力と理解力が人よりも優れてるじゃない」

「……日菜が2人いるわね」

そう、私とアキさんは喧嘩？をしたまま私はスキーを、アキさんはスノーボードをしてしまうという最悪な状況になってしまったんだ。

次回。

アキと日菜、こころが隠していた秘密が遂に——。

B e g i n n i n g o f a n e w y e a r . 3 .

正月編！というか、冬編ですね。

今回は某探偵少年くんが絡みますが、名前は出ません。

というか、ほぼ映画じゃね？と思われるかもしれないけど暖かい目で見ていたければ……。

それではどうぞ！

昨日からずっと沙綾と気まづくなくなってしまった。

別に、私はこんなつもりなんて微塵も無かったんだ。当初の予定では、こんな風

になるつもりなんて無くてただただ沙綾とリサにだけどうしても伝えたい事があった。

その為に、私は酔った演技をして日菜ちゃんと花音ちゃんに手伝ってもらったのに、なんでこうなったんだろう。

事の始まりは、日菜ちゃんところちゃんの発明に私が気付いてしまった事だった。

それはスキーをしに遊びに行く予定がまだ出来ていなかった時、私は仕事をしていて偶然休憩に立ち寄ったカフェに日菜ちゃんところちゃんがいたのを気づいて話しかけたのが本当の始まり。

「：日菜ちゃんところちゃん？」

「アキちゃん！」

「あら、アキじゃない！元気だったかしら？」

「うん、元気だよ。2人は……元気そうだね。というか、コソコソと何してるの？」

「ん？るん♪ってするものだよ！」

「る、るん……？」

「ええ！皆を笑顔に出来るものよ！」

「……何だろう、2人が組むと嫌な予感しかしないんだけどなあ」

「まあまあ、見たまえアキちー」

「あ、アキちー!？」

ほぼ無理やり席に座らされ、エアタブレットの画面を見せられる。

私が高校生の時じゃ有り得なかったけど、今ではもうスマホなんてものは存在しない。

エアタブレット、通称ヱータブヰは腕時計型の電子端末から出てくるホログラムの事。

高校生の私達で簡単に言うなら、タブレット端末がホログラムとなって空中に現れるって感じかな。

それを私に見えるようにスライドさせて、私は嫌な予感がするとは思いつつも好奇心の方が勝ってしまってみてみるとそこにはスケボーのようなものの図面。

「…スケボー？」

「違うわ！これは、スノーボードよ！」

「スノーボード？突然それがどうしたの？」

「こころちゃんがね、私達が高校生の時に高校生がとある事件で小学生になっちゃって、幼馴染のお父さんが経営してる探偵事務所に居候しながら、事件を解決して自分の姿を元に戻すー的な漫画あったじゃん？それを実現させたら皆笑顔になるんじゃないかしら！って言ったんだ！」

「……あー、あの探偵漫画かあ」

確かに、あの主人公の男の子が持つてるスケートボードは私も昔は憧れた。

だって、スケボーに太陽光パネル付きのエンジンが付いてるんだよ？車とかバイクにも負けないしエコでしょ。

他にも腕時計型麻醉銃とか、キック力増強シューズとか現実にあったらなーって前は思ってたけど……。

「でも、流石にそれを実現させるのは難しいんじゃないかな？それに日菜ちゃん、紗夜ちゃんに怒られるよ？」

「ふふ、アキちゃん私は知ってるんだー？」

「え？何を？」

「紗綾ちゃんとリサちーに話してないんでしょ？例の件」

「っ!?な、何で日菜ちゃんが…知ってるの…?」

まだ、誰にも話してないのに。

マネージャーの佐藤海華渾名は海ちゃんさんにでさえ、誰にも言わないでと私から伝えたはずだから誰にも話してないはず。

だって、海ちゃんは口が堅いで有名な人。そんな人がヘマをするとは思えない。

時々いじってくるからあれだけど。

「それでも、あたし。芸能人だよ？」

「っ、なるほどね……」

「あら、何かあったのかしら？」

「……んー、沙綾ちゃんとリサちー。そしてアキちゃんにとっては重要な事かなあ」

「……私の件は黙ってて、お願い。2人を哀しませたくないの」

「それは無理な話だよ、だってアキちゃん。私とこころちゃんがやろうとしてる事おねーちゃんに話すつもりでしょ？」

「っ、だってそれは危険過ぎるよ。いくら天才の2人でも無理なものが……！」

「無理だなんて誰が決めたのかしら？」

「……え？」

「やってみなきゃわからないじゃない！アキが何に悩んでるのか私には分からないけれど、沙綾とリサなら分かってくれると思うわ！」

「……………」

「ねえ、アキちゃん。取引しよーよ」

「……取引？」

「そ、私とこころちゃんはアキちゃんの件を黙っておくし2人に伝えるための手伝いをする。でもその代わり、私とこころちゃんの計画をアキちゃんは邪魔をしないし手伝う。これでどうかな？」

「……………わかった」

それが全ての始まり。

このスキーで遊ぶってのも、偶然皆がスキー場に行く日が被ったわけじゃない。全ては、私達3人の計画に過ぎなかった。

A f t e r g r o w が加わったのは、私も予想外だったけど4グループ揃うの
にって事で日菜ちゃんがモカと巴ちゃんに連絡していたらしい。

そして私は昨日、沙綾とリサの2人に伝えるために酔った演技をして呼び出したのに結果は失敗。

今は完全に私達は別行動となってしまった。

「……はあ」

「アキちゃん、るん♪ってしないよ？」

「……失敗したんだもん、これからどうしようかなって」

「そうだね……、アキちゃんもう時間無いもんね」

「……うん」

そう、私にはもう時間が無い。

この連続で休みを取れたのだから、殆ど奇跡だったけど、海ちゃんにお願いして何とか取ってもらったんだ。

この休みを逃したら今度皆に、沙綾とリサに会えるのは……。

「アキちゃん、とりあえず今は滑ろ！」

「う、うん」

日菜ちゃんが勢いよく、スノボーで雪道を滑っていくのを私も少し遅れて滑っていく。

気持ちいい冬の風、キラキラと光る雪道。

スキーと違ってスノボーは両足は完全に固定されてるから、最初は慣れなかったけどスケボーと同じ感覚かなくて何となくやってみたら意外と滑れて結構難しいコースも滑られるようになった。

あ、日菜ちゃんまた技を決めてる。

私も少しだけやってみようかな。

日菜ちゃんが決めた技を目で追って、頭の中で映像として再生させる。あとは、この映像通りに身体を動かす！

「よっ！」

「アキ姉、かっこいいー！」

「凄い…です…！」

「すげえ、アキさんと日菜先輩。選手にも負けないんじゃない!?」

「アキさんすごい！」

あこちゃんや憐子ちゃん、有咲ちゃんに香澄ちゃんの声が聞こえてきて私は綺麗に着地してから手を振る。

ああ、やっぱり気持ちいい。スキーも楽しいけど、私はスノーボードの方があつてみたいだ。

さーて、どんどん滑ってこー！

なんて思った時だった、腕時計型のエータブに通話の音が響いて私がフリックし
て出れば千聖ちゃんや紗夜ちゃんの大きな叫び声が聞こえたのは。

「皆さん!!早くその場から離れて!!」

「皆!!急いで降りてきて!!」

『え??』

《弦巻スキー場に起こしの皆様にご連絡致します、近くの黒川ダムが決壊した事
で水が全て漏れたとの連絡が来ております。その結果、スキー場にある雪の一部が
決壊した事で発生した地震によって雪崩を引き起こしました。至急、コテージにお
戻りください。繰り返しします……》

「……………うそ」

「っ、日菜ちゃん!!」

「…う、うん! あこちゃん、燐子ちゃん掴まって!」

「は、はい!」

「…はい!」

日菜ちゃんは急いで2人の手を掴んで、なるべく速くコテージへと滑っていく。私は全体の把握をしなきゃと思い、全体を見渡せば私たちの真上では雪崩は起きていない様子。

じゃあ、何処で起きてるんだ?

この場にはいないのは沙綾とリサ、ゆきちゃん、おたえちゃん、りみちゃん、イヴちゃん、麻弥ちゃん、彩ちゃん、花音ちゃん、美咲ちゃん、薫さん、はぐみちゃん、

こころちゃん、Aftergrowのメンバーだ。

その内、電話で千聖ちゃんと紗夜ちゃんの他に聞こえた声からしてコテージで休憩してるのがゆきちゃんとりみちゃん、麻弥ちゃん、彩ちゃん、花音ちゃん、つぐみちゃん、ひまりちゃんだけ。

つまり、私の側にいなくてコテージにもいないのは沙綾とリサ、おたえちゃん、イヴちゃん、美咲ちゃん、薫さん、はぐみちゃん、こころちゃん、巴ちゃん、モカ、蘭ちゃんだけ。

「…ちっ」

「アキさん！逃げないと！」

「アキさん…！」

「2人とも掴まって!!」

私は、とりあえず目の前にいる2人を安全な場所へと思つて有咲ちゃんと香澄ちゃんが私の手を握ったのを確認してからスノボーで勢いよく降りていく。

本当は危ないからこんなことしちゃいけないけど、有咲ちゃんは運動が苦手らしいし香澄ちゃんはスキーに慣れてない。

やるしかない。

勢いよく滑っていけば、先に着いたであろう日菜ちゃんやコテージにいた皆と合流する。

「他の皆は！」

「アキさん!!」

「モカ…!!」

モカがスキー板を外しながら、何処か怪我をしたのか足を引きずりながら歩く蘭ちゃんを巴ちゃんと支えながら歩いてくる。

それを見た、つぐみちゃんとひまりちゃんは急いで駆け寄る。とりあえず、命に別状はなさそうで良かった。

それからすぐに薫さんと美咲ちゃん、こころちゃん、はぐみちゃんとハローハツピーワールドメンバーで合流。

「おたえがないよ……！」

「あ、あいつ……！」

「すみません……！お待たせしました……！」

そう言ってイヴちゃんが来たのは、おたえちゃんに肩を貸しながら歩いてくる姿。皆で慌てて、コテージの中へと連れていくとおたえちゃんは少しだけ苦しそうな

顔をしながら「足首を捻っただけ」と言ったので、すぐに紗夜ちゃんとりみちちゃん
で手当てをする。

待って。ねえ、2人はどこ…？

「……ねえ、リサと…沙綾は…？」

「……え」

嫌な予感がする、嘘だよね。

何で2人だけ来ないの、アナウンスは聞こえてるはずだよね。

まさか、雪崩が起きた場所って2人がいる所…？

「アキさん…！」

「……モ…カ」

「リサさんとさーやは、あたし達と同じ場所で滑ってました」

その言葉を聞いて、自分でも恐ろしく早いスピードでモカの肩を掴む。

思いつきり力が入ってるからか、モカの顔が少し痛そうにしてるけど今の私には
余裕なんてない。

モカ達がここにいるなら、何でここに2人はいないの？

「……2人はどこ」

「……私達の所が雪崩が起きた場所です、私達は急いで降りたんですけど頑張っ
ても間に合うかギリギリで、その時に沙綾が足を挫いてリサさんが……」

「……日菜」

「っ、アキちゃん…？」

この時の私は気付いてなかった、あまりの必死さに日菜ちゃんへの呼び方が変わってることを。それすらどうでもいいぐらいに私は自分の事を恨んだ。

何で、変な意地を張ったんだろう。

こんな事になるなら、スケボーするにしても同じルートを選べば良かった。

蘭ちゃんから聞いた話だと沙綾が逃げてる途中に足を挫いた、多分リサはそんな沙綾を連れて滑ってるのかもしれない。

雪崩が起きてまだ5分弱、まだこころちゃんと日菜ちゃんが作ったあれなら間に合うかもしれない。

ううん、間に合うかもじゃない。

「——あれ、使えよ」

「…うん、分かった。リサちゃんには自力で動けてるだろうからあたしが援護する、で

も沙綾ちゃんは……」

「私が一緒に滑る」

「あ、アキさん！無茶ですよ、いくら何でも、スノボーじゃ……！」

「——有咲」

「っ!？」

「安心して、2人は……沙綾とリサは私の命に賭けて守ってみせるから」

日菜ちゃんはその間に作ってスキー場に持ってきていた、あの某探偵少年が使っていたエンジン付きスノーボードを持ってきてくれた。

使い方は前に聞いた事がある、それより乗りこなせるかの方が問題だけど今の私

には要らない心配。

沙綾とリサを救えるのなら、私は悪魔だろうが死神だろうが利用してやる。

「行くよ、日菜!!」

「りょーかいっ!」

私用に作られたスノーボーに付けられたボタン型のスイッチを踏んで、外に出る。普通のスノーボーとやっぱり違う、エンジンが付いてるからスピードが馬鹿にならないぐらい速い。

私を先頭に日菜と雪道を走る。

前方には雪崩が迫ってきていて、私と日菜は急いでリサと沙綾の姿を探す。

何処だ、何処にいるの。

「アキちゃん!あの髪色!!」

「っリサ!!」

スイッチをさらに強く押せば、その分スピードが上がる。

リサのすぐ傍まで来て、リサは凄く驚いた顔をしてるけど私が一つ頷けばリサは分かってくれたのか頷いてくれる。

「……アキ……さん……!? 何で、ここに……!」

「助けに来たよ、沙綾。リサ、リサは日菜と一緒に降りて」

「っでも!」

「沙綾は私が絶対に連れて帰るから」

そう言うってから私はリサから沙綾を預かる。

私の足の近くに沙綾に脚を置いてもらって、私に抱き着く形になってもらう。さあ、ここからはスピード勝負だ。

日菜ちゃんは私にくくんと1度譲くと、エンジンのスピードを上げていきりサはその隙に急いでスキー板を脱いでから日菜ちゃんにくつついて滑っていく。

「……アキさん……私……」

「……話は後で、今は沙綾を連れて帰るのが最優先だよ」

「……私」

「沙綾」

「……？」

「今だけ私を信じて、お願い」

すぐ傍まで迫って来てる雪崩。

このままのスピードじゃ、2人とも雪に飲み込まれる。

沙綾がギュッと私に抱き着いた事を確認してから、私は沙綾を守るように引き寄せてエンジンのスピードを上げる。

でも、雪崩のスピードは早まるばかりで引き離せない。

こうなったら、危険だけどやるしかないか。

「こんにゃろ…！」

不味い、このままだと本当に。

そう思ったらすノボーから嫌な音が鳴って、私は焦ってチラッとエンジン部分を見れば黒煙が上がってる。

嘘でしょ、ここに来て支障が出るなんて神様は本当に意地悪だね。

あの2人が設計したもので、まだ試作品とは聞いていたけど私は何処かであの2人なら大丈夫だと思ってたのかもしれない。

でも、あくまで試作品だ。これ以上スピードを出せばただ事じゃ済まないかもしれない。

それでも、私は約束したから。

何があんでも2人を連れて帰るって、私の身がどうなろうとも。

だから、きっと大きな声で言わなきゃ伝わらないだろうから大きな声で。

「沙綾！」

「っはい…！」

「今しか言えないかもしれないから！言っておくよ！」

そう、もしかしたらもう1度エンジンを押せばスピードが止まらなくなってコテージにぶつかるなんて有り得る。

その前に沙綾だけは皆の方へ投げ飛ばすけど、怪我だけはほしくないな。私はきつと、怪我では済まないだろうけど。

「私！この休みが終わったら、仕事の都合で日本を離れてイギリスに行くの！」

「…え？」

「それを昨日伝えたかった！でも、沙綾にはいつもいつも迷惑かけて昨日もそうだった！」

「そんな事…！」

「暫く会えないから、あんな風に言っちゃったの！でも、もうそれも無いかもしれ

れないから！」

「…アキさん…何言ってる…」

上手く聞こえないけど、沙綾の顔を見れば何となくわかる。

コテージまでまだ距離はある、リサと日菜ちゃんの姿は少し遠くにあるから私達よりは安全だろう。

雪崩は傍まで迫ってる、エンジンはさっきからバチバチと嫌な音だ。

沙綾もエンジンの音に気付いたのか、チラッと見てからすぐに私へと視線を変え
る。

ああ、バレちゃったかな。

「あ、アキさん…これ…普通のスノーボーじゃ…」

「…日菜ちゃんところちゃんを作ったものだよ、でもまだ試作品。スピードに

耐えられなかったのか、それとも熱に耐えられなかったのか分からないけど雪崩に巻き込まれるのが先か、爆発が先か……ってね？」

「っ!？」

「安心して、沙綾だけは絶対に皆の所へ帰すから」

「何言ってる!!」

「どっちかしかないの!!」

「っ!？」

「……雪崩から引き離すにはスピードを上げるしかない!」

私はそこまで言って、沙綾の頬を軽く撫でる。

そんな顔しなくていいのに。泣かないで沙綾、私は笑ってる沙綾が好きなんだも
ん。

ああ、最後ぐらい我儘言ってもいいかな。

「でも…！スピードを上げたら！」

「…私は足を固定されてるから一緒にどかーんだね」

「っ…！」

「ねえ、沙綾」

「…はい」

「好きだよ」

「……………え」

「世界で一番、キミが好き。どこの誰よりも、私はキミを愛しています」

だから――

その瞬間に私はエンジンのスイッチを強く押した、スピードが上がり沙綾の身体がぐらっと揺れて私はすぐに引き寄せる。

雪崩とは少しだけ距離が遠くなるけど、これで2人とも安全だとは言えない。本当は今すぐにもこのスノーボーを足から外すべきだ、でもまだバチバチとなっているだけならもう少し走れる。

せめてもの、あの2年間救えなかったキミを救うためにも。

「――ずっと、愛しています。だから、私の分まで幸せになってください」

「……アキさん……！」

「返事はいらないよ、後悔したくなかったただけだから」

死ぬ前に伝えたかった言葉、誰にもバレないように隠してきた私の気持ち。

いつから？と言われたら、ハッキリなんてわからない。

けど、いつからか私は沙綾が好きになっていた。友情ではなく、恋愛の意味で。

最後にコツんつと額を合わせてから、私は深呼吸して前を向く。

もう、後悔はない。

私は更にエンジンのスイッチを踏み、スピードを上げる。

日菜ちゃんとリサの横まで来れた。

「アキちゃん……！エンジンが……！」

「わかってる！」

「アキ……！」

「お姉ちゃん、沙綾をお願い!!」

「……っ!?」

「アキちゃん、巫山戯ないでよ！」

「……日菜ちゃん」

「沙綾ちゃんを1人残すの!? 2人で生きるって選択肢は無いの!?」

「エンジンがもう駄目なんだ！」

「……でも！」

「ここまでスピードを上げたら、もう爆発するかコテージにぶつかるかの選択肢しかない！それとも雪崩に突っ込む!？」

「…巫山戯ないですよ！」

「ふざけてない！」

「日菜！アキ！雪崩がすぐ傍まで来てる…！」

「っ！」

「…あはは、まじか」

もう、笑うしかなかった。

ここまで来たらスピードを上げるしかない、でもそれはある意味私の命が消えるまでのカウントダウンだ。

「……やるっきゃない……！」

「っ！」

私と日菜ちゃんは一気にスピードを上げる、日菜ちゃんの方を見れば黒煙では無いけど白い煙が上がってる。

向こうもギリギリなのかもしれない、リサもそれに気付いたようで悔しそうな顔を浮かべる。

何としてでも、この3人だけは。

「見えた!!」

日菜ちゃんの言葉に全員が前を向けば、コテージの中へすぐに入れるような外の場所に皆が待っている。

何かを叫んでるけど何を言ってるのかわからない。

周りを見れば警察やら消防隊員やらと沢山の人がいて、私は一気に安心感を感じるけどエンジンを緩めずに、もう1度強く押す。

でも、それが仇となった。

「っ!？」

黒煙が上がっていたスノボの板が悲鳴を上げたんだ。

一気にスピードが落ちて、せっかく遠くなっていた雪崩との距離が縮んでしまう。エンジンは多分あと1回しか使えない、それが終わればただのスノボの板だ。遠くからリサの叫び声が聞こえる、私は急いで体勢を元に戻して沙綾を抱き締め

て支える。

エンジンを起動させられるのはラスト1回のみ、ここからは完全に私のセンスと運だけ。

「……沙綾」

「……っ、はい」

「……絶対離さないで」

この雪崩を止める方法、それは無い。

私はチラッと横を見れば、決壊したダムの水が暴れて襲ってきてるのが見える。不味い、このままじゃコテージまで危ない。

コテージは一つ上の丘に建てられているから雪崩の被害には遭わない、けど決壊した事で溢れたダムの水が来ることで水位は上がりコテージに水が来る事が予想でき

る。

でも、この雪崩を上手く使えばダムの水をコテージの方ではなく反対の何も無い場所へ流せれる？

「こころちゃん！」

『何かしら！』

「この電話をすぐに皆に繋げて！」

『分かったわ！』

「今、私は沙綾を連れてコテージに向かっている。でも、その途中で決壊したダムの水がコテージの下にある川に流れて逆流して水位が上がっているのが見えた！このままだと、コテージが水に飲み込まれる！」

『っ、そんな事どうやって止めろと言うのですか……!』

「正直、これは賭け勝負だよ。私が何とか雪崩を使ってダムの水をコテージの手前に流す。そうすればコテージの前で水は塞き止められて大丈夫なはず」

『そんな事したらアキが危ないでしょ……!』

紗夜ちゃんとりサの声が腕時計型の端末から聞こえる。

そう、殆どこれは賭け勝負だ。

正直、私はあの某探偵少年のように上手くスノーボーが乗りこなせてるわけじゃない。
い。

ラスト1回のエンジンを使って、何とか雪崩の進行方向を変えられたとしても逃げられるかと言われたら逃げられない可能性が高いだろう。

ギョツと掴まれたスキーウェアに気付いて、沙綾へと視線を向ければ青白い顔を

している。

「……確かに危ないよ、でもこれに賭けるしかない」

『……アキ』

「……ゆきちゃん、お願い」

『……約束よ、絶対に戻ってくるって』

『友希那!?!』

『本当は私だって言いたくないわ、でもこのままじゃ全員が助からない……』

『……でも、アタシは!』

「リサ」

『……アキ、駄目だよ。アタシ、もう嫌だよ。アキがいない世界なんて……!』

「約束する、絶対に皆の所に戻るから」

私は沙綾をギュッと抱き締めながら言う。

震えてる、またこんな思いさせてしまう私も本当に最低だろうな。

決心が揺らがない内に私はもう1度、端末に向かって叫ぶ。

「黒服さん！聞こえていますか！」

『聞こえております、今井様』

「コテージのギリギリで沙綾を下ろします、そこで沙綾を保護してください！私はそのまま雪崩を使ってダムの水を止めに行きます！」

『……ですが』

「お願いします、これしか方法が無いんです！」

『……黒服さん、私からもお願いよ』

『……ころん!?』

『嘘だろ!?アキさんを見殺しにすんのか!?』

『……香澄ちゃん、有咲ちゃん』

『アキさん、嘘だよな！こんなの、こんなの……！』

『アキさん……！』

「——沙綾をよろしくね。黒服さん、準備をお願いします」

『……かしこまりました』

『アキさん……！』

『アキ……！』

モカと蘭ちゃん、そしてリサ、ううん。皆の声が聞こえてから私は端末から視線を外して沙綾をギュッと抱き締めて大丈夫だと伝える。

「沙綾、大丈夫だから」

「……………」

もう少しで黒服さんに待機してもらってる場所、私は上手くそこでスピードを落としてから沙綾を降ろす。

でも、握ってる私のスキーウェアから沙綾の手が離れない。

私は雪崩をチラッと見てから、ふうと深呼吸をしてから「沙綾」と名前を呼んでほんのちょっとだけ上がった顔に合わせる。

そして、顎を少し上に向けて――

「ん」

「っ!？」

「…行ってきます」

私は笑って沙綾の頭を撫でてから、右足で雪を蹴って助走をつけてからスノーボードに乗る。

さあ、ここからが勝負だよ、私。

コテージにいる皆の声が聞こえるけど、あの声に返すのは全てが終わってからだ。まさか、23歳でこんなにも危険な事をするなんて昔の自分でも思わなかっただろうな。

なんて思いながら、エンジンのスイッチを押す。

一気にスピードが上がり、私は雪崩のギリギリまで来てからダムの水が流れてる方へとギザギザに雪に段差を付ける。

多分、さっきの地震でこの雪崩が発生したなら簡単にもう一つの雪崩だって出来るはず。

「……よしっ！」

『…アキさん、マジでやっちゃった……』

新たな雪崩を作ったことで、その方向へと後ろの雪崩を変えられた。

端末の電話が繋がったままだったのか、有咲ちゃんの声が聞こえる。

あとはこれで、私が逃げ切って雪崩がダムの水を塞ぎ止めてくれれば全てが上手くいく……！

「っあ!？」

『アキさん!？』

思いつきり、私はエンジンが急に止まった事で転ぶ。

不味い、最悪だ。ラスト1回のエンジンがこんなにも早く終わるなんて思わなかった。

後ろを見れば、自分が作った雪崩とダムの水が決壊した事で出来た雪崩達。前を見れば、まだ遠いけどコテージに横からは暴れ出した水。

「っ、最悪…！」

『アキさん、逃げてー！』

『アキ…!!』

急いでスノーボーに乗って、自分の運動神経を全て使う。

やばい、このままだと私。雪崩に巻き込まれる…！

小さな雪の塊や大きな雪の塊を避けて、急いでスピードを上げていくけどエンジンが壊れてるからさっきまでのスピードを出すことが出来ない。

徐々に迫ってくる雪崩。

間に合うかギリギリのダムの水。

「……っ!?」

段差となっていた雪に気付かなかった。

その段差に乗った私のスノボーは、空中へと浮かび上がる。

ああ、何でこんな所に段差なんてあるのかな。

すぐ傍まで来ていたコテージ、そのコテージのベランダにいる沙綾と目が合う。

「アキさん…!!」

「……沙綾」

——ごめんね、幸せになって。

私の声は届いただろうか、届いてたら。

そこで、私の視界は真っ白に染まって意識もぷつんと途切れた。

暫くして皆の声が聞こえてきて、私は重たい瞼を開く。

「……みんな…の…声…」

早くここから出ないと、雪崩に巻き込まれて15分したら人は死ぬんだ。

これは前に本やニュースで見っていたから知ってる、私が巻き込まれて何分たった…？

そう思ったと同時に腕時計型の端末がブーブーとなって、私の目の前にエータブが出てくる。

名前の欄には、もちろんあの子の名前。

『沙綾』

「……出なきゃ…」

震える手、重たい腕を何とか動かしてホログラムに手を伸ばす。

私の場所を伝えなきゃ、お願いだから動いてよ。

必死に動かして、通話ボタンをフリックする。

『っ!? アキさん…!』

「…さあ…や」

『何処にいるんですか…!』

何処って言われても分からないよ、なんて少し笑いながら返すけど向こうは泣いてるようだった。

ああ、また泣かせちゃったかなー。なんて思いながら少しでも分かりやすく居場所を伝える方法を考えるけど浮かばない。

足の方を見れば、まだスノーボーが付いてる。

『アキ！返事して！アキ…！』

『アキさん…！』

リサと…沙綾の…声。

スノボーが付いてるなら、きつと。

私は最後の力を振り絞って、思いっきり足でエンジンスイッチを押した。

ほんの少しだけ動いたそれを今度は思いっきり外に突き出すように足を振り切る。

ザクっと音が聞こえて、通話の先から皆の驚いた声が聞こえる。

『「アキさん!!」』

沙綾の声が聞こえて、私の意識は再び消えた。

次に目を覚ましたのはコテージの中で、それからは大変だった。リサや沙綾を中心に泣きながら怒られるわ、日菜ちゃんは紗夜ちゃんにスノーボーで怒られるわ。

まあ、色々あったけど凄く楽しかった。

それから数日後。

「…アキさん、行くんですね」

「うん、仕事だから」

「お土産期待してます！」

「あはは、イギリスだからなあ」

今日から半年後まで私は映画の撮影でイギリスへ。

リサと沙綾にこれを伝えるためだけに色々あった、もちろんマネージャーの海

ちゃんにも怒られました。

私が乗る飛行機のアナウンスが鳴る。

そろそろ行かないきゃ。

「もう、そんな寂しそうな顔しないでよー。リサがいるでしょ？」

「いやいや、アタシとアキは違うからね？」

「…アキさん」

「あはは、しょーがないなあ」

今にも泣きそうな沙綾に私は一步前に出て、キョトンとする沙綾の顎を上に向けてキスをした。

もちろん、私達以外にもガールズバンドの皆が来てくれてる中でだけどね？

「っ!？」

「…妹が大胆すぎて、アタシおかしくなりそう」

「いくらリサでも、沙綾はあげないよ？」

「貰わないから!!」

「あはは！それじゃ、行ってきます！」

そう、あの日から私と沙綾は恋人となった。

何年か前の初詣に私は密かに願ってた、なんて誰にも言えないけどね？

「行ってらっしゃい、アキさん！」

この笑顔が私は大好きなんだ。

私の愛しくて、どうしようもないほどに可愛い。

自慢の彼女である、山吹沙綾さんが。

アキのかわいいシーン書けた…だろうか。(困惑)
次回は本編を更新します！絶対！

Happy Setubun and small mischief.

番外、節分編です。

アキちゃんのことと意外な部分が出てくる…かも？
それではどうぞ！

——私のちょっとしたイタズラの始まり。

私は今、手に持っている一つのお面を見ていた。

何の変哲もないお面、でもある日につければ一躍悪者扱いならぬ楽しいポジションに早変わり出来るイタズラ好きの私にとっては最高の武器。

これを付けて、リサや沙綾、ゆきちゃんは勿論皆に楽しんでもらおう。

私自身は寝ていただけだから時間の経過にあまり分らないのだけれど、主にリサやゆきちゃんは私とこの日を迎える事が久しぶりって感じるはずだ。

そう言えばCHISPАでもやったなー、沙綾達も喜んでくれるかな。

「まりなさん！」

「アキちゃん、準備完了だよー！」

「ありがとうございますっ！」

「それにしても懐かしいなあ、若いうちにしか出来ない事だね」

「そんな事ないですよ、まりなさんも一緒にやりますか？」

「え、いいの？」

「はい！何なら一緒に皆を驚かせましょう！」

「やったー！私もそっち側はやった事が無いから嬉しいよ、じゃあやるからには本気でやろう！」

「はい!!」

スイッチが完全に入った私とまりなさんは、目をキラキラさせながら赤色と青色のお面を見てニコニコしながら、これから来るであろう皆を待っている間に作業を進めていく。

お面だけじゃつまらないよね、衣装も作って本格的なものにしまきゃ！
楽しくなってきたぞ〜！

「アキちゃん、衣装にこれをプラスしたら本物っぽくないかな！」

「いいですね！あ、でもここをこうした方が…！」

「おー！アキちゃん、手先が器用だね〜」

「あはは、リサと昔から色々やってたからかもしれないです。んっ、よし縫えた」

「…凄い、やっぱりやるからには本気でだね！」

「はい！全力で皆を楽しんでもらいたいですから」

「あ、待って！いいこと思いついた！」

「え？お面がどうかしました？」

「私ね、美術が昔から得意だったの。だから、これを」

そう言って、お面にも少しだけ細工する。

まりなさんが美術が得意って言うこともあって、まるで生きてるかのように見える鬼のお面。

絵の具やコピックはどを取り出した時は、いったい何処から持ってきたんだってツツコミたくなつた。

ツツコミが不在というのは、どうも違和感しか感じないから今度はプロの有咲ちゃんでも呼ぼうかなあ。

どんどん出来上がっていく衣装達。

それから衣装だけじゃ勿体ないという店長のノリノリな意見もあって、特別にライブハウス全体を普段の雰囲気とガラッと変えていく。

「アキちゃん、ここに鬼の城とかどうかな？照明を付けなければこんな感じ！」

「いいですね、それなら照明を付けたら見えるように入口には鬼の門でも置きましよう」

「アキちゃん、物作りが得意なんだね。凄いクオリティ高いのにサクサク進むよ。お姉さんであるリサちゃんも、料理とお菓子作り得意だけど双子だと一緒にやるの？」

「昔から何かを作って驚かすとか好きだったんです。うーん、確かにリサと良く作ったりしますけど殆ど頼っちゃってます」

私は料理とか出来ないわけじゃないけど、圧倒的にレパートリーはリサの方が上だ。

リサは和食が好きだけど、和食だけじゃなく洋風も中華も何でも作れちゃう。

私は洋食が好きで極めたら、洋風のレパートリーしか無くて必然とリサとお母さんに頼っちゃうんだよね……。

洋風なら全然いけるんだけどなあ、リサにお願いして教えてもらおうかな。流石に洋食だけってレパートリーの少なさが……。

「そうなんだ、2人とも作れるならお母さんきつと助かってると思うよ！」

「いやー、私は完全に洋食しかレパートリー無いで微妙ところですけどね」

「へえ、アキちゃんって洋食派？」

「はい、和食が嫌いってわけじゃないんですけど好きな食べ物が大体洋食なので」

「わかるわかる、私も和食好きなんだけどお酒のおつまみとかは洋風に偏っちゃうよ」

「あはは……」

それは少し違う気がするけど、まりなさんが楽しそうに話すから私は苦笑だけする。

それから暫くしてセッティングも終わり、作っておいた衣装を私とまりなさんで身に付ける。

おお、サイズぴったりだ。燐子ちゃんのようなクオリティの高いものは作れないけれど、ちょっとしたのなら私達でも問題はなかったみたい。

「楽しみだね、アキちゃん！」

「はい、それじゃありサ達にRAINしますね」

「はい」

私は簡潔に、でもすぐにここに来てもらえるように文を作って皆が入っているR

A I Nグループ『ガールズバンドパーティー』と表示されたグループに送る。

すると、すぐに既読が何個か付いて何人か既に反応してくれた。

いや、皆早すぎない？いくら日曜日とは言っても、昼間だから気付かないパターンの方が多い気がするんだけど。

特にリサと沙綾、既読付いた瞬間に返事送ってきたのびっくりしたよ。

「…ふふ、楽しみだなあ。今日は節分だもん、やったるーじゃん！」

にしし、と一人で皆の浮かべるであろう表情や反応を想像して笑いながら私は先に奥へと行ったまりなさんの元へ向かった。

そう、これからやるのは節分でお馴染みのあれ。

私とまりなさんと鬼役、他の皆には豆を投げる側になってもらう予定だ。

ただ、それだけだとつまらないから少しだけイタズラを加えてみた。

「それじゃあ、まずは私がカウンターで予定通りに動くね！」

「はい、私は中で準備しておきます！」

まりなさんが例の衣装とお面を持ってカウンターへと向かったのを見送ってから、私もお面を手にとってライブステージの部屋に入る。

照明を付ければ完全に鬼ヶ島のようなステージ、でも逆に照明を付けないと完全にドラマのセットで犯罪現場にでもなりそうな怪しげな雰囲気。かなり凝ったなーなんて、今は思うけど1年に一度しかないんだもん。いいよね。

私は真ん中に設置しておいた椅子と、まるで私が座ってるかのように見せるための人形の下に自分の声を録音しておいたレコーダーを置いてリモコンと接続してから設置しておく。

これで、私がリモコンを押せば事前に録音しておいた私の声が流れてあたかも私がそこに座っているかのように見える。

「あ、まりなさんから連絡だ。おお、一番最初はAftergrowの皆だ。RA

INでもAftergrowの子達が近くににいるからすぐに行くってきてたから早いのか」

さーと、私もそろそろ準備しますか」。

入ってくる皆には見えない、でも私からは見えやすい場所を事前につけておいたからそこへと移動して皆が来るのを待機。

うわ、外から予想以上に悲鳴が聞こえてくるんだけど。まりなさんの演技力って千聖ちゃん並みに高いのかも。

私もあんな衣装着られて会ったら、叫び声はあげなくても固まって動けない自信はある。

外から幾つかの足音が聞こえてきた、きっと彼女達が走って来てるのだろう。ガチャッと勢い良く扉が開けられて、真っ暗だった部屋に光が溢れる。

「アキさん、無事ですか…！」

「アキさん!!」

想像通りの展開だ。

私は隠れていた場所から静かに出て、お面を被って顔を見えないようにしてから真ん中に置いておいた椅子に座ってる人形の後ろに立つ。

皆はまだ気付いていないらしい、まあ暗いから目が慣れるのに時間かかるよね。私は得意な演技というか、巫山戯て遊んでた時に身に付いた変声術で普段の声よりも低くして男の人のように聞こえるように準備する。

さてと、Aftergrowの皆用に準備してた方のボタンを押しますか。これ意外と便利なんだ、切り替えとか出来るから。

『……来ちゃ……だめ……』

「アキさん!?! 何処にいるんですか!?!」

『……皆、早く逃げて……!』

「おいおい、動くなよ。お前の大事な大事なお友達が怪我するぞー?」

やっと皆の目が暗闇に慣れてきたのか、人形を私に見えるようにした偽物の私の首元に真^モッ黒^{デル}な銃^{ガン}を突き付けてる私。

そして人形を上手く動かして抵抗してるかのように見せれば、私をキッと睨む蘭ちゃん達。

……意外と辛いものだなあ、ネタバレしたい。

「……お兄さん、アキさんを離してくれない?」

『モカ……!早く逃げてよ……!お願いだから!!』

「……警察呼びますよ、まりなさんにもあんな事して……!」

「うるせえな、お前らがこんなとこに来るのが悪いんだろうが。こいつはちゃんとお前らに言ったんだろ？ C i R C L E に来ては行けないってさあ？」

『……っ、お願いだから彼女達に手を出さないで……！』

「だーかーらー、動くなっつてんだろ!!」

銃口を人形に更に食い込むように押す。

つぐみちゃんとひまりちゃんは泣きそうな顔で、でもしっかり立ってる。蘭ちゃんと巴ちゃんは既に怒りが限界値みたいで初めて見るほどに怒ってる、モカも静かに私をずっと睨んでる。

それから新しい足音が聞こえてきたかと思えば、P o p p i n g P a r t y のボーカル香澄ちゃんがまりなさんへ何かを言ってる声と共に聞こえてくる。

予定より早いなあ、これまりなさん上手く動いてくれると助かるんだけど……。

「アキさん!!……え」

「…何が起きてんだよ、何でアキさんがあんなところに座らされて殺されそうになつてんだ!!」

「さーや、有咲。動かない方がいいよ」

「モカ…!?!」

「……下手に動いたらアキさんが危ない」

私とまりなさんが考えたシナリオ通りに動いていく。

次にハローハッピーワールド、そしてPastel*Paletteと続々に到着する。

とりあえず、皆には中に入れてもらって私は大人しくしてろって遠回しに伝えるためにモデルガンの銃口は人形に向けたまま。

…これ、想像以上に心が痛いかも。

でも、こんなところで終わらせない。

「…こころ、黒服さん達に頼めないの？」

「…黒服さん」

「…申し訳ございません、下手に手を出してしまえばアキ様が」

『……何でこんな事するんですか』

「あ？」

『貴方の狙いは私だけでしょ!?今すぐ関係の無い皆を離して!!』

「ぷっ、あはは!!確かにお前だけしか用はねー、けどそのパン屋の娘にも関係あるからなあ?」

「……沙綾が……?」

『っ、過去の事に沙綾は関係ない!!』

私が録音しておいた声に沙綾がびくつと反応する。

多分、今沙綾の頭の中では目の前の奴私は昔の因縁でこんな事をしてるのかって思ってるんだろう。

一気に顔が険しくなって、あの沙綾が静かに皆の前にゆっくりと歩いてくる。え、待って、これは予想外。

「……貴方はアキさんの昔を知ってるんですか」

「ああ、知ってるさ。自分の事のように」

「だからって何で今さら来たの!? アキさんは、もう何もしてない! 貴方と関係だつてないでしょ!?!」

「…沙綾?」

『…お願いだから沙綾に手を出さないで』

「揃いも揃って友情か? いいか!」

「アキ!!」

お姉ちゃんの声だ。

まりなさんが上手く動いてくれたようだ、助かりました。

さて、そろそろネタバレしないと皆の綺麗な顔が台無しになり兼ねない。

いや、流石にここまでこうなるとは思わなかったんだけどき。

リサは部屋に入ってきた途端、何も知らないはずなのに私を完全に睨んでる。

Roseliaの皆は着いて周りを見た瞬間に、燐子ちゃんとあこちゃんをゆき

ちゃんと紗夜ちゃんを守るように前に立ってる。

「……アタシの妹に何か用ですか」

「まあな」

「……今すぐアキから離れて」

「……嫌だと答えれば？」

「そんな事、アタシが許すとても？」

多分、今の私をアイツと勘違いしてるんだ。

もうそろそろネタバレしようかな、私はポケットに入っていたもう一つのモデルガンを取り出してからリサへと向ける。

中身はもちろん、豆。

「それならこうするしかねえよな？」

『やめて!!お願いだから!!』

「アキ、大丈夫だよ。アタシだってお姉ちゃんなんだからさ？」

「……歯を食いしばれ!!」

引き金を引く、皆がリサの名前を叫ぶ。

同時に私はリモコンを押してリサの名前を叫んでるようにする、そして皆の後ろで隠れていたまりなさんが大きな声をあげて……………。

「鬼は、外おおおおお!!」

『きやああああ!……………え?』

店長さんが一気に照明を付けてくれて部屋が明るくなる。

私も人形を担いで別の場所へ置いてくる。

皆はと言うと、唾然としていて固まって動かない。

やったー、大成功!

「……………何がどうなってんだ……………」

「まりなさん、何て言った…？」

「アキちゃん始めるよー！」

「あいさー！」

私は被っていた鬼のお面をズラして、顔が見えるようにすれば違う意味でリサと沙綾を主に皆の顔が険しくなっていく。

…あー、これは後で怒られるパターンってやつですね。

「アキ!!説明しなさい!!」

「アキさん!!」

「今日は節分！普通にやったらつまらない！だからドッキリした!!」

『はああああ!?!』

「まりなさんもグルだったんですか!?!」

「いやー、つい楽しそうだったからね。皆が本気で心配してくれた時は心が痛かったよ〜……」

「まりなさん！私達は逃げますよ！」

「待ちなさい！アキ!!」

「アキさん！今回のイタズラは度が過ぎてます!!」

「文句言いつつ豆を投げてきてるのは誰さー！」

「アキは外ー！」

鬼は外のはずが、アキは外って言葉に変わってるし。

皆が本気で私とまりなさんに豆を投げってくるから、変に止まってたら痛くてしょうがないから全力で逃げる。

まりなさんも楽しそうだし、結果オーライかな？

「アキー!!」

「アキさんのバカー！」

「ごめんなさーい！もうこれはしないからー！」

ただ、これはやりすぎだったみたいだ。

私が立てこもり犯役で、まりなさんは逆らった事で打たれた役。店長はいない設定。

そして、人形が立てこもり犯に人質にされた私役。

いいと思ったんだけど、ダメだったみたいだ。

「……アキちゃんって天然なのかな、おねーちゃん」

「……あれは天然より馬鹿ね」

「流石にあれはねーな、私でも心臓止まるかと思った」

「ふふ、有咲ちゃんはアキちゃんが好きなのね？」

「そう言ってる白鷺先輩こそ、アキさんからのRINE見て仕事をバックれたって

聞きましたけど？」

「……それはあれよ、内緒よ」

「うう、アキちゃんが無事で良かったよおー！」

「うんうん、そうだね彩ちゃん……！」

「あー、花音さん落ち着いて。彩先輩は私じゃなくて白鷺先輩に抱きついて下さい」

「……ああ、彼女のイタズラ。儂い……」

「絶対に儂くはないと思うわ、薫」

「……りんりん、アキ姉が無事で良かったよお」

「…そう…だね、あこちゃん。…事前に…聞いて…、衣装の作り方教えたなんて…言えない…かな」

「燐子先輩、今…」

「何でも…ないですよ…？」

「うう、有咲あー！アキさん無事だったよおおお！」

「だー！離れろー！」

「香澄、豆投げよう」

「うん！おたえ行こ！」

「……それにしても、これは流石にやりすぎっスね」

私がリサと沙綾を中心に豆を投げられてる時、まさか携帯を開いて私が送った文を苦笑しながら麻弥ちゃんが見ていたなんて思わなかった。

いい考えだと思っただけけどなあ、でもある意味で忘れられない節分になったと思わない？

なんて言ったら殺されそうだから口には出さないけどね。

——RAIN《ガールズバンドパーティー！》

Aki…皆、Circleに来ちゃダメ。

Saaya…②Aki何かあったんですか？

Lisa…②Akiどうしたの？

Aki…◎Saaya◎Lissa お願い、皆を巻きこ

RinRin…アキさん…?

Yukina…既読付かないわね

Hina…文も途中だよね…?

☆香澄☆…何か事件に巻き込まれたとかじゃないですよ…?

Arisa…◎香澄それはねーだろ…多分…

Moka…今、Aftergrowが近くにいるので行きますよ

Saaya…◎Moka私も行く!

Lisa…◎Mokaアタシも行くよ!

Chisato…◎Moka私も向かうわね

Aya…◎Chisato千聖ちゃんお仕事は!?

Hina…◎Aya♡彩ちゃん、もう千聖ちゃん現場から飛んでっちゃったっ

て

Aya♡…えー!? 誰情報!?

Hina…◎Aya♡マネージャーに決まってるじゃん

Aya♡…千聖ちゃん、今日って連ドラの撮影じゃ…:

おたえだよ…既読、アキさん以外付いてるから全員見たって事ですよね

Arisa…◎おたえだよそうだな、ってお前のそれなんだよ!!

おたえだよ…わかりやすいでしょ?

Arisa…有難い程にな!!

Sayo…とりあえず、行ける人はCircleに向かいましょう

Kokoro…分かったわ!ハロハピからは全員行くわね!

Misaki…◎Kokoroせめて目の前にいるから言って、お願いだから

Kanon…◎Sayo私達も近くにいるからすぐに向かえるよ

Rimi…◎Sayo私達も沙綾ちゃんと合流すれば大丈夫です!

Lisa…皆、気を付けてね。アタシもすぐ行くから

Aya♡…猫スタンプ

Himari…ハムスタースタンプ

墮天使あこ姫…◎Lisa了解っ!

Moka…はーい

A dream come true
an unreachable
dream

——叶えたいと願う夢がある限り

無数の可能性があると言った。

番外編 日本武道館。

仕事が終わってリビングの電気を付けてからソファへと鞆を放り投げるように
おいて、コーヒーを淹れるためのお湯を電気ケトルのスイッチを入れてお湯を沸か
す。

お湯が沸くのを待っている間に、リビングの真ん中に設置してる小さめのテーブルの上に置いておいた数年前から大事に使っているチケットケースがある事を確認して座り、中に入っている数枚のチケットを取りだしてテーブルに広げる。

数枚と言っても数えられる程度で、中にはボロボロとなっているものが多い。高校生の時に初めて行く事が出来た、憧れの人の最初で最後のライブ。

姉のリサと幼馴染のゆきちゃんがいるバンド、Roseliaが見事優秀賞に輝いたFWF。

Roseliaがメジャーデビューして初めての1stライブ。

沙綾がいるバンド、Poppin'Partyがメジャーデビューして行われた1stライブ。

あとは、仕事関係で呼ばれた何枚かのライブチケット。

その中でも一番綺麗でまだ封筒から出していないチケットを手に取り、封筒に書かれている名前を確認してからハサミでゆっくりと切り取る。

封筒には『今井アキ様』と書かれていて、相手先の名前には『Poppin' Party』ドラム担当 山吹沙綾』の文字。

「……ライブチケット」

中に入っていたのは、1枚の関係者用のライブチケットと1通の手紙。

内容を読めば何とPoppin Partyが今年で5周年目を迎えるらしく、それもあってなのか2度目の日本武道館でライブをするとの事。

そのライブに来て欲しいというのと、少しその件で相談があると書かれていた。相談事ぐらい、RAINで言ってくればいいのに。なんて思いつつも早めに返事をした方がいいかと思つてソファに放り投げていた鞆からスマホを取り出してRAINのアプリをタップする。

それから「沙綾」と書かれた連絡先をタップして、トーク画面を開く。

今思えば、こうやって連絡を取り合うのも久しぶりかもしれない。

私が声優アーティストになったばかりの時は、沙綾達は大学生だったし、まだメジャーデビュー前だったから私の返信が遅くなる事はあっても連絡が途切れることは無かった。

でも、沙綾達が大学生の間にメジャーデビューが決定してからは元々の人気もあつてすぐに音楽番組などで取り上げられ、一躍人気ガールズバンドの仲間入り。私も女優としての仕事も増えて連絡を返すのが遅くなり、沙綾達もなかなか連絡が取れなくなって気付けば最後に連絡を取ったのは、沙綾達が武道館ライブを成功させたという報告とそれに対するお祝いの言葉だった。

『Saaya…アキさん！武道館ライブ成功しましたよ！』

『おめでとう！ごめんね、観に行けなくて……。』

『Saaya…いえ、アキさん凄く忙しそうですし逆に無理してないか心配です。』

また武道館で必ずライブするので、その時に来てください！』

『うん、その時は必ず行くね！』

これがRAINでの最後の会話。

何年前だろうと思ったら、もう2年も前だった。

私は声優であり女優。

沙綾やリサはバンドマン。

同じ芸能界でも方向が違うから現場で会う事はない。

千聖ちゃんや彩ちゃんなど Pastel*Palette の皆は、アイドルバンドだから音楽番組などでちょこちょこ会ってるらしい。

私はと言うと、日菜ちゃんと千聖ちゃんとはドラマや映画などでは会う。彩ちゃんはバラエティで会うけど、私はあまりバラエティに出る回数が多いわけじゃないから少ない。

麻弥ちゃんとイヴちゃんは、Pastel*Palette とは別で舞台女優として活動中。

「……全然、皆に会えてないなあ」

実際、姉であるリサやゆきちゃんとも連絡は取っているけどなかなかスケジュールが合わなくて会えてない。

私が一人暮らしを始めたのもあるんだろうけど、何だか私だけ皆と会えてないか

らか違う世界にいるようで寂しくなってくる。

一旦、トーク画面を消してからホーム画面に戻れば懐かしい写真。

まりなさんがCircleのオーナーへと昇進し、そしてRoseliaとPop'n'Partyがメジャーデビューしたって事で皆でお祝いパーティーした時の集合写真。

Aftergrowの皆はスカウトはされたものの、メジャーデビューはせずに各々の道へと進んだ。

蘭ちゃんとつぐみちゃんは家の跡を継ぎ、モカはお母さんと同じデザイナーさんの道へ。

巴ちゃんは商店街でラーメン屋さんを始めて、ひまりちゃんは有名ブランド服の店員さん。

ハローハッピーワールドの皆もメジャーデビューはしなかったけれど、こころちゃんの『世界を笑顔に！』というのは変わらずで、こころちゃんがお父さんから継いだ会社で皆と世界中を飛び回っているみたい。

『すっごく大変だけど楽しいって花音から聞いてるわ』って千聖ちゃんから聞いた

のも最近の話。

「あ、お湯沸いてた」

急いで電気ケトルの電源を切ってから普段使っているマグカップを用意して、コーヒーマーカーにお湯を注いでコーヒートを淹れる。

出来立てのコーヒを持って、再びテーブルの前で座ってから一口飲んでスマホを手に取る。

何て送ろう。

普通に久しぶりって感じでいいのだろうか。

悩み出したらキリがないのなんて目に見えてるのに、リサと普段話すように送ればいいのに変に緊張して打つに打てない。

チケット受け取ったよ、いや久しぶりの会話の始まりがこれってどうなのだろう。そんな風に考えていけば、突然の着信が入って私は驚いて咄嗟に通話を出る方ではなく切る方のボタンを押してしまう。

「……やば、掛け直さない」と

相手が誰だったかとも確認せずに慌てて掛け直せば、懐かしい声が聞こえてきた。本当に久しぶりの声だ、しかもこんなに突然電話してくるような相手ではない。

「もしもし？」

『あ、えっと……市ヶ谷……です』

「……久しぶり……だね。どうしたの？」

『あー、その……チケット届いたかなーって……不安になったんで……』

「え？あ、うん。受け取ったよ、今ちょうど沙綾に連絡しようとしてた所だった」

私がそう返せば、スマホ越しに『ほらみろ！私の言った通りじゃんか！』と有咲ちゃんが誰かに怒っている声が聞こえてくる。

有咲ちゃん、相変わらず変わらないみたいだね。でも、そんな所が可愛いんだよなあ。

本人は可愛いって言うけど嫌がるんだけど、それも変わってないのかも。

なんて考えていけば、有咲ちゃんが軽く溜息を吐いてから再び私に話しかけてきた。

『…あー、あの』

「ん？」

『今って時間大丈夫ですか？』

「うん、今日はもう仕事終わったから家にいるから大丈夫だよ」

『……じゃあ、あいつに代わります』

「あいつ？……あれ、有咲ちゃん？」

いったい誰の事を言ってるんだろうと思って名前を呼ぶけど、既に耳からスマホを離してしまっているのか私の声の有咲ちゃんの声が返ってくることは無かった。でも、その代わりまた久しぶりに懐かしい声が聞こえた。

『……もしもし、アキ……さん？』

「……沙綾？」

『は、はい。あの、チケット……届きましたか？』

「うん、届いてるよ。マネージャーから受け取った」

『あ、良かった……』

「ごめんね、連絡するの遅れて。それで相談ってどうしたの？」

『あの、アキさんってその日仕事入ってたりしますか？』

「あー、待ってね。今確認する」

鞆から手帳を取りだしてから2月23日のスケジュールを確認する。

あ、そう言えばここは丁度オフだった。

2月21日にリサが初の武道館ライブをするって聞いたから、纏めて休みが取れるかマネージャーに確認して取れたから取ったんだった。

「オフだよ、だからライブ行けるよ」

『本当ですか!?!』

「う、うん」

『∴その、相談内容なんですけど』

「うん、私で良ければ乗るよ?」

『ドラマーとしてのパフォーマンスを増やしたくて、一人で考えてみたんですけどなかなか浮かばなくて。アキさんに意見を聞きたいなって……』

「あー、なるほどね。じゃあ、どっかで落ち合う?」

『そうですね、私達も今日は仕事休みなのでつぐみのお店とかでどうですか？』

「うん、いいよ。じゃあまた後で」

通話を切ってから洗面所へと向かって、メイクなどの手直しをしてから身支度を整えて軽く変装としてマスクと伊達眼鏡を付ける。

まあ、これをやってもバレる時はバレるんだけどね。

それから歩きやすいスニーカーを履いて、持ち物を確認してスマホをポケットに突っ込んでから家を出て鍵を閉める。

ここからつぐみちゃんの家まで電車で30分ぐらい。

んー、これは電車よりもタクシーの方が早いかもしれない。

沙綾が何処にいるのか分からないけれど、有咲ちゃんと一緒にいたって事は練習をしていた可能性が高いし、何よりどんなスタジオよりも見つからないであろうあの蔵で今も練習をしているならすぐに着くだろう。

ちょうど来たタクシーに向かって手を挙げて、タクシーに乗り込む。

それから、つぐみちゃん家のお店のホームページをスマホに映して運転手さんに見せる。

「すみません、ここまでお願いします」

「分かりました」

タクシーの運転手さんは頷いてからアクセルを踏んだ。

止まっていたタクシーが徐々に動き始め、私が普段から仕事に行く時と帰る時に見ている景色が動き出す。

見慣れた桜の木々、行き慣れたコンビニ。

使い慣れた歩道、通い慣れた道のり。

全てが、まるで早送りされているように変わっていく。

そう言えば、こうやってゆっくりあの商店街に戻るのも久しぶりかもしれない。

多分、最後に行ったのは沙綾がバンドとお店を継ぐかで迷ってるって相談を沙綾の家で聞いていた時に、純くんが『俺が継ぐ！姉ちゃんが好きなの事やれ！』って宣言したのを聞いた時は本当に驚いたけど、それ以上に頼もしくなったなあって思えた時だったと思う。

あれから私も忙しくなっちゃって、私が行く事は出来なくなった代わりにマネージャーに頼んでお店のパンを買ってきてもらってたから久しぶりに顔を出そうかな。

いつも美味しいパンをありがとうございますって、伝えなきゃね。

そんな事を考えながらブーツと窓から見える空を見ていれば、私の好きな群青色が広がってる。

ベース、最近弾けてないな。久しぶりに弾こうかな。

「お客さん、着きましたよ」

「あ、すいません。ICカードでお願いします」

ピピッと音が鳴るまでかざして、運転手さんに礼を告げてからタクシーを降りればあつという間に商店街に着いた。

懐かしいなあ、お店の場所が変わっていないならこの道を真っ直ぐだったはず。歩いていけば私が高校生の時に店主だったおじさんではなく、その息子さんのお店に立っていたり私の事に気付いてくれたのか薬局のおばさんは静かに手を振ってくれる。

そんなおばさんに手を振り返してからゆっくりと進んでいけば、私の好きなあのパンの香り。

「…後で挨拶行きます。でも、その前に」

クルッと顔をやまぶきベーカリーから羽沢喫茶店へと変えて、中をチラッと覗けば誰かが既にお店にいる。

でも、他のお客さんの姿が見えない。

もしかして早く着きすぎてしまったのだろうかと思いつつ、扉を開ければ鈴の音が鳴って誰かがお店に入った事を店内に知らせる。

それと同時に誰かと話していた店員さん——つぐみちゃんが私の方へと視線を向けた。

「いらっしやいませ！あ、アキさん！」

「久しぶり、つぐみちゃん。沙綾来てるかな？」

「アキさーん！こっちです！」

「…あれ？香澄…ちゃん？」

「いえーい」

「おたえちゃん……?……えーっと?」

待って、私は沙綾と約束してたんだよね?

何でここに、香澄ちゃんとおたえちゃんがいるんだろ?

そう思っていたら金髪のロングヘアをした有咲ちゃんと、黒髪のセミロングぐ
らいの長さで揃えられたりみちゃんが気まづそうにしながらも口を開いた。

「:すいません、こいつらがアキさんに会いたい会いたいうるさくて……」

「ごめんなさい、アキさん……」

「全然大丈夫だよ、ビックリしただけだから謝らないで!……沙綾は?」

「沙綾ちゃんならここにいますよ?」

つぐみちゃんに言われた方へと目を向ければ、ポニーテールにしていた髪を下で纏めて私がプレゼントしたりボンで結んでる沙綾の姿。

一瞬、誰か分からなくて思わず固まってしまった。

「…え？沙綾…？」

「はい、私ですよ？アキさん」

「……………マジか」

「ええ!？」

「おー、これはアキさん沙綾が分かんなかったパターンだな」

「ふふ、沙綾ちゃん髪型変えたから雰囲気も変わったよね」

「下ろしてもさーやは可愛いよね〜！」

「うんうん、上で結ぶポニーテールもいいけどこっちの沙綾は大人」

「そ、そうかな…？」

冗談抜きで本気で分からなかった。

綺麗な人がいるなー程度でしか分からなかったけど、良く良く見れば沙綾だし、有咲ちゃんやりみちゃん達も正直最初わからないぐらい雰囲気もう大人だ。

香澄ちゃんとおたえちゃんが昔から変わらないテンションで話し掛けてくれなかったら、絶対にわからなかったと思う。

「…と、とりあえずアキさん座ってください！」

「う、うん」

「アキさん、お飲み物はいつものので大丈夫ですか？」

「へ？」

「ふふ、いつもアキさんが頼んでいたもの覚えてますよ！」

「ほんとに!?!じゃあ、それをお願い！」

「はい!ごゆっくりお待ちください！」

「つぐみちゃん、すごい。私達は普段から来てるからあれでしたけど、アキさんって最後に来たのっていつですか？」

「んー……、3年前？」

「3年!?アキさん、すっごい忙しそうですよねー！」

「あはは、有難い事にね。でも、香澄ちゃんとおたえちゃん、それに有咲ちゃんの事も良くバラエティで見るよー？」

「ま、マジですか!?うわ……恥ず」

「特にクイズ番組でおたえちゃんが真顔で答える天然な所とか、香澄ちゃんの素で間違えるところとか、有咲ちゃんがピシッと難しい問題を決めるところとか。りみちゃんも良く最近、沙綾と一緒に食レポとかで番組出てるのみてるよ」

「ええ……!は、恥ずかしい……」

「あはは、りみりんの食レポ凄いですよね。隣にいる私もいつもびっくりしちゃいます」

「いや、パンの時に異様に語ってパンの娘を發揮してたの誰だよ」

「ちよ、有咲！」

「あはは！本当にポピパの皆は変わってないねー！」

「アキさんは変わったんですか？」

「…え？」

香澄ちゃんの言葉に思わず私は固まる。

変わったか……か。確かに、私は今友人という時間よりも仕事を優先してる気が

する。

まあ、それが本当は普通なんだろうけど私は自分からそうしてる気がする。

叶えたい夢を叶えたから、なりたい仕事に就けたから。そんな理由を並べているけれど、本当は一番叶えたかった夢を叶えられてないという現実から目を背けるために、皆と会わないようにしてるだけ。

そんな自分、バレたくない。

「…あー、でもちょっとだけ仕事に余裕が出来たかな！」

「おおー、大人の女性は違う」

「おたえちゃん…多分それは違う…かな」

「……アキさん……？」

「お待たせしました、アキさん！」

沙綾が何かに気付いてしまったのか、私に何かを言おうとした時にベストタイミングでつぐみちゃんが飲み物を持ってきてくれる。

つぐみちゃん、ありがとう。

「ありがとう、んー！やっぱりこのコーヒー好きだよ」

「ふふ、ありがとうございますっ！今日は貸切にしているので、ゆっくり気にせず話してくださいね！」

「え、貸切!？」

「さーやの相談事はライブに関係するので、私が貸し切っちゃいました！」

「か、香澄ちゃん……。ま、まあとりあえず相談って?」

「沙綾、ほら」

「う、うん。あの、ライブ時にいつも私だけパフォーマンスをしようって思うんですけどどうしてもレパートリーが増やせなくて……」

ああ、なるほどね。

確かにドラムは座って演奏するからパフォーマンスをするにしても、大分限られてきてしまう。

竿隊に関しては幾つもあるし、キーボードも違うタイプの形にすればパフォーマンスの幅は広がる。

んー、簡単に出来ることじゃないけどあれならパフォーマンスの幅が広がるんじゃない?

「立奏したら？」

「立奏……？」

「そう、立って演奏するの。ドラムは本来、座って演奏するものだからパフォーマンスの幅も強制的に限られちゃう。だけど、立奏にすればパフォーマンスの幅も広がるかなって」

「……立ってドラム……逆立ち？」

「何でそうなるんだよ！逆に逆立ちしてどうやってドラム叩くんだ!!」

「じゃあ、肩車して貰って？」

「おたえ、それなら最初から座って演奏するから……」

「でも、それって沙綾ちゃんが立奏するとなると足りない部分が出てきちゃいますよね…?」

「うん、だから沙綾と同じレベル又はそれ以上のドラマーを一人用意しないといけないってのが難点かな。それさえクリア出来れば、その人がリズムを刻んでいる間に沙綾は観客の人達と一体感を感じられるようなパフォーマンスも出来ると思う」

「さーやと同じ…:Roseliaのあこちゃん!」

「いやいや、無理だろ!あこちゃんと一緒に今回のライブを企画したし、何より1日目がRoseliaだっつーの!」

「あ、そうだった…:」

「あれ、リサ達が武道館でライブするの知ってたの？」

「はい、私達『Poppin Party』とリサさんがいる『Roselia』さん。そして、おたえの幼馴染がいる『RAISE A SUIREN』さんの3グループで合同ライブって事でやるんです！」

「Day1がRoseliaさん、Day2がRASさんで私達が最後なんです」

「へえ、その『RAISE A SUIREN』さんってDJがいるハロハピみたいなバンドだよな？DJの方が私の事務所の先輩だけど知らなかったよ。んー、そうになるとあこちゃんは厳しいね」

「じゃあ、麻弥先輩とか？」

「おたえちゃん、麻弥先輩は舞台があるから……」

「花音ちゃんも厳しいかなあ、RoseliaとPoppin'Partyのライブを見るために日本に戻ってくるって千聖ちゃんから聞いてるけど、それまでは海外だし……」

「あ、つぐみちゃん！」

「はい、りみちゃんどうしたの？」

「巴ちゃんって、この日空いてるかな？」

「うーん、巴ちゃん自分のお店持ってるから『ライブは観に行くぞ！』って言うてたけど難しい…かな…?」

うーん、これは難しいなあ。

知ってるガールズバンドのドラマーなら沙綾と同じレベルだから問題ないんだけど、皆難しそうだし。

だからと言って他にドラマーはいないしなあ……。

「うーん、立奏は厳しいね……。他のを考えよっか」

「すみません、アキさん……」

「こーら、沙綾はすぐに謝らないの。まあ、私も知り合いでドラマーは少ないからさ……」

「あー！」

「うお!?なんだよ!いきなりでかい声出して!」

「アキさん！私、いいこと思いついたんです！」

「……なあ、香澄のいい事ってさ」

「……殆どが」

「……無茶振り……だよね」

「香澄、何思いついたの？」

私も平然を装うために、コーヒーを1口。

うん、知ってる。今の香澄ちゃんがどれだけ危ないかなんて分かっている。

「……って、どうかかな！」

「……へ？」

「はああああああ!!？」

「か、香澄！それはいくら何でも無理だよ！」

「香澄ちゃん、流石にそれは……」

「……確かに、それなら出来る」

「な、おたえ!!お前、分かって言ってんのか!!？」

とんでもない事を香澄ちゃんは言ってしまった。

正直、これはすぐに無理だと香澄ちゃんにこの案を止めさせるべきなのかもしれない。

そう言おうと思っけて口を動かしかけた時、私は動けなかった。

もし、それが可能なら。

もし、それが許されるのなら。

「……香澄ちゃん」

「はい！」

「いい案だと思う、それでやってみよっか」

「えへへ、はい!!」

「「え、ええええええええええ!?」」

「香澄、ナイスアイデア」

という一件があつてから数ヶ月後。

Roseliaのライブが始まったと同時に始まったガールズバンドの合同7th LIVE。

私はというと、ちゃんとリサから事前に貰っていた関係者席から見てるけど本当にRoseliaは凄いなと思う。

もう、私の技術なんてとっくに追い越してるじゃん。

最後の最後までRoseliaのカッコイイ演奏で幕は閉じ、私は楽屋へと向かえばちやうど楽屋に戻って来たRoseliaの皆と鉢合わせた。

「アーキ！どうだった？」

「凄かったよ、もう本当に」

「アキ姉久しぶり！」

「うん、あこちゃんも久しぶりだね。元気そうで良かったよ」

「アキ、貴方の活躍は見てるわ。次のドラマも期待してるわね」

「ゆきちゃん？ そうやって会うたびにハードル上げないで？」

「アキさん、今日はお忙しい中来てくださってありがとうございます」

「いえいえ、紗夜ちゃんのギターテクが生で見られて良かったよ！」

「アキ…さん、お久しぶり…です…。どう…でしたか…？」

「隣子ちゃんの演奏、ほんっとーにすごい！ いつ聞いても綺麗だよ」

「ふふ、アキが楽しそうで良かった」

「え？」

「最近のアキ、テレビで見ても何か怖い顔してたからさ。きつと溜め込んでるんだろうなって思ってたんだ、アタシが気付かないとでも思ってたー？」

予想外の攻撃が来て、私は固まるしか出来ない。

怖い顔……、そんな顔してたんだ私。そりゃ、香澄ちゃんも「変わったんですか？」って聞きたくもなるよね。

疲れてるのかなー、確かに最近休みが無くて連続でドラマとCM掛け持ちで撮ってるけど。

「あはは、ごめんね。ちょっと疲れてるのかも」

「ちゃんと休まないダメだぞ？ほんと、アキは無理しがちなんだから！」

「ごめんね、でも大丈夫だよ」

「リサ、そろそろ着替えるわよ。アキ」

「うん？」

「——見てるわね」

「うん、ありがとう」

Roseliaの皆を見送って、私はふうつと息を吐く。

明日はRASさんのライブだ、それを見たらPoppin'Partyの皆のライブ。

私は来た道に戻って家に帰り、次の日も先輩から貰っていたチケットで関係者席に座って昨日の Roseliaとはまた全く異なったライブ演出に度肝を抜かれながらも楽しんだ。

そして、最終日。7th LIVE Day3だ。

「アキさん、おはようございます」

「おはよう、楽屋に来ちゃってごめんね」

「いえいえ、そろそろみりん達も来ると思いますよ」

先に来ていた沙綾と軽く話をしていれば、続々と Poppin Party の皆が揃ってくる。そして扉が開かれたと思えば、香澄ちゃんまでニコニコの笑顔が浮かべている。

楽しみなんだろうなあ、緊張とかしてなさそう。

「おたえ！」

「何ー」

「キラキラドキドキしてる!？」

「うん、してる」

「…早くない？」

「りみりん！」

「お、おはよう香澄ちゃん」

「うん！おはよ！りみりんも、キラキラドキドキしてる!？」

「う、うん！してるよ！」

「……早くない??」

「さーや！」

「なーに、香澄」

「キラキラドキドキしてる!？」

「キラキラドキドキしてるよ」

「……あれー、私がおかしいのかな？」

りみちゃんは驚いてたけど、平然とテンションの高い香澄ちゃんに答えるおたえちゃんと沙綾を見て私は何とも言えなくなる。

これが……ポピパって事ね、うん。

「アキさん！」

「は、はい！」

「キラキラドキドキしてますか!？」

「う、うん！してるしてる！」

「……ふぁー、おはよ……」

「有咲あー！」

「……何、まだ朝なだけど」

「キラキラドキドキしてる!？」

「……まだ、朝だし」

「ええー！そんなあー！」

ですよね、普通はそうなんだよね。有咲ちゃんが居なかったら私はこれが当たり前になってたよ。

そう言えば、有咲ちゃん朝弱かったんだっけ。

「Poppin' Partyさん、30分後にリハーサル始めるので準備お願いし

まーす！」

「はい！」

「やべ、私何も準備できてないわ……」

「急いで有咲！」

何だか、ちょっと意外かも。

普段の有咲ちゃんではあまり想像出来ない姿を見て、私はそう思った。

でも、きつとこれがPoppin Partyの良さでありPoppin Partyなんだろなあ。

—— ああ、羨ましい。私の叶えられない夢が目の前にあるのが羨ましい。

「アキさん！」

「んー？」

「アキさんも！やりましょ！」

「えー、私はいいよ。Poppin Partyのメンバーじゃないから」

「アキさん、それは違いますよ」

「え？」

「ふふ、おたえちゃんの言う通りです」

「…そうですよ」

「あーきさん、ほらほら！」

「ちょ、沙綾!?!」

「それじゃあ、いつもの行くよー！せーの！」

「ポピ『パ!』、ピポ『パ!』、ポピパピポ『パー!』」

成り行きでやってしまったけど、ちょっと楽しいかもしれない。

それから順調にリハーサルが進められて、本番が始まるほんの数分前となった。お客さんは既に入っていて、問題視されていたお客さんの対応もスタッフさんが対応してくれたみたいだ。

これで、Poppin Partyの皆が安心して出来る。

「アキさん」

「ん？」

「これ」

「……持っていてくれてたんだ、それ」

「はい、私の色は黄色ってイメージがあるのは知ってるんです。でも、これだけは外せなくて」

沙綾が私に見せてくれたのは、私が事故に遭う前に渡した群青色のシュシュ。もうボロボロでもおかしくないのに、ちゃんと綺麗に残っているのは沙綾がしっかり手入れをしてるからだろう。

私がついている沙綾のシュシュは、私が事故に遭った時の血が残ってしまっているから普段は家に置いておいてるけど今日だけは。

「……うそ」

「何か、今日は持ってこなきゃって思ってたさ。当時の事を思い出させちゃうよね、ごめん」

「待って！」

「…沙綾？」

「付けててください、それ」

「え、でも……」

「お願いします、私が付けて欲しいんです」

「…分かった、付けとくね」

ここまで言われても外しておく、なんて言えない。

私は左手に黄色のシユシユを付ければ沙綾は満足そうに笑って、群青色のシユシユを大事に左手の手首に付けた。

それから私の手を握って、ギューツと握りしめる。

「沙綾？何してるの？」

「……伝われ！」

「…？」

「伝われ、伝われ…!!」

「…さあ…や…?」

「…:伝わりましたか? 私の気持ち」

「…:え、えっと…」

「あー! 沙綾抜けがけずるいよー!」

「そうだそうだー」

「ま、待っておたえちゃん! シュシュ忘れてるよ!」

「ちょ、お前ら…! 騒ぐなっつーの!」

「…え、え？」

沙綾の急な行動に頭が追いつかない。

Poppin Partyの皆はまるでそれが分かってるかのよう、何も言わずに皆が私の周りに集まる。

え、なになに。

「アキさん！」

「う、うん？」

「手を出してください！」

「…ことう？」

「はい！皆、せーの！」

「えい！えーい！」

「伝われー！」

「伝われ…！」

「……伝われ！」

「伝われ、アキさんに伝われ！」

「ちょ、ちょっと皆………あ」

私の手を皆で握られて、力が強いから離してと言おうとした時だった。

皆の手首に付いてるシュシュの色。

紫色、赤色、水色、群青、ピンク。

そして、私の手首に付いている黄色。

「Poppin Partyさん！お願いしまーす！」

「よしっ！皆！行こう！」

「アキさん、ちゃんと見ててくださいね」

「アキさん、見ててください！」

「…が、頑張りますから見ててください」

「アキさん、行ってきます！」

眩しい、眩しいよ。

あのシュシュの色、あの5人の背中。

まるで、昔の私がいたCHISPAみたいじゃん。

笑顔で私に手を振る沙綾、そんな沙綾と一緒にステージへと歩いていくPOP
in Partyの皆。

「——ああ、私」

——やっと気付いたの？

「……今更……ね」

——ずっと、私は寂しかったんだよ。

私が居なくてもお姉ちゃん居場所を作って、沙綾も私が居なくても誰かが傍

にいたのが。

「……うん」

——ずっと叶えなかったんだよね、お姉ちゃんとバンド組むのを。沙綾とまたバンドメンバーになるのを。

「……そうだね」

——でも、叶えられないって諦めちゃったから。私はそれに目を背けるために仕事に全力を注いだ。

「……何処で間違えちゃったのかなあ」

私の手にはもう何も残ってない。

あの日、事故にあって目を開けたら皆がいてくれた。

でも、もう私が知ってる皆じゃなかった。

それがどうしても、置いていかれてるようで私だけが取り残されてるようで寂しくて悲しくて。

沙綾の前でベースを握るのは私じゃなくて。

お姉ちゃんの隣でギターを弾くのは私じゃなくて。

CHISPAのベーシストは、私の居場所だった所に私の姿はなくて居場所じゃなくなった。

沙綾とバンドメンバーにはもうなれない。

沙綾と共にリズム隊として弾けない。

お姉ちゃんとバンドメンバーにはなれない。

必死に練習したギターをお姉ちゃんと共に竿隊として弾けない。

「……………藤崎アキ」

「っ!?!?……佐々木さん」

「駆け出しの時は、イキイキしてたのに最近じゃ死んだような目してたよ」

「…知ってますよ、目を逸らしてただけです」

「でも、もう平気でしょ。今のアンタなら」

「はい、前までなら苦しいだけだったけど今日までのスケジュールは大変だったけど苦しくなかった」

私の憧れたあの人は、この景色を見ていたのかな。

いや、それは本人じゃないから分からないけれど私の中ではこの景色を忘れる事なんてないと思う。

『今日は、7thライブ3Days『Jumpin' Music』にお越し頂き
ありがとうございます！』

ずっと叶えたかった夢。

ずっと追いかけた夢。

諦めようとしていた夢。

沢山の夢がこの世には沢山ある。

私も声優という夢は叶えられたけど、2番目に叶えたかった夢を叶えられな
かったから。

それでも、きっと諦めずに足掻き続ければ叶うかもしれないって教えて貰ったの
に忘れてしまうなんて。

このライブを観て、新たに夢を持つ人が増えると思うし持つてる夢をさらに叶え
ようと努力する人が増えると思う。

だって、私もその一人だから。

何処までも何処までも飛んでいく後輩が眩しくて、羨ましくて、でも背中を押し

てくれる頼れる後輩。

『今日は特別ゲストに来て頂いてます!!』

香澄ちゃんの声が聞こえる。

それに応えるように観客の人達の大きな声が聞こえてくる。
行かなきゃ、私が行かなきゃ始まらない。

『大丈夫だよ』

「…え？」

『演奏者が楽しまなきゃ見てる人に伝わらないよ、お姉ちゃん』

「……………昔の私の方がちゃんと分かった」

マネージャーの佐々木さんが、変な顔で私を見てるけど私はふと見えた気がした昔の自分の姿にそう微笑む。

頑張ろう、出来る限りのことを。

今日だけって寂しいけれど、私はずっと――

「――よしっ」

ギョツと握り締めて、白煙が巻き起こるステージへと私は上がっていく。

スポットライトで照らされて眩しいなと思いつつも目を開ければ、目の前にいるのは前バンドメンバーの沙綾。

手に持っている物を私に向けてくる。

「アキさん」

「ねえ、沙綾」

「はい」

「——今日だけ、仲間に入れてくれる？」

「今日だけなわけではないじゃないですか、私はずっとアキさんのバンドメンバーでありリズム隊のドラマーです」

「…そっか、ありがとう」

沙綾に微笑んで私は沙綾の手にある物を受け取り、真っ直ぐと歩いてあの場所へ座る。

まさか、こんな事になる未来があるなんて思わなかった。

無数の有り得た未来。

私が一般人で皆とはただのファンと演者という観客席から見ると未来。

そもそも、私という存在がない未来。

「今日は、先輩である声優の藤崎アキさんに沙綾と一緒にドラムを担当して貰えることになりました！——アキさん！」

名前を呼ばれて、私は沙綾から受け取ったスティックを握り締めて軽く含むパフォーマンスとして叩いて見せれば観客席からは大きな声援が聞こえてくる。

久しぶりの感覚だなあ。

「アキさん、私を支えてくださいね？」

「あはは！もちろんだよ、沙綾！」

「それじゃあ聞いてください！6人のPoppin' Partyで『君じゃなきゃ

だめみたい』！」

——夢を叶えさせてくれてありがとう。

大変遅くなりました。

明日には本編を更新する予定です！

7th LIVE全通楽しかったー！

夢は叶う、それを伝えたかった今回の番外編。

第1章 Emotional Daybreak

夜はまだ、始まったばかり

初めましての方、初めまして。

『男ですが家庭事情で女の子になります。』を読んで下さってる方、いつもありがとうございます。

今回はTwitterの方で『リサ姉メインを書いてほしい、Roseliaとの絡みも欲しい』というリクエストがあったので書きました。

ちょっとシリアスが前半多いですが、宜しく願います。

無機質な機械音が部屋に一定のリズムで響く。

視線の先には真っ白なカーテンがキツチリと閉められていて、まるで自分が立つ

ている場所と向こう側で今も眠っている彼女が別世界にいるような境界線のよう
だ。

今日は起きているだろうか。

それとも、普段と同じ景色があるのだろうか。

起きている事を願いながら、カーテンをゆっくりと開けて中に入る。

ああ、変わっていなかった。

目の前で寝る彼女は2年前から変わらず、ベッドで横になって眠っていた。

自分よりも少し赤っぽい茶色の髪の毛がショートカットだった長さが懐かしく感
じる程に今では長くなっている。

「……今日もいい天気だね、アキ」

声なんて帰ってくるわけなのに、どうしてもこの部屋に広がる沈黙に耐えられ
ずに話しかける。

桜が広がるこの季節がそろそろ終わりを告げる。キミが一番好きだって言ってた

季節が、あれからもう2回訪れた。

いつ起きるのかな、もう待ちくたびれたよ。いくら疲れてるからって寝すぎじゃない？

「……そろそろ起きてよ」

目の前の本人は何も言わず、ただただ彼女が生きている事だけを示す機械音だけが鳴る。

このまま黙っていたら自分がおかしくなりそう、少しでも今の状況を話そうかな。飾られていた花と自分が持ってきた花を入れ替えて飾り直し、近くの椅子に座り込む。

さて、どんな話をしよう。

「あのね、最近バンドを始めたんだ。久しぶりに楽器なんてやるから大変なんだよ」

『あはは、もう大分前だもんね』

「それとね、バンドメンバーもやっと集まってさ。何ていうかスタート地点にやっと立った！って感じなんだ〜」

『良かったね、私も久しぶりにやりたいな』

そんな会話が本来なら出来るはずなのに、自分の脳内に彼女がどんな風に返してくれるのかと考えてしまう。

ああ、もっと自分を追い込んでどうするんだ。

ここにいるも彼女に笑顔を向けられない。

そう思って持ってきた荷物を持ち、椅子から立ち上がる。

今度は笑ってあげられるかな、いや自信なんて何にもないけど少しでも姉らしい事をしてあげなきゃ。

目から零れ落ちる涙を拭いてカーテンに手をかける。

「……また明日来るね、アキ」

カーテンを閉めて病室から出るために扉を開ける。

ここから普段練習で使っているライブハウスは少しだけ遠い。

一応、今日だけは遅れてもいいって言われてるけど流石に私情とは言え、メンバー全員が知ってるわけじゃないから急がなければ。

ちらっと横目で病室前に設置されているネームプレートを見て悔しくなり、下唇を噛む。

《今井アキ様》

2年、もう2年も経っているんだ。その事が信じられなくて病室から逃げるように早く歩く。

バスに乗ってスマホを開けば自分を心配して送ってくれたメッセージの通知が表示されている。

タップして相手に今向かっている事を連絡すると、すぐに既読が着いて返信が返ってきた。

『本当に大丈夫なの？』

「もう、心配性だなあ……」

「大丈夫だよ！」と送って可愛らしい猫のスタンプを送れば『そう、無理だけはないで』と返ってきたのを確認してスマホの画面を閉じる。

バスの窓から見える街並みや風景が少しずつ変わっていくのをポーツとしながら見ていく。

ここ数年でここは変わってしまった。

駄菓子屋さんは無くなり、小さなお店はスーパーへと変わった。

小さな公園は大きな公園へと変わり、少し前まで遊びに来ていた記憶がすごく昔に感じる。

あの公園にあったブランコ、よくあの子と一緒に遊んだり公園内を駆け回ったりしてお母さんに怒られたっけ。

泥だらけになって帰った日は2人でこっぴどく怒られた記憶も鮮明に覚えてい
る。

水鉄砲で狙いあってお父さんの顔や服をびしょびしょにした事もあった。

『次はー、羽丘駅。羽丘駅です』

降りる準備をして下車をするためにボタンを押す。

ICカードを出口でかざしてバスを降りれば見慣れた景色が広がっていて、時間を確認すれば既に15時を過ぎていた。

ここからライブハウスは遠くないけど、すでに練習は始まってしまっている。

重い荷物達を背負い直して、ライブハウスに向かうために商店街を通り抜けて通

学路を歩く。

少しすればライブハウスが見えて、中に入れば受付をしている月島まりなさんの姿。

こっちに気付いてくれて笑顔で案内してくれる。

「こんにちは、今日もいつもの3番でやってるよ」

「ありがとうございます！」

「頑張ってるね！」

「はい！」

教えて貰った通りに3番の部屋に入れば、丁度1曲終わった所なのかそれとも始まる所だったのか静かなスタジオ。

ささっと中に入って荷物を置き、すぐに準備を始める。

遅れるって連絡はしていたから何も言われない、今日だけはちょっと有難いかな。

「ごめんね、遅れて」

「大丈夫よ、今日は仕方ないわ」

「ええ、事前に連絡を頂いてますから。ですが、極力避けてください」

「あはは、うん。気を付けるよ」

「準備は終わったかしら？」

「終わったよー！」

幼馴染である友希那以外は今日遅れた理由を知らない、だから普段通りに振る舞う。

返事を返すと、こくんと頷くと友希那は後ろを振り返る。

妹であるアキが昏睡状態に入ってから2年。長い長い悪夢のような日々が続いてる。

本当はバンドをやっているのかなって悩む事がある、あの子が好きだった楽器を自分が演奏して楽しんでもいいのだろうか。

「あこ、お願い」

「はい、友希那さん！」

「リサ」

「……ん？」

名前を呼ばれて顔を向けると、軽く肩を叩かれる。

驚いて友希那に目を向ければ優しく微笑んで口を開いた。

「あの子なら大丈夫よ」

「……うん」

カウントが0になり、意識を切り替えて自分の手で握る深紅のベースに触れて弦を指で弾き、低い音を掻き鳴らした。

2年前から眠り続けている、ここにはいないアタシの双子の妹に届くように。

——今日であの子が眠ってから、そしてアタシの長い長い夜が始まって丁度2年が経った。

今回はプロローグ的なもので、次回からRoseliaが結成して少し経ってからという形です。

それでは、また次回も宜しくお願いします。

時間は止まったまま

こっちは少し短めに投稿予定です。

それではどうぞ。

バンド練習後、メンバー全員が揃って友希那と紗夜から話があると言われて訪れたファミレス。

とりあえず、ドリンクバーだけ頼んで友希那と紗夜が座る向かい側にアタシと隣子、あこと座る。

そして言われた内容はこのバンド、Roseliaを組んだ理由である、Future World FeS 通称《FWF》を目指すという目標だった。

アタシは前から友希那の話を聞いていた事と友希那のお父さんの件もあって知ってはいたけど、隣子とあこの2人は全く知らなかったみたい。

幅広い年代から人気であり、尚且つ世界で名を轟かせるほどの技術を持つバンドだけが出る世界一の音楽フェス。

友希那がバンドメンバーを探していた理由の一つでもあった目標が遂にメンバー全員に発表された。

発表後、アタシ達が昨日初めて披露したライブは大成功で終わったと思う。

ライブの余韻に浸りながらも疲れた体でベッドに勢い良く倒れながら寝たのを思い出しながら、鳴り響くアラームを止めて醒めない眠気を何とか飛ばしてベッドから起き上がる。

カーテンを開けて背伸びをし、一息つく。

「……………んー、はぁ……………」

軽く乱れていたパジャマや髪の毛を治して、廊下に出て階段に向かおうとしてすぐに視界の端に映る扉。

扉にかかっている名前のボードを見て、視界が滲むように歪む。

「アキ、おはよ☆」

『お姉ちゃん、おはよ〜』

そんな会話が2年前まで当たり前だった。

ふにゃつと笑いながら眠気が醒めずに目を擦するあの子の姿が、今すぐにも目の前の扉から出て来そうなのに出てこない。

時間はまだ余裕だから少しだけなら良いかな。

アタシは涙を拭いて《アキ》と書かれた部屋に入る。

ママにもアキが戻ってくるまでアタシが掃除するって伝えてあるし、入る事自体は問題ない。

中に入ると閉められたカーテンから溢れた太陽の光が、部屋に差し込んでいて明るく照らされている。

アタシとは反対的に青系統が好きだったアキは、大体のものを青か白で統一して

いた。

机の椅子にかけられた帽子やハンガーにかけられたパーカー。それに大好きなスケボー。

性格は似ていたけど好みは綺麗に反対だったアキは、アタシと違ってストリート系ファッションを好んだ。

それもあって、偶にお互いの服とかを借りてたりもしたな。

その一角にある一つの楽器に目が行き、アタシはそつと優しく触れる。

弦はしっかり張られていてボディも傷一つない、友希那のお父さんが月1で見に来てくれてるみたい。

アタシの深紅のベースと対になるような群青のベース。

塵一つないその色は、楽器は違うけど青色のギターを弾いている紗夜を見るとあの子を思い出す。

『お姉ちゃん、セッションする？』

「いいね、しょっか！」

『ふふん、私このフレーズ弾けるようになったんだ』

「うそ、マジ!? アタシに教えてー！」

『どうしょっかな〜って、うそそうそ！教えるから拗ねないで！』

アタシがベースを選んだのは、友希那と友希那のお父さんと一緒に弾きたかったのもあるけど、アキがお揃いにしよって言ったから。

アタシもアキとお揃いは嬉しかったし、2人で同じ楽器って何か簡単に出来そうじゃない特別感があったからすぐ了承した。

今となっては少しだけベースを触れると辛いけど、あの子に教えて貰った技術があるお陰で、今 Rosealia のベーシストとして立っていられるから良かったと思う。

「リサー？そろそろ準備しないと遅くなるわよー？」

「はい、今行く！」

最後にひと撫でして群青色のベースから離れ、アタシは扉を閉める。

階段を降りれば、ママがご飯をテーブルに乗せていてくれてすぐに仕事に行こうと準備していた。

「リサ、ごめんね。今日も何時に帰って来れるか分からないの……」

「大丈夫だって☆アタシの事は気にしなくていいよ！」

「……ごめんなさい、本当に。昔から貴方にはお姉ちゃんだからって我慢させてばかりね」

ママは苦笑しながらアタシの頭をポンポンと撫でる。

そんな事ないよ、昔は確かに寂しかったけどアキがいてくれてし友希那もいるから大丈夫なのに。

けど、そのアキはここにはいない。

「……リサ、アキの事お願いね」

「……うん、今日も行ってくるから大丈夫だよ」

「ありがとう、今年こそ一緒に誕生日をお祝いしましょ？」

「…そうだね！」

今年こそ、あの子が起きてくれる事を家族全員が祈ってる。

パパだって喜ばせるために、アキとアタシのために頑張って色々計画してくれてるみたいだもん。

ママも今年は休みをとるって張り切ってる。

アタシもバイトしてるし、アキにプレゼント用意しようかな。

「それじゃあ行ってくるわね」

「行ってらっしゃい！」

ママを送りだして用意してくれていた朝食を食べる。

テレビを付けて天気予報や新しいニュースなどを見ながら、ちゃちゃっと食べ盛り「ご馳走様でした」と手を合せて言ってから食器を流しに片付ける。

帰ってきたら洗い物しちやおうかな。あ、でも今日はバンド練習があるから急いで準備して片付けよ。

歯を磨いて髪の毛を治して結びメイクをして、制服に着替えてからいつものピア

スを付ける。

それから食器を洗って乾燥機にいれて、時間を確認すれば7時半頃。

普段出てる時間は7時40分頃だから、普段よりも少しだけ余裕を持って準備を済ませれた。

「……アタシも、そろそろ行こっかな」

家が静かなのなんて昔からだから慣れてるのに、一人でいる事だけは慣れない。ママがいつも以上に優しくしてくれたから余計にそう感じるのかもしれないけど。

鞆とベースを背負って、最後に身支度を整えてから玄関でローファーを履く。鏡で自分の顔を見てパンッと軽く叩いて、いつものアタシにスイッチを切り替える。

笑わなきゃ、あの子が戻ってくる日までアタシは笑って過ごさなきゃ。

「…行ってきます」

扉を開けて誰もいない家にそう告げて、アタシは鍵を閉める。

隣に住む友希那の家の前に行くとき既に準備が終わっていたのか本を読んで待っていた。

あれ、今日は速い。それともアタシが遅かった？

「ゆーきな、おはよ☆」

「おはよう、リサ。……貴方」

「大丈夫だって、ね？」

「……そう」

多分、アタシが泣いた事に気付いたんだろう。ほんと、変な所鋭いから隠すのが大変だよ……。

メイクで隠したはずなのに、友希那の前じゃ何にも隠せてないように感じる。

「リサ」

「ん？」

「今日も行くのよね？」

「……うん、だからバンド練習は遅れる……かな」

「大丈夫よ、私も今日行くこうと思ってたから」

「え、そうなの？」

これは驚いた。

確かに友希那も結構な頻度でアキに会いに行ってくれてるけど、バンド練習を遅れてまで来てくれるなんて思わなかった。

アタシが驚いた事に不満を感じたのか、友希那はプイッとアタシから顔を逸らしてしまった。

「……幼馴染なんだから、会いに行くのは当たり前でしょ」

「……うん、そうだね。ありがとう」

「感謝されるような事じゃないわ。……私も、最近行けてなかったから」

「……友希那」

それから暫くは沈黙が続いた、けどアタシも友希那も無理に会話しなければ居た堪れないような関係ではなかったから嫌な沈黙ではなかった。

下駄箱で友希那と別れて『2・A』と書かれた教室に入れば友達が挨拶してくれる。

アタシも挨拶を返しつつ、席に座ると前に座っていた日菜がクルンツと振り返って笑顔を向けてきた。

「おはよ、リサちー！」

「日菜、おはよ☆朝から元気だね〜」

「まあね〜。あ、おねーちゃんとバンド一緒に組んだんだって？」

「ん？おねーちゃん？」

日菜ってお姉さんいたんだ。

てか、アタシ日菜のお姉さんに会ったことくない？
あ、もしかして。

「おねーちゃんって紗夜？」

「そうそう、あたしの双子のおねーちゃん」

「へえ、日菜って双子だったんだ」

「うん！リサちーは兄妹いる？」

日菜の何気ない質問にアタシは思わず固まる。

そんなアタシを見て違和感を感じたのか、眉を少しだけ下げて困ったような表情を浮かべてしまった。

別に本当の事を話すだけだし大丈夫だよ、きつと。

「いるよ、アタシも日菜と同じ双子なんだ」

「え、そうなの!？」

「うん、アタシは紗夜と同じ長女☆」

「やっぱり!おねーちゃんと同じで、るん♪ってするから納得だよ」

「る、るん…?」

お姉ちゃんって感じがするって事でいいのかな?

日菜のこの不思議な言葉は、昨年から同じクラスだけど相変わらず良く分からないや。

でも、お姉ちゃんって感じがアタシからもするんだ。巴とかの方がお姉ちゃんって感じがすると思っただけ。

「だってリサちー、後輩ちゃん達にリサ姉って呼ばれてるでしょー？」

「あー、確かに言われるな〜」

「それがるん♪ってするんだよ」

「……ごめん、よく分からないかな」

「えー」なんて日菜はアタシに言うと、HRが始まるチャイムと共にいいタイミン
グで先生が教室に入ってきた。

アタシの席からすぐに空いていた窓から見える桜の木はいつの間にか桜の花が散り、緑色に染まった。

『お姉ちゃん、桜が綺麗だね！私、桜が一番好きなんだ』

「……桜、今年も綺麗だったよ。アキ」

小さく、そっと囁いた言葉は吹いた風に消された。

今日もアタシの時間は止まったまま、太陽はまるで意地悪するかのようになんて顔で昇って世界はアタシを置いて動いていく。

アキのプロフィールを少しだけ載せておきます。

・今井アキ

誕生日…8月25日

趣味…スケートボード、ベース

服装…ストリート系ファッション

好きな色…青系統が特に好き。

性格…リサと似ている、詳しくは本編。

《備考》

リサと2人きりの時はお姉ちゃん呼び、それ以外は呼び捨て。

傍にいない

日菜ちゃんと友希那の話し方がイマイチ分からない(難題)
それではどうぞ。

午前中の授業が終わり、太陽が真上に来た頃。

教科書類を片付け、いつものようにお昼を食べようとすると何処かキラキラした
目を向けてくる日菜。

えーっと、アタシのお弁当の中身に何か期待してる？

「日菜？どうしたの？」

「あのね、朝からずーっとリサちゃんの妹ちゃんの事が気になってさ」

「へ、へえ……」

絶対、今の笑顔引き攣ってる。

もしかしたらと一応考えてはいたものの、実際にこうなると少し困る。

アキの現状を知っているのはアタシと友希那はもちろん、家族と一部の人しか知らない。

日菜にアキの存在を教えた時点で、同じ双子って事で色々質問させられそうだとは予想していたけど……。

「リサちゃんの妹ちゃんの事教えてくれない？何か、るん♪ってする気がするんだ！」

「いやー、るん♪とはしないとと思うよー……？」

「えー、そうかなあ。でも、リサちーの他に今井ってこの学年にいないし他校？」

「…そうだよ」

違う、本当は同じ羽丘に進学するはずだった。

元々あの子は頭が良かったから特に困ることも無く『ネクタイじゃないと嫌だ！リボンなんて付けない！』って言って羽丘を第一志望にした。

アタシは中学から羽丘だったけど地元の中学校に通っていたアキが来るって聞いて今までで一番喜んだ気がする。

友希那も滅多に笑わなかったのに笑ってたんだ、いつものように『そう。』って軽く流すように言いつつも結構気にしてたしね。

「どんな子どんな子！教えてリサちー！」

「どんな子…かあ……」

どうしよう。

いや、話す分には良いんだけど変に鋭い日菜の事だ。アキの現状をバレてしまってもいけない。逆に全く疑われないってことも考えられるんだけど。

アタシ自身は後者である事を願いたい、あの日の事に触れなければ多分大丈夫だよね。

「性格というか考え方は、アタシに少しだけ似てたかな。他人優先で自分の事は後回しで結構アクティブな感じで服とかはストリート系が好きだよ」

アキの事を思い出しながら口にする。

スケートボードにハマってた時、どれだけ危ないってアタシや友希那が注意しても、いつものふにゃつとした笑顔で階段の手すりを難なく滑ったり、技も何個か決めた。

見てるこっちがひやひやして、叫びそうになった回数なんて数えられないくらい。

運動が好きで中学の部活はバスケットボールに所属して、大好きなパン屋さんで知り合った子と一緒にバンドを組んでベース担当をしてたっけ。

いつもは隣でふにゃつとしてるのに、ベースやバスケットボールを握ったら人が変わったかのように格好良くてアタシはいつも見惚れてた。

人の前に立つのが苦手で人見知りだけど、困ってる人がいたらほっとけなくて、自分で決めた事には真剣で人の中心に立つよりも影で支える事が得意。

でも、人付き合いは少しだけ苦手。アキはそんな子だった。

「へえ、リサちーもアクティブだね。ダンス部とテニス部掛け持ちしてるし」

「そう？あの子はバスケット部だから尚更だけどね」

「バスケット部かぁー、凄いな。……リサちーは妹ちゃんの事好き？」

家や親しい人の前以外は呼び捨てだけど、2人っきりの時だけ『お姉ちゃん』っ

て呼んでくる不器用な子。

喧嘩なんて数えられるくらいしかしたことが無いし、アタシが散々振り回しても嫌な顔せずに合わせてくれるあの子の方が姉らしいけど、好きか嫌いかって聞かれたら即答できる。

「もちろん、大好きだよ。たった一人の妹だしね☆」

「……そっか！ やっぱり、るん♪ っしてたから今度妹ちゃんに会わせてねー！」

「あはは、今度ね☆」

日菜の表情が少しだけ暗くなったのに気付いたけど、アタシが簡単に触れていいものではない気がしたから敢えて触れなかった。

アタシだって隠してるんだ、日菜の隠し事を無理やり聞き出すなんて出来ない。それからはたわいもない話をしながら、ご飯を食べて午後の授業を受けた。

長かった6時間が終わり、アタシはなるべく急いで帰る仕度を整える。

バンド練習もあるし、その前に病院に行かなきゃ。

日菜に別れを告げて廊下に出ると丁度友希那が出てきた所なのか偶然にもタイミングが重なった。

「リサ、丁度良かったみたいね」

「だね☆行く前にショッピングモール寄ってもいい？」

「良いわよ、アキに何か買って行こうと私も思っていたから」

友希那の了承も得られたし、早く行こう。

下駄箱で上履きからローファーに履き替え、羽丘駅近くにあるショッピングモールへと向かう。

下校時刻と重なってるからか中高校生や親子連れの姿が多い。

ショッピングモールに着いてふと横を見ると、そこにはアキが大好きなアーティストさんのアルバム予約が始まった事を知らせるポスター。

アタシも詳しくは知らないけど、次のライブが最後に芸能活動から引退してしまいうらしい。

アキが知ったら絶対泣くだろうな……。

「リサ？どうかしたの？」

「あのポスター、アキが好きなアーティストさんなんだけど次のライブが最後に引退しちゃうんだって」

「そう……、じゃああのアルバムは最後のアルバムって事かしら？」

「多分そうだと思う、アキ絶対悲しむだろうな……。この人に憧れてたから」

アタシがそう言うと、横にいた友希那が真っ直ぐにそのポスターが貼られてるCDショップへと歩いていく。

そして、何の戸惑いもなく予約用紙を手に取るとアタシの方に振り返った。

「これ、そのライブのチケット申込用紙まで入ってるのね。先行チケットはネット応募みたいよ」

「あー、この前パソコンにメール来てたからあれが先行チケット応募のお知らせメールだったのか」

「……もし、もし当たったらアキは喜んでくれるかしら？」

「それは、まあ喜ぶと思うよ？」

「買ってくるわ」

「え、ちょ、友希那!？」

買ってくるって、それ初回限定盤で特典が付くし最後のアルバムだからかライブ映像とMV付きだから高い奴だって！

アタシは急いで友希那の手を掴むけど、何故か不機嫌な様子。

え、えーっと…？

「リサ、私はこれを予約しに行くの。邪魔しないで頂戴」

「でも、それ初回限定盤だから普通のアルバムより高いよ。アタシが買うって」

「高いって、そこまで高くないでしょう？」

いやいや、それが結構いい値段するよ？

2年前までアキがCD買って良く『好きだけどお財布がピンチだー！でも買うよー！』って叫んでた。

買ってからは毎日その曲がアキの部屋に流れるからアタシも覚えちゃったし、アタシ自身もこの人の声とか歌詞が好きなんだよねー。

特にデビュー曲の《モノクロームオーバードライブ》は好きでカラオケで良く歌う。

流石に『大好きだー！』ってアキみたいに叫んだりはしないけど。

初回限定盤は色々特典が付くし、今までの全楽曲を入れたアルバムなら5000円以上するはずだ。バイトしてるアタシならまだ平気だけど友希那はバイトしてない。

値段を見て友希那は想像以上だったのか驚いて固まってる。

ほらー、だからアタシが買うって言ったのに。

「……アルバムってこんなに高かったかしら？」

「引退最後のアルバムだから特典とか付くんだと思うよ？それに初回限定盤だし新曲入ってるみたいだよ」

「……リサ、半分お願い」

「……折れないね、友希那も」

結局、2人で割り勘して初回限定盤のアルバムを予約した。

アキ、良くこの値段の物をいつも買えたね……。

チケットの応募用紙も無事アルバム受取時にゲット出来る事も確認出来たし、アタシ達は急いでショッピングモールに来た本来の目的を果たしてバスに乗った。

有難い事に道は空いていたし、途中で下車するお客さんがあまり居なくて思いの外すぐに病院に付いた。

今ではもう顔見知りになった事務の人に受付で手続きをしてもらって、エレベー

ターに乗って歩き慣れた廊下を真っ直ぐ歩く。

《今井アキ様》のネームプレートを見てから扉を開けて、アタシと友希那はカーテンを開ける。

そこには変わらず寝ているアキ。

隣で友希那が息を呑んだのが分かった。

アタシは持ってきた花を変えようとした時、アタシが前に持ってきた花と違う花が飾られていた事に気づく。

あの子達が来てくれたのかな…？でも、今でもドラムの子はアキの現状を知らないんだっけ。

バンド続けてくれてるといいなー、ライブとかで会えたらアタシから礼を言っとかないと。

「……久しぶりね、アキ。なかなか来れなくてごめんさい」

「アキ、友希那が来てくれたよー？あとね、アキが好きなアーティストさん引退

しちゃうんだって」

「起きないと最後のライブ行けないわよ？」

「ホントだよー、代わりにお姉ちゃん達が行っちゃうよ？」

病室に無機質な音だけが響く。

アタシは思わず泣きそうになるのを堪えてると、友希那がアキの長くなった赤茶色の髪を撫でながら普段より優しく呟いた。

「……今度来る時に『ライブ行く！』って元気な返事が聞けるのを待ってるわ」

「…友希那」

「リサ、そろそろ行きましょ。アキ、また来るわ」

「ごめんね、またゆっくり来るね」

アタシも友希那と場所を変わって頭をゆっくり撫でながら思い出す。

今も残ってるアキが好きなアーティストさんに送るはずだったプレゼントと手紙。

アキが何日も迷って買ったプレゼントは後は出すだけの状態が机の上で2年続いている。

本当はママが代わりに送るかって話になったけど、パパが止めてた。

『アキが送らなきゃ、その人に伝わらないよ』って。

「……またね、アキ」

ゆっくりと頭から手を離してアタシは椅子に置いていた鞆達を持ち、病室を後にした。

外に出れば春が過ぎたばかりだと言うのに強く照らしてくる太陽。

バスを待っている間でも涼しかった病院と比べて暑い外にいれば汗が出てくる。

「……リサ、切り替えるわよ」

「……うん」

ふうと息を吐いて深呼吸をする。

今日だけで時の流れを感じる事が色々あった、日菜にアキの事を話した時もアタシは過去を思い出して、アキが大好きなアーティストさんは引退する。

空を見れば皮肉にも平然と昇って照らしてくる太陽。

あの子が隣にいない2年目の夏が近付いてきた。

今回出たアーティストさん、誰だか分かりますよね？

本来の月日と少しズレますがお許しください。

それではまた次回も宜しくお願いします！

お気に入り登録&評価ありがとうございます！

The shank of the evening

リサベース買ったぞー！（奇跡）

偶然寄った楽器屋さんでラスト1点だったそうで、速攻買いました。元々ベースは好きだったので嬉しいですね。

それではどうぞ！

ライブハウスに着けば既に練習は始まっていた。

友希那とアタシが中に入ると、あこが元気良く挨拶をしてくれる。

「あ、リサ姉！それに友希那さんも！」

「ごめんなさい、遅れたわ」

「遅れてごめん」

「大丈夫…です…：用事の方は、平気…でしたか…？」

「ええ、問題無いわ」

燐子の質問に友希那がいつも通り答える。

紗夜はと言うと何も言わずにギターのチューニング中で、偶にこっちに視線を向けるだけ。

アタシも早く準備しなきゃ。

それから18時半頃まで全体練習をし、友希那からアドバイスを受けて片付け始める。

これ以上は中学生のあこもいるし、学校もあるからやらない。

受付で友希那と紗夜が次のスタジオ予約と予定について話している中、アタシは入口から外に出て先に外に出た燐子とあこの会話に混ざる。

「あ、リサ姉！」

「ん？あこ、どうした？」

「今…あこちゃんと…お姉さんの話をしてて……」

「お姉ちゃん、超超ちょーカッコイイの！」

「あゝ、確かに巴は男前だ☆」

「でしよでしよ！リサ姉は？お姉ちゃんとか、あこみたいな妹いる？」

その言葉にアタシは開いていた口を閉ざす。

何で普段は全くされないのに、今日だけで同じ質問を2回されるんだろう。神様が言ってるのかな？

アタシがアキをあの日、あの時いつも通り送り出して守れなかったのが悪いんだろって。

どう答えようか迷っていると後ろから聞きなれた声が凜と響く。

「あこ、そういう話はしないで頂戴」

「ゆ、友希那さん…ごめんなさい…」

「……………っ」

アタシは咄嗟にあこから視線を逸らした。

アタシが悪いんだ、ちゃんというって、あこと同じで妹がいるんだって言えばよかったんだ。

それに、今のはどう考えてもあこは悪くない。バンド練習だって終わってるから友希那が怒る必要も無いのに、アタシのせいで止めてくれたんだ。

燐子があこを元気づけてるのが視界の端に映り、紗夜は何か言いたげな顔をしながら溜息をついている。

ごめん、あこ。

アキ、本当にごめん。こんなお姉ちゃんでごめんね。

心の中でひたすら謝っていたら、肩を叩かれる。気付けばアタシと友希那以外は帰っていたようで、友希那が何かを探るように見てくる。

「……リサ、やっぱり」

「…大丈夫大丈夫☆ちょっと考え事してただけだよ！」

「……。」

今の気持ちを友希那にバレそうで、アキをあんな風にさせたのがあの時のアタシのせいだって現実から逃げたくて。

無理やり笑顔を浮かべて、家がある方向に歩を進める。

背負っているベースが普段より重く感じる、家に近づく度に足が重くなっていく。家の目の前で友希那と別れて、アタシは家の鍵を開けて玄関で靴を脱ぎ、リビングへと続く扉を開ける。

誰もいないリビングは暗くて、もう少しで夏が来るといいうのに寒く感じる。多分、独りだからだろう。

「……寒い…なあ」

電気を付けてベースと鞆をソファに起き、その隣にアタシは縮こまって体を温めるように丸くなって座る。

本当は大丈夫なんかじゃない。

今すぐにも泣いて、思いつきり自分の気持ちを吐き出したい。

でも、これはアタシの罰なんだ。アキを助けてあげられなかった、姉として何もしてあげられなかったアタシへの神様からの罰。

あの日、2年前の夏休みにあった商店街のお祭り。

アキがそこで一つ下の子達と組んだバンドの初ライブをするって聞いて、アタシと友希那も見に行つたのをハッキリ覚えてる。

受験生なのになって思ったけど、このライブが終わったらアキはバンド活動を一旦抜けるって言ってたし、元々成績が良かったのと模試の結果が合格に届いていたらママ達も許してた。

そしてライブが始まってすぐ、アタシは違和感に気付いた。

アキが所属しているバンドはボーカル、ギター、ベース、キーボード、最後にドラムの5人組だけどステージに立っているのは4人でドラムの子がいない。

ライブはそのまま4人で始まり、何処か物足りなさを感じながらも会場を盛り上げて無事に終わった。

「友希那、アキが楽屋に来てって言ってたから行かない？」

「そうね」

今朝、ママとパパも仕事だからライブ見に行けないって言われてた時は無理して『大丈夫だよ！』なんて笑ってたけど、アタシと友希那が行くって言ったらすぐに笑顔に戻って『終わったら楽屋に来てね！裏だから！』って飛び出して言ったのを思い出す。

友希那もあまり笑わなくなってたけど、アキの事になると笑ってくれていたからアタシも嬉しい。

友希那とステージ裏に行き、関係者通路を通らせてもらって楽屋の前に着く。

アタシはノックして扉を開けると、そこにはライブが成功で終わった後だと言うのに凄く静か。

「あ、アキ……？」

「……あ……リサ！ 私達のライブ凄かったでしょ？」

アタシが名前を呼ぶまで気付かなかったのか、ハツとして暗かった表情から普段のアキのように話しかけてくる。

友希那もアキの違和感に気づいたようで、アタシは何があったのか聞こうとした時、誰かの携帯の着信音が響き渡る。

あの子は確かボーカルの子だった気がする。

その子が電話に出ると、アキに視線を動かして口を開いた。

「アキさん、大丈夫だったみたいです！」

「っ！良かった……」

そう返すと、ほっとしたような顔をしてすぐに携帯を持って何処かに行こうと準備を始めるアキに頭が追いつかない。

アタシは咄嗟にアキの腕を掴んだ。

「……どこ行くの？」

「リサ、ごめんね。今から病院に行かなきゃ行けないんだ、すぐ戻ってくるから」

「アキ、それはドラムの子が関係あるのかしら？」

「うん、ゆきちゃんもごめんね。わざわざ楽屋まで来てくれたのに」

「大丈夫よ」

何だろう、嫌な予感がする。

アキの背中をすぐ目の前にあるはずなのに、何処か遠くに行ってしまう感じがする。

アタシは理由や根拠なんてないけど双子の感なのか、不安に感じて思わずアキの背中に抱きつく。

「り、リサ？」

「……嫌な予感がするの」

「大丈夫だって、バンドメンバーを迎えに行ってくるだけだから！」

そう笑ってアタシの頭を優しく撫でてくれる。偶にアタシが妹何じゃないかって思うけど、しょうがないよね。

アタシは顔をアキの背中に埋めながら一度頷いて離れた、そしていつものふにやっとした笑顔を浮かべて楽屋を後にしたのが最後だった。

この時のアタシは知らなかったけど、あの時ドラムの子がいなかったのはお母さんが病院に運ばれて、急遽その子は病院に行っていたらしい。

最後の最後まで、その子はライブを投げ出すような形を取ってしまうのが嫌で迷っていたけど、アキの一言が背中を押したんだって。

——後で私も行くから、ここは先輩に任せなさい！って。

その子は長女で、弟や妹がいて幼いからずっと支えていたから甘え方を知らなかった。

そんな時に仲良くなったのがパン屋さんに通っていた一つ上のアキで、姉のように慕っていたとアキのバンドメンバーから聞いた。

だから、病院で今も自分の不安な気持ちを押し殺してるドラムの子の元に行く約束したアキはライブが終わってすぐに向かった。

でも、アタシはあの時何がなんでも止めるべきだった。いや、あの子を一人で行かせなければ良かったんだ。

病院に向かっている途中の信号でアキは事故に遭った、それも相手の居眠り運転。運転手が眠っていた車のスピードは、約50キロを超えていて突然の事だったか

らアキも逃げられるわけがなくて。救急車も近所の人達が呼んでくれたって警察の人が説明してた気がする。

あの時のアタシはアキが事故に遭ったという現実が信じられなくて、ママとパパが警察の人に説明を受けていたけど殆ど聞いていなかった。

嘘だって、夢だって思いたかった。

誰かに言って欲しかった。

でも、アタシに突きつけられたのは全身が包帯だらけで呼吸器を付けてベッドで眠る妹の姿。

一命はギリギリ取り留めたけど頭を強く打っていて、いつ目が覚めるか分からない。

下手したら2度と目覚めないかもしれない。

そう言われてアタシの中の何かが崩れ落ちて変わって、長い長い夜が始まった。でも、変わったのはアタシだけじゃない。

友希那は前より笑わなくなったし、あの日アキが病院で会うはずだったドラムの子は、アキの現状を知らないまま別の理由でバンドを抜けた。

何でもバンドメンバー全員でドラムの子にはアキの現状を教えなくてならない。しい。

アタシが同じ立場でも同じ行動をしていたと思う。だって言えないよ、約束を守るために向かった矢先で事故に遭って昏睡状態です、だなんて。

そう色々と考えていたらあっという間に時間は過ぎていき、気付けば21時回っていた。

ああ、ご飯とか作らなきゃ。ママ達にこれ以上心配かけられない。

「……立たなきゃ」

重たい身体を動かそうとするけど、全く動かない。壊れて錆び付いたロボットのようになんか1ミリを動いてくれない。

もうあれから2年経つ、アタシもそろそろ限界なのかもしれない。

「……っアキ…アキ…！」

止まることを知らないのかと思うほどに溢れてくる涙と何処にもぶつけられない怒りや不安、寂しさが胸いっぱい広がる。

どうしてアキなの？

何でアタシの妹なの？

誰かが教えてくれるわけでもなくて、ただただアタシの時間は止まったまま世界だけが動いていく。

まるで、綺麗な低音を出せなくなった壊れたベースのようにアタシはノイズ音だけを奏でてるんだ。

ほら、今日もあの子がいない夜がやってくる。

そろそろリサ姉を笑わせてあげたい（真顔）

番外編で幸せなりサ姉の様子でも書こうかな。
それではまた次回も宜しくお願ひします！

Second hand inclined

感想とお気に入りに登録、そして評価と沢山の方々から頂きました。ありがとうございます！

それではどうぞ。

今朝、病院から連絡が家に入った。

アキが目を覚ましたのかなって思ったけど一瞬で違うのが分かった、電話に出たママの表情を見れば一目瞭然だったから。

パパも仕事を急遽休みを取り、アタシも本当は学校に行かなきゃいけなかったけど、パパが今日は休んでいいって言ってくれたからアタシは制服のまま車に乗っている。

2年という長い月日。

本当ならここまで長い時間昏睡状態が続いてるのに、医者から何も言われないはずがない。

アタシは当時15歳だったし、ショックを受けて倒れかけたから詳しくは教えて貰っていないけど、意識が回復する見込みはあるけど、いつ目覚めるか分からない。そして、後遺症が残る可能性の方が高い。

ママとパパも入院費よりもアキの方が大切だって言って主治医さんをお願いして2年間ずっと入院させてくれてる。

けど、アキの身体は2年前からすっかり変わって痩せ細くなって見てるだけで辛い。

もしかして、ある程度の覚悟はした方がいいのかな…？

そんなの嫌だ。あの子がいない世界なんてもう充分過ぎた。

ポーツと窓から見える空や景色に目を向けながら考えていけば、気付けば病院に着いていた。

ママの裾をきゅっと掴みながらアタシは重い足を無理やり動かして歩いていく。

視線の先には主治医の黒崎先生。

「…場所を変えましょう、こちらです」

パパを先頭にママ、アタシと続いて先生の後ろを歩いて進むと何処かの相談室のような部屋に案内される。

正面に先生がいて奥から順に座ってアタシは顔をあげられない。

「……先生、話というのは？」

「……はい、アキさんは2年間昏睡状態が続いています。私が先程診ましたが脳死ではありません。ですが……」

ママとパパが息を飲んだのが分かる。

やめて、何も言わないで。

アタシは知りたくない。

目を瞑って、先生の声が聞こえないように胸内で呟いていても聞こえてしまう。時に聴力って残酷で理不尽な器官だ、聞きたい言葉や音は聞けないのに聞きたくない音や言葉はすんなりと耳に入ってくるんだから。

「——時間は……あまり無いかもしれません」

あれから先生の話聞いた後、家に戻ってアタシは自室にこもった。

スタンドに置いてあるベースに触れる気も起きなくて。でも、何もしないで独りであるより何かをしていた方が楽かもしれない、そう思って今日は練習に参加するって伝えちゃったから準備をしなきゃいけない。

ベースに触れようと近づけた手が微かに震えてる。

アタシは下唇を噛んで、顔を伏せながら殆ど投げやりのようにベースをケースへと入れて準備しては必要なものを持って部屋を出る。

ママとパパは2人でリビングで話しているようで、アタシは階段を降りてリビングに顔を出せば2人は心配させまいと無理に笑顔を向けてくれる。

「……バンド練習してくるね」

「…分かったわ、気を付けてね」

「…友希那ちゃんにも宜しくな」

「……うん、行ってきます」

扉を閉めてCircleに向かうけど、足はいつもの何倍も重たくて正直立ち止まりたい。

でも、外ではいつものアタシでいなきゃ。これ以上誰かに心配かけたくない。

その一心で歩いていれば、下校途中だったのか正面からバイト先と学校どちらも後輩であるモカとバイト先で聞いたバンドメンバーであり、幼馴染である5人で歩いて向かってくるのが見える。

挨拶しないとね、個人的に関わってる人もいるし。

アタシがいつものアタシに改めて切り替えようとした時、アタシに気付いたモカがいつものふにゃつとした緩い笑顔を浮かべて手を振ってくれる。

その笑顔があの子の笑顔にそっくりで、アタシは思わず固まる。

「リサさーん？」

「……あ……モカ、偶然だね〜！」

モカの言葉にハツとして、いつも通りに手を振りながら装う。

でも、きつと装ってるだなんて誰も気付かない。モカ達の目の前にいるのは、いつもと同じように笑顔で手を振るアタシ。

「……リサさん、どうしてそんな顔してるんですか？」

「何言ってるのさ、急にどうしたの？」

辞めて、そんな顔してアタシを見ないで。

アタシを見るモカの目が、何かを決心したような目でアタシを見つめる。

そんなやり取りをしていたらモカの隣から別の声で呼ばれる。

「あの、リサさん。どうしてそんな怖い顔してるんですか…？」

「……巴まで何言ってるの、先輩をいじめたらダメだぞ？」

「……ともちーん、リサさんと同じバンドに妹ちゃんがいるって言ってたよね？」

「ああ、あこはリサさんと同じだ」

モカが巴に何かを言っているけど、アタシには上手く聞こえない。

てか、そろそろ行かないと練習に遅れちゃう。モカ達の様子を見るに、楽器を持ってからCircleに行く途中だと思おうし一緒に行こうって誘ってみようかな。

「ねえ、モカ？アタシ、バンド練習あるからそろそろ行きたいんだけど……」

「リサさん、今日はバンド練習行っちゃダメです」

「……え？」

「ともちゃんと蘭、ひーちゃんはCircleで、つぐはお店借りてもいい？」

「おう、こっちはあたし達に任せな！」

「うん。ほら、ひまり行くよ」

「え!? ちょっと皆!? どういう事!?!」

「良いから、ひまりも来て。モカ、後でそっち行く」

「はい」

テンパったまま、ひまりと呼ばれた子は赤メッシュを入れてる蘭って子に連れて行かれてしまった。

アタシは何が起きてるのか分からず、モカに説明を求めようと視線を向けるとすぐ腕を掴まれる。

ど、どういう事…!?!

「お店は全然大丈夫だよ!あと、この時間ならいつもの席も空いてると思う!」

「おー、それじゃあれっつごー」

「ま、待って！説明してよ、モカ！」

「……今井アキさん」

「……え」

突然、前を向いていたモカが立ち止まって普段のゆっくりとしたのんびりな口調ではなく、真剣そうな口調でアキの名前を呼びながらアタシの目を見てくる。

その目はさっきと同じ何かを決心した目だけど、何処か寂しさと悲しさを含んでると思う。

それよりも、どうしてアキの名前を…？

今朝の事があったのと、モカ的笑顔がアキ的笑顔と重なって無理やり維持してい

た心が崩れかけてもう倒れかけてる。

「……アキを…知ってるの…?」

「……はい、ずっと聞こうか悩んでたんです。アキさんから双子のお姉さんがいるとは聞いてたんですけど、学校で見かけた時は最初はアキさんかなって思ったんです」

「……………」

「……2年前からアキさんと連絡取れなくなって、いつも通ってたパン屋さんに行ってもアキさんいなくて。それで、初めてリサさんと顔を合わせて話をした時に『この人がアキさんのお姉さんなんだ』って」

「……モカちゃん」

「リサさんの優しい雰囲気も、あたしに声掛けてくれる時も全部アキさんとそっくりで。でも、リサさんの方が分かりやすいんだなって思いました」

「……分かりやすい……？」

確か生徒会で、何度か話した事があるつぐみちゃんもモカを心配そうに名前を呼ぶと、モカは平気と言うように首を振ってる。

アタシの手を引きながら、前を歩くモカは優しく微笑んだ。

まるで、アキが『大丈夫だよ』って言ってる時のような優しい笑顔。

「アキさんって隠すのが本当に上手いんですよ。リサさんも上手いんで『やっぱり双子なんだな』って普段は思ってた本当に全く分からないんですけど、さっきのは分かりました」

「……モカ」

「リサさん、今日はモカちゃんと……Afterglowと少しだけお話しませんか？」

「……その、リサ先輩も誰かに頼ってもいいと思いますよ……！」

「……モカ、つぐみちゃん」

2人の優しさが心に染みて、ピンっと張っていた糸が切れるようにアタシは泣き崩れた。

モカとつぐみちゃんが咄嗟に支えてくれたから縋り付くようになってしまったけど、今だけは許して欲しい。

「……アキ……アキ……！」

アタシがどれだけ強くブレザーを握りしめても、2人はずっと嫌な顔も文句も言わずにずっと背中を摩ってくれる。

その優しさが更にアタシの涙腺が緩んで、止めどなく涙が溢れてた。

アタシが落ち着いたのを確認してから、モカはアタシの腕を掴んで、つぐみちゃんのお親がやってる羽沢喫茶店へと歩いてく。

ただただ、その引っ張られる方向に歩いていくと前を歩いていたモカが止まった。

「リサさん、ここでーす」

「えっと……お邪魔します……?」

「リサ先輩、うちは喫茶店なので普通に入ってもらって大丈夫ですよ?」

「…あ、そっか」

つぐみちゃんに、モカ達が来ると必ず座るといふ奥の席を案内してもらった。アタシが座ってもいいのかなって思ったら、モカがここって決めていたらしい。多分、さっき来る前にしてた会話だよね。

「飲み物どうしますか？」

「アタシはカフェオレにしようかな」

「モカちゃんはカフェモカで」

「分かりました、少しお待ちください！」

つぐみちゃんがそう言って厨房へと走っていった。

それからすぐ、つぐみちゃんが戻ってきて頼んだ飲み物を乾ききった口に含む。

美味しい、もっと早くここを知りたかったな。なんてアタシが思っているとモカに名前を呼ばれた。

「リサさん、リサさんはアキさんの双子のお姉さんなんですよね？」

「うん、そうだよ。ずっと隠しててごめん」

「謝らないでくださいよー、何もリサさんは悪くないんですから。」

「……あはは。それにしても、モカとアキに関わりがあったんだね。アタシ知らなかったよ」

「モカちゃんはパン友ですよ、と言っても今のあたし達があるのはアキさんのお陰なんですけどね」

苦笑しながら「ねー、つぐー？」とモカが言うと、つぐみちゃんは頷いた。

あれ、モカだけじゃなくてつぐみちゃんも関わりがあるの？

アタシの考えを察したのか、モカがカフェモカが入ってるカップを覗きながら口を開いた。

「あたし達がバンド組んでるのは知ってますよね？」

「うん、バイトで話は聞いてるから少しなら」

「その時にバンドを組むきっかけを話したじゃないですか、それでバンドを組んだら？って言うてくれたのがアキさんなんです」

確か、赤メッシュを入れてた子とモカ達が中学の時にクラスが離れてバラバラになりかけたんだっただよね。

それで、皆との共通の居場所として作ったのがバンドだって聞いてたけど、それ

を提案したのがアキだったのは初耳だ。

「楽器を教えてくれたのもアキさんで、ホント何から何まで頼りきっちゃってたんですけど、2年前の夏が最後でぱったりと連絡が途絶えちゃったんです」

「……っ」

脳裏に映るのは楽屋から笑顔で飛び出して行った後ろ姿と今も病院のベッドの上で眠るあの子の姿。

本当はモカ達にも伝えない方がいいのかもしれない、けどアキの事を大切に思ってくれてるんだって伝わったから。

それに、アキだって友達に会いたいはずだ。それなら姉として出来る事をなるべくしてあげたい。

でも、今朝の事だけは黙っておくのは許して欲しい。きっと、モカ達に今朝の事まで伝えたらひとたまりもないはずだから。

アタシは、ふうーと深呼吸をしてギュッと手に力を込める。

大丈夫、アタシが怖がってどうするの。

「……今のアキを知りたい……？」

「はい」

「もちろんです……！」

2人の返事を聞いて、アタシが口をもう一度開こうとした時後ろからカラコンロンと音が響く。

視線を向ければ、そこにはCircleに行っていた巴と蘭ちゃん、ひまりちゃん
の姿。

「あたし達も知りたいです、リサさん！」

「あたしも。アキさんにはお世話になったから」

「私もです！」

「……分かった、じゃあ行こっか」

「リサさん……？ 行くなって何処に……？」

カフェオレを飲みほして、座った時に下ろしたベースを背負い直すとモカ達が状況が読めずに固まっている。

そんな目の前で驚いてるモカの表情を見て、アタシは苦笑しながらもう今日は行かないと思っていた場所の名前を発した。

「羽丘総合病院に、ね」

いつもと同じ、あの子がいない白黒な時間が続くと思っていた。
今日もあの子は隣にいない、でもいつもと少しだけ違った。

おまけ*Circleにて。

巴「あこ！」

あこ「あ、お姉ちゃん！どうしたの？」

巴「今日、リサさん少し借りてもいいか？」

あこ「リサ姉を？うん、あこから友希那さんに伝えとくね！」

友希那「あこ、どうしたの？リサが遅いようだけど」

あこ「友希那さん、リサ姉はお姉ちゃん達が借りるそうです！」

友希那「………どういふ事かしら、うちのベシストに何か用でも？」

蘭「ちょっと、そんな言い方ないでしょ」

友希那「貴方……後輩ね？」

蘭「だったら何ですか？リサさんを1日借りるだけで怒るような先輩」

友希那・蘭「……………。(ムカつく(わね))」

ひまり「何でこうなるのー！」

？

AfterglowとRoseliaのいざごきは、ここから始まっていたり……

次回も宜しくお願ひします！

The day the sound disappeared

ここ数日で沢山の声優さんが……。

明坂さん心配ですね、私も突発性難聴になった経験があるので大変な思いをしました…。

今は大丈夫そうでした。

それではどうぞ。

病院に来るまでの間に自己紹介を済ませ、アタシは閉ざされたカーテンを開けて中が見えるようにすれば、アタシの隣に立っていたAftergrowの皆が息を飲んだ。

ピッピッとアキが生きてる事を示す医療機器の音と、点滴が一定に落ちていく音だけが病室に広がる。

「……2年前の商店街のお祭りです。ライブした後、事故に遭ったんだ。それからはずっと……」

「……アキ……さん……」

アタシの言葉に、つぐみとひまりが涙を浮かべて巴が2人を辛そうにしながらも支えている。

モカがアキの名前を呼びながら恐る恐る手を伸ばして、アキの細くなった手に触れるけど、その手は微かに震えてた。

アタシも、アキに触れようとした時はいつも何か怖くなって震えたんだよね。そんなモカを見てから蘭は顔を伏せて、両手に力を込めながら口を開いた。

「ねえ、笑ってよ……いつもみたいに、ふにやって笑って『もう冗談だって〜!』って言ってよ……。アキさん……!」

蘭の悲痛な叫びが引き金となったのか、Afterglowの皆が泣き崩れた。

アタシは何も言えず、ただただ皆の背中を見てる事しか出来なかった。

ああ、アタシは知ってるんだ。

モカのようにやせ細った手を触れてもアキから握り返されない、蘭のように何度も声を掛けても返事は返ってこない。

アタシの中でこの子の存在は大きいはずなのに、隣にいない事が当たり前に――

「…………え、アタシ…シ…今…………？」

今、アタシは何を思った…？

まさか、この子が…アキがいない事を当たり前って思ったの？

自分が怖くなり、アタシは口元を手で覆う。

当たり前なわけない、アタシの隣にはいつもこの子がいてその日常が壊れるなん

て有り得なくて。

アタシは変な焦りを感じ、アキから逃げるように一歩ずつ後退りしつつも、頭の中は嫌にはっきりしてくる。

——ああ、アタシはもうとっくに壊れてるんだ。

「……リサさん……？」

「……あ」

名前を呼ばれてアタシは顔を上げると、そこにはアキと似たような雰囲気を持つモカが涙を流しながらも心配そうにアタシを見てくる。

いつも、バイト先でも学校でも何気ない会話の中でモカの笑顔を見て、いつも重ねてた。

あの子もこんな風に笑ってたなーとか、パンが好きで同じような表情をしながら幸せそうに食べて、『お姉ちゃんも食べる？』って聞いて半分個にして食べたっけ。

モカが何かを言おうと口を開いた時、病室の扉をノックされ振り返るとそこには看護師さんの姿。

「すみません、そろそろ面会時間は……」

「…分かりました」

それから誰も何も言わなかった。

ひまりやつぐみの背中を巴が摩りながらバスに揺られ、蘭は心ここにあらずって状態。

モカもブーツとしてて、アタシもスマホを操作してアキとのツーショット写真を撮ってバスに揺られていた。

大して変わらない背丈だったのに中学に入ってから、アキがバスケット部に所属したのもあってか一気に身長伸びて、当時のアタシよりも大きくなってからの写真をスクロールしながら見ていく。

一緒に水族館に行った時の写真、大好きなアーティストさんのライブに行った時の記念写真。

ダンス部の大会で優勝した時に撮った写真やアキのユニフォーム姿を撮った春季大会。

もちろん、友達との写真もあるけど圧倒的に友希那とアキの3人で撮った写真の方が多し。

でも、上に上がれば上がるほどアキとの写真は減っていき、最後の1枚は2年前の夏祭りでのライブで偶然アタシが綺麗に撮れて、本人に送ろうとしていたベースを弾いて真剣な表情をしてるアキ一人の写真。

青空が頭上に広がって太陽の光で赤茶色の髪の毛が光り、握る群青色のベースが輝いてる一枚の写真。

普段の生活では、なかなか見れない真剣な姿。

アタシはこの子を守りたかった、守るって約束したのに。出来ることなら今すぐ変わってあげたい。

羽丘駅についてバスを降り、アタシは自分の帰路に歩いていこうとした時誰かに

腕を掴まれる。

驚いて振り返れば、さっきまで放心状態だったモカに掴まれている。

「…リサさん、今日はありがとうございました」

「…：…ううん、アタシは何もしてないよ」

「…：そんな事ないです、あの、これからもアキさんのお見舞いに行ってもいいですか…？」

「…うん、逆に会いに行っておいてあげて？絶対、アキも喜ぶからさ」

その会話を最後にアタシ達は別れ、お互いの家へと歩を進ませる。

商店街を抜け、1本裏の道に入ってから右に曲がると丁度 Roselia のバンド練習が終わったのか友希那の後ろ姿が視界に入る。

いくら巴達が言ったと言っても、今日行くって言ったのに休んじやっただよね。謝っておこう、他の皆には明日謝らなきゃ。

「…友希那！」

「…リサ、宇田川さんから話は聞いたわ」

「ごめん、練習出るって言ったのに休んじやって…」

「大丈夫よ、次の練習で2倍やってもらおうから」

「うん、分かった」

今朝の事は友希那も知らない。

いつかは、ママから友希那ママには伝わるかもしれないけど今は言うべき事じゃ

ない。

ライブがまた近付いてきてるのに、友希那に心配かけたくない。

それに、アタシがとつくに壊れてしまってるのもバレちゃダメなんだから。

いつものように笑顔を浮かべて、歩いてる友希那の横を歩く。

アタシ達の間流れる沈黙は、決して居心地の悪いものではないからお互い無理して話す必要なんてない。

そう思っていた時、友希那が口を開いた。

「リサ」

「んー？」

「…隠しても無駄だって事を、貴方はそろそろ自覚するべきよ」

「……え？」

「何年一緒にいると思ってるの、伊達にリサとアキの幼馴染をやってないわ」

「…そう、だね。でも大丈夫だから」

「……そういう所、アキにそっくりね」

「…うっ」

アタシは何も言えず、口を閉じた。

アキも確かに隠すの上手いし、自己犠牲が激しい子だったけどアタシはそこまで酷くないと思うんだけどなあ……。

あの子はダメだね、見てるこっちの寿命が縮むもん。

家に着き、アタシは友希那に手を振ろうとした時ふいに友希那の言葉が突き刺さった。

音楽にしか興味が無いって言ってるけど、そんな事ないって思う。

「リサ、貴方は一人じゃないのよ」

「…うん、そうだね。じゃ、また明日ね☆」

「ええ、おやすみなさい」

「うん、おやすみ〜」

手を振りながら友希那が家に入っていくのを確認してから、家の鍵を開けて中に入る。

玄関でローファーを脱ぎ、リビングを覗くと既にキッチンでママがご飯を作っていた。

多分、パパはお風呂掃除かな。

「おかえりなさい、遅かったわね？」

「ごめんね、ちょっと色々あって」

「大丈夫よ。ご飯出来るまで、まだ時間あるけどパパがお風呂掃除してくれてるか
ら先にお風呂入っちゃおう？」

「んー、ちょっと部屋でベースの練習するからお風呂入れるときに呼んで！」

「分かったわ」

リビングの扉を閉めて階段を上がり、自室のドアを開けてベースをスタンドに置
く。

ケースを邪魔にならない場所に掛けて、ベッドにアタシは倒れ込むように乗る。

自分が怖い。アタシにとって、この非日常である2年間の生活が当たり前だと
思い始めてる自分が怖い。

チラッとベースに目を向ければ、そこにはいつも通りスタンドに置かれ、部屋の
証明で照らされてる深紅のベース。

でも、その姿がまるで『あの子からベースを奪ったんだろ?』と言ってるよう
に見えてくる。

部屋の静かさが嫌になってくる。

制服を脱いで部屋着に着替え、自分の部屋から出てなんとなくアキの部屋に入る。
ママに自分の部屋にいらって言ったから呼びに来る前に自分の部屋に戻らなきゃ。

「……アキ」

カーテンで完全に光を遮ってる部屋に、アタシの声が響いて消える。

重い足を引き摺るように歩きながら、スタンドに置かれてる群青色のベースに触
れる。

アタシは何故か勝手にスタンドからベースを取り、ストラップを肩にかけてアキのベッドに座ってベースを構える。

アタシが持つてるベースの色違いってだけなのに、全然違うベースを持つてるよ
うに感じるのは本来の持ち主じゃないからだろうか。

弦に指をかけて弾いてみようと思えば、指にピリツとした刺激が走る。

「痛っ……」

指をベースから離し、見てみると弦で切ったのか血が出ている。

爪がポロポロになるのは慣れてたけど、弦で指を切るなんてベースじゃないと思
ってたアタシは驚いたけど何となく理由が分かって自嘲気味に笑った。

「あはは……持ち主じゃないから、ベースも嫌だったのかな……？」

自分の主は今井リサじゃない。

そう言われた気がして、アタシは群青色のベースから手を離してベッドに置く。アタシは力無くその場にただただ座ってるだけで、部屋には壁に付けられてる時計の秒針が動く音だけが響く。

この場にはいけない、あの子がいない世界を当たり前だなんて思い始めてる最低なアタシがここに居ちゃいけない。

そう思って群青色のベースを元の位置に戻し、自分の部屋に戻って扉を閉めて深紅のベースをスタンドから取りストラップを肩にかけて、シールドを差し込んでアンプに繋ぐ。

何もしないでポーツとしてたら、これ以上おかしくなりそうだから友希那にも言われたし、今日の練習分だけでも取り戻そう。

楽譜を開いて、コードを抑えて指を弦にかける。

そして、音を出すために指を弾く——

「……あれ」

何度も何度も弦を指で弾くけど、音が鳴らない。
コードを確認してもあってるのに音が鳴らない。

「……何で」

シールドがちゃんと入ってないのか、それともアンプに繋がっていなかったのか。
再確認するも、全てちゃんと繋がっていて何もおかしい所はない。
アタシはもう1度弦を強めに弾く。

「……聞こえない……？」

強く何度も弦を指で弾いても鳴らない、いや音が聞こえてこない。

アタシは、まさかと思いつつも今度も強く1度弦を弾く。

聞こえない。ベースの不調かな？と思った時、アタシの部屋の扉が開いた。

「リサ、練習するのは悪い事じゃ無いんだけど時間も時間も時間も時間だからもう少し抑えてね？」

「……え、ママ。音聞こえたの……？」

「ええ、いつもより大きかったからびっくりしたわ」

「……ごめんね、ちょっと集中しちゃってて！」

「気をつけなさいよ？あと、もうお風呂入れるから入っちゃいなさい」

「……はい」

パタンッと扉が閉められ、アタシは手をベースから離す。

音が鳴らないわけじゃない、故障したわけじゃない。

アタシが聞こえないんだ。

「……あの子から奪ったアタシへの罪……かな」

スマホの通知が鳴って見てみれば、そこには友希那からのメッセージ。内容はママと同じような内容で、更にアタシは自分の状態に気づく。アタシだけが聞こえてないんだって事に。

『リサ、練習するのはいいことだけど。こっちまで音が漏れてるわよ』

「……隣にまで聞こえてたのかあ、それじゃあママも注意しに来るよね」

『ごめんね、頑張りすぎちゃった！』とだけ送ってスマホを手から離す。

誰にも気づかれちゃいけない、これはアタシが一人で解決しなきゃいけないんだから。

明日からのライブまで練習、いやもしかしたら一生この状態でやっていくかもしれない。

皆に気付かれたら、きっとバンドを抜けなきゃいけない。

「……皆の音に合わせて隠すしかない」

ママに呼ばれてベースをスタンドに戻し、後片付けをしてから着替えを持ち部屋を出る。

この状態はきつとあの子からの罰なんだ。アタシがあの子を守れずに好きだった楽器で、バンドを組んだアタシへの罰。

それならアタシは逃げちゃダメだ、この状態を受け止めなきゃいけない。

今日も隣にあの子がいない。

そしてアタシは今日、あの子が好きだった音が聞こえなくなった。

元々この話を書こうとしていたので、本当に偶然明坂さんの事が被って私自身こんなタイミングある…!? って思いました。

ファンミ、行きたいな……。

それではまた次回もよろしくお願いします。

Anguish of twins

はい、本日は何と初の2話投稿。(だったはず)

もう一つの作品は書けてるんですけど、何か足りないと思っていて中々投稿できなない……。

それではどうぞ。

追記

ランキング18位に入ってる……だと……(´。ω。´)……

あまりの驚きに何度も目を擦って目が痛いです。

音が聞こえなくなっただけの数日間。

アタシは誰にも気付かれずに、バンド練習に参加していた。

偶に友希那から怪しまれる事はあるけど、まさかベースの音だけが聞こえてない

とは気付いてないみたい。

あこの激しいドラムや燐子の綺麗なキーボード、紗夜の正確なギターに友希那の透き通る声。

メンバーの音は聞こえるのに、アタシ自身の^アベースの^キ音^の音だけが聞こえない。

「リサ、また少し大きいわ。少し抑えて」

「オッケー☆」

「あこ、サビで盛り上がってから少し走ってるわ。気をつけて」

「はい、友希那さん！」

友希那に言われて、ベースのボリュームを少し落とす。

ベースの音が大きいのか、それとも小さいのかも分からないアタシはこういうア

ドバイスを貰って変えるしかない。

次はBLACK SHOUTの合わせのはずだから、念の為覚えてはいるけど楽譜を広げなきゃ。

「今井さん」

「紗夜？どうかした？」

楽譜を用意して譜面台に置いてみると、突然紗夜から声をかけられた。

アタシは何かと思い、楽譜から目を離し紗夜を見ると鋭い目がアタシの目を射止める。

あれ、アタシ何か怒られるような事したかな…？

「今井さん。貴方、自分の音が聞こえないんですか？」

「……………え？」

「先日からベースの音が不安定です、やる気が無いなら…………」

紗夜の言葉にアタシは思わず固まる。

嫌だ、気付かれたくない。この罰は、アタシが一人で解決しなきゃいけない。

アキの時間だってないんだ、その為にも今ここでアタシはベースを辞めるわけにはいかない。

だって、辞めたらそれは逃げる事になっちゃう。逃げたらアタシはアキに顔を合わせられない。

そう思った直後。

「大丈夫だから！！！」

「リサ…？」

「……あ、えっと、大丈夫だから。ごめんね、急に大きな声出しちゃって」

自分が思ってる以上に大きな声を出してしまった。

目の前にいる紗夜も驚いてるし、燐子やあこ、友希那も驚かせてしまった。とつくに壊れてるアタシは、もう正直余裕がない。

「……リサ」

「ごめんね、友希那。急に大きな声出しちゃって、練習しよ？」

「ベースの音、聞こえないのでしょうか？」

「もう、友希那までどうしたの？そんな事ないって！」

「それなら、どうしてミスに気付いてないの？」

「……え」

ミス？どこで？

チューニングでミスしてたの？ううん、それはないはず。ちゃんと機械で合わせてる。

そんな事ないって見せようとベースに指をかけて弾くけど、音が聞こえないからアタシには分からない。

アタシは何処でミスしたの？

「嘘よ」

「……え？」

「ミスなんてしてないわ、今のはリサの反応を見るために付いた嘘よ」

「……何で、そんな事」

「あの日から違和感を感じてたわ。隣に住む私の部屋までベースの音が聞こえて来るのに、弾いてるリサ自身は平然としていたもの」

隠せてると思ってた日からバレてたの？

このままじゃ、アタシはRoseliaから抜けなきゃいけない。

そしたら、この罰から逃げる事になってしまう。それは、アタシがアキからの罰を放棄するってこと。

「リサ、まさか……」

「……今井さん……？」

「リサ姉、大丈夫…？」

友希那の顔が変わった気がする。

やめて、気付かないで。

燐子やあこが楽器から離れて、アタシを心配して近付いてきてくれるけどアタシはその分後ろに下がる。

紗夜は何も言わずに、アタシを見てるだけ。

「…：…本当に大丈夫だから、練習しよ…？」

何かに気づいた友希那も今度はアタシの言葉に賛成して練習は再開した。

多分、アキの事が絡んでるって分かったからこの場で話をしなかったんだと思う。あれから一時間ぐらいして休憩に入り、アタシは飲み物を買いに外に一旦出た。とりあえずお茶でいいかな、水はさっきまで飲んでたし別のも飲みたい。

冷たいお茶を自販機で買ってキャップを開けて口に含めば、練習で暑くなった身体にすうーと涼しさを感じる。

スタジオに戻って扉を開けてみれば、何故か紗夜があこに怒っているところだった。

「お姉ちゃんお姉ちゃんって、いつも真似ばかりするじゃない。貴方の意思は何処にあるの!? 真似するだけなら自分なんて要らないじゃない!」

「ちょ、紗夜! 落ち着きなよ!」

アタシは間に入って紗夜を落ち着かせようとするけど、全く落ち着く気配なんかない。

あこの方をちらっと見れば、燐子が何とかしてくれてるみたいだからアタシは紗夜を何とかしなきゃ。

「だから妹なんて嫌いなのよ、妹なんていなければ…！」

「紗夜!!」

「何ですか、今井さ…っ!？」

パチんつと音がなり、スタジオに響き渡る。

目の前にいる紗夜は驚いていて、アタシは自分が何をしたのかを今更になって理解した。

そう、アタシは紗夜の頬を勢いよく叩いていた。

「妹なんていなければ良かったなんて言わせない、それだけは許さないよ」

そんな事、絶対思わないし例え思っても口にしちゃいけない。

本当に隣からいなくなつた時、どれだけ辛くて悲しくて寂しいかを紗夜は知らない。

いんだ。

アキに『お姉ちゃん』って呼ばれなくなるのが、呼ばれていた時は当たり前だっ
て感じるけど呼ばれなくなった時に気付く。

あの日常は、当たり前なんかじゃないって。

「……すみません、今日はお先に失礼します」

紗夜はそう言ってアタシの横を通ると、ギターをケースに片付けてスタジオから
出ていった。

本当ならアタシが追いかけるべきやいけないのかも知らない、けどあんな事した後
じゃ出来ない。

紗夜は妹の日菜と何かがあったんだ、それは分かってたからアタシも双子だし相
談に乗れるかなって思ってたのに、アタシ何やってるのかな……。

「……友希那、お願いがあるんだけど」

「私ができる範囲なら良いわよ」

「紗夜をお願い出来ないかな？」

「……どういう事かしら」

「紗夜、多分だけど日菜と何かあったんだと思う。アタシも似たような状況になった事があるから何となく分かるんだ。でも、アタシさっき叩いちゃったから……」

「……あの時期の事かしら？」

「うん、お姉ちゃんだと必ずぶつかると壁……かな」

アタシも今じゃ無いけど、昔一時期だけアキとの関わり方が分からなくて距離を

とってしまった時があった。

だからこそ、アタシは紗夜に同じ道を通って欲しくない。

「…分かったわ、紗夜の方は私から少し話をしてみるわ」

「ありがとう！あこ、大丈夫？」

「…うん。でも、あこ前にも紗夜さんに言われたのに……」

前にも？もしかして、アタシが遅れて来た時に何かあったのかな。

いる時は、みたことないし。

燐子も何とか、あこを元気づけようと頑張ってるけどアタシに手伝って欲しいと訴えているので手伝おう。

流石にアタシもほっとけない。

「うーん、あのね。うちにさ、氷川日菜って子がいるんだけど知ってる？」

「あ、名前だけ聞いたことあるよ！いつもテストで一番の人だよね？」

「そうそう、その日菜って紗夜の双子の妹なんだよ」

「え、紗夜さんって双子だったんだ！」

「初めて…知りました…」

「アタシも日菜に聞くまでは知らなかったんだけどね。まあ、多分それで何かあったんだと思うよ」

「…その、今井さん…」

「ん？」

「さっき…湊さんに『お姉ちゃんだと必ずぶつかる壁…かな』…って言ってましたけど…その…」

アタシは、あーと思いつつながら、まあ話してもいいかなと友希那の方に目を向けると何も言わずに頷いてくれた。

多分、姉のアタシが良いなら良いって言ってるんだと思う。

いつかは言おうって思ってたし、あこにもこの前悪くしちゃったから教えとこうかな。

「アタシもね、妹がいて紗夜と同じような状況になった事があったからさ」

「え、リサ姉に妹いたの!？」

「そうだよ」

「貴方達、そろそろいいかしら？」

「友希那さん…ごめんなさい…」

「…あ、ごめん」

「…すみません」

「これ以上の私情はRoseliaには必要ないわ、それと今日はもう解散にしましょう」

そう言って、友希那はすぐに鞆を持って外に行ってしまった。

多分、紗夜を探しに行ったんだと思う。

言葉は少しキツイけど、ちゃんと約束は守ってくれるいい子なんだよ？

あこや燐子と別れ、アタシはそのままバスに乗って病院に向かいアキの病室に訪れる。

持ってきた花を飾って、飲み物を口に含んでベッドの横に設置してある椅子に座る。

「今日は暑かったんだ、最近の温度は絶対おかしいよ。地球温暖化ってほんと嫌だね」

なんて声をかけながら、アタシはアキの頭を撫でる。

髪もだいぶ長くなつたなあ、アタシが今度切って短くしといてあげようかな？

でも、長い髪の毛のアキも可愛いし……。

明日は紗夜に謝んなきゃなあ、ほった叩いちゃって痛かったよね。

そんな事を思いながら頭を撫でていたら、ふいに扉をノックされる。

看護師さんかな、なんて思いながら「はい」と答えて振り返ると中に入ってきた

のは看護師さんではなかった。

「……友希那に…紗夜…？」

「ごめんなさい、リサ。勝手に連れてきたのは悪いと思ってるわ、でも紗夜に話すのは私ではなくリサの方が適任だと思って連れてきたの」

「……そっか、アタシも紗夜に謝らなきゃって思ってたから大丈夫だよ」

「…あの、今井さん。この方は…？」

「……アタシの妹なんだ、双子の」

紗夜が息を呑んだのが分かる。

そうだよね、いきなり連れてこられた場所がバンドメンバーの妹の病室なんてア

タシだったら驚くよ。

このままでと話しづらいし、とりあえず場所を変えた方がいいかな。

アタシは最後にアキの頭を撫でて「また来るね」とだけ告げて、病室から出るように紗夜と友希那に視線を向ける。

3人で一旦病室を出て、近くの休憩所に3人で座る。

「アタシの妹、アキって名前なんだけど。2年前に事故に遭ってからずっとあんな感じなんだ」

「……そう、なんですか」

「うん、だからアタシにとって今の紗夜は少しでも羨ましい」

「……それは」

「分かってる、アタシも似たような経験した事あるんだ」

そう苦笑いで答えると、紗夜は驚いた表情を浮かべる。何か、今まで紗夜はあんまり表情変えないなって思ってたけど、今日は結構変わるね。

元々、美人だしスタイルもいいからモテそうだなー。なんて関係ない事を思ってしまった。

「アキもバンド組んでベースやって、同じタイミングで始めたはずなのにアタシをどんどん追い抜いちゃって。それでも『お姉ちゃん』って、呼んで笑ってくれるあの子から逃げてる自分がアタシは一時期辛かった」

「……今はどうなんですか？」

「今は全然、大好きな妹だよ。だって、どれだけ遠ざけてもアタシにとってあの子はたった一人の妹だもん。姉らしい事なんて一つもしてあげられないし、あの子の

方が姉らしいって今も思うけど、少なくともあの子にとっては一番のお姉ちゃんになりたい」

「……今井さんは強いんですね」

「…強くなってるよ、あの子が隣にいないってだけでアタシはもうボロボロだから。それにアタシは紗夜と違って姉らしい事してあげられないから」

「……ごめんなさい、いくら貴方の現状を知らないとはいえ先程は酷いことを……」

「いやいや！アタシだって、ほった叩いちゃったし。お互い様だよ」

「ですが……」

「じゃあさ、日菜と少しずつでいいから仲良くしてあげて？」

「……努力はします」

「うんうん。……お姉ちゃんって大変だよね、特に双子だとさ」

「……ええ、そうね」

アタシのお節介かもしれないけど、日菜と紗夜は仲良くして欲しいな。

絶対、仲良い双子になると思う。

アタシが出来なかった事を紗夜にはして欲しい、今のアタシはあの子を守れなかった情けない姉だから。

「ねえ、リサ。そろそろ教えてくれてもいいんじゃないかしら？」

「え、何が？」

「ベースの音が聞こえてない事についてですよ」

「……それは」

「今井さん、先程私の頬を叩きましたよね？」

「は、はい。叩きました……」

「許しますから代わりに教えてください」

ず、ずるい。

アタシは日菜と仲良くして欲しいって伝えたのに。
でも、ここまで来たら隠せないよね……。

「リサ、先に言うておくけど。もし音が聞こえてなくてもRoseliaを脱退してもらうとは決めてないわよ」

「……へ？」

「ええ、見た限りだと私達の音は分かっているようですし、会話も出来ますから。バンドにとっては、小さい問題ではありますが大きな問題は無いようですから」

「……うん、ありがとう」

もう、隠せないね。

燐子やあこだって、ずっと気にかけてくれてたし隠せてるって思ってたけど全然だったみたいだ。

それに、もうアキの事以外で色々隠して過ごすのはキツいかな。

「……あのね、アタシ。ベースの音だけが聞こえないんだ」

「……そう」

「ベースの音だけ……ですか……」

2人の言いたい事は分かる。

だって、ベースはアキが大好きで担当していた分身とも呼べる楽器。

その音が聞こえないなんて。まるで、アタシが今のアキと繋がれる唯一の物が消えたと同然なんだから。

今日も隣にあの子はいない。

そして、あの子の面影を感じていたベースの音は今日も聞こえなかった。

紗夜ちゃん可愛いですよ。(リサ姉推し↑)

いや、元々遠藤さんの影響かつリサモカと沙綾に一目惚れしてバンドリ始めたんですけど、紗夜が可愛いなって最近思ってた。

何というか、ギャップがやばい。(語彙力低下)

いつか紗夜メインを書きたいな、文才ないですけども。

それでは、また次回もよろしくお願いします。

The appearance of ultramarine

ランキング8位まで上がった。(。ω。、)∴

昨日は朝から驚きで現実なのかと確認のため、何度も何度も目を擦って目が痛い
です。

ベースの音が聞こえないことを友希那と紗夜に告白した次の日。

今日は、バンドの練習が休みの代わりに夕方からバイトがあるから、それまでア
タシは家でベースを弾いたり恋愛小説を読んでいたけど、やっぱり暑い季節だと言
うのに部屋の中は独りだから寒く感じて外に出て歩いていた。

明日のバンド練習時に、あこと燐子にもベースの音が聞こえない事とこの状態が
ライブの時までに治らないかもしれない事を伝える事になってる。

ちょっと伝えるのが怖いって思ってたけど、2人なら大丈夫だと友希那に言わ

れたし、アタシも2人なら大丈夫って思えるから今はそこまで怖くない。

特に行く宛も無く、ただ商店街の近くの道に出て公園前を通っていると綺麗な黒髪と夕焼けを連想させる赤メッシュ、涼しそうでありながらもちょっと露出がある赤色のキャミに合わせた黒のオフショルを着る、ついこの間自己紹介を済ませ知り合った後輩の姿が視界に映る。

あの日、アキの現状を知らせて病室に行ったきり顔を合わせてなかったから少しだけ気まずい。

向こうはまだ気付いてないみたいだし、何かやってるから話しかけない方がいいかな？

何て思って公園を通り過ぎようとした時、「リサさん」と透き通る声で風に乗って名前を呼ばれる。

アタシは前に向けていた視線を動かさず、名前を呼ばれた方である公園内のベンチへと目を向ければ、ペコッと頭を下げる蘭。

「やっほー、蘭。誰かと待ち合わせ中？」

「いえ、ちょっと色々あって……」

「大丈夫？アタシで良ければ話聞くよ？」

「ふふ、リサさん。今のアキさんにそっくりです」

「そう？双子だからかな」

アタシはそう言いながら、蘭の隣に座る。

んー、これは良くない方で何かあったね。いつもと違って暗い顔してるから蘭って結構分かりやすいのかも。

ただのお節介かもしれないけど、ほっとけない。

「それで、どうしたの？」

「…やっぱり隠せてませんか？」

「うん、普段より暗い顔してるというか何か辛そう」

「……少しだけ話を聞いてくれますか？」

「もちろん☆お姉さんに頼んなさい！あ、でもちょっと待ってね？」

アタシは急いで公園の入口に戻って自動販売機でアイスコーヒーとアイスティーを買う。

蘭はコーヒーが好きってモカが良く言ってたから多分、大丈夫だと思うけど無理だったらアイスティーと変えよう。

キョトンとしてる蘭の隣に座ってアイスコーヒーを渡すと、慌ててお財布をポ

ケットから取り出している。

ポケットなんかに入れてたら落としそうだよーって、今は違う。

「お金は要らないからね。はい、どーぞ！」

「そんな、悪いですよ！」

「いーのいーの、先輩らしい事させて？」

「……分かりました」

「うんうん。コーヒーで大丈夫そう？」

「はい、ありがとうございます」

「いえいえ、それじゃあ本題に入ろっか」

プルタブを摘み、プシュツと音が鳴って一口二口とお互いに口に含ませて乾いた喉を潤してからアタシは蘭の話聞いた。

何でも、蘭はこの辺りで有名な美竹流と呼ばれる華道の家元の娘さんで、お父さんから前々からバンドを辞めて家業を継げって言われて今日も喧嘩をしてみましたらしい。

お父さんの気持ちも分からなくはない、バンドってアタシ達 Roselia や蘭達の Afterglow のように本気で音楽に挑戦してるバンドもあれば、あくまで趣味として組んでるバンドもある。

蘭のお父さんは、多分だけど1度も本気で音楽に向き合ってる蘭達のライブを見たことがないだと思ふ。

でも、蘭の気持ちもアタシは凄くわかる。

自分が本気でやってる物を言い方はあれだけど、なかなか聞いてもらえずに反対ばかりされてしまうのも悲しい辛い。

「んー、難しいね」

「……何にも分かってないんです、私の父は。いつも華道ばかり」

「これってアタシ以外にも相談した事ある？」

「……アキさんにはありますね」

「その時何て言われた？」

『もう1度、蘭ちゃんの気持ちを言葉にして伝えてみて。どんな親でも、自分の子供が本気でやってる事は絶対応援してくれるよ』って言われました」

なんだ、もう答えは出てるじゃん。

そこまで道が出来てるなら、あとはきつとアタシが背中を押してあげるだけで十分だと思う。

ほんと、我ながら妹はアタシがいなくてもしっかりして誰かを助けてたんだなって気付かされる。

アタシだけかもしれない、アキが居なくなっただけで過ごせなくなってるのなんて。

「ねえ、蘭？」

「はい」

「アキがそこまで教えてくれたならアタシから言える事は何も無いよ、でも強いて言うならお父さんをライブに誘ってみたらどうかかな？」

「……ライブに……ですか……」

「うん、アタシ達って演奏者じゃん？蘭はギターボーカルだからちよつと違うかもしれないけど、言葉で伝えるのが難しいなら音で伝えるの」

「……音で伝える」

「そ。アタシはベースで、蘭ならギターと声で音や歌詞に乗せて気持ちをぶつける。どう？」

「……そうですね、あたしもそれなら出来るかも」

「うんうん、面と向かって言うのって勇氣いるしすぐには出来ないかもしれないけど音楽なら大丈夫だよ。……アタシも音楽で伝えようと思うから」

「……リサさん」

「なーんて、アタシなんかアキよりも全然下手だから届かないかもしれないけどね」

そう笑ってアタシはアイスティーを口に含む。

届けていつも思ってた弾いてる。けど、どれだけ練習しても2年経ってしまった今では、アタシの音は全く届かないんじゃないかって思う。

Rosealiaの皆と演奏してる時は強くそう感じる。皆のような完璧な演奏じゃなきゃ、アタシのような不完全な届かないんじゃないかって。

それに、今のアタシはベ^アキ^キの音^{の音}が聞こえないから余計にそう思う。

「リサさん、あたし今度のライブに父を……お父さんと呼んでみようと思います」

「うん、それでぶつけなよ！蘭の想いをね☆」

「はい！リサさんもライブやるんですか？」

「やるよー、アタシが遅れた日に確かPoppin Partyさん？って所にCircleで開かれる《ガールズバンドパーティー》っていうライブに誘われたから、それに参加予定だよ。Afterglowも？」

「あたし達もです、偶然そのPoppin Partyってバンドのドラマーと巴とモカ、つぐみの3人が知り合いでそのまま出るって感じに」

「おー、じゃあアタシも蘭の全力の気持ちが入ったライブが見れるって事だ☆」

「は、恥ずかしいんで見ないでください……」

「あはは！もう、可愛いヤツめ〜！」

「わ、ちょ、リサさん……！」

アタシが蘭の頭を撫でながら笑うと、恥ずかしそうに頬を赤くしながらも蘭は嫌がらずに受け入れてくれる。

ほんと、可愛いヤツめ！

でも、アタシだって蘭に強く言える立場じゃない。言葉では届かない分、音で伝えようって決めてたのに今のアタシの意思はグラグラに揺れてる。

「リサさん」

「……んー？」

「お互い、頑張りましょうね」

「……蘭」

「大丈夫ですよ、だってあのアキさんですよ？リサさんの話をよく聞いてたんで、
どれだけアキさんがリサさんの事が好きだったか分かります」

「アタシの話って、あの子は何話したんだろ……」

「色々ですよ、だから大丈夫です。それにアキさんにとって、リサさんがもう1度
ベースを弾いてるって知ったら喜ぶと思います」

「……それは無いよ」

「アキさん良く言ってたんです、『またリサとセッションしたいな……』って。ベー
スをもう1度握ってくれる日をずっと待ってましたから」

「……アキが……ずっと」

『お姉ちゃん、また一緒にベースやらない…?』

そう、何度も聞かれたけどアタシはいつも首を縦に振ることは無かった。

気付いてしまったから、アタシには友希那のような才能も無いしアキのように努力して手に入るような才能も無い。

2人の横に立てる自信がなかった。

「リサさん」

「…ん?」

「あたしにとって、アキさんは一人でいたあたしに共通の居場所を作ってくれた恩人です。モカを通して知り合った先輩ですけど、学校も違うのに丁寧に楽器を教えてくれたり、あたし達を支えてくれたり、それに人として沢山の事を教えて貰いました」

「…うん」

蘭はアイスコーヒーを一口飲んで、優しく微笑むようにアタシの顔を見る。

その笑顔を何処かで見たことがあるような気がしたけど、気のせいだと思い脳裏からその考えを外に追い出す。

何だか、こんな後輩に思ってもらってるアキが羨ましいなって感じる。

「そんなアキさんは、ずっとリサさんを信じて待ってました。だから、今度はあたし達が信じて待つ番かなって…すみません、上から目線で」

「…うん。そうだね、アタシも音で伝えてみる」

「お互い、最高の演奏しましょう」

「もちろん☆」

それからのはたわいも無い話で盛り上がり、気付けばもうお昼を過ぎていた。

話し始める前に買ったアイステイーを飲み干して、蘭の手にあった空となった缶と一緒にゴミ捨てに入れる。

そろそろ家に帰ってお昼ご飯食べたらいバイト行かなきゃ、モカとシフト重なってるし遅れたら迷惑かけちゃう。

「それじゃあ蘭、頑張ろうね」

「はい、リサさんはこれからバイトですか？」

「うん、モカと重なってるんだ」

「だからモカ、あんなにウキウキだったんだ……」

「え？ そうなの？」

「はい、何かリサさんと話しながらやるバイトは楽しいみたいです」

「あはは☆アタシも楽しいから嬉しいな」

ポケットの中に入れてたスマホが振動しているのが分かり、蘭に悪いなと思いつちラツと画面をみるとママからのメッセージ。

『お昼ご飯出来たから帰ってきてー』

あ、もう出来たんだ。蘭もこれ以上はあれだね。

アタシはメッセージを素早く打って返し、スマホまたポケットに入れる。

「もうお昼だし、そろそろ帰ろっか？」

「はい、…すみません。話に付き合わせちゃって、どこかに行くような感じだった

のに……」

「ううん！アタシも暇でこの辺をブラブラしてただけだから大丈夫☆」

「なら、良いんですけど……」

「もう、後輩なんだから気にしなくていいの！困った時はお姉さんに任せなさい！」

「…ふふ、リサさん。本当にアキさんのお姉さんですね」

「今のも似てた？」

「いえ、ただ良く言ってたんです。『私の姉は誰に対してもお姉さんって感じだよ』って」

「あはは、そうかなー」

「はい、リサさんみたいなお姉さんが欲しかったな……って困りますよね」

苦笑いでそう言ってくれる蘭が可愛い。

嬉しい事を言ってくれるなあ、もう！

アタシはさっきと同じように蘭の頭を撫でると、また恥ずかしそうに顔を真っ赤にするけど嫌がらない蘭が可愛いくて更に撫でてあげる。

「り、リサさん！ば、バイトの時間が……！」

「あ、やば……！ありがとね、蘭も頑張れ！」

「……はい！」

蘭に手を振って小走りで家に戻る。

この2年間なかなか感じなかったあの子の面影。

あの子がいた部屋やベースからしか感じなかったのに、2年経った今ではあの子が関わっていた人達から、あの子がいたいどんな世界を見ていたのかが間接的にだけ分かるようになってきた。

でも、アタシがアキに時間が無いということを皆に伝えられないのはアタシ自身が弱いからなのか、それともアタシがまた現実を信じられなくて夢としておきたいのか。

ベースの音が聞こえないのだって、友希那と紗夜以外には言えてない。

家の前に着いたのになかなか扉を開けられずに、玄関前で固まる。

この一歩がとてつもない不安を感じる。

『そんなアキさんはずっとリサさんを信じて待ってました。だから、今度はあたし達が信じて待つ番かなって』

「……ごめんね、蘭。アタシはもう、待ちくたびれて疲れちゃったんだ」

あの場で言えなかったアタシの本音。

2年って人によっては違うけど、アタシにとっては凄く長くて寂しい2年だった。それは今でも。

音で伝えようと蘭に言っときながら、アタシは音でも伝えられない。

もう抜けられない、そして音がない迷路にアタシ一人だけが2年前から迷い込んでしまったんだ。

「……バイト行かなきゃ」

重たい足を引きずって玄関の扉を開けて中に入る。

涼しいエアコンの風を一気に身体に感じて、暑い外にいた時にかいた汗が一気に冷たくなる。

「リサ、おかえりなさい。ご飯もう出来てるわ」

「ただいま！」

けど、ママとパパにこれ以上心配かけられないからアタシはいつも通りに笑って過ごす。

自分が壊れてしまってる事も、アキがない非日常を慣れてきてしまってるのも、涙がもう出ないことも隠し通す。

そして、ベースの音が聞こえない事も。

アタシが皆に向ける笑顔は、今のアタシにはいったいどんな顔をしてるのか何とも分からなかった。

今日もあの子は隣にいない。ベースの音も聞こえない。けど、あの子の面影は感じた。

沢山のお気に入りに登録、評価と観測ありがとうございます！

とても嬉しいです！

そろそろアキちゃんを出したいけど、まだ…！まだなんだ…！

それでは次回も宜しくお願いします！

Sunflower withering

投稿時間が安定しない…(最近の悩み)

そして、今回は普段よりも何か違うかもしれないです。

慣れないことをするもんじゃないですね…はい。

それではどうぞ。

あこと燐子にベースの音が聞こえないと告げてから数日が経ってアタシは今、友希那と学校から真っ直ぐCircleに向かっていた。

今日は練習は休みて聞いてたから久しぶりに、アタシは部活に顔を出そうとしていた所を突然、友希那に呼ばれてCircleに行く事になった。

「ねえ、友希那？今日って練習休みだよね？」

「ええ、休みよ」

「じゃあどうしてCircleに？」

「今度のライブ《ガールズバンドパーティー》の事で各バンド集まる事になったの、それが急遽連絡があつて今日って言われたのよ」

「なるほどね、紗夜達は知ってるの？」

「ええ、紗夜と燐子は2人で来るそうよ。あこには高等部の正門前で待ってもらつてるわ」

流石だなく、友希那は仕事が早い。

急遽って事は多分、全員を集めるには今日しか無かつたんだろうな。

確か5バンドが参加って友希那から説明を受けた。

1組目は花咲川女子学園の1年生で組んだPoppinPartyちゃん、2組目はアタシも交流があるAfterglow。

3組目は、この前日菜から聞いた芸能事務所からPastel*Paletteで、4組目が『世界を笑顔に！』がテーマのハロー、ハッピーワールド。

そして、最後にアタシ達Roselia。

全員が現役高校生だから部活とかバイトとか、それにアイドルだっているんだし日程を合わせるなんて少し無理矢理じゃないと大変だよな。

「リサ姉〜！友希那さーん！」

「あこ、お待たせ☆」

「遅くなったわ」

「大丈夫です！それで、今日って打ち合わせって感じなんですか？」

「そうね、そのつもりでいいと思うわ」

「それじゃあ3人集まったし行こっか☆」

「うん！あ、リサ姉。ベースの音は聞こえた…？」

「…ううん、生音も聞こえない。けど、皆の音を頼りに頑張るから大丈夫だよ☆」

「あこも頑張ってリサ姉を支えるね！」

「ありがとう」

アタシが真ん中で歩いて、右が友希那で左側をあこが歩いている。

たわいない話をしながら歩いて、裏道を通り商店街を抜けて駅の近くにあるCircleまで来ると、Circle前に設置されてるカフェ近くに紗夜と燐子の姿が見えた。

あこが元気良く手を振りながら燐子の名前を呼ぶと、2人とも気付いたようで視線を向けてきた。

「りんりーん！」

「あこちゃん…走ると…危ないよ…?」

「宇多川さん、少し落ち着いてください」

「ごめんなさい…:…」

「まあまあ、あこもライブの話だって知ってテンション上がっちゃったんだよね？」

「うん！もう、あこ超楽しみ！」

「テンションが上がるのは良いけれど、他の人に迷惑にならないで頂戴」

「もちろんです、友希那さん！」

友希那を先頭にアタシ達はCircleの店内に入ってから、まりなさんが来るまで少し待機していると少し奥から走って来る姿が視界に映った。

何か、慌ててるというか焦ってるみたいだけどどうしたんだろ？

そう思っていると、紗夜がアタシが思った事をそのまま質問してくれた。

「まりなさん、そんなに急がれてどうかされたんですか？」

「あ、紗夜ちゃん！良かった、間に合ってくれて……」

「もしかして、アタシ達が遅かったから心配してくれたんですか？」

「うん、急遽だったから難しいかなって思ったんだけど Roselia の皆以外は揃ってたから、とりあえず連絡してみようかなって思ってた所だったんだ。でも、良かった……」

「ごめんなさい、遅くなってしまって」

「ううん！大丈夫だよ、すぐに案内するね！」

まりなさんはそう言って走ってきた方向に身体を向け直し、ゆっくりと歩き出す。アタシ達はその後ろ姿を追って歩いていくと、普段は使っている楽屋の隣にある少し大きめの楽屋に案内される。

中からは話し声が聞こえるから本当にアタシ達が一番最後みたい。

友希那が扉を開けて順に入っていくと、さっきまでの賑やかさは一気に消えて視線が真っ直ぐにアタシ達に向けられる。

何か、ちょっと緊張する……。

「遅れてしまっでごめんなさい」

「大丈夫ですよ！わあー！本物のRoseliaさんだ！」

「こらこら、香澄。自己紹介しなきゃ駄目でしょ？」

「すみません、うちのメンバーが失礼な態度を……。香澄、お前はちょっと落ち着け！」

友希那に近付いていた香澄って呼ばれた子が、同じバンドメンバーらしい子にズ

ルズルと引き摺られていくのを見て思わず笑ってしまう。

面白そうな子達だなあ、アタシ達とはまた違ったバンドだね。

「とりあえず、自己紹介しない？ 話が進まないんだけど」

「ちょっと蘭、言い方がキツイから！」

「そうね、私達もあまり時間は無いから始めましょう？」

「千聖ちゃん…!？」

「あら、皆怖い顔じゃない！ 笑顔になりましょう！」

「ちよ、こころはちょっと黙ってて…!!」

な、何か個性豊か過ぎてカオス状態……。

燐子も知らない人が多いからか顔色が真っ青だし、紗夜は日菜からのニコニコ笑顔をどう受け取ればいいのか分からないみたいで複雑そうな表情浮かべてる。

アタシは苦笑しながら、どんな子がいるのかを軽く見渡してると一人の女の子と目が合う。

その子はアタシの顔を見ると、キョトンとした顔になってから一気に驚いた表情へと変わっていく。

そして、気付けばアタシに抱き着いてきた。

「……!？」

「アキさん……!」

「えっと、さーや?どうしたの?」

さっきの香澄ちゃんが、アタシに抱きつくゞさーやゞって子に名前を呼ぶ。

友希那や紗夜、あこ、燐子は勿論、この場にいる誰もが驚いてる。

いや、一番アタシが驚きなんだけど!?

「香澄、私が前に話したでしょ？なつ達と前に組んでたバンドで一人だけ先輩がいたって」

「あ、前に沙綾が2年間連絡が取れてないって言ってた人のこと？」

「うん、おたえにも教えたね。モカ、アキさんいたよ！」

待って、この子何でアキのこと知ってるの？

それに前に組んでたバンドって事は、もしかしてこの子あの時アキの現状を知らされなかったドラムの子…？

アタシからガバツと離れて、モカに笑顔を向ける目の前の子にモカは寂しそうな

顔を向けるだけ。

モカは言いづらそうにしながらも、困ったような笑顔を浮かべて口を開いた。

「……さーや、その人はアキさんじゃないよ」

「え？もう、そんな冗談言わないでよ」

「……沙綾、本当なんだ」

「ちょっと巴まで何言ってるの？ドッキリか何かですか、アキさん？」

「……ごめん、アタシはアキじゃないよ」

アタシがそう言うのと、目の前の子は信じられないと言いたげに少しずつアタシから離れていく。

口元を手で覆うその姿を見てると、アタシも辛くなる。

あの時、この子にアキの現状を教えなかった事は正しかったのか、今日の前で起こってる状況を見ると正しいって言えなくなってくる。

「……嘘、本当にアキさんじゃないんですか…?」

「……さーや、その人はアキさんの双子のおねーさんの今井リサさんだよ」

「双子…?じゃあ、本当のアキさんは今何処にいるんですか…?」

「……っ」

言えない、こんなの言えないよ。

モカや蘭達 Affterglow の子達の表情が、どんどん暗くなるのが見える。隣にいる紗夜や友希那と、今のアキの状態を知ってる人達の表情が辛くなってい

く。

アタシの前で聞いてくるこの子になんて言えばいい…？

あの時、あの子達がこの子に伝えなかつた理由を知ってるアタシがどうやって傷付けないように教えればいいの…？

「…リサちー」

「…日菜？」

「…あたしね、いつも凄い早く帰るリサちーが気になって後を追ったことがあるんだ」

「……え」

「日菜、貴方…！」

「…ごめんね、あたし見ちゃった。殆ど毎日、病院に向かうリサちゃんの事」

ああ、もうこの子に言わなきゃいけない。

誰にも見られてないって思ってたけど、やっぱりバレるか。

今日初めてあったばかりの人達が多いのに、アキの話をしていいのだろうか。

でも、多分この場で伝えなきゃいけない。この場を失ったら、アタシはもう誰にもアキの話が出来ない気がする。

紗夜が日菜に怒ってるけど、今のアタシは気にしてあげられる余裕なんてない。

「…沙綾ちゃんが前にいたバンドってCHISPA？」

「…はい、ドラマーでした」

「…そっか、あの時アキが会いに行こうとしてたのは沙綾ちゃんだったんだね」

アタシは、なるべく不安がらせないように笑顔を向けて言うけど声は震えてる。本当はこの子には伝えたくない、伝えちゃいけないのになんかどうしてこうも神様は意地悪で酷いのだろう。

この子は何も悪くないのに。

「……アキはね、今病院で入院してるの」

「……え」

「……2年前のあのライブ後に、交通事故にあってから昏睡状態が続いてるんだ」

アタシの言葉に部屋がシーンっと静かになる。

でも、その沈黙を破ったのは沙綾ちゃんでもモカ達でも、紗夜や友希那でも無く、ずっと静かにしていたハロー、ハッピーワールドさんの水色の髪の毛をした子だっ

た。

「……あのアキさんって、2年前に夏祭りですらライブしてたベースの子ですか…?」

「……え、アキを知ってるの…?」

「……は、はい。そのアキさんが事故に遭ったとき、偶然近くにおいて私と千聖ちゃんですら救急車を……」

花音さんがそう言うと、千聖さんも悲しそうにくくんつと頷いた。

嘘、こんな事があるの…?」

次に声を出したのは、その花音さんの隣にいた薫。

「……そうか、リサとはずっと初めましてではないような気がしていたが彼女だったのか」

「え、薫も会ったことあるの…?」

「中学の時に私が1度、道に迷ってしまったってね……その時リサとよく似た子猫ちゃんに助けってもらったことがあったのさ」

「じ、ジブン、アキさんと仲良くしてたっす…!」

「麻弥ちゃん…?」

「中学生の時に楽器屋さんで困ってたら、いつも助けてもらった事があってそれから友達になったっす。先程から凄く容姿が似てるなってジブンも思ってた……」

今日初めて会う人ばかりなのに、アキの事を知ってる人が沢山いてアタシは思わず涙が溢れそうになる。

2年間もの間、アタシと家族、そして友希那との間しかアキを感じなかったの
にあの子はアタシが知らない間に沢山の人と関わってた。

ずっと、アタシが知らない間にあの子は自分の世界を広げてた。

その時、ガタンっと前でぶつかる音がして何かと思えばそこには真っ青な顔を
した沙綾ちゃんの姿。

「……………2年前…ライブの後……………私のせい…?」

「さーや…?」

「……………私がアキさんに病院来てって行ったから…事故に遭ったんですよね…?」

「……………それは」

何も言えない。アタシはそっと沙綾ちゃんから視線を外すしてしまう。

あの時、私が止めていれば事故に遭わずに済んだ。それか私が一緒に向かっていたら守ってあげられた。

でも沙綾ちゃんのせいじゃない、そう言い直そうと思って顔を上げた時には遅かった。

「ごめんなさい…！私のせいで、私が我儘なんて言うからアキさんは…！ごめんなさい、ごめんなさい…！」

「沙綾、落ち着け！沙綾…！」

「ごめんなさい、ごめんなさい…！私が私が…！」

「さ、さーや…！」

「違う！違うの、アタシがあの時止めれば良かった。だから、沙綾ちゃんのせい

じゃ……!」

「あの時、私がライブを優先してればアキさんは事故に遭わなかったんです……! 私がアキさんを……!」

沙綾ちゃんはカタカタと身体を震わせて、しゃがみこむ。

Poppin Partyちゃんの皆が落ち着かせようと声をかけてるけど、何にも聞こえてないのかひたすらずっと謝ってる。

このままじゃ、アタシみたいにこの子が壊れちゃう。

「……2年間も……私は……!」

「沙綾ちゃんのせいじゃない!」

アタシは大きな声を出して言うと、やっと涙がぐしゃぐしゃになってしまった顔

を上げてくれた。

少ししやがみこんで目線が合うようにすれば、沙綾ちゃんの自分を追い込んでる姿がいつものアタシに見えてくる。

駄目だよ、沙綾ちゃんまで壊れちゃ。

「……あの子は自分から沙綾ちゃんの元に行こうとした、それは我儘とかじゃなくてあの子の優しさなんだ。それに、アタシも止められなかった。あの場にいたのね……だから責められるのはアタシだけで十分だよ」

「……じゃあ、どうして私に教えてくれなかったんですか……？」

「……っ」

「……香澄」

「……さーや?」

「……ごめん、私ドラム出来ない」

「な、何言ってるんだよ! 沙綾……!」

「そうだよ、沙綾ちゃん……!」

沙綾ちゃんは悲しそうに、寂しげな笑顔を浮かべて口を開く。

アタシは嫌な予感がして、沙綾ちゃんの言葉を遮ろうとするけど間に合わなかった。

「……私はアキさんの時間を奪っちゃった、そんな私がドラムなんて出来ないよ」

「……で、でも……!」

誰も何も言えない。

アタシが同じ立場だったとしたら、アタシもきつと同じ選択をしてると思うから。でも、ドラムを辞めないでほしい。そんなのアキは求めてない。

そう伝えたいけど、口が思うように動かないのはアタシが弱いからなのかかもしれない。

アタシが悪いんだ、もっと優しく言えばよかった。いや、沙綾ちゃんに伝えるのが間違ってたのかもしれない。

アタシは沙綾ちゃんも同じように壊れるのが嫌だったのに、どうして何も出来ないんだろう？

その時、香澄ちゃんの後ろに立ってずっと黙っていた子が口を開いた。

「沙綾、それは違うんじゃない？」

「……おたえ……？」

「だって、そのアキさんって人は沙綾がドラムを辞めたら喜ぶの？一緒にバンドを組んでたなら、きっと喜ばないよ」

「でも、出来ないよ……。私のせいで、アキさんは事故に遭って入院してるんだよ？アキさんの時間や音楽を奪ったのに、私がバンドなんて出来ないよ……！」

そう吐き出すように叫ぶと、沙綾ちゃんはそのままアタシの前を通り過ぎて部屋を飛び出すように走って出ていく。

その後ろを香澄ちゃんを先頭に追いかけていったけど、アタシ達は何も出来ずにただただその場に立っていることしか出来なかった。

今日も隣にあの子はいなくて、ベースの音も聞こえない。

沙綾 あああああ！

もう、何も言えない。(自分が考えたのに↑)

それでは、また次回もよろしくお願いします。

Tenderness of the sunlight

体調を崩して薬を飲んだら倒れまして、まさかのテストを1日目しか受けられないという最悪な状態を迎えました。

やばいな、うん。赤点以前の問題。

そして、宅名でハリー・ポッターの小説を書き始めたのですが既にバレてる。なぜ。

TwitterのDMで『——って蒼井さんですよ？』って言われてビビりましたよ、ええ。

では、どうぞ。

沙綾ちゃんが飛び出して、それを追いかけていったPoppinPartyちゃんがアタシの横を通り過ぎていってからは誰も何も言えなかった。

このまま話を続けられるわけもなく、全員が一致で今日はこれで解散することになった。

アタシは友希那と帰りながら一人で後悔してた。あの時言うべきだって思っていたけど、あのタイミングで言うことじゃなかったのかもしれない。

予想は出来ていたのに、沙綾ちゃんと関わりが全く無いからどんな子なのか何て分からないけど、いつもアキがどんな子なのか話は聞いていたから。

『沙綾はね、とっても優しい子なんだ。自分の事より他人を優先する優しい子、でもそれがあの子の悪い所でもあるから目を離せないんだよね』

そう言いながら苦笑していたのをハッキリ覚えてる。

だからこそ、あの子をすれば自分のせいだって沙綾ちゃんが自分を責めてしまうのも分かっていたはずなのに。

「リサ」

「…ん？」

「リサがりサ自身を責めても駄目よ、山吹さんには戸山さん達いるのだから。それに、いつかは話さなければならぬ事だったのよ」

「…そうだね」

アタシは、友希那にそう言ったのが最後でそのままお互いの家の前で別れた。

《ガールズバンドパーティー》まで残り2週間ちょっとしかない。沙綾ちゃんが本当にドラムを辞めないようにするには、アタシに何か出来ることは無いだろうか。

ただただ、アタシはあの子からドラムをアキとの想い出を取り上げることしか出来ないの？

アタシは自分の部屋に入り、ベッドに座る。

静かな部屋が何だか居心地が悪く、CDプレイヤーの電源を入れて先月別で自分の分で購入したアキの好きなアーティストさんのアルバムを入れて音楽を流す。

CDプレイヤーから流れる曲は、先月に予約して受け取ったアキが好きなアーティストさんのアルバムの新曲である『Emotional Daybreak』。

アキの分は既にアキの机の上に置いてあって、今度友希那の2人でお見舞いに行った日に持っていこうと思っている。

アタシの目に止まった世界で俯いてる、誰隣にでもない僕妹の影を追いかけてた。♪
歌詞の一つ一つにアタシの気持ちに沿っていき、まるで今のアタシに何かを訴えるように聞こえてくる。

前に、このアーティストさん本人が詩を書いた曲は『knight·night』で『大丈夫だよ、頑張れ！』って寄り添うような意味を込めたって言ってた気がするけど、この曲は違う。

応援でもなく、別れを悲しむものでもなく、また違った意味な気がする。

※現実から目を背けて逃げ出したくなつては、居場所妹の姿を求め、心が叫んでる。※

絶対本来の歌詞に載せた意味や想いとは違うのに、アタシは歌詞に勝手に自分の

思いを載せてしまおう。

こんな駄目だ、こんな気持ちで聞いちゃいけないのに。

そう思っているのに、涙が溢れてきて素直な気持ちでこの曲を聞けない。

「……取り繕ってる言葉だらけ……聞こえる度、笑う事が上手くなった。……はは、アタシの事じゃん」

歌詞を口ずさみながら自嘲気味に笑う。

そんなアタシを壊してしまいたくなるけど、そんな時いつも優しく君妹は笑うんだ。

『自分を否定しないで』と言いたげに、アタシはあの子の笑顔を思い出す。

この曲はこんな気持ちで聞くものじゃない、きっとこれはこれから変わっていく、別の道を進むこのアーティストさんの今の気持ちを全部溢れないように載せた歌詞だ。

今のアタシのような状況で聞くのは間違ってる、そう思って音楽を止めようと立

ち上がったら、ある歌詞の部分でアタシの動きは止まる。

そう思ったら、そつと背中を押された気がした。

音楽が終わり、そのまたアタシは自分の部屋を出てアキの部屋へと入る。

そして何か沙綾ちゃんのためになるものがあるのでは、と思って探していると偶然あの子が事故にあった時に持っていた鞆が床に落ちて中身が出てしまう。

アタシはすぐに戻そうとしゃがんだ時、何枚かの封筒が目に入った。

「……山吹沙綾ちゃんへ……？」

封が空いていて勝手に見るのは良くないと思いながらも、中身を取り出してみる。

中には2枚の手紙が入っていて、沙綾ちゃん宛にアキが書いたものだった。

アタシはそれを見て心を誰かに掴まれたような感覚を感じて思わず手紙をギュッと握りしめしめすが、シワにならない程度だったので安心しつつ、アタシはすぐに家を飛び出した。

『山吹沙綾ちゃんへ。』

きつと、この手紙を読む頃は私が受験で一旦バンドを抜けた時だと思う。なっちゃんから渡されてるはずだけど、びっくりしてるかな？

学校が違って学年も違うのに、あの日偶然パンを買いに来た私をバンドに誘ってくれた時は本当に嬉しかったんだ。

ただただ、一人でベースを弾いていた私にバンドという楽しさをくれたのは紛れもなく沙綾です。

沙綾のお母さんや純くん、沙奈ちゃんの前でもずっとずっと頼れるお姉さんである沙綾は本当に凄いと思う。

でも、偶にでいいから私やバンドメンバーを頼ってほしいな。一応、私は先輩だしね！

甘えていいんだよ、沙綾だって頑張りすぎたらダメ。誰でもいいから時には休んでね。

これからは受験があって私はあまり会う機会減っちゃうけど、その間もドラムを続けてくれると嬉しいな。

私は沙綾が鳴らすリズムが本当に大好きで、一緒にリズム隊として組んでた時なんてもう最高だった。

CHISPAに戻れるかは何とも言えないし、もしかしたら皆バラバラになってしまったり、お互い別のバンドを組んでしまうかもしれない。

今は何とも言えなくて、これから先どうなるか何て私も誰も分からないけど、CHISPAの皆でまた集まろうね！

私にとって妹のような存在の沙綾、短い間だったけどバンドの仲間に入れてくれてありがとう。

最高の思い出と時間、そして仲間をくれた沙綾には感謝しかありません。

ドラムを続けてて辛い事なんて沢山あると思う、私もベースをやってて何度も辞めちゃうかなって考えた事があるからね。

でも、やっぱり辞めなくて良かったって思える日が必ず来るから。

音楽を続けてて、ドラムを続けてて良かったって思える日が必ず来るから、どうか辞めないでほしい。

長くなってしまったけど、これから先は沢山辛いこともあると思う。でも皆で頑

張って沢山の壁も全部乗り切って楽しい思い出にしていこうね、沙綾の事ずっと大好きだよ！

今井アキ』

この行動も間違いかもしれない、それでもきつとこの手紙は今の沙綾ちゃんに絶対必要だ。

暗くなった道を走り、商店街にあるやまぶきベーカリーに向かって走り続ける。今のアタシには救えない、今のアタシはきつと沙綾ちゃんを追い込むことしかできない。

自分の先に見えるのは、お店のシャッターを降ろそうとしてる沙綾ちゃんの姿。多分、今日の出来事を誰にも話さず普段通りに演技してるんだと思う。何で分かるのかって聞かれたら答えは単純だ。

だって、アタシがそうだから。

アタシは初めてきたパン屋さんの前にいる沙綾ちゃんの傍まで走って来ると、沙綾ちゃんも驚いている。

それもそうだ、昼間にあんなことがあった後なのに普通こんな時間になってまで会いになんて来ない。

それでも。

「……沙綾ちゃん……！」

「……はい。って、リサさん……!?!」

「これを渡しに来たの」

アタシは沙綾ちゃんの手にしっかりと、アキの字『山吹沙綾ちゃんへ』と書かれた手紙を渡した。

何とも言えない空気が流れる、けどアタシが出来るのはここまで。

多分、ここからはアタシじゃなくて沙綾ちゃんとPopPinPartyちゃん、そしてこの手紙を書いた今はここにいないアキしかきつと無理だ。

でも、あともう一個出来るとすれば。きっと。

「…あのね、沙綾ちゃん」

「…はい」

「沙綾ちゃんがその手紙を読んでからでいいんだ、もし良かったらアキに会いに行かない…?」

「……え」

「無理には言わない、でもきつとあの子は待ってるはずだから。沙綾ちゃんの事、本当の妹みたいに毎日アタシに話してくれてたんだ」

そう、出来るだけ笑顔で言うと言った沙綾ちゃんの目からポロポロと涙が溢れてくる。

アタシはギュッと抱き寄せて、背中を優しくポンポンと撫でる。

「……ごめんね、アタシのせいで。辛かったよね」

沙綾ちゃんは声には出さずに、首を横に振る。

アタシ達の背丈は大して変わらないけど、ほんのちよつとだけアタシの方が大きいように肩ら辺に沙綾ちゃんの頭が乗る。

それから暫くして落ち着いたのか、沙綾ちゃんはゆっくりアタシから離れた。

「…すみません、突然泣いちゃって」

「ううん、大丈夫。泣きたい時に泣いておかないと壊れちゃうよ？」

「……ふふ、アキさんにも同じ事言われました」

「双子だからね、考える事は同じなのかも。でも、やっと笑ってくれたね」

「……あはは、リサさん」

「ん？」

「リサさんも無理しちゃダメですよ」

「……あー、そんなに分かりやすいかなアタシって」

「いえ、全然分からないですけど昼間の私と同じ顔をしてたので。多分、私がか
るってことは湊さんにはバレバレだと思います」

「あちゃー、アタシも上手く隠せてると思ったんだけどな」

「アキさんにリサさんの話は聞いてたので少しだけ分かりました」

「あの子はいったい何を言ってるのかな……」

蘭にも言われたけど、あの子はいったいアタシの事をどれだけの人に言ったのやら……。

沙綾ちゃんは大事そうにアキからの手紙を見ながら、口を開いた。

「……私、今でも自分のせいだって思うんです。あの時、私が我儘を言わなければアキさんは事故になんて遭わなかった」

「……それは……!」

「……分かってます。分かっているんですけど、それでも思わないと私は許せないんです」

悔しそうに、それでも悲しそうに笑う沙綾ちゃんに何も言えない。

アタシもそうだ、あの時止められなかった自分を許してしまったらアタシはきつと何も出来なくなる。

居眠り運転した相手を恨みたくても、もう捕まってるから恨むに恨めない。

あの居眠り運転さえなければ、なんて何度考えたか分からない。

時間を確認すれば、そろそろ帰らなければいけない。

アタシは沙綾ちゃんの方に視線を向けると、察してくれたようでこくんっと一度頷いた。

「リサさん、この手紙を届けてくださってありがとうございます」

「ううん、きっとそれは沙綾ちゃんが持つものだから。アタシは何もしてないよ」

「それと、昼間はすみません。私も余裕が無くて……」

「……謝らないで、アタシも沙綾ちゃんと関わりがないとはいえ教えてあげればよかったですね。ごめん」

「いえ、きつとあの時の私が聞いたらそれこそバンドなんて組んでないと思います。アキさんには怒られそうですけど」

確かに、なんて思いながら2人で笑ってからアタシ達は連絡先を交換してからその場を後にした。

正解だったかなんて分からない、今日の行動でもしかしたら沙綾ちゃんはドラムを辞めてしまうかもしれない。

さつきはあんな風に笑ってはいたけど、本当の所は全く分からない。

それでも、今アタシが出来る事は出来たはずだ。

あの子は、沙綾ちゃんに壊れちゃいけない。アタシと同じ道に進んじゃダメなんだ。

そう思っていたら突然スマホが鳴った。

『Saaya:リサさん、さっきは本当にありがとうございました。今度、一緒にアキさんに会いに行かせてください』

アタシはその文を見て、もう大丈夫かもしれないと思いきすと笑う。
大丈夫、沙綾ちゃんを壊すことだけはしたくない。

「『もちろん、一緒に行こっか☆』……よし！」

メッセージを打ち返して、アタシはスマホをポケットに入れてから急いで家に帰った。

まだドラムを辞めてしまわないか確信はない、でも昼間よりは大丈夫な気がする。
アタシのお節介かもしれないけど、ここからはきっとアタシが出来ることはない。
家の前までついて、深呼吸を一度する。

『リサ、貴方は一人じゃないのよ』

『お互い頑張りましょうね』

『リサさんも無理しちゃダメですよ』

「……ごめんね、アタシはもう手遅れだから」

幼馴染と可愛い後輩、妹が仲良くしていた子の姿が脳裏に映る。

けど、アタシはその姿を頭を軽く振って消した。

誰かにいうわけでもなく、誰かに縋り付くわけでもなく、アタシは家のドアを開けて声を出した。

誰にもバレないように、皆が思うお節介で元気で明るい今井リサでいるように笑顔を浮かべて。

「ただいまー！」

今日もあの子は隣にいないくて、あの子の音も聞こえない。

アタシの中で何かが崩れ落ちて行くのを、もう止められない。

FNS歌謡祭、Roseliaおめでとー！

本音を言ってしまったら、ゆりしいも出て欲しかったけど…あけしゃんのキーボード姿が見れますからね、幸せです。

では、また次回もよろしくお願ひします。

Disappearing ultramarine blue

——手を伸ばしても届かない。

刻一刻と迫る時間という魔の手はすぐ傍に。

ママが泣いてる。

お風呂から出て自室へと戻ろうと階段を上った時、リビングから廊下に聞こえた。多分、家全体が静かだった事もあってだろう。普段なら聞こえないし、アタシの前では見せない母の涙が見えて辛そうな声が聞こえる。

何があったんだろうか。

何か大切なものでも壊してしまったのか、それとも怪我をしてしまったのか。

アタシは気になってリビングに慌てて入ろうと扉を掴んで開けようとした時、ママ以外の声が聞こえた。

その声は聞き慣れ、時には厳しく時には落ち着かせてくれる優しいパパの声だ。

「大丈夫、大丈夫だ。まだ時間は残ってる、信じて待とう」

「…分かってる、分かってるわ。でもね、もう無理よ……。リサもずっと私達や友希那ちゃんの前でも笑顔で居てくれるけど、部屋ではずっと泣いてたりしてるのよ……。？」

「…ああ、リサが一人で我慢してるのも知ってるよ。だからこそ、親である私達はあの子達の前では笑わないと」

「……そうね、でも何であの子ばかりが……！」

「……まだ1週間ある、2年もあの子は頑張ってくれたんだ。もう少しで起きてくれるよ」

アタシは扉に伸ばしていた腕を降ろして、ゆっくりとその場から少しずつ離れる。具体的にママが泣いている理由は分からない、でもアタシは分かってしまったんだ。

パパの『まだ1週間ある』という言葉で全て察してしまった、アタシだって鈍感じゃないし宣告されたあの日からこんな日が来てしまうんじゃないかって何処かでは分かっていた。

静かに聞いていたことをバレないように階段を登って自分の部屋へと向かう。暗い廊下を歩き、静寂に包まれてる部屋に入ろうと扉を開けて入り、ズルズルと閉じた扉に寄りかかりながらしゃがむ。

お風呂から出て髪の毛を乾かしてない状態だから顔を膝に埋めると、水が滴り落ちてくる。

暑いからと思ってつけっ放しにしていたエアコンで、キンキンに冷えている部屋

の中に濡れた髪の毛でいるからか、だんだん身体が冷えてくるのを感じる。

髪の毛を乾かさなきゃいけない、じゃないと風邪をひいてしまう。ライブまで1週間しかない、今風邪をひいたら友希那や紗夜に怒られるし、あこや燐子に心配をかける。

でも、どうしても身体が動かない。頭では分かっているのに、心や身体がそれを否定する。

「……てよ」

思わず、ポツリと言葉を零す。

アタシの声は思った以上に小さくて、部屋には全く広がらずに足元で消えていく。唇を噛み、アタシは自分の両手を頭に置いて泣き叫ぶように声を出した。

「……助けてよ……!」

誰にとは言えない、縋り付くのも出来ない。

アタシの声は、本音は防音となった自室にだけこもって外には出ずに消えていく。ねえ、どうして？

そこまで難しい事は頼んでないじゃん、アタシはただ妹の笑った顔が見たいだけ。あの子がもう一度楽しそうに笑いながらベースを弾いたり、バスケットをしたり、何気ないあの日常をもう一度送りたいだけなのに。

どうしてその願いは誰にも届かず、誰にも気付かれないの？

ねえ、本当に神様がいるなら。あの子は何も悪いことをしてないのだから助けてよ。

誰でもいい、あの子ともう一度ごく普通のただの日常を過ごさせてよ。

「……何で、なんで……！」

ベースの音を失って、アタシはあの子との唯一の繋がりが消えてしまったと思ったら今度は妹まで失うのか。

やめて、アタシからあの子を奪わないで。

あの日アタシが悪かったのはわかっている、だからどんな罪も罰も受け入れる。でも、あの子が何をしたというの？

何もしてない、あの子は沢山の人を救って笑わせていたのにあの子からどうして自由を奪うの。

アタシが悪かったのならアタシに罰を与えればいい、あの子にこれ以上の罰を与えて誰が喜ぶのだろう。

そう思っていた時、スマホに通知が鳴る。

誰だろうと思ったけど動く気になんてさらさらなれず、無視をしているけど一向に止まない。

何とか身体を動かして、スマホの画面を見ればメッセージの通知ではなく着信のようだった。

「……沙綾ちゃん……？」

相手は先週連絡先を交換したアキ繋がりで知り合った後輩。

何だろうと思っただけ通話ボタンをタップし、耳元にスマホを当てる。

「…もしもし？」

『すみません、リサさん。突然電話なんて掛けてしまって……』

「ううん、ダイジョーブ。それでどうしたの？何かあった？」

『……窓を見てください、そしたら多分ですけど分かります』

そう言われてアタシはスマホを耳に当てながら、窓へと目を向けるとある光景に驚いてスマホを落としそうになる。

そこには、夜だというのにカーテンが開けっ放しのドアの外であるベランダを通り越した先。

そう、友希那の部屋がある視線の先だった。

「……ゆき……な……」

『……湊さんから連絡があったんです、リサさんの事をお願い出来ないかって。急にどうしたんですか？って聞いたたら、アキさん関係の事だって言われて……』

視線の先には何とも言えない表情と、何処か悲しそうにでも怒っているような眼差しでアタシを見ている友希那の姿。

多分、夜になったからカーテンを閉めようとした時にアタシの事を見たのだろう。そして沙綾ちゃんにお願いする辺り、アタシが誰にも頼らないからアキ関係で似たような状況である沙綾ちゃんに連絡したんだと思う。

「……大丈夫だよ、何でもないから！ごめんね、変に心配かけちゃったよね。友希那にはアタシから大丈夫だって連絡しとくよ」

『……リサさん、その言葉本当に信じていいんですか？』

「……え、何言ってるの？アタシは大丈夫だって！それより沙綾ちゃんこそ、無理してるんじゃない？」

『私は大丈夫です、まだ辛いですけどドラマは続ける事にしました。香澄やリサさん達が話を聞いてくれたので、前よりは楽ですよ』

「……そっか、それなら良かったよ」

『リサさん、そろそろ本当の事を言ってください……。何も出来ずに、ただただ見てる事しか出来ないのって辛いんですよ……？』

そんな事、アタシが一番知ってるよ。

すぐ隣にいた幼馴染が辛い時に、アタシは何も出来ずに傍観しているだけしか出来なかった。

妹のあの子の目の前で、何も出来ない自分の姿だって何度も見てる。

『…湊さんから話は聞いてます、ベースの音が聞こえないって。それも紗夜先輩と湊さんが気付くまでずっと隠してたって事も』

窓の先にいた友希那はもう見えない。

カーテンを閉めてしまって、もうアタシは姿を捉える事は出来ない。

沙綾ちゃんの言葉だけが頭に響いて広がっていく。

「…あはは、そっか。聞いちゃったか、もう友希那も隠し事が出来ない子だなあ」

『はぐらかさないでください、本当は大丈夫じゃないんですよね？先週だって……』

「……2年」

『…え?』

「……2年って、すごく長いんだ。皆にとって普通の生活を送ってる人達にとっては早くて、あつという間だって言うけどアタシにとって2年は長い長い夜なの」

もう、止まらなかった。一度決壊した壁を治せるほどアタシの心は平常じゃない。とつくに狂ってるアタシを一度動いてしまったのだから止められるわけがない。言うつもりなんてなかった、外に出すつもりもなかったはずのアタシの本音が口からどんどん溢れ出す。

「……あの子が、アキが何をしたっていうの。ただ皆と同じように笑って、苦手な人付き合いを治そうって頑張って沢山の人と触れ合って、話して世界を広げてただけじゃん。なのに、何であの子だけがこんな目に遭わなきゃいけないの…?」

『……リサさん』

「……ねえ、どうして？あの子との唯一の繋がりだったベースの音は聞こえない、あの子が好きでアタシも好きになったアーティストさんの曲を聴いても喪失感しか感じない、隣にあった温もりも消えて、今度はアタシからあの子を届かない場所に連れていくの……？」

『……』

「……救えなかったアタシに大して罰を与えればいい、それが普通じゃん。ベースの音が聞こえない事が罰の一つだと言うなら、アタシは喜んでそれを受け止める。でも、あの子が受けてる事の方が重くて、辛いのはどうして？何で、何でアキばかりがあんな目に遭わなきゃいけないのさ……!!」

止めどない本音と涙、涙のせいで視界はボヤけているし、気力も出ない。

スマホの向こう側でアタシの言葉を聞いている沙綾ちゃんは何も言わずに、ただただ黙ってアタシの言葉を聞いている。

教えてよ、アキがどうしてあんな目に遭わなきゃいけない理由を。

アタシが納得するような理由を誰か教えてよ。

「……アタシが事故に遭えばよかったんだ、そうしたらアキはベースを楽しく弾けるしバンドも続けられた。沙綾ちゃんとだって離れずに済んだ」

『そんな、それは違います…！そんなの、絶対アキさんは望んで…！』

「……ねえ、沙綾ちゃん。姉って妹にとっては格好良くて憧れる存在でしょ？」

『……それは…』

「……アタシは妹のあの子を助けてあげられなかった、姉として何もしてあげられなかった。そんなアタシがのうのとあの子が好きな音楽を、ベースをバンドを続けるなんて許されないよ」

『……リサさん』

「……ごめんね、嫌な事聞かせちゃって。もう夜遅いし、沙綾ちゃんに迷惑かけたくないから電話切るね」

『ま、待ってください……！』

「……ごめん。アタシ、もう無理なんだ」

『リサさん……！まだ、まだ希望はあるんですよね……？それなら私も一緒に待ちますから、頑張りませんか……？』

「……1週間」

『……え？』

「……あの子には後1週間しか残ってない」

スマホ越しで沙綾ちゃんが息を呑んだのが分かる。

伝えたくなかったはずなのに、アタシは何も言ってるんだらう。

膝から顔を上げて、誰かに向けてる訳でも無いのに自嘲気味に笑った。

「……1週間後ってね、丁度ライブの日なんだ。その日が本当の最後かもしれない、アキをアタシは救えない」

『……どうして諦めるんですか！そんなの、リサさんらしくないです！』

「……諦めるしかないじゃん、アタシはあの子を傷付けることしか出来ないんだよ
!?! 助けるなんて、医者じゃないアタシには出来ない!!」

『じゃあ蘭へ言った言葉はどうなるんですか!』

「……それは……!」

『音楽で、音で伝えるって言ってたじゃないですか! アキさんに♫ベースの音で伝える♫って言ったのはリサさんです!』

沙綾ちゃんの言葉にアタシは何も言い返せない。

確かにアタシはあの時、蘭に『アタシはベースの音で伝える』と言った。
だって、こんな時間が無いなんて思わなかったんだ。

確かに宣告はされてたけど、まさか残り1週間だなんて誰が想像出来る?

『私はドラムで届けます、アキさんに私がどんな風に今までを過ごして、どんな思いでいるのかを一人のドラマーとして病室にいるアキさんに伝えます。最後の最後まで諦めるなんてしたくない…!』

「……っ」

『……ベースの音だって届けられるはずです、リサさんはその為にもう一度ベースを始めたんじゃないんですか…?』

「……アタシ…は…」

スタンドに置いてある深紅のベースに視線を向ける。

そこには変わらず、部屋の照明で輝くアタシの分身とも呼べるベースが置いてある。

アタシは1度、ベースを手放した。

その理由は、幼馴染とそのお父さんの2人の間に流れる特別な空気に追いつけないと分かったからだろうか、それとも幼馴染が持つ才能を感じて無理だと悟ったからか。

もつと別でアタシ個人がネイルなどオシャレに興味を持って、音楽から自然と離れたからか。

今上がったものは、確かにどれもアタシがベースから離れる理由の一つだ。

でも、根本的なものは違う気がする。

幼馴染とのお父さんだけしか感じられない空気も、幼馴染の持つ才能を隣で感じてるのは確かに辛いと感じる時はあった。

けど、アタシがベースから離れようとした最初の出来事は同時期に始めたはずなのに、アタシよりもどんどん上手くなっていくアキへの嫉妬だった。

紗夜の気持ちは本当に良くわかる、アタシもアキに対してベースやそれ以外でも《双子》という枠などがあって劣等感を味わった。

なのに、その劣等感を味わうきっかけになったベースを再び握り、嫉妬していた

アキから授かった技術でベースを弾くアタシは矛盾しか感じられない。

「……アタシは、…あの子と少しでも近付きたかった。遠く離れてしまったアキと更に事故で離れて、少しでも届けて思っ、ベースを……」

そう、それが本当に再開した理由。

友希那がバンドメンバーを探していたという理由も勿論あるし、友希那の傍で見守ってあげたいと思ったから Roselia のベーシストとして始めたのも理由だけど、全部が全部じゃない。

『……それなら駄目ですよ、諦めるなんて。私よりもリサさんはアキさんに届くはずです』

「……うん」

『…あの、ごめんなさい。先輩であるリサさんに上から目線な事ばかり言ってしまつて……』

「…うん、逆にありがとう。アタシ、沙綾ちゃんに言われなかったら間違つた方向に言つてたかもしれない」

『その言葉は私じゃなくて湊さんに言つてください、私はリサさんに伝えたかった事を伝えただけですから』

「…うん、友希那にはアタシから言つておくよ。こんな遅い時間までありがとうね、沙綾」

『っ！……いえ、私も突然の電話すみませんでした』

「大丈夫だよ、それじゃあまたね」

『はい、おやすみなさい』

「うん、おやすみ☆」

電話を切って、耳からスマホを離してだらんと腕を床に伸ばす。

濡れていた髪はエアコンの風で冷たくなり、タオルに滴り落ちていた水は止まっている。

いつの間にか涙も止まっていて、心無しか沙綾から電話が来る前よりも身体は軽く動く。

狂ってしまったアタシをすぐに治すことなく不可能だ、でも狂ってしまったベースの音が聞こえなくても届ける事は出来るのかもしれない。

「……アタシに力を貸してくれる……?」

ゆっくりとベースに近寄って、そっと深紅のボディを撫でる。

ベースは少し光って、まるでアタシの言葉に答えたようだった。部屋の照明で偶然視覚とかで光ったのだろう、でもそれがアタシにとって『もちろん』と答えてるように感じた。

今日もあの子は隣にいないし、ベースの音も聞こえない。

でも、崩れ落ちていたアタシの何かはあの子が妹のように接していた子と幼馴染の小さな力によって塞き止められた気がした。

全て本編に書いたので余計な事は書かずに簡潔に。

次回も宜しく願います。

Concerto played by 25 girls.

大変遅くなりました。

期末テスト後に投稿予定でしたが、身内に不幸事があり時間が取れませんでした。なので、ちょっと急ぎ気味で書いたので違和感があるかもしれません。

また後で訂正すると思います。それでは、どうぞ。

重たい体を起こし、襲ってくる睡魔とその睡魔に身を任せようとする自身を無理やり押さえ込む。

カーテンから溢れる朝日が、部屋全体を包み込んで直射日光を避けるために少し端の方に置いてある自分の分身ベイスも溢れた光を反射している。

机の上に設置してるミニカレンダーに前日までは赤色のペンでバツ印が書かれ、

今日の場所には『ラストチャンス』と赤色で書いてある。

「……今日……かあ」

立ち上がり、カーテンを開けて溢れていた光を部屋全体に放つ。

クローゼットを開けて昨晚のうちに決めておいた服を手に取り、ベッドに置いてからアタシは廊下に出るために扉に手をかける。

廊下に出て階段を降りていけば、だんだんとカチャカチャと金属と金属がぶつかり合う音や何かを焼く音、お湯が沸いた音が聞こえる。

リビングに入ろうと扉を開ければ、休みを取ったパパがママを手伝いながら朝ご飯を作っていた。

あの後ろ姿を見ていたら、アタシは居てもたってもいられずキッチンに駆け寄る。

「……おはよう、アタシも手伝うよ！」

「おはよう、リサ。パパが手伝ってるから大丈夫だよ、今日はライブなんだろう？」

「…うん、ごめん。最低な姉だよ、アキがこんな状態なのにライブに出るなんてさ……」

アタシはコーヒーを入れようと用意していたカップを、一度置いて顔を伏せる。沙綾に言われてから1週間、アタシは今まで以上にベースに打ち込んだ。それはもう、あの紗夜と友希那に止められるほどに。

そして遂に今日がライブ当日。

でも、アタシは正直パパとママに顔を向けられなかった。

だって自分の妹が、アキが今日目覚めなかったら本当に二度と会えないのに傍にいないでライブに出ようとしてるのだから。

「リサ、それは違うわ」

「…ママ？」

朝ご飯を作っていた手を止め、ママは私に向き直るときぎゅっと抱き締められる。突然の事でアタシはどうすればいいのか分からず、恐る恐るママの背中に腕を動かす。

パパは何も言わずにいつもの優しい笑顔で見つめてるだけ。

「ライブに出ることはリサしか出来ないことなのよ？それに貴方がベースから離れて、ママはずっと後悔してたの」

「え…？」

「アキはいつも寂しそうにしてたけど、リサ自身も寂しそうにしてたのを気付いていたのに何もしてあげられなかった。でも、アキが事故に遭って貴方が『もう一度ベースを弾くためにバイトしたい！』って言ってくれた時は本当に嬉しかったの」

優しく背中を撫でられながら、ママは普段よりも優しい口調で言葉を綴る。

目頭が熱くなり、このままでは零れてしまいそうでアタシは零れないようにママの背中に伸ばした腕に力を込める。

ずっと黙って見ていたパパが今度はアタシの頭に手を乗せ、嬉しそうな顔で笑った。

「パパもだよ、またリサが楽しそうにアキのために弾いてるのを見て嬉しかった。だからこそ、今日はライブに出なきゃいけない。アキに伝えるんだろう？」

「…うん、伝えたい。ううん、アタシじゃアキの実力に及ばないけど必ず届けるよ」

「ふふ、それでこそうちのお姉ちゃんね」

「ああ、そのいきなりサ。それでね、パパとママからお願ひがあるんだが聞いてく

れるかい？」

「お願い？」

アタシは予想外の言葉にきょとんっとしてしまう。

何だろう、連絡の事ならアタシよりも先に出番がある沙綾にアタシがライブ中は携帯を預けるから連絡は付くようにするつもりだけど、他に何かあるのかな？

「アキのベースを、ライブハウスに持って行ってくれないか？」

「……え」

アキのベース。

今もアキの部屋にスタンドに立てかけていて、以前弾いた時にまるで『自身の主人ではない』と言われたように弦を切ってしまったあの子の分身。

今はもう、友希那のお父さんが張り直してくれていたようで綺麗に直っているけど急にどうしたんだろ。

それ以前にアタシは、あの子の分身に触れてもいいのだろうか。

そう思い、アタシは固まっているとパパとママは何かを察したのかクスツと笑った。

「あの子にリサのライブを見せてあげてほしいんだ」

「……あ、でも……！」

「ママからもお願い。ママとパパはライブ見に行つてあげられないけど、あの子のベースはきつと今でもアキを待ってるはずだから」

アタシは考えた。

きつと、2人は本当に願っている。どうする、アタシにあの群青色のベースに

触れる資格なんて無いのに。

ううん、資格なんて関係ない。沙綾にも友希那、蘭と沢山の人に言われたじゃん、資格とかじゃなくてアタシが出来ることをしてあげなきゃ。

アタシはパパとママの顔を見て、頷いた。

「…分かった、持っていくね」

「ありがとう、リサ。パパ達は病院にいるから何かあったら電話するよ」

「うん、絶対電話してね。すぐ行くから」

それからパパとママがご飯を準備してる間に、アタシは顔を洗って髪の毛をいつもの髪型にセットして、久しぶりに皆で談笑しながら食べる。食べ終わってからアタシは一旦部屋へ戻った。

そして、ベッドに置いておいた服に着替えて鏡で身支度を確認してからスタンド

に立てかけてある深紅のベースを一撫でする。

「……ちょっと怖いけど、こんなアタシだけでもアキに届けたい。その為に、力を貸してくれる……?」

なんて言葉にしてみても何も返ってこない。

でも、その瞬間に開けておいた窓から突然ふわっと風が吹きアタシを包む。

もしかして返事をくれたのかな?

そう思い、クスツと微笑んで「ありがとう」と言ってから丁寧にケースに入れて背負う。

ズシツと肩に重さが伝わり、アタシは深呼吸してから持ち物を持って廊下に出て隣の部屋へと入る。

若干薄暗い気がする部屋の奥にある群青色のベース、変わらずに置かれてるベースを見てアタシは何とも言えない気持ちになる。

ベースの前でしゃがんで、スタンドからベースを離してケースに入れようと思っ

たけど一度その手を止める。

ダメ、その前にやることがある。

「……この前はごめんね、突然知らない人に触られて驚いたよね。けど、今日は貴方の主人——アキにアタシの音を、思いを届けたいの。その為に力を貸してくれるかな……？」

そう言うってからネックへと手を伸ばせすが、前のように指先に痛みを感じることはない。

アタシはホツとし、思わずふうーと息をついてから「ありがとう」と呟いてから丁寧に壁にかけられていたカバーを手にとって入れていく。

そして、傷付けないようにそっとチャックを閉めて同じように背負う。

本当は2本専用のケースとかに入れるのが一番だけど無いからアタシがゆっくり歩いたりして気をつけるしかない。

廊下に出る前にアキの机にある写真に目を向ける。

そこには笑顔で赤色のベースを握るアタシと群青色のベースを握るアキ、そして友希那の姿。

懐かしい、そう思ってしまうほどに時間は経っていた。

もう一度、この時のような景色を見ることは出来るのかな。

「……必ず、届けてみせる」

アタシはそう誓ってゆっくりとアキの部屋から出て階段を降りていく。

すると、玄関前には既にパパとママが待っていてくれた。

アタシは慌てそうになるが背負っているベースを思い出し、何とか冷静に降りる。

「頑張ってるね、リサ。アキに伝えてきなさい！」

「リサ、思いっきり弾いておいで。アキはパパ達に任せて、リサにしか出来ないことをしてこい」

「うん、ありがとう。…行ってきます！」

靴を履いて、玄関の扉に手をかけて後ろに振り返ってからアタシはそう言う。

2人は笑顔でアタシを見送ってくれて、背中を押されたように家から出れば既に友希那が玄関前で待っていた。

何か、デジャブを感じるけどきつと気のせいだよね。

「ゆーきな！おはよ！」

「おはよう、リサ。…ベースが2本？」

「1本はアキのだよ」

「…え？」

「パパとママにお願いされたんだ、ライブに持って行ってほしいって」

アタシがそう言えば友希那は何か考えるようにして、すぐに納得したような顔でアタシに微笑んでから歩き始めた。

アタシはそんな友希那を追いかけるように少しだけスピードを出す。

「なら、しっかりと今まで以上に演奏しなかったら怒られそうね」

「そうだね」

「……リハーサルも練習も今まででも本気だったけど、今日は全力を出し切るわよ」

「もちろん！」

それからCircleに着いてすぐRoseliaの皆と合流した後、今回出演する全バンドと合同の最終打ち合わせとリハーサルを終らせて楽屋で過ごしていた。

あの子のベースは既にアタシのベースの隣に置いてあって、あこが「カッコイイ！」と燐子と話しながら眺めている。

「ねえねえ、リサ姉ー？」

「どうした〜あこ？」

「これがアキさんのベースなんだよね？」

「あこちゃん…それは…あんまり聞かない方が……」

「あはは、燐子大丈夫だよ☆そうだよ、そのベースがあの子の」

「お祭りでライブしてる所見たけど、やっぱりカッコイイ！」

そっか、そう言えば巴が和太鼓で出てたもんね。あこもあの場にいたんだ。

アタシはそう思いつつ、髪飾りを整え直しているとコンコンつと楽屋の扉が叩かれる。

友希那が「はい」と答えれば、入ってきたのは沙綾と蘭やモカ達 After girl
owの皆。

そして、一点を見て驚いた顔をしてからすぐに納得したように笑った。きっと、アキのベースを見たんだろう。

「リサさーん」

「モカ！どうしたの？」

「すみません、ただ一言伝えておきたくて」

「一言？」

沙綾の言葉にアタシが首を傾げると、紗夜にため息をつかれてしまう。

え、アタシ何か失礼な事言ったかな…？

友希那や憐子、あこにまで呆れられてしまう。

皆して酷くない!?

「あたし達も届けられるように頑張ります」

「っ!？」

「なーんて、思ってるのはあたし達だけじゃないですけど」

「…うん、ありがとう。アタシも頑張るね」

「そろそろ起きてって伝えてます」

沙綾がそう言うと同時に香澄達が来て、笑顔で中に入って沙綾に抱きつく。
え、ちょ、そろそろライブ始まるよね!?

「さーや、そろそろ準備だつてー!」

「あ、もうそんな時間なんだ。それじゃあ私は失礼します」

「え、ええ……」

友希那が困惑しながら答える。そんな友希那に蘭が「……湊さんもあんな風になるんだ」って零してたのは気付かなかったフリしとこーっと。

沙綾達 Poppin Party ちゃんがトップバッター、次にハロー、ハッピーワールド！に続いて日菜がいる Pastel*Palette、そして蘭達 Afterglow、最後にアタシ達 Roselia と終わる。

そう考えていたら気付けば、蘭達は楽屋に戻っていたようで既に目の前からいなくなっていた。

何か、急に静かになったなあ。そのお陰でどんどんアタシ達の出番が近付いていて、携帯を見るけど何の連絡も来てないことにホッとす。

失敗出来ない、やれることは全力でやらないと……。

「今井さん」

「紗夜？」

「大丈夫ですよ」

「…へ？」

「貴方は一人じゃないですから、姉として背負う物が沢山あるのは私も分かります。でも、一人の友人として背負えるものは私達にも背負わせてください。それを教えてくれたのは紛れもなく今井さん、貴方です」

「そうだよ、リサ姉！あこも支えるよ！」

「私も…力不足かも…しれないですけど…今井さんを…支えますから…」

「私もよ、リサ。偶には頼りなさい、アキと大して変わらないわよ？」

「…あはは、うん。皆ありがとう」

また顔に出てたかな。最近、友希那には前からだったけど更に紗夜とかにバレや

すいんだよねー…。

まあ、でもそれはそれで良かったりするからアタシは何にも言えないんだけど。そう考えてたら肩から余分な力が抜けた気がする。ああ、アタシ緊張してたんだ。楽屋に設置されてるテレビに映像が映り始めた。

ライブが始まったんだ。

『今日は私達のライブ、ガールズバンドパーティーにようこそ！』

『私達だけじゃなねーけどな』

『あはは、ほら香澄。そろそろ始めよっか』

『あ、そうだった！最初は私達、Poppin PartyでTime Lapse
e』

各グループ4曲ずつで組まれたセットリスト。

他のバンドがどんな曲で組んだのかアタシ達は全員知らない。

何でも、まりなさんが「演奏側も楽しまなきゃ！」という事でリハーサルもバラバラに行われたから。

アタシ達のセットリストは、初めが有名なアニメの主題歌である『魂のルフラン』で、2曲目はオリジナル曲の『Rebirth day』、3曲目に『Determina』、そして最後にアタシ達の初めてのオリジナル曲である『BLACK SHOUT』だ。

Poppin Partyちゃんの最後の曲が始まる。

そう思っていたらヴォーカルの香澄ちゃんではなく、ドラマターの沙綾がマイクを
持った。

何だろう、MCかな？

『次で私達Poppin Partyの曲は最後になります、この曲は私達皆で考えた曲で大切な曲です。そして、今日は私にとって大切に大好きな先輩に送ろうと

「思います！」

「っ…！」

『今は理由があつて離れ離れになつてしまつてるけど、必ずまた会える事を願つて今も私の全力を出し切り最後まで駆け抜けて、次のバンドに繋がります。それでは聞いてください、♪前へススメ！♪！』

聞いてないよ、こんなの。

アタシは視界が歪み、ぼやけてくるのが分かる。

そつと誰かに背中を撫でられ、驚いて振り返れば友希那が優しく微笑んでる。

そしてゆっくりと口を開き、驚くことを告げられた。

「今日のライブ、セットリストに1曲は必ずどのバンドもアキに送る曲を用意してるのよ。リサには黙っておこうって意見が一致したから黙っていたけど、山吹さ

んの提案よ」

「……うそ。え、じゃあまさか……?」

「ええ、瀬田さんがいるハロー、ハッピーワールドも美竹さん達Afterglow、日菜がいるPastel*Paletteも1曲入れてるわ。もちろん、私達も」

「日菜が勝手に病院まで追いかけたことを反省したようで、その謝罪とアキさんに早く会って話してみたいからと白鷺さんや大和さんと決めてバンドメンバーにお願いしたそうです」

紗夜も友希那の隣に立って、優しく微笑みながら教えてくれる。

燐子もいつもの笑顔で、あこと一緒に紗夜の隣に立ったと思うと口を開いた。

「奥沢さんからも…聞きました……。瀬田さんだけじゃ…なくて…弦巻さんが…アキさんに笑顔を…届けたい…って言ってたみたいで……」

「お姉ちゃんもだよ！お姉ちゃんは1曲じゃなくて、全部伝える！って言ったんだ！」

「……皆」

アタシは泣いた。

皆がそんな風に考えてくれていたなんて思わなかった、気付きもしなかったから。ライブはどんどん続いて、ハロー、ハッピーワールドの皆はアキに向けて『ひまわりの約束』を、Afterglowの皆は『Scarlet Sky』、Pastel*Paletteの皆は『Secret base 君がくれたもの』。

そして遂に、アタシ達の出番がくる。

今アタシ達Roseliaの目の前でAfterglowの皆が歌っている。『S

Carlet Sky』の最後のサビに入った。

あと少ししたら、アタシがあの場所に立つんだ。

もう戻れない、やるしかない。失敗は許されない。

そう思って沙綾に預ける予定のスマホを握る力が強くなるが、すぐに誰かに手を触れられる。

「…リサさん」

「…沙綾？」

「大丈夫です、絶対」

「っ…うん、これお願い」

「はい」

携帯を沙綾に渡し、アタシは一緒に持ってきていた群青色のベースをまりなさんに許可を得た場所にスタンドを置いて立てかける。

蘭が最後のMCをやっている間に、アタシは群青色のベースをひと撫でしてから眩いた。

「——行ってきます」

「リサ」

「うん！」

円陣を組むように丸くなって、手を皆で前に差し出して目を合わせる。

大丈夫、絶対に。届けてみせる、だからもう諦めない。

「行くわよ、Roselia！」

「「「ふぁいていーん！」」」

ステージから下がったモカと目が合い、ふっと微笑む。

手を差し出され、アタシは何かと思っただけですがすぐに察して思いっきり笑って手を出してハイタッチする。

「リサさん、あとはお願いしまーす」

「もちろん！」

暗くなったステージを真っ直ぐ歩いてアタシが立つ場所に置かれた深紅のベースに触れ、盛り上がって熱くなってる歓声の中を立つ。

皆が繋げてくれたバトンをしっかりとアタシ達は握った。

大丈夫、アタシは一人じゃないから。

パッと眩しく友希那にライトが当てられ、友希那は堂々とマイクを握って口を開いた。

「——貴方達、Roseliaに全てを賭ける覚悟はある？」

今日もあの子は隣にいらなくて、音も聞こえない。

けど、アタシは必ず届けてみせる。アタシの大切な人に。

本編が何か完結を感じさせるような感じですが、まだ完結しませんよ!?

書いてる自分がそう思ってしまった…。

では、また次回も宜しくお願ひします。

備考

何と、Roseliaのファンミーティングが当たりました！

良かった、3枚しか積みなかったので1枚だけ当たった昨日は叫びました。はい。

明坂さんの姿が見れるのが幸せだ……！（；ω；）

Dawn of ultramarine and crimson

——忘れないで。

私はいつでも、お姉ちゃんの隣にいる事を。

聞こえない、やっぱりあの子の音は聞こえないけどアタシは手を止めずにひたすら弦を弾く。

アタシの後ろで奏でられる燐子の綺麗なキーボード、斜め後ろで力強く叩かれて
いるあこのドラム。

アタシと反対側で鋭く、でも的確に音を掻き鳴らす紗夜のギターとアタシの隣で存在感のある強い歌声を出す友希那。

ここにいる誰もが、今までのが比べ物にならないぐらい本気で全力を出している。会場は盛り上がり、熱くどんどん酸素は薄れていく。

「まだ行ける、まだまだアタシは……行ける!!」

皆の音を頼りにアタシは自分の音、あの子に教えて貰った数多くの技術を駆使して深紅のベースを鳴らす。

音は聞こえないけど、この子はアタシに力を貸してくれてる気がする。

酸素が元々薄かった所が更に薄くなっていくから、1曲1曲と終わる事に喉が歌っていないアタシでも喉が渴いてくる。

倒れてもいい、ライブが終わった後なら。

動けなくなってもいい、あの子に届くなら。

たとえ、アタシの指がポロポロになろうともアキに届くなら何を犠牲しても厭わ

ない。

その一心で『魂のルフラン』『Re:birth day』、そして『Determina
tion symphony』を弾き切る。

友希那が2回目のMCをしてる間にアタシはヒリヒリする指に視線を向ける。

ああ、爪が剥がれてる。でも、そんなの気にしない。

そう思って水をひと口飲んでみると燐子が段から降りて、アタシの腕を掴む。

思わず、驚いてギョッと目を向けると衣装のポケットから絆創膏を取り出した。

「…駄目、です。そのままに…しっちゃ……」

「…燐子」

「アキさんは…きっと、楽しんで…ほしいうって…思ってると思います……。今井さんが…傷付きながら…弾いてても…ダメですよ…?」

「っそうだね、ごめん。アタシ少し焦ってたかも……」

アタシは燐子に絆創膏を巻いてもらってる間に視線を逸らす。

ああ、やっぱりアタシは駄目だなあ。

大丈夫だなんて思っておきながら、全然駄目なんだもん。

ベースの音が聞こえないのがその証拠。無理やり、がむしゃらに弾いたって届かないよね。

そう思っていたら、あこと紗夜までもアタシの傍に寄ってきた。

今はライブ中だから小さい声だけど、どうして……？

「リサ姉、楽しもうよ！せっかくアキさんに届けるのにダメだよ！」

「宇多川さんの言う通りね、今井さんはアキさんに届きたいのなら今井さんの演奏をしないと無理よ」

「っ…！そうだね、ごめん。ありがとう」

ポンッと皆は、アタシの肩を叩いてから自分の持ち場に歩いていく。

友希那がMCをしながらアタシの傍に寄ってきた。

「……今日はリサの大切な人がこのライブを見に来てくれてるの。だから、私たちは最後にこの曲をリサの大切な人とリサに贈るわ」

「……友希那」

「貴方達、最後まで私達についてくれるかしら？」

友希那の掛け声に、わぁー！と観客が盛り上がる。

ふっと微笑んだ友希那は皆と同じようにアタシの肩をポンッと叩くと、スタンドにマイクを差し込んで深呼吸する。

アタシも、もう一度気持ちを入れ直す。

思い出せ、あの子が一番大切にしていたことを。

『——演奏で何より大切なのは、どれだけ楽しむか。演奏者が楽しまなきゃ伝わらないから』

そう笑って教えてくれたアキ。

アタシはどうしてこんなにも大切な事を忘れていたんだろう。でも、今思い出したよ。

お姉ちゃんのベース、見ててくれるかな？

「Roseliaで……『BLACK SHOUT』」

アキに届けようと思って再開したベース。

Roseliaのベーシストとなって、初めてステージに立って演奏したこの曲

こそ、あの子に伝えるなら最高の曲かもしれない。

アタシがどんな思いで弾いてきたか、どんな風に過ごしてきたのかをなるべく全部伝わるように、でもアタシらしさは忘れずに。

とことん楽しみながら伝えたい事を頭に浮かべながら弾こう、だってあの子が言ってたから。

♪楽しまなきゃ、伝わるものも伝わらない♪——ってね。

アタシは何となく始めたサイン、あこにはOKサインって呼ばれてるちーっすって感じに指で作って、友希那の歌声を聞いてから笑って歌詞を口にする。

「OKー！」

さあ、行くよ。アタシは弦に指をかけながらハモる歌詞を口にして皆と合わせて歌っていく。

友希那が指を曲げていき、胸元まで寄せて手を上げた瞬間。

アタシはかけていた指で弦を弾き、首を振る演出をしながら演奏を始める。

音が聞こえない、それは今でも変わらないけどだからと言ってアタシが楽しまない理由なんてない！

友希那の歌声に合わせて、振られた歌詞を口にしながら弦を弾いてあこに視線を向ける。

楽しそうにドラムを叩くあこと目が合い、軽くお互い頷き合ってサビを盛り上げる。

紗夜のギターが鳴り響き、アタシはそんな紗夜の音を支えるようにベースを掻き鳴らす。

次はソロパートが含まれる。

あこから始まるソロパート、アタシはベースの弦から一旦手を離して視線を敢えて外に逸らす。

アタシのソロパートが近付き、アタシは逸らしていた視線を一旦ベースに向けて弦を確認して指でコードを抑えてから、息を吸い込む。

「声を高らかに、本音に答える。嘆くよりずっと、大事で——！」

楽しい、久しぶりにこんなに楽しくベースを弾いてる。

音が聞こえないから分からないけど、肌で皆と合わさってるって感じる。

まだ行ける、アタシなら。ううん、アタシ達ならまだまだ行けるはず。

「(アキ、こんな駄目駄目なお姉ちゃんでごめんね。ずっとアタシは間違えてた、アキに技術なんかよりも大切な事を教えて貰ったのに忘れてた。きっとアキは謝らないでって言うだろうけど、もう間違えないよ。だから、また楽しく弾こうよ。沢山アキに話したいことがあるの、ベースってこんなに楽しく弾けたんだね。アタシ、もう1回アキとセッションしたい！)」

全員のソロパートが終わって、サビに入る。

アタシはただただ楽しく弾いた、難しい事なんか考えずにサビのあとに来るべー

スソロに不安なんて抱かずに。

左端で弾いていたアタシは、ベースソロのタイミングで友希那と場所を替わってステージ真ん中に立つ。

アキと弾いていた時のように、今となってはもう大分前のことで記憶は薄れてきてしまってるけど、これだけは忘れることは無い。

隣にアキがいるように、2人で一つのベースソロを奏でるように弾く。

後ろに視線を向ければ、皆が驚いてアタシを見てる。すぐ後ろでギターソロをアタシのソロが終わった後に控えてる紗夜も驚いてる。

「(どうしたんだろ？でも、アタシは今が楽しい！)」

紗夜と替わるように真ん中のステージに設置してある台から降りて、バトンタッチという感じにハイタッチする。

アタシの後ろから紗夜のカッコイイギターの音が響く。

やっぱり、紗夜はかっこいいなあ。

紗夜が終われば、燐子のキーボードソロで最後にあこのドラムソロ。各パートのソロが終われば、友希那の声とアタシ達のハモリで最後のサビに向かう。

友希那の声が会場に響いたあと、一瞬だけ全ての音が聞こえる。

その瞬間、演出として証明が消されステージは真っ暗となる。

アタシは次の音を鳴らすためにベースの弦に指を触れた時だった。

「…………え」

マイクに拾われないぐらいの大きさで、アタシは思わず声を出してしまう。

暗闇にと言っても少しだけ光があつてステージにいる皆の姿は演奏側は見える。だから、アタシは思わず声を出してしまったんだ。

『お姉ちゃん』

ふわっと風を感じて何だろうと思ひ、演出で前の方に傾いていた身体をそのままに視線を向けた時だった。

懐かしい声が耳に聞こえて、視線の先にアタシの隣にストラップを肩にかけて、群青色のベースを握っているアキが立っていたんだから。

まるで時間が止まったようで何も動かず、この一瞬の時間がとても長く感じる。アタシは驚きで固まっていると、ふにゃつとアキはあの笑顔を浮かべた。

服装は2年前のCHISPAのライブとは全く違って、どちらかと言うとアタシ達Roseliaの服装に合わせたようなストリート系の服装。

『ほら、お姉ちゃん。行くよ？』

「……うん！」

アキの言葉にアタシは笑って頷く。

隣にアキがいる、それだけでアタシは――。

最後のサビが始まり、アタシは思いつきり弦を弾けば嘘のように音が聞こえてくる。

ああ、聞こえる。アキの音が、アタシの音が聞こえてくる。

アキと背中合わせに弾くようにアタシが友希那立ち側に立ち、アキがその反対に立って2人で顔は観客に向けて自身の分身を掻き鳴らす。

低い低音が合わさって、何か強い力に引っ張られる気がして一瞬身を任せようかと思っただけ、アタシはその力に追いつくように駆け抜ける。

アキは驚いた顔をしてから、にやっとベースを弾く時やバスケットをする時に見せるカッコイイ表情を浮かべて、アキもアタシと同じように掻き鳴らして駆け抜けていく。

アタシはふと、友希那の方に顔を向ければ隣子とあこは驚いていて紗夜も凄く驚いてる中、友希那は何処か泣きそうな顔を浮かべてる。

ねえ、凄いでしょ？アキの演奏。

『——リサ！』

「アキ、全力で最後まで駆け抜けていくよ！」

『あつたりまえじゃん！』

アタシの耳に聞こえてくる二つの低音。

懐かしい、この感覚。ずっと前に感じて、離れてしまってから一度も感じれなかったこの感覚。

アタシとアキだからこそ奏でられるベースの音。

最後の1音まで無駄にしない、残ってる全ての体力も技術も全部出し切るんだ。アタシがハモリの部分を歌えば、アキは目を閉じて目の前で歓声を上げてる観客と同じように聞きながら、重くてハッキリとしたベースの音を鳴らす。

届いたかな？ 伝わったかな？

アタシが込めたアキへの想いが届いたかな、そう思ってアキに目を向ければふにゃつと微笑んで頷いてくれる。

良かった、やっとお姉ちゃんらしいこと出来た気がする。

ここまで来るのにとても長かった、2年という長い長い夜に浸って最初なんて毛布を被って動くことさえしなかった。

ママとパパをどれだけ困らせたかわからない。

友希那にも沢山迷惑をかけたと思う。

それでも、外に出てなるべく今井リサを演じて隠してきたけど2年経ってから沢山の事を知った。

アキが苦手な事にも逃げずに立ち向かっていた、沢山の人と関わって世界を広げていたこと。

アタシが知らない間にこの子は沢山の世界を見てきてた。

だからこそ、今こうやってアタシはアキとベースを弾ける。

アキが、パンが好きで訪れたパン屋さんをきっかけに沙綾と出会ってCHISP Aに入って、それから沙綾がいるPoppinPartyの皆から繋がったパトロンが、その沙綾の家が営むパン屋さんで出会ったモカから通じてAfterglowの皆へと伝わり、アキがベースを続けていたから楽器屋に訪れていた今はPas

tel*Palettesに所属する大和さんに出会って、何気ない日常で薫に出会ったアキがいた。

そうやって沢山の人の関わりがあったから、今があると思う。

アタシはそう思ったら泣きそうになったけど、何とか堪えて今を楽しもうと笑う。最後のフレーズが終わって観客から大きな声援が上がる中、アタシは笑って背中合わせで弾いていたアキに視線を向ければ、そこには笑っているアキの姿。

「……アキ」

『やっと笑ったね、リサ』

「あはは、ごめんね」

『ううん、でも良かった。最後にリサの笑った顔が見れて』

「……最後？」

アキにそう聞き返せば、まるで時間だというようにタイミング良くアキの身体が薄く光り出す。

どうして、何で。どういう事？

「だめ！」

『——ごめんね、もう時間切れだから』

「嫌だ、嫌だよ！そんなの、アタシ…！」

アタシの異変に気付いた友希那がアタシを止めようと、腕を掴んでくるけどアタシはそんな止まっていられない。

嫌だ、やっとやっとなのに。またお別れだなんて。

アタシは友希那に引っ張られながらステージから離れるように歩かされる。
嫌だ、離してよ友希那！

『……またね、お姉ちゃん』

その言葉を言って笑ったのが最後に、アキはアタシの前から消えた。

友希那は何も言わずに、唇を噛み締めながら顔を伏せてアタシと一切目を合わせずに腕を引く。

紗夜や隣子、あこも何も言わずにアタシの前を歩いていく。

そして、畳み掛けるようにステージから降りたアタシに告げられたのは沙綾の慌てた声と表情だった。

「リサさん……！病院から電話で、アキさんが……！」

その言葉に誰もがアタシに視線を向ける。

ねえ、どうして。まさか、違うよね。そんなの嘘だよ。

だって、さっきまでアタシはアキと一緒にベースを弾いてたんだ。

観客席で見っていたモカ達や皆も慌てて集まってくる中、アタシは変に冷静でいる自分に気持ち悪さを感じながら、沙綾から電話を受け取って恐る恐る耳元にスマホを当てる。

聞こえるのはママの声で、パパの声は聞こえない。

泣いてるみたいで上手く言葉が聞き取れないけど、今のアタシはおかしいように聞こえづらいはずなのに、どんどん頭も耳もクリアになっていってママの声がハッキリと聞こえる。

『リサ…！アキが…!!』

次の言葉を聞いて、アタシは自分のスマホを床に落とした。

ガタンっと音が鳴り、アタシは動けなかった。

誰も動かない。ううん、動けないんだ。

けど、アタシは次の瞬間走り出した。

落としたスマホとか、まだライブは終わってないとかそんなの気にせずただ走った。

誰かに名前を呼ばれてるのに気付かずに、アタシは楽屋に入って財布だけカバンから抜き取り外に向かって走り出す。

外で運良く停まっていたタクシーに乗り込んで、行き先を告げようとした時誰かがアタシを追いかけて乗り込んできた時に気づいた。

「リサ！」

「：友希那、それに沙綾とモカ」

「置いて行くなんて水臭いですよ、リサさん」

「私達も行きます」

友希那とモカ、沙綾の言葉を聞いて止められるはずもなく、アタシはタクシーの運転手さんに向けて鋭く言葉を言い放った。

「羽丘総合病院まで急いでください！」

運転手さんは何かを察してくれたのかすぐに頷いて、アクセルを踏んだ。

アタシは隣に座った沙綾から落としたスマホを渡され、ぎゅっと握りしめる。

このタクシーに乗ってる時間すら勿体ない。今すぐ向こうに行きたいのに。

「……リサ、他の皆はライブが終わった後まりなさんと弦巻さんの車で来るそうよ」

「…分かった」

それ以上会話することもなく、病院の近くになってモカに「お金は払っておくん

で先に行ってください」と普段と違った口調で言われ、素直に頷いて病院に着いた瞬間に今までで一番速く走り出す。

受付では既に話を通っていたみたいで何も言われずに、アタシはアキの病室に向かって走る。

何度か看護師さんに注意されたけど、ごめんなさい。今はそれどころじゃないんです。

そして、『今井アキ様』と書かれたネームプレートがある部屋の扉を勢いよく開ける。

勢いよく開けた病室の中には、アタシと沙綾、友希那の視界の先に映ったのは泣いてるアタシのママとベッドの傍に駆け寄っているパパ。

ママの傍にいる看護師さんと、パパと反対側で立っている主治医の黒崎先生。
そして――。

今日はアタシの隣にあの子はいて、音も聞こえたんだ。

遂にここまで来たあああ！

言いたいことは全て本編に書き記したつもりです。

どうして2話投稿？と思った方もいると思いますが、長期間お待たせしましたので出してしまおうという事です。

それでは次回も宜しく願います。

E m o t i o n a l D a y b r e a k

——どんなときもアタシの隣にいてくれたね。

そんなキミがアタシは大好きで自慢だったよ。

沙綾から震えながら渡されたスマホから聞こえたのは普段とは違う、ママの泣きながら出される声。

無機質に鳴る音は聞こえず、電話の向こう側はバタバタしてるようでママ以外の声も聞こえる。

けど、アタシの耳や頭は嫌にクリアでママの声を綺麗に聞き取る。

ママの一言に身体に電気が走ったかのようにアタシは固まる。けど、すぐに走った、今まででこれ以上にならないぐらい走った。

もう、後悔なんてしたくない。2年前のような思いなんてもう充分感じた。

中に入る前に名前を確認して思いっきり扉を開けば、中にいるのはスマホ越しで聞こえた泣いてるママとその近くに看護師さん。

奥のベッドに駆け寄っているパパといつもなら閉ざされてるカーテンが開けられ、そのカーテンの近くに主治医の黒崎先生。

アタシが来たことに気付いた黒崎先生が、静かにその場からゆっくりと離れていく。

そして、アタシの視界に映ったのは、いつもはアタシのとアキの境界線のように防がれていたカーテンは開かれ、中の様子がひと目でわかる。

部屋の中を響かせていた無機質な音は変わらない、けど何処か違う。

普段は枕が置かれていたベッドが、上半分だけ上がっていて、椅子の背もたれのようになってそれに寄りかかるように座って――。

アタシは手に持っていたスマホや財布を床に落として、ゆっくりとベッドに近づ

く。

「…ふふ、お姉ちゃん…。変な顔…してるよ…?」

まだ起きたばかりなのか、舌っ足らずだけどしつかりとアタシの顔を見て話すアキ。

アタシは咄嗟に抱きしめた。生きてる、アキが生きてアタシを『お姉ちゃん』って呼んでくれる。

「良かった…よかったあ…!」

「…ごめんね、さつき先生から事故の事を聞いたんだ。私、2年も寝ちゃって
沢山心配かけたよね」

「アキ…アキ…!」

「うん、私はここにいますよ。リサ」

アタシの背中に弱々しく腕を伸ばして、アキはアタシの言葉に返しながら優しく背中を撫でてくれる。

もう離れ離れになりたくない、もう離したくない。

アキが生きてる、それだけでアタシの崩れて壊れていた心が少しずつ欠片を拾い始める。

「……ゆきちゃんと……沙綾……？」

「……アキ」

「……アキ……さん……！」

「ごめんね、2人にも心配かけちゃった」

アタシは一旦アキから離れて、2人へと視線を向ける。

友希那は涙を堪えてるみたいでアキの言葉に首を振って、頑張って笑ってる。

沙綾はもう涙が堪えられないみたいで、アキがそんな沙綾を見てゆっくりと腕を広げて笑って口を開いた。

「沙綾、おいで？」

「っ、アキさん……！」

「ごめんね、きつと沙綾の事だからリサと同じぐらい責任感じてたよね。ゆきちゃんもリサをずっと支えてくれてありがとう」

沙綾を抱きしめて背中を撫でながら、友希那へと視線を向けてアキはふにゃつと

笑う。

友希那はその笑顔を見て、何か込み上げてきたようで目元を手で抑えながら優しく笑った。

「……本当に、貴方達姉妹には心配が絶えないわよ」

「あはは、ごめんね。……モカ？」

友希那にそう返したアキが、友希那の後ろに視線を向けて驚いた顔をしている。アタシも釣られて視線を向ければ、滅多に固まるほど驚かないモカが固まってぐしゃっと顔を歪ませた。

「……アキ……さん……」

「——久しぶりだね、モカ」

「久しぶりって……心配したんですよ……？」

「……うん、知ってる」

アキがそう言ってモカに笑う。

モカはその笑顔を見て目元をグシグシと袖で拭きながら小さく、でも力強い言葉を吐き出した。

「……良かった、生きてて……。アキさんが……生きてて良かった……！」

「……うん、ごめんね」

沙綾はアキから離れて、そんなモカに寄り添って抱き締めていた。

アタシはアキへともう一度目を向ければ、そこにはずっと記憶の中でしか見れな

かったあの子のふにやっとした笑顔。

そう、アタシはずっとこの笑顔が見たかったんだ。

「——おかえり、アキ」

「——ただいま、お姉ちゃん」

今度は笑って、涙を拭ってから優しく抱き締めれば今まで感じなかったアキの温かさが伝わる。

やっぱり、痩せちゃってるから力を込めたら折れちゃうんじゃないかって思っちゃうけど、それでもアタシの背中にしっかりと腕を回してくれてる。

触れた場所からアキの温もりを感じて、夢じゃないんだって、本当にアキは生きてるんだって直に感じられる。

それからはママとパパが一旦、アキの現状を黒崎先生に聞くために病室を後にした。

アタシも行こうかと思っただけど「アキの傍に居てあげて」って言われたし、アキにも服の裾をきゅっと掴まれてしまったので行かなかった。

アタシ達は皆で涙を拭いてから、2年間の穴を埋めるように会話を始めた。

「何か、皆が知らない間に凄くお姉さんっぽくなってビックリだよ」

「2年だもの、少しは変わるわ」

「そうそう、アキも変わったよ？」

「そうかな、髪の毛ぐらいじゃない？沙綾は本当にお姉ちゃんって感じになったね！」

「そ、そうですか？私よりもモカの方が……」

「モカちゃんは変わってないと思いますよ？変わったと言っても、食べるパンの量が増えたぐらいですかね？」

「……青葉さんらしいわね」

「……それ、変わってたって言うかな？……？」

「……そうだね、家のパン買う数増えたね」

「あはは、モカは相変わらずだねー」

うん、モカは変わってないというかモカは今のまま変わらない方がいいなと思う。
う。

だって、パンを食べなくなったモカなんて想像出来ないもん。

アキは、そんなモカの言葉やアタシ達の言葉にクスクス笑っている。

それから暫く話していると、廊下の方が騒がしくなってくる。

アタシ達は何だろうと思ひ、アタシと友希那で廊下を見るために扉を開ければ凄
い怖い顔で走ってくる皆というか主に巴と蘭など Aftergrow を先頭にライ
ブを終えた皆の姿。

「……怒られるわね、あれ」

「…あ、あはは……」

思わず、アタシと友希那は何も見なかった事にしようと思ひ扉を閉めかける。

中にいる沙綾とモカ、アキはキョトンっとしていて首を傾げている。

いや、ね。これはダメだよ、Pastel*Palettesなんて事務所NG 出
てもおかしくないんじゃない？

一番は巴と蘭がダメだと思う、女の子としてあれはね……。

なんて思ひながら扉を閉めかけていると、ガシツと誰かに阻まれて思わず「ひっ

！」と声を上げてしまう。

友希那もビクツと肩を震わせて、視線の先には扉を片手で掴んで閉めさせないようにしてる手。

「リサさん…！アキさんは…！」

「リサさん!!」

ガラツと思いつきり開かれて、目の前にいるのは凄く汗をかいて普段じゃ有り得ないぐらい慌ててる蘭と巴の姿。

その後ろにはライブを終えた殆どの皆が、肩で息を吸いながら呼吸を整えてる。でも、言いたい事は2人と同じみたいだ。

更に後ろでは、看護師さんから注意を紗夜と燐子、美咲、有咲、千聖、つぐみが代表的な感じで受けて謝罪してる。

うん、6人とも何かごめん……。

「……その声は蘭ちゃんと巴ちゃん？」

「……え」

「……うそ」

そんなカオスな状態で一番最初に口を開いたのは、アタシの妹であるアキだった。多分、アタシと友希那が扉の前に立っちゃってるから姿は見えてないんだろうけど声で分かったのかな。

蘭と巴は聞こえた声のアキのものだと理解するのに時間がかかったみたいで、アタシの顔を見てくる。

「ほらほら、中に入って？」

「らーんー、アキさんだよ？」

「巴、アキさんだよ」

アタシは2人の中に入るように行って、扉の前から移動して中を見えるようにする。

モカと沙綾も笑って2人にアキの姿が見えるように移動すると、蘭は泣き出してしまい、巴は現実なのか夢なのかを確認するためにモカに頬を引っ張ってもらっている。

「……アキ……さん……あたし……！」

「久しぶりだね、蘭ちゃん。なーんか、凄くカッコよくなっちゃって〜！」

「え、夢じゃないよな？現実だよな？」

「巴ちゃん、現実ですよー？ 私は真正正銘、今井アキですよ。もしかして、そこにいるのはつぐみちゃんとひまりちゃん？」

「……アキさんだあ……！」

「アキさん……！」

ひまりとつぐみも勢いよくアキに抱きつく。アキは、「おっとと……」なんて言いながらすっかり受け止めてる。

それからアキの事を知ってる人は勿論、関わったことが無い人達も中に入って談笑が始まった。

今では泣いていた蘭や巴、つぐみ、ひまり、大和さんも皆笑ってる。

「えり!? じゃあ、私の事を助けてくれたのって白鷺さんと松原さんなんですか？」

「ええ、お祭りの帰りだったの。あ、敬語やさん付けじゃなくていいわよ？リサちゃんと双子なら同い年でしようし」

「わ、私も…敬語とさん付けじゃなくていいよ…？」

「そうかな？じゃあ、遠慮なく千聖ちゃんと花音ちゃんって呼ぶね。あと、救急車呼んでくれてありがとう」

「アタシからもお礼言わせて！アキを助けてくれてありがとう」

アキと一緒にお礼を言うと、2人は照れながらも「どういたしまして」と返してくれた。

すると、アキが紗夜や燐子、あこの姿を見ると首を傾げる。もしかして会ったことあるのかな？

「アキ？どうしたの？」

「あ、ううん。ただ、紗夜ちゃんと燐子ちゃん、あこちゃんってリサのバンドメンバーなんだよね？」

「うん、そーだよ。紗夜がギターで燐子がキーボード、あこがドラムなんだ」

「うーん、おかしいなあ」

「どうかしたの？アキ姉」

顎に手を当てながら何か考えてるアキを見て、あこがきよとんつとしながら話しかける。

因みに、アタシの事をミリス姉と呼ぶからミリアキ姉って呼ぶことにしたんだっ

て。

他の皆もそんなアキに首を傾げてる。

「何かね、起きる前に夢見てたんだ」

「夢ですか？」

「うん、最初は皆のライブを見てたんだけど何か見てたらベース弾きたくなっちゃって。気付いたらリサの横に立って、Roseliaの皆と演奏してる夢を見たんだよ。その時に紗夜ちゃんと燐子ちゃん、あこちゃんを見ただけど今日初めて会ったはずだから一緒に演奏なんて出来ないよなーって」

「っ!？」

アタシはその言葉に驚く。

それは、アタシだけじゃないみたいでRoseliaの皆も息を飲んだのが分かる。

あれは夢じゃなかったのかもしれない、そう思っていたら友希那が優しく笑いな
がらアキの頭に触れる。

「もしかしたら、夢じゃないのかもしれないわね」

「んー、もしそうだったら嬉しいな」

「アキさん、また一緒に演奏しましょう」

「あこも！アキ姉とまたやりたーい！」

「わ、私も…一緒に…またやりたいです…！」

「もちろん！一緒にやろうね♪」

「あー、ずるーい。モカちゃん達もやりたいですよー」

「ジブンだってやりたいっす！」

「私も子猫ちゃんとはいい曲が出来る気がするよ、ああ儂い……」

「私達ポピパともやりましょうね！アキさん！」

「ちょっとちょっとー、皆アキは一人しかないならねー？」

アタシが止めに入っても、全然止まる気配がない。当の本人が楽しそうにクスクス笑ってるからいいかな。

それから暫く話していたけど、流石に起きたばかりのアキも疲れてるだろうか

らっと早めに解散した。

病室に残ってるのは Roselia のメンバーだけ、本当は Circle に戻ってやる事があるんだけど他の皆が代わってくれた。

アタシが飛び出した後もアンコールが止まらなくて、Roselia からアタシと友希那が抜けちゃったから急遽全バンドでアンコールをしたみたいだし、今度お礼しなきゃなあー……。

今は燐子とあこ、そして友希那が飲み物を買って行ってアタシと紗夜、アキだけが病室にいた。

「リサさーん？」

「うん？どうかした？」

「なーんか、難しい顔してたから話しかけてみた」

「ええー？アタシ、そんな顔してた？」

「してたしてた、紗夜ちゃんもそう思うよねー？」

「そうですね、今井さんは良く溜め込みますから」

「どっち？」

「……リサさんの方です」

「あはは、紗夜はもう『今井さん』って呼べないね☆」

「…はあ、慣れないものですね」

「意外とすぐ慣れると思うよ。あ、紗夜ちゃんって確かPastel*Pale

ttes?の日菜ちゃんのお姉さんなんだよね?」

「はい、双子ですが」

「……うちの姉より姉らしい」

「こら!アタシ結構気にしてるんだからね!」

多分、紗夜の事を思って話しやすい双子関係の話題に変えたんだろうけど話題が見つからなかったんだね。

まさか、それに触れてくるとは思わなかったからアタシもつい本気で答えちゃったよ!?

「そんな事ないですよ、リサさんは充分私よりも姉らしいです」

「だってさ、お姉ちゃん♪」

「もう、調子のいいことばかり言うんだからー」

「アキさんが眠っている間、リサさんは1日足りとも病室に訪れない日は無かったですよ。バイトやバンドの練習も全部遅らせても行ってましたし、私だったら無理かもしれません」

うっ、アキに黙っていた事をサラッと紗夜に暴露された。

アキは予想外だったみたいで鳩が豆鉄砲を食らったみたいに、目を見開かせてる。

「え、ほんと?」

「…うん。でも、アタシが行きたかったただだからアキは気にしなくていいよ?」

「紗夜ちゃん」

「はい」

アキはアタシから視線を外して、紗夜へと向ける。

ふにゃっと普段の優しい笑顔を浮かべて自信満々に、そして誇らしそうな表情を浮かべて口を開いた。

「私のお姉ちゃんは、最っ高のお姉ちゃんだね！」

「ええ、私もそう思うわ」

「ちよ、ちよっと…！ 恥ずかしい事を2人して言わないでよ！」

「あら、アキさんが本当の事を言っただけじゃない」

「紗夜だって日菜に言われたら恥ずかしいでしょ!？」

「……そういうのは無しよ」

プイっと顔を逸らす紗夜。

そんなアタシ達の会話をアキはクスクス笑って楽しそうにしてるのを見たら、アタシと紗夜は1回だけ溜息をつけて顔を見合って苦笑した。

「双子のお姉ちゃんって大変だよね、紗夜」

「ええ、本当に。でも、こんな顔を見たら何も言えないわ」

「ホントだよ……」

「2人とも何話してるの？」

「姉同士の秘密です」

「そうそう☆」

「えー！何それ、ずるい！」

むすっと不貞腐れたアキを見て、今度はアタシと紗夜が笑う。

飲み物を買って戻ってきた3人はアタシ達を見て、首を傾げてるけど紗夜と2人で「何でもない」と言えばそれ以上聞いてくることは無かった。

2年間アタシの隣にあの子はいなくて、いつの日からかあの子の音も失った。

けど、あれから2年経った今アタシの目の前にあの子はいて音も聞こえるようになった。

「ねえ、お姉ちゃん」

「んー？」

「だーいすき！」

「急にどうしたのー？でも、アタシも大好きだよ☆」

もう、アタシはこの子の手を離さない。

アタシの大切な人で、ベースリストとしても一人の人として自慢な妹で大好きなアキを今度こそ守り続ける。

頑張ろう、立派でお手本のような姉らしい姉じゃないけど。せめて、アキにとって一番のお姉ちゃんであられるように。

完結しませんよー!!! (念の為叫ぶ)

ですが、やっと山場一つ終わりました。やっところまで来れた……。
それでは、また次回も宜しくお願いします！

第1.5章 Beyond the ultramarine
sky・Aki・

The first time to be spoken.

本来なら語られなかった群青の少女による

陽だまりに寄り添い続けた片割れの物語

医師である黒崎先生の質問に全て答えて、皆が家へと帰ったあと。

私は窓から見える夜空に目を向けて、先生から質問された一つの事を思い出していた。

それは、事故当時の記憶はあるか。

私はそれに対して一瞬答えるのに迷ったけど、覚えていないと答えた。

これ以上、お父さんやお母さん、リサと沙綾、ゆきちゃんや皆に心配をかけたくなかったから。

「……2年……前」

正直、信じられなかった。

自分が事故に遭った事はわかっていたけれど、まさか2年もの間私は昏睡状態で眠っていたなんてそう簡単に理解なんて出来ない。

あの場では、皆を困らせたくなくてもう理解してるよって雰囲気を出したけど全然理解なんて出来てなかった。

姉であるリサは、私が知ってる頃では普通の女の子だったけど今ではギャルになって、あれだけ嫌がっていたベースを弾いてる。

幼馴染のゆきちゃんは、昔と変わらさずのクールな雰囲気だけど何処か冷たいオーラを持っておりリサとバンドを組んでいて。

妹的存在だった沙綾は、私が知ってる時よりも自分を押し殺して甘えるなんて言葉をまだ知らないんじゃないかと思うぐらいお姉さんになっていて。

モカは本人は変わってないなんて言うけど、蘭ちゃんへの接し方が前まではただ見守るだったのに今では隣に立ってるような接し方。

「…………私だけ置いてかれてる」

無性に寂しく感じる。

前まであんなにも皆が近くにいたのに、私が眠っている間に皆は大人になっていった。

私が変わったのなんて髪の毛の長さぐらい、心は2年前から止まったままだ。

そう思っていたら病室の扉をノックされて、面会時間は終わったはずじゃないかと思いつつ、返事をすれば中に入ってくるのは黒崎先生。

「ごめんね、夜だというのに」

「いえ、大丈夫です」

「アキさんに一つ聞いておきたい事があったんだ」

そうやって私の目の前に先生が置いたのは、所々が赤黒く染まってしまっているけど綺麗な向日葵カラーの黄色いシュシュ。

CHISAの皆とお揃いで買って、沙綾と交換し意識が飛ぶギリギリまで掴んでた沙綾のシュシュだ。

「アキさん、本当は事故当時の記憶あるんだよね？」

「どうしてそう思うんですか？」

「君の態度が余りにも自然体だったから、かな」

「…あはは、流石に医師である先生に演技は通用しませんよね」

「…アキさん、どうして嘘を？」

「あの場には私の家族、大切な人、友人がいました。これ以上辛い気持ちになんてさせたくなかったから、と言えば許してもらえますか？」

「…：…：そうか」

目を瞑れば、ついさっきの事のように思い出せるこの記憶も皆からしたら2年前。

そう思いながら、私はあの日を思い出した。

大切な妹的存在の沙綾のお母さんが倒れた事を聞いて、昔のツテを使って移動するものを容易し病院へと送り出してから私は皆の元に戻る。

皆の顔には不安でいっぱいだった。こんな時こそ、私がしっかりしなきゃ。

「なーっちゃん！」

「あ、アキさん……」

「不安な気持ちもわかるよ、でも一番不安なのは沙綾だから。私達は病院に向かっている沙綾の分まで、ここにいる観客の人達を楽しませよ？」

「…はいっ！」

「CHISPAの皆、お願いします！」

「よし、じゃあ行くよ！」

『はい!!』

自分の楽器が置かれてる場所に立って、私は深呼吸する。

斜め後ろを見れば、本来なら微笑んでくれる沙綾がいない。でも、私がこんな気持ちじゃ皆にまで伝染しちゃうから。

私はいつも通りでいなきゃ。

「あ、え、えーっと、皆さんこんにちは。CHISPAです！」

「あはは！ なっちゃん緊張しすぎ〜！」

「あ、アキさんが緊張してなさすぎなんですよっ！」

「ナーツ、マイクに声が通ってるよ〜」

「っ!？」

「あはは！ナツったら顔真っ赤！」

そんな私達の会話に商店街の人達、お客さんは笑ってくれる。

うん、これでいいんだ。

沙綾がいらないからカウントが入らないけど、私が急いで沙綾が置いていったドラムスティックを握り締める。

「それじゃあ1曲目行きます！」

ステイックを鳴らしてカウントを取り、急遽でふみちゃんが私が本来なら入る部分を代わって入ってくれる。

そこから急いでステイックを置いてから私は向日葵カラーの黄色のシュシュを見てから弦へと指をかけた。

ライブは何とか成功。

途中でなっちゃんがやらかしちゃったりしたけど、私はCHISSPAに入る前にとある先輩のバンドに助っ人として入ってた時期があった事もあって何とかフォー出来て失敗にはならなかった。

それから笑顔でステージを降りて、皆で裏へと急いで向かってからは沈黙。

なっちゃんのスマホにかかってくるであろう、沙綾の電話を待っていればリサとゆきちゃんが楽屋に来てくれた。

「あ、アキ……？」

「……あ、リサ！ 私たちのライブ凄かったでしょ？」

何とか普段の私に戻って接するけど、2人は何処か疑うような目で見てくる。

ああ、失敗したかも。

そう思ったと同時に、なっちゃんから沙綾のお母さんが無事だということを知り、私はほっと息を吐きながらも、急いで必要最低限の物だけを手に取って病院へと向かおう準備を始めるとリサから声をかけられる。

「……どこ行くの？」

「リサ、ごめんね。今から病院に行かなきゃいけないんだ、すぐ戻ってくるから」

「アキ、それはドラムの子が関係あるのかしら？」

「うん、ゆきちゃんもごめんね。わざわざ楽屋まで来てくれたのに」

「大丈夫よ」

ゆきちゃんやリサに悪いことしたな…と思いながら、明日にでもお詫びをしようと思えばスマホを掴んで、扉を開けて外に出ようとした所を後ろから誰かに抱き締められる。

昔からずっと傍にあった匂いと温もり。……リサ？

「り、リサ？」

「……嫌な予感がするの」

「大丈夫だって、バンドメンバーを迎えに行っただけだから！」

不安そうな顔をしてるリサの頭を撫でてから、私は1度微笑んで大丈夫だと伝えれば何とか私に回っていた腕を外してくれる。

それから私は1度なっちゃんに譲りてから、その場を飛び出したんだ。

口の中が血の味がする。

喉が何かで切られたみたいに熱くて、喉の奥底から血を吐き出せるんじゃないか
と、思ってしまう程に私は走っていた。

遠くて遠くて、何処までも見えない目的地。

あの子が待ってる、一人で不安や恐怖を心の中に押し殺して自分よりも幼い弟と
妹を優先してるあの子が。

——速く、誰よりも部活の時よりも速く走れ。

全国大会の時に仕掛けた速攻よりも、相手の速攻をディフェンスするために走っ
た時よりも速く。

右手に持つスマホで時間を確認しながら、暗い道をひたすらに全力で駆け抜ける。

何台も隣の道路を走り去る車を見て、思わず苛立つ。

自分がバイクに乗れる年齢だったら、どれだけ楽だっただろうか。

俊を呼べばと思ったが、彼は今あっちで勃発してる喧嘩に加勢しに行ってる時点で呼べるはずがない。

「っ!!」

左手首に付いてる向日葵色に近い黄色のシュシュを見つめて、走るスピードを上げていく。

まだ速く走れるはずなんだ、体力だって現役バスケット部として今でも動いてるんだから余裕のはずなんだ。

なのに、身体が普段よりも重く感じるの嫌な想像ばかりをしてしまうから？ それとも、リサがさっき「嫌な予感がする」と言っていた事に対して何処か気になるから？

でも、今はそんな事どうでもいい。

私は約束したから、必ず会いに行くと。病院へ行くからと。

今でも一人で押し殺して頑張ってるあの子の元に。

信号が赤なのが見えて、少しスピードを落としながらも走り続ける。

一旦止まってしまえば、スピードを上げるのに時間がかかることは運動部の経験で身に付いている。

青色になるギリギリで信号の手前まで来て、青色になった所をまた走るスピードを早める。

でも、それが間違いだった。

右側から眩しく何かに照らされて、私は驚いて視線を向ければすぐ傍まで迫ってきてるトラック。

「……………うそ」

鈍い音が身体の全身からして、地面に叩きつけられる。

痛いとか、苦しいとか、そんなものは全然感じなくて何故か瞼がどんどん下がってくるのだけは分かる。

ダメ、ここで私が負けるわけには行かない。

あの子が、沙綾が待ってるんだ。せめて。

必死にスマホのある場所まで這いつくばっていく、だんだんと研ぎ澄まされて行く痛覚に思わず悲鳴をあげたくなくなるけど止まらない。

ここで止まるわけには行かないの、ひたすらに伸ばした手でスマホを掴んで画面を見ればヒビが入ってるものの、何とか画面は起動する。

震える指先でパスワードを打ち込み、開きっぱなしだったトークアプリの相手へとメッセージを打ち込んでいく。

視界が霞んでくる、良く画面が見えない。

自分の髪の毛に近い赤色に左目の視界が染まってくるけど、私は一文字一文字震える手を動かす。

「……や……くそく……まも……れなくて……ごめ……んね……」

打ち込む文を読みながら平仮名になってしまいうけれど、せめて約束だけは私は守りたかった。

でも、こんな状態じゃ守れないけど私は向かったんだって事だけでも伝えておきたい。

貴方のせいではないということだけでも。

送信ボタンを押す、でも画面は反応してくれない。

嘘だ、送ってよ。私の気持ちを、あの子に。

「……そんな」

でも、スマホは私の願いを届けてくれなかった。

トラックとの衝撃に耐えられなかったスマホは、中身がダメになっていたらしい。

私がかつてまで頑張った瞬間、沙綾に届けたかった言葉は届かない。

それに気付いてしまった瞬間、身体から一気に力が抜けていく。

「……ですか！」

「……ちさ……ちゃん……!……この……ベース……!」

水色の髪の毛の女の子と、クリーム色の髪の毛の女の子が必死に私に話しかけてきてくれるけど、返す気力も無くて。

私は力の入らない右手で左手首に付けてる向日葵カラーに近い黄色のシュシュを、ただただ握り締めたのが最後にぷつんと意識が途切れた。

そう、この全てが私の今井アキが2年間昏睡状態になった原因であり覚えてないと言った内容。

今思えば、あの声をかけてくれたのは花音ちゃんと千聖ちゃんだったのかも
しれない。

「……そうだったんだね」

「はい。まさか、シュシュがまだ残ってたなんて思いませんでした」

「……彼女、えっとアキさんのお姉さんからお願ひされていたんだ。本当は事故に遭われた次の日には渡せたんだけど、『……アキに渡してください』って言われてしまってたね。あの時のリサさんの目は本当に何も返せなかったよ」

「……そう、ですか」

「そうだ、アキさん」

「はい？」

「僕に教えてくれないかい？」

「……え？」

「君が過ごして来た15年間、僕はあくまで事故に遭ってからの君しか分からない。でも、僕は医師の中でも意外と時間がある方だね。君の話を聞きたいなーって」

「何ですか、新手的ナンパですか？」

「何でそうなるのかな!？」

「あはは、冗談ですよ。そうですね、何処から話します？」

「そこは君に任せるよ、僕はただ聞きたいとしか言っていないからね」

「んー、そうですね」

私が過ごして来た15年間。

死んだ訳でも無いのに、そう言われると納得してしまうな。年齢は今年で17歳

だけれど、実際に私が意識を持って過ごしたのは15年という短さだ。

でも、意外と振り返ってみれば15年にしては余りにも濃くて普通の女の子としての生活を送っていたかと言われてしまったら私は首を縦に振ることは出来ないと思う。

自分の過去を思い出していたら、つい笑ってしまつて黒崎先生はきよとんつと首を傾げている。

「すみません、ちょっと自分の15年が短い割には結構濃い時間を過ごしてたな〜って思ったら笑っちゃって」

「そんなに濃い時間だったのかい？」

「はい、普通の女の子では体験出来ないようなことばかりです。何なら、姉のような理想の女の子って人生じゃないですよ？」

「どんな過去を進んできたのか僕はとっっても不安になってきたよ……」

「あはは！まあ、人は殺してませんからまともだと思いますよ？」

「是非とも、そうであって欲しいね!!」

「冗談はこれぐらいにして、そうですね。話すならやっぱり最初から全部話した方が分かりやすいと思います」

「そ、そんなに複雑なんだね……」

「複雑というか、私は1回道を間違えてしまったんです」

「道を？」

黒崎先生が首を傾げて聞いてくるのを、私は苦笑して返すしかなかった。

何だか喉が乾いたな、目の前にある水を一口飲んで喉を潤す。

それから、まるで自分の過去ではなく一つのおとぎ話を話すかのように私はゆっくりと口を開いた。

「まず、最初におきませんが私は自分から自分の事を人に話したりするのがあまり得意じゃないです」

「え」

「何なら、人との繋がりとか人付き合いとか一番苦手ですね。勉強とかよりも」

「……………え」

「なので、説明の仕方が悪かったり分かりづらいかもしれないですけどそこら辺は

自己解釈でお願いします」

「…アキさんってしっかりしてるようで、テキトーな所あるよね」

「話すの止めますよ？」

「嘘です、ごめんなさい」

「あはは！まあ、なので分からないところとかあったら遠慮なく聞いてください。あ、話が終わってからですよ？」

「うん、わかった。ここに座って僕は聞いてるよ」

「…仕事はいいんだ」

「ちゃんと、カルテ整理終わらせてきました!!」

「あ、はい。じゃあ話しますね、私と姉のリサが生まれてからとなると面倒なので全てを話すためにも最初から話しますね」

「うん」

そうして、私はもう1度だけ水を飲んで喉を潤わせる。

こうやって、自分のことを長々と話す機会なんて滅多に無いし正直、私はあまり話したくないからそういう雰囲気になっても普段なら流してしまう。

でも、この先生には黒崎先生には何となく話しておくべきなのだろうと何かを感じた。

どうせいつか聞かれてしまうなら早いうちに話しておいた方が、楽だろうって考えが無い訳でも無いけど。

私の過去、それはとてもじゃないけど綺麗なものじゃない。

ガラス細工のように鮮やかでも無ければ、花のように繊細で美しいものでもない。言ってしまうえば、真っ黒でどん底な地獄と言っても過言ではない日々があった。

「私の過去は一部を除けば平和でした」

そう、一部を除けばの話。

それさえなければ、きっと今よりもリサと仲良くなれただろうし、沙綾やゆきちゃんにも変な心配をかけずに済んだだろう。

それでも私はあの日々、ううん。あの年が無ければよかったと思った事は一度も無いけど一言で言うなら。

私の醜い3年間。

「ある3年間だけ、色で例えるなら真っ黒でとても人に簡単に話せるようなものでもないです。でも、きつと黒崎先生には話しておかなければいけない事だと思うから包み隠さずに全てを話します」

私がそう言うと、黒崎先生は真剣な顔をして頷いてくれた。

さあ、ここから話す事は私の周りの一部しか知らない真っ黒で醜い過去もある話。

「一番最初……生まれてすぐなんて話す意味無いので、幼稚園頃。ゆきちゃんとりサ、私の3人でゆきちゃんのお父さんをきっかけに楽器に触れた事が全ての始まりです」

真っ赤なベースを持つ幼き姉、カッコイイギターを奏でる幼馴染のお父さん、真ん中で歌う幼馴染、そしてその3人に交ざって同じように必死に小さな手で群青色のベースから音を奏でる私の姿を思い出しながら、私はゆっくりと自分の過去を話した。

アキ視点による昏睡状態前の15年間です。

本編と同時進行で進めていくので、分かりづらい場所に設置してしまいましたが宜しく願います。

Everything started.

——黒崎先生、これが全ての始まりです。

私の15年という長くて短い物語の始まり。

目の前にあるキラキラと輝くギターやベースが沢山展示されてる。

リサとゆきちゃんは、まだ買うとも決まっていなくてキラキラした目で見て触ったりしていた。

まあ、キラキラして見てたのは多分私もだったと思う。

何故楽器屋さんに来てるのかと言われると、幼馴染のゆきちゃんと姉のリサと一緒に、3人でゆきちゃんのお父さんが奏でるギターのメロディに合わせて歌って

いた時だった。

——3人も楽器に触ってみるかい？と言われたのは。

そのまま私とお姉ちゃんのママ、そしてゆきちゃんのお父さんの5人で近くのゆきちゃんのお父さんの知り合いがやってる楽器屋さんに来たのが今だった。

「ねえ、友希那！アキ！これ、可愛い！」

「ホントだ、赤色だね」

「リサは赤色が好きなの？」

「うん、赤色好きだよ！」

「ふふ、リサはそれが欲しいの？」

「……いいの？」

「ええ、ちゃんと大切にしておいてあげてね？」

「うん！」

ママと2人で話してるお姉ちゃんの会話が気になるけど、私は私で色々楽器を見て回る。

キーボードってピアノみたい、ドラムってのも小太鼓とかと違うのかな。

でも、私達はまだ来年小学生になるけど幼稚園生。

楽器は高いってパパから聞いていたから、何だか簡単に欲しいって言えない。

それがゆきちゃんのお父さんに気付かれたのか、しゃがんで視線を合わせながら話しかけてきた。

「アキちゃん、どうしたんだい？」

「……わたし、楽器いららない」

「え？要らないの？」

「アキ、あたしと弾くの嫌？」

「……うん、お姉ちゃんと弾きたいよ。でも、楽器って高いんだってパパが言った」

「アキ、我慢しなくていいのよ？貴方はいつも我慢するんだから」

「……でも、パパとママが大変になっちゃう」

「そうだ、アキちゃん。ここは私のお友達のお店なんだ、欲しいです！って言え

ば貰えるかもしれないよ？」

そう言われて、お店の人に目を向けたら少し困った顔をしたけどすぐに頷いた。
我儘……言ってもいいのかな。

「アキ、本当に要らないの？」

「……お姉ちゃんと同じのがいい」

『え？』

「お姉ちゃんは赤色だけど、わたしはあれがいい」

お姉ちゃんが選んでいた赤色のベースと呼ばれる楽器の隣に設置されてる青色、でもあれはただの青色とは違う気がするけどベースを指で指す。

お姉ちゃんと同じ楽器をやってみたい、なんて我儘かな。

「……わがまま、だよね」

「アキ、一緒にやろ！」

「……いいの？」

「うん！あたし、アキと一緒に演奏したい！」

「ふふ、アキ我儘なんかじゃないわ。でも、ちゃんと大切にしておいてね？」

「うん、大切にする」

それから、お店の人とママ達が話してるのを他所にお姉ちゃんとゆきちゃんの色

んな楽器を見て回って、私は見てもわからないけれどさっき教えて貰った楽譜って物や練習本を読んでみる。

良くわからない記号が沢山、日本語じゃないのもあって本当に良くわからない。私が見てるのが気になったのか、お姉ちゃん達も横にきてじーっと私が見てる物を見てる。

「ねね、友希那。この音は何？」

「これは……ドだよ」

「ド？」

「わたしもまだ良くわからないの、でもパパが教えてくれると思う」

「うーん、アキは分かる？」

「全然わかんない」

ゆきちゃんのお父さんは、これを見てかっこよく楽器を弾いてるんだ。

私もいつか、あんな風に弾けたりするのかなあ。なんてボーッと考えていたらママに呼ばれて、3人で駆け寄る。

ママ達から聞いた話だと、楽器を持って帰るにも私達はまだ小さくて楽器の方が大きいから家に届くようにしてくれるんだって。

確かに、ゆきちゃんのお父さんに弾いてみる？と言われて前にゆきちゃんのお父さんのギターを触ってみたけど大きくて難しかった。

「ベース！ベース！」

「お姉ちゃん、危ないよ」

「もう、楽しみなのは分かったからリサは少し落ち着いて」

「だって楽器だよ！友希那のパパがいつもカッコ良く弾いてる！」

「お姉ちゃん、あれはギターでわたし達のは違うって言ってたよ？そう言えば、何でお姉ちゃんベースを選んだの？」

「いいの！んー、ベースって友希那のパパが使ってるのと違うからなんだっけ。あの、えーっと、すりー……」

「すりーぴーす？」

「そうそう、それ！それに、アキと同じのがいいなって思ってたからね！」

「ふ、ふーん」

「あら、珍しくアキが照れてるわ。お姉ちゃんと一緒に良かったね？」

「て、照れてないよ！」

それから、真っ直ぐに家に帰ってお姉ちゃんの部屋で2人でゆっくりしてから数時間後には楽器が届いて急いで隣の家であるゆきちゃんの家に向き込んだ。

ゆきちゃんのお父さんはバンドマンっていうお仕事で、私達に分かりやすく一番最初から教えてくれた。

手で持つ部分はネックで、私のだと青色じゃなくて群青色っていう色らしいけど、その部分はボディだって教えて貰った。

私は平均よりも手が小さいのか、選んだ楽器が子供用では無かったからかネックを掴めなくて苦戦したけど、ゆきちゃんのお父さんに支えてもらいながら少しずつ練習した。

それから約半年立って、小学一年生になったと同時に私はベースとは別に違うも

のを始めてみた。

「アキー？そろそろ、ミニバスの時間よー？」

「うん。今行くー」

「あれ、アキ。今日もバスケ？」

「そうだよ？」

「そっかあ、友希那と3人でセッションっていうのをしようって話してたんだよ
）……」

「うーん、バスケ終わった後か明日でもいい？」

「もちろん！バスケ、頑張ってるね！」

「ありがとう、お姉ちゃん」

そう、偶然我が家のポストに入っていたミニバスケットボールチームの広告を見て、これやりたいって言うってから私はベースとバスケ、勉強の両立をしていた。

結構楽しいんだ、バスケットボール。

まだ入って半年だから試合はあれだけど、いつかは試合に出てシュートをバンバン決めるのが夢。

ママが運転する車に乗って、ミニバスケットボールチームが活動してるここら辺では一番大きな体育館がある総合体育館に向かう。

それから私は約3時間の練習とミニゲームをして、水を飲みながら着替えをしてタオルで汗を拭く。

帰ろうと思って外に出れば、ママが既に待っていてくれたみたいで席に座りながらコーヒーを飲んで、私を見つけるとニコニコして待っていてくれた。

「お疲れ様、楽しかった？」

「うん！ベースと同じぐらい楽しかった！」

「ふふ、良かった。そうだ、アキはいつも頑張ってるから大好きなパン買いに行く？」

「うん！行く！」

椅子に座ってコーヒを飲んでたママに満面の笑みを浮かべてから、私は急いでお気に入りの青色のパーカーをママから受け取って着てからちゃんと履けてなかった靴を履く。

パン屋さんって、どこのなんだろう。私の考えてる事がわかったのか、ママはクスクス笑いながら私の手を握って歩き出した。

「それじゃあ、パン屋さんにレッツゴー！」

「ごー！」

「どんなパンがあるかしらね、前々から行こうかなって思ってたけどなかなか行けてなかったのよ」

「そうなの？わたし、メロンパン食べたい」

「あら、白いソフトフランスパンとかはいいの？」

「食べる」

「うーん。買いすぎには注意ね、アキは」

ママが苦笑しながら私に目を向けてくるけど、良く聞こえなくて私は首を傾げる。お姉ちゃんのご飯が大好きだけど、私はご飯も好きだけどパンの方が好き。何だっけ、こういうのを和食と洋食って分けるってパパに教えて貰ったはず。ママの車に乗って、シートベルトを締めてから領けばママは車を走らせる。それから少しすると、見慣れた景色が見えてきて私はママに話しかけた。

「ママ、ここって商店街？」

「そうよ」

「パン屋さんなんてあるの？」

「ええ、ママが通ってた高校の後輩って言っても分からないわよね。友達がやるお店よ」

「へえ」

ママの友達なんだ、そう言えば前からここら辺にママは住んでたって聞いてたなあ。

パパもママとは中学高校って一緒なんだって、小学一年生の私にはまだまだ先だなーって思ってたから、どんな場所かまだ分からない。

暫くして、商店街の決まった駐輪場にママは車を停めて私を降ろして手を繋いで真っ直ぐに進んでいく。

あ、何かパンの匂いがする!!

「ママ！パン!!」

「びっくりした……、もう分かるの？」

「うん！これはパンだよ！」

「お、落ち着いてアキ…！」

ママの手を離して、良い匂いがする方へと走っていけば見えてくるのはオレンジ色の屋根が見えてきて私はその場に立ち止まる。

小学一年生の私で読めるお店の名前、初めて聞くけどパンのいい匂いがするから絶対に美味しい。

ゆっくりりと、私はお店の名前を読み上げる。

「……やまぶき…ベーカリー……」

「……あの」

「え？……あ、邪魔だったかな…？」

後ろから声をかけられたと思えば、私より少し身長が低くて灰色が混ざった茶色のような髪色で私の好きな色である青色の目を持つてる女の子。

手に持つてるものは小さな袋で、『北沢精肉店』って書かれてるけど最初の二文字と肉しか読めない。

お肉だよ、てことは御遣いに來てるのかな。

「……うん、その」

「うん？」

「入らないの……？」

「………え？」

「こら、アキ！危ないから……あら、沙綾ちゃん？」

「沙綾のこと、知ってるんですか？」

「ええ、貴方のお母さんから少しだけね。お母さんのお手伝い？」

沙綾ちゃん、と言うらしいこの子をママは知ってるみたいだ。

その子を持ってた袋を見て、ママは少し驚きながらも話しかけると沙綾ちゃんは笑顔で頷いた。

「母さん、頑張りすぎちゃうから」

「偉いわね〜！」

「ママ、この子知ってるの？」

「知ってるわ、というよりこのパン屋さんがママの友達のお店で沙綾ちゃんはそ
の子供よ」

「母さんの友達なの？」

「ええ、お店やってるかしら？」

「うん、どうぞ！」

「ありがとう、アキもほら」

「えっと、お邪魔します…？」

「ふふ、ここは沙綾の家だけどお店だよ。いらっしやいませ！」

同い年なのかな、凄いしっかりしてる。

中に入れば本当に沢山のパンがあつて、私はテンションが上がって気付けば右往左往していた。

全部が美味しそう、甘い嫌いだけど甘そうなパンまで美味しそうに見える。甘い食べれなかったら、お姉ちゃんにあげよう。きつと食べてくれる。

「久しぶり、千紘さん」

「梨穂先輩…ですか…？」

「ふふ、年賀状送ってるから私よ」

「お久しぶりです、住所をみたらここら辺なのかしらって思ってたんですよ。亜嵐先輩はお元気ですか？」

「娘のアキがパン大好きだから買いに来てみたの、あの人は前と変わらずって感じよ。アキ自己紹介出来るよね？」

「うん、今井アキです。小学一年生です」

梨穂はママの名前で、亜嵐はパパの名前。

お姉ちゃんと私はママとパパの名前から一文字ずつ貰って、付けたんだよってパパから聞いたんだ。

正直、何で名前がカタカナなんだろうって凄く不思議で仕方の無いんだけどパパは「カタカナが可愛いから」しか答えてくれなくて、お姉ちゃんと悩んだことだってある。

私の自己紹介を聞いたママの友達は、優しそうに笑ってから沙綾ちゃんの背中に手を回した。

「アキちゃんしっかりしてますね、沙綾も自己紹介しないと」

「山吹沙綾です、来年から小学生です」

「そうだ。アキ、沙綾ちゃんと遊んできたなら？」

「え？」

「ふふ、良いですね。沙綾、いっておいで？」

「……でも」

「沙綾ちゃん」

ママは、私の背中に回してた手を離して沙綾ちゃんの目線に合うようにしやがみ

込むとお姉ちゃんそっくりの笑顔で笑った。

私はパパ似で、お姉ちゃんはママに似てるんだって。

「おばさんが沙綾ちゃんのパパが無理しないように見張っておくから、沙綾ちゃん遊んできていいよ」

「…ほんと？」

「うん、それでも心配かな？」

「ううん、母さんをお願いします」

「ふふ、沙綾ちゃんしっかりしてるじゃない☆」

「…娘に頼っちゃう所が、私も申し訳ないって思っちゃいます」

「母さん、沙綾の部屋で遊ぶね！」

「分かったわ、純が寝てるから気をつけて階段を上ってね？」

「うん！アキちゃん、行こ！」

「え？うわあ!？」

遊ぶと言っても何処でと考えていたら、突然手を引っ張られてお店の奥へと沙綾ちゃんに連れていかれる。

遊ぶのはいいんだけど、パンが食べたい！バスケット終わってからお腹すいてペコペコなんだよおー！

そう思ったなら、沙綾ちゃんはハッと何かを思い出すとまた突然方向転換をして私の手を引っ張っていく。

「えっと、お腹すいてる？」

「え？う、うん」

「これ、うちのパン。父さんが作ってるんだよ！」

「ありがとう……白いパン!!」

「白いパン？」

「これ、白いから私そう呼んでるの。食べていい？」

「確かに白い！あ、待って沙綾の部屋で食べよ！」

「おっけー！」

沙綾ちゃんが用意してくれたお盆とお皿にパンを置いて、何か手伝わなきゃと思っていたら冷蔵庫から何かを取り出そうとしてるんだけど手が届かないのか大変そうにしてる沙綾ちゃんに気付いた。

私の方がお姉さんなんだもん、しっかりしなきゃ！

「沙綾ちゃん、ちょっといい？」

「うん」

「あ、大丈夫そう。沙綾ちゃんはどれが取りたいの？」

「オレンジジュース取りたい」

「よいしょっと、はいオレンジジュース」

「ありがとう、アキちゃん！」

ギリギリ椅子に登ったら取れる身長で良かった、何とか椅子から降りてグラスにジュースを注いでから私がお盆を持ってあげる。

最初は沙綾ちゃんが持つって言ったんだけど、危ないからって言ったたら何とか私
が持てた。

沙綾ちゃん、しっかりしてるなあ。本当に幼稚園児？って、ちょっと疑っちゃう。
う。

「ここが沙綾の部屋、どうぞ！」

「お邪魔します、これ何処に置けばいいかな？」

「その白いテーブルでいいよ！」

自分の部屋なんて凄いなあ、なんて思ったけど良く良く考えたら1階にお店があるから2階に自分の部屋があるのは普通なのかななんて思ってしまった。

それにしても、まだ幼稚園児のはずなのに勉強机があつて本棚もある程度絵本ではない本も入ってる。

「あのね、アキちゃん」

「ん？」

「小学校ってどんな場所？沙綾もあと少しで通うんだけど、どんな場所か分かんなくて……」

「んー、勉強する場所で友達が沢山出来るとこ！」

「勉強…？」

「うん、例えば」

私は小学生に入ってすぐに習った算数を思い出す。

沙綾ちゃんはしっかりしてる子だけど、勉強はまだやってないはずだから簡単なもので簡単に教えてあげなきゃね。

紙と鉛筆を借りて私は数字を書いていくと、沙綾ちゃんは真剣に私の書く紙を見つめる。

「数字はわかる？」

「うん、父さんと母さんに時計読むために教えてもらったよ」

「じゃあ大丈夫だね、えっとここに $\text{¥}1$ と $\text{¥}1$ があるよね？」

「うん」

私は両手を使って、人差し指だけを立てて分かりやすくする。

それから私は本当に簡単な足し算で、勉強というものを教えることにした。

「今書いたのを手でやるとこうなるの、それでこの不思議なマークは足し算っていう計算の名前」

「……足し算？」

「んーと、パンをお客さんに渡す時にお金を貰うよね？」

「うん、パンと交換してるよ」

「そのパンが沢山あった時、沙綾ちゃんのお母さんは何かしてない？」

「うーん、レジで数字を押して……あ！」

「そうそう、それが足し算。じゃあ、今沙綾ちゃんの目の前にある私の指の数は？」

「2つ！」

「うんうん、となるとこれはー？」

「2が答えなんだ！」

沙綾ちゃん、頭良すぎない？

私の教え方は正直上手かったとは言えない、お姉ちゃんに何度も教えたけど3回

ぐらいでやっとお姉ちゃんが分かったから私の教え方は下手だとおもう。

でも、沙綾ちゃんとはちゃんと1回で分かったからきつと頭がいいんだろなあ。

「これが勉強だよ、まだまだ色々あるけど分からないところあったら私が教えてあげる」

「ほんと!?アキちゃんありがとう!」

それから、貰った白いパンを2人で食べながら小学校はこんな所だとか沙綾ちゃん弟の純くんが起きてないか2人で見にいったら、丁度起きちゃったみたいで泣いちゃったからお世話をしたり。

すっごく楽しかった。お姉ちゃんとゆきちゃんと遊ぶのも楽しいけど、何だか妹が出来たような気分。

それから暫くして純くんと3人で遊んでると、ママに呼ばれて顔だけひよこっ
と出せば沙綾ちゃんのお父さんらしき人が看板を『OPEN』から『CLOSE』

に変えて、片付けをしていた。あれ、英語って言うらしいけど読めないから分からない。

「アキ、そろそろ帰ろっか？」

「えー……」

「沙綾、アキちゃんそろそろ帰らないとだからバイバイして？」

「やだ！沙綾、まだアキちゃんと遊ぶ！」

「沙綾……、アキちゃんのお姉ちゃんがが家で待ってるから駄目よ」

「……やだよ、アキちゃんと遊びたい」

「……ママ、明日も来ていい？」

「え？」

「沙綾ちゃんと明日も遊ぶ、学校あるけどそれから遊ぶ」

「ふふ、良いわよ」

「それじゃあ、駄目かな沙綾ちゃん」

正直、私もまだ遊びたいけどお姉ちゃんが待ってるから帰らなきゃダメだ。

今日は祝日だったから学校が休みだったけど、明日は学校があるけど金曜日だし、少しぐらい遅くなっても大丈夫なはずだもん。

沙綾ちゃんは少し涙目で私の裾をギュッと握りしめたまま、小さく頷いてくれた。そっか、この子お姉ちゃんだから……。

「梨穂先輩」

「なあに？」

「もし良かったらなんですけど、明日アキちゃんを家にお泊まりしますか？沙綾、本当に離さなそうなので……」

「え、いいの？」

「家は大歓迎ですよ、沙綾も喜ぶと思いますから」

「ねえ、沙綾ちゃん」

「……アキちゃんのお母さん……？」

ママは、ここに来た時にしたようにまたしゃがんで沙綾ちゃんを目線に合わせてから微笑む。

うん、やっぱりママとお姉ちゃんは笑った顔がそっくりだ。

お姉ちゃんは、私に『アキはパパそっくりー！』だなんて言うけどそこまで似てないと思う。

「明日、アキが学校終わったら沙綾ちゃんのお家にお泊まりするって決まったの。だから、今だけ我慢できる？」

「……明日はアキちゃんとバイバイしなくていいの？」

「うん、どうかな？」

「…我慢、する」

「沙綾ちゃん、偉い偉い。よし、じゃあアキ帰ろっか？」

「うん。沙綾ちゃん、また明日ね！」

「うん！また明日！」

さっきまでの悲しそうな顔は消えて、今は楽しく遊んでた時と同じように満面の笑みを浮かべて手を振ってくれる。

可愛い子だなあ、お姉ちゃんに自慢しちゃおーっと。

「アキ、沙綾ちゃんと仲良くなれて良かったね」

「うん！」

もちろん、ちゃんとパンはママが買ってくれてたし新しい友達も増えて私は本当に満足だった。

これが、将来のバンドメンバーであり大切な人になる沙綾との出会い。

——次回…Blueish color that goes muddy(仮)

Blueish color that goes muddy

崩壊へのカウントダウン。

私はそれに気付けなかった。

沙綾ちゃんと出会い次の日にお泊まり会をしてから、あっという間に3年が経った。あれから私は身長も伸びたし、お姉ちゃんやゆきちゃんと一緒に練習してるベースと小学1年から始めたバスケットがかなり上手くなった。

ベースの方は、まだ小学4年生だから出来ない曲の方が多いけど、お姉ちゃんとゆきちゃん、そしてゆきちゃんのお父さんとセッションが出来るようになってきて凄く嬉しくて楽しい日々が続いている。

私は、お姉ちゃんと一緒に家を出て前で待っていてくれるゆきちゃんと合流して学校へと向かう。

何度も何度も歩いている道、何度も通っている学校。

それでも私にとっては何ととても楽しい日々に変わりない。

下駄箱に着いて私はお姉ちゃん達とは別の場所へと向かう。私は3組だけど、お姉ちゃんとゆきちゃんは1組なのだ。

ずっと私だけ違うクラスで双子だからなんだろうなって勝手に納得してるけど寂しいものは寂しい。

上履きに履き替えて階段へと向かう途中で、もう一度先に履き終えて待っていたお姉ちゃん達と合流する。

「お姉ちゃん、今日から体育はサッカーだって！」

「そうみたいだね」

「ゆきちゃん、楽しみだね！」

「…うん、そうね」

「…2人ともどうしたの？具合悪い？」

何だか元気の無い気がする2人に私は声をかける。

でも、何でもないよと笑って返されてしまうから何も無いのだろう。

それから沙綾の家でやってるパン屋さんのパンが美味しいのだと、教室に着くまで私はずっとお姉ちゃん達に語っていた。

沙綾とは小学校は同じだけど学年が違うから、あんまり交流は少ないけど私がやまぶきベーカリーに行く頻度は毎日毎日増えていってるから、あまり寂しい思いは

してないみたい。

「アキ、また後でね」

「うん、お姉ちゃんとゆきちゃんまたね！」

あ、そういえば今日はミニバスに行く日だ。

最近では試合にも出られるようになってきたから凄く楽しいし前よりも出来るプレーが増えたからレギュラーにも選ばれるようになったなあ。

なんて思いながら歩いていれば教室に着いていたらしく、お姉ちゃん達と別れて教室に入れば仲の良い友達が声をかけてくれる。

「アキー！おはよう！」

「茉希、おはよ〜」

「アキ、おはよ！ 今日も姉ちゃんと通ってきたのか？」

「そうだよ、お姉ちゃんとゆきちゃんの3人」

「ほんと仲良いよなー、俺なんて弟と喧嘩してばっかだぜ？」

「それ、優星が嫌われてるだけじゃない？」

「なんだと茉希！」

「はいはい、落ち着こーねー」

黒髪ของセミロングで私に抱き着いてきた子が深谷茉希、そしてその茉希に怒っているのが1つ下に弟がいる立花優星くん。2人は幼馴染でずっと一緒なんだった。

私はお姉ちゃんやゆきちゃんと違うクラスってのもあるけど、1年から同じクラスだから良くこの2人と一緒に遊んだりしてる。

ほんと、喧嘩ばかりかしてて良く飽きないよなーなんて思う。

いつつも喧嘩してるんだもん、見てる私が飽きてきちゃうよ。

「アキ！ 茉希になんか言ってくれよ！」

「アキちゃん、優星に言い返して！」

「はいはい、仲が良くていいと思うよ」

「人の話を聞けー！」

「…十分仲がいいと思うんだけど」

これを毎日繰り返ししてるんだ、私から見たら夫婦みたいだと思う。前に夫婦みたいだって言ったら本気で2人が黙って静かになっちゃったから禁句って事で、口には出さないけど私以外にもクラスメイトは2人の事を夫婦だって言ってる。

私は自分の机まで移動してランドセルを降ろし、机の横に掛けてから筆箱や教科書、本などを取り出して筆箱は机の上に、教科書や本は机の中にしてしまう。

私はお姉ちゃんやゆきちゃんと同じクラスになったことが1度もない、双子だからなのか絶対に隣のクラスだったり、全然遠かったりするのが毎年。

さっきも思ったけどゆきちゃんとお姉ちゃんは、ズーっと同じクラス。正直、羨ましいなあと思うけど口には出さない。

「:ねえ、アキ」

「ん？今日も優星と仲直り出来ずに逃げて来ちゃったの？」

「違うよ!!……もっと大事な話よ」

「大事な話？えーっと場所変えた方がいい？」

「そうだね、ゆーせい！」

「分かってるって、じゃああの場所行こうぜ」

優星と茉希ちゃんに言われるがままに廊下へと出る。

そう言えば最近気になる事が増えた、というか朝の時点でも気付いたけど何となく違和感があるような、気の所為のような気がするけどお姉ちゃんとゆきちゃんに元気がない。

普段の土日とかは凄く元気なんだけど、学校行く前とかさつきみたいに学校の話をするとき少し暗くなる。

お姉ちゃんなんて学校楽しい！ってテンション上がったし、ゆきちゃんだってお姉ちゃんみたいに飛び跳ねたりはしなかったけど学校行くのを楽しみにしてた。

何かあったのかなって思って話しかけたけど、何も無いよっていつものように笑って返されるし、逆に私が心配される。さっきも何でもないよって言われたし。

2人についていけば人気が無い空き教室。

時間は全然余裕だからそこまで長話をしなければ、何の問題もないから大丈夫だろう。

「それで2人ともどうしたの？」

「……アキさ、リサちゃんの家の様子とかどんな感じ？」

「お姉ちゃん？普通だよ、一緒にベース弾いたり勉強教えあったり」

「…じゃあ、湊の方はどうなんだ？」

「ゆきちゃんも普通だけど……」

「優星、これ……」

「…ああ、多分教えてねーんだ」

「2人とも本当にどうしたの？お姉ちゃんとゆきちゃんが何かあった？」

2人が何処か考えるような顔をしながら私の方を見る。

いったい何があったのだろう、突然お姉ちゃんやゆきちゃんの普段の話を聞かれるなんて思わなかった。

確かに最近は少し元気が無くなって、さっきも思っていたけど何でもないって返されるから最初は本当なのかって疑ったけど、お姉ちゃんやゆきちゃんが嘘を吐くとは思えない。

優星と茉希は何か覚悟を決めたような顔をしてからゆっくりと、慎重に口を開いた。

「…アキ、リサちゃんと友希那ちゃんが危ないかもしれない」

「……え？」

「俺の幼馴染が教えてくれたんだよ、湊とアキの双子の姉ちゃんのクラスの一部が湊を虐めの対象にするとか変な会話してたって」

「……なに…それ、お姉ちゃんとゆきちゃんが…？」

「…本当かは分からないよ？アキに、さっきリサちゃん達は普通だって言ってたから何もされてないって事も考えられるから」

「…ただ、幼馴染が言うにはその会話してた奴らこの辺じゃあんまり良い噂を聞かないんだ。暴力騒ぎ起こしてるとか、先生に反抗してるとかそんなのばっかだ」

「……………」。

お姉ちゃんとゆきちゃんが虐められてる？

だから、学校の話や学校行くってなると元気がなかったの？

でも、何で私に2人は言わなかったの？

それともまだ虐められてない…？

分からない、何も知らない。

同じクラスじゃないけど、家族で幼馴染だから何かあったら私に話してくれるはず。

もしかしたら、まだ虐められてないのかもしれない。

「……茉希、優星」

「……うん？」

「…なんだ？」

「まだ、2人が本当に虐められてるのか分からないんだよね？」

「…ああ、俺の幼馴染が言うにはそういう会話をしてたけどまだ見たことはないって言った」

「…私も、そういうのは聞いてないかな」

「もし、2人が虐められたら私に教えて」

「おう、当たり前だ」

「うん、絶対にアキに教えるから！さっそく誰か知らないかの聞き込み、優星行

くよ！」

「今!?!それに俺もかよ!?!」

2人はそう言って、すぐに行動に移すためなのか教室を出ていった。

お姉ちゃんとゆきちゃんが、私の知らない場所で時間に傷付けられる。

そんな事、私が許さない。

何を犠牲にしたっていい、どんな終わりを描いたっていい。

この身を闇の世界へと投げる事になったとしても、悪魔に命を売ってでも守ってみせる。

「……強く、ならなきゃ」

ギョツと血が止まりそうな程に拳を握る。

何かあってからでは遅すぎる、そのゞ何かゞが起こる前に私が行動すればいい。

それから、私がやる事はすぐに決まった。

優星が合気道を習っていたからもしもの時に備えて、合気道を教わってバスケで体力と忍耐力をつけていく。

合気道だけじゃ足りないかもしれないと思って、私は叔父さんが格闘技などが好きだと聞いていたからDVDを借りて何度も見て覚える。

偶然にも私は記憶力に優れてるらしく、映像などで人が動いたのを見れば自分のモノに出来るらしい。

それから半年経った日。

私は合気道を完全に習得し、他の格闘技と言っても空手とテコンドーを親戚の叔父さんが師範として教えてくれて何とか自分のモノに出来た。

最初は反対されたけど頑張っていくうちに、どんどん教えてくれたんだ。

「……すげえな、お前」

「え？」

「俺が教えられることはもうねーよ」

「いやー、流石にあの優星に勝っちゃうのは予想外だったな」

「まぐれだよ、まぐれ」

「もう俺の方が弱いな、アキには勝てねえ」

「そんな褒めても何も出ないからね！」

「わあーってるって、俺だって教えたくて教えただし」

「ねえ、アキ」

「ん？どうしたの、茉希？」

さっきまでの明るい雰囲気は何処へ行ったのか、そう思わせるほどに声色が変わった。

私や優星も流石に空気が読めないわけじゃないから切り替えて、茉希へと視線を向ければ少し心配そうにでも複雑そうな表情を浮かべてる。

「……これって、もしもの時だけなんだよね？」

「…茉希」

「…私、リサちゃんや友希那ちゃん達が傷付くのも嫌だよ？2人とも友達だから、でもそれ以上にアキが傷付くの嫌だよ……」

「——アキ」

「…優星？」

「もう一個、絶対に教えなきゃいけない事があった。どんなに難しい技よりも絶対に忘れちゃいけない奴だ」

何だろう。

私は、座っていた身体を立たせて優星の前に立つ。

優星は何も言わずに、ただただ真っ直ぐに私を見てから茉希へと視線を向けてすぐに私へと戻した。

何か茉希に関係ある事なのかな？

「合気道だけじゃない、全ての格闘技で必ず言われるんだ。『力を傷付けるために使ってはいけない』ってな」

「……傷付けるために……使わない」

「そうだ、どれだけ相手にムカついても俺らが習ってるのは簡単に人を殺せるんだ。だから、絶対にそれだけは守ってくれ。いや、忘れないでくれ」

「……うん、分かった」

この時、私はちゃんと2人の前で頷いた。

茉希と優星はホッとしたようにして、お互いに微笑んでから茉希は、とりあえずお疲れ様っ！と言いながらお茶を私に渡してくれた。

ごめんね、2人とも。

確かに私は頷いたよ、でもお姉ちゃんとゆきちゃんを守るためなら私は2人との約束を破ると思う。

私にとって優星は師範。

師範の言うことは絶対、これが練習する時にした約束。

だけど

私の前では、2人が道場を出る準備を終わらせて出口へと向かってる。

ああ、茉希と優星をこれ以上巻き込みたくないなあ。

「…………ごめんね、約束守れないや」

「アキー？優星のお母さんがご飯作ってくれてるよー？」

「冷めるぞー、いや茉希が全部食うな」

「私はそんな食いしん坊じゃないですー！」

「あはは、ごめんごめん。今行くよー」

私は、大切な人達を守れるならなんだってする。

格闘技の掟を破ろうが犯罪を犯そうが、それで皆を救えるのなら私は喜んで破ってやろう。

何なら、私が死ぬ事で大切な人が一人でも救えるのなら私は喜んで死を受け入れるし、自分に銃口を向けて引き金だって引く。

「アキ、大丈夫だよ」

「茉希…?」

「アキには私達がいるんだから、ね? ゆーせい!」

「おう、俺らが出来事なら何でもする。だから頼れよ?」

「あはは、ありがとう」

「皆ー？ご飯冷めちゃうわよー？」

「や、やば！早く行こ!!」

「おい！ここはお前の家じゃねーつつうの、茉希！」

「ちょっと2人とも待ってってばー！」

私はタオルを首に掛けながら、前を走っていく2人を追いかける。

楽しい時間、お姉ちゃんやゆきちゃん、沙綾ちゃんと過ごす時間とはまた少しだけ違う時間。

何も起きなければいいのに、この時間を過ごしていたい。

このまま、ずっと——

だけど、私のそんな願いは尽く崩された。

私の中で何かが壊れていく、元々小さかった手に収まっていたはずの幸せという欠片は砂時計の砂のように零れ落ちていく。

ねえ、何でなの神様。

私はそんなに難しい事を願っただろうか。

ただただ、お姉ちゃんやゆきちゃん、沙綾ちゃん、優星、そして茉希と何にも特別な事ではない普通の日常を過ごしていたいと願っただけなのに。

私の幸せな時間が終わるカウントダウンは、この時既に始まっていたんだ。でも、それに気付けるのはまだまだ先。

「ねえ、アキ？」

「んー？」

「私、何があってもアキ達の味方だから!!」

「私じゃなくて、俺らの間違いだろ」

「だって、優星は負けるってわかったらすぐに手を抜いちゃうじゃん」

「んな!? ……確かに今まではそうしてきたけど、今回ばっかはそんな事しねーよ」

「へえ、言ったね?」

「おう、約束してやる。俺と茉莉、そしてアキは必ず、今井と湊を守る」

「優星、お姉ちゃんのことリサって呼ばないと私まで反応しちゃうんだけどー」

「それは慣れろ、俺アイツとまともに話したことない」

「ですよねー、ってもうこんな時間じゃん! アキ、沙綾ちゃんのとこ行くんじゃない」

ないの？」

「やば！優星のお母さん、ご馳走様でした！」

「いえいえ、また来てね〜」

「はい！」

私はさっきまで考えていた事なんて忘れて、すぐに持ち物を持って着替えてから玄関へと急ぐ。

沙綾ちゃん達が待ってるからね、急いで行かないと。

優星のお母さんと優星、そして茉希に挨拶して道順を聞いてから私はやまぶきペーカリーへと向かって走る。

意外と優星の家から商店街は近かったのか、言われた通りに何回か曲がればパンのいい香り。

「いらっしやいませー、あ！アキちゃん！」

「沙綾ちゃん、遅くなってごめんね」

「ううん！……あれ？」

「うん？どうかした？」

「ほっぺた、怪我してる」

「え？……あ、ほんとだ」

言われてみて触れれば、少しだけぶつけていたらしい。

多分、優星に手合わせをしてもらってるときにでも怪我をしたんだろう。

まあ、青アザにはならないだろうし何の問題も無い。

「アキちゃん、座って！」

「ん？なんで？」

「湿布貼るから！」

「いやいや、この程度大丈夫だよ」

「だーめ！アキちゃん、そう言ってお姉さん困らせてるってアキちゃんのお母さんが言ってたの聞いたもん！」

「……お母さん」

そこまで言われてしまえば、私は反論出来ずに座って沙綾ちゃんの言われた通りにするしかない。

沙綾ちゃんは救急箱から湿布を1枚取りだして、ハサミで大きさを整えてから私の頬に貼る。

うっ、冷たい……。

ありがとう、そう伝えようとした時だった。

沙綾ちゃんの表情が少し暗くて私は言おうとした言葉を飲み込んで、別の言葉を発する。

「沙綾ちゃん？どうかした？」

「……アキちゃん、会うたびに怪我増えてるよ」

「……あー、最近仲良い子に合気道習ってたからかなあ」

「あいきどう?」

「そそ、ちょっとした習い事かな? まあ、それをやってたら小さい怪我が増えちゃうんだ」

「…無理しないでね、沙綾もアキちゃんが傷付くの見たくない」

「…うん、ありがとう」

私は今にも泣きそうな沙綾ちゃんの頭を撫でながら、ギューツと抱きしめてあげる。

沙綾ちゃんはこう見えて泣き虫さんだ、純くんや生まれたばかりの紗南ちゃんの前ではしっかり者さんだけど私の前では妹モード。

私がそうしてほしいって言ったんだけどね。

「さてと、沙綾ちゃん」

「うん？」

「今日のオススメは何かな？」

「ふふ、今日はねー！」

可愛い私にとっての妹的存在な沙綾ちゃん。

いつか、お姉ちゃんやゆきちゃんにも紹介したいなあ。きつと、2人とも沙綾ちゃんの事を妹みたいに接すると思うから。

私はテンションが上がってる沙綾ちゃんの後ろについていきながら、オススメのパンをトングで掴んでトレーに乗せていくのだった。

次回：『I did not notice anything unusual.』（仮）

898 Blueish color that goes muddy.

第2章

Sister
Hidden real intention wandering

——近すぎて気付けない

私達にとってアキは日菜何より大切なのに。

あれからパパとママ、そして主治医の黒崎先生が病室に戻ってきた。

でも、表情は少しだけ固くてアタシ達はさっきまで笑顔だったけど表情を変える。アキが2年越しに起きたのに、何をそんなに怖い顔をする必要があるんだろう？

「楽しく過ごしてたのにごめんね、アキちゃん」

「いえ、大丈夫です。多分ですけどあれですよね？」

「あれ…？」

「うん、アキちゃんが言ってる事であってるよ。それじゃあ検査するね」

アタシは『あれ』という言葉に反応する。ママは「大丈夫よ」って言いながらアタシの背中を撫でる。

紗夜と燐子、そして友希那は何かを察してか、あこを連れて病室の端に移動してしまふ。

アタシは何か何だか分からず、不安気にアキに視線を向けるとアキは『大丈夫』と口パクで言いながら笑った。

「まずは、ここで維持して」

「はい」

「うん、大丈夫そうだね。じゃあ最後に、手を軽く握ったり開いたりしてみて？」

アキは言われた通りに、手を軽く握ったり開いたり動かしていく。

先生はそれを何処かホツとしたように笑って、ゆっくりとアキから後ろにいるアタシ達に振り返る。

額に流れる汗を軽く拭いて、黒崎先生は微笑んだ。

「大丈夫です、脳も後遺症が見当たりませんし足も動かせていました。特に痙攣などもせず、最後の確認で手や腕を見ましたが特に後遺症はありません。……奇跡です」

「……アキ、良かったわね……！」

「……良かった、良かったなアキ」

「——うん！」

パパとママが嬉しそうにアキに近寄る中、アタシは全く頭が追いつかなくて動けずにいる。

え、後遺症が何も無い？ 待って、さっきはそれを確認してたってこと？

一人で固まっていると、後ろからポンッと誰かに触れられて驚いて視線を向け

ば友希那が優しく微笑んで軽く頷いてくれる。

友希那だけじゃなく、紗夜も燐子、そしてあこも笑ってアタシに頷く。

ああ、本当なんだ。奇跡が起こったんだ。

「……アキ」

「うん？」

「元気になったら、また2人でセッションしようね」

「っ！……うん……！」

アタシはパパとママに押され、アキに近付いて涙を零さないように笑って伝えると驚いたようで目を見開いたけど、すぐに涙を浮かべながらも笑って返してくれた。

あれから数週間が経って、アタシはRoseliaの皆とバンド練習前にアキの

病室へと向かっていた。

アキはリハビリが始まってキツイと嘆いているけど、起きた次の日に前に予約しておいたアルバムを渡してファイナルライブの存在を伝えたら狂ったようにリハビリに精を出し始めた。

黒崎先生も『…本当に怖いよ、毎日「早くリハビリしたいんだけど!？」って訴えてくるんだ』なんて泣きそうな顔で言っていて、アタシ達は呆れつつも笑ってしまっただのを覚えてる。

アキの名前を確認してから扉を開ければ、中にはアキがいる———と思ったんだけど。

「アキー、今日は皆と…!？」

「今井さん? どうかされたんですか?」

「リサ姉ー、早く中入らないの?」

「…今井…さん…?」

「リサ、どうしても中に入らない…:いないわね」

「「ええ!?!」」

「な、何で!?!リハビリの時間じゃないし、あの子はまだ勝手に歩いちゃいけないから歩き回ってるとは思えないし、じゃあご飯?ううん、病院食があるから外に出る必要は無いし…:まさか誘拐!?!」

「リサ姉落ち着いて!最後のは絶対ないから!」

「そ、そうよ今井さん。いくら何でも病院で誘拐なんて有り得ないわ…:」

「……前に…アメリカで…ありましたよ…?」

「……誘拐かもしれないわね」

「紗夜さん!?!りりんも待って!?!誘拐なんて無いですよ、ですよね友希那さん！」

「……まさか、あの子が誘拐に…?」

「友希那さんまで!?!」

あこが何か言ってるけど、アタシの頭はパニックでいつものように周りを落ち着かせられるほどの余裕なんてないわけで。

アタシ達は荷物を投げるように病室に置いてから走り出して、皆アキと最近仲良くなったから必死に探す。

「…この音は…アコースティックギター…？」

「紗夜？どうかしたの？」

「今井さん、アキさんはアコースティックギターは弾けたりしますか？」

「え、うん。確か弾けたと思うよ？」

「じゃあ…この音に…辿っていけば…？」

「…そうね、誘拐されて助けを呼んでるのかもしれないわ」

「…あの、そろそろ誘拐から離れませんか友希那さん」

「辿らなきゃ…！アキ、すぐに助けるからね…！」

「リサ姉までええええ…！りんりん、皆を止めるの手伝ってえ！」

「…ごめんね…あこちゃん、私も…無理…かな…？」

あこの言葉を申し訳なく思いつつもスルーして、遠くから聞こえるアコースティックギターの音を辿っていく。

あれ、こっちって小児科じゃなかった？

まさか誘拐犯は小児科にいるの！？絶対絶命じゃん！！

そう思ったのは皆一緒のようで走るペースを早めて、音を辿っていく。

そして遂に辿り着いたと思っアキの名前を叫んだ。

「アキー！！」

「あれ、お姉ちゃん…って。え、何でそんな怖い顔してるの？」

「アキさん、大丈夫ですか？すぐに警察を呼びますから安心してください」

「アキ、怪我はないわね？大丈夫そうね、もう私達が来たから大丈夫よ」

「アキ、大丈夫だよね？何もされてないよね？アタシ…アキに何かあったら……
！」

「え、いや何かあったの？」

「…あの、皆さん…アキさんが…病室にいらなくて…誘拐されたんじゃないって……」

「……あこは何度も言ったもん…皆聞いてくれなかったけど……」

「……リサ、深呼吸しよっか？」

急にガシッと腕を掴まれて何かと思えば、少し怖い顔をしたアキの姿。

アタシは言われた通りに深呼吸してアキの目を見ると、はぁーっと深い溜息をつかれた。

いやいや、何で!?

「リサとゆきちちゃん、そして紗夜ちゃん。周りを見て？」

「……小児科ね」

「……小さい子供達がアキさんの周りに集まっていますね」

「……もしかして、アキが演奏して皆で合唱とかしてたり…?」

「せーかーい、よく出来ました」

確かに言われてみれば、あこなんて特に疲れてる。

いや、ほんとにごめん。そう言えば、ずっとあこが止めようとしてくれてたのにパニックでスルーしちゃってたよ。

今度何かお詫びしよう。

アタシ達3人は2人に謝ってから、ずっと静かに事の成り行きを見ていた小児科で入院してる子達にアキが視線を向けて再び合唱が始まった。

あ、この曲知ってる。確か、パンで出来たヒーローアニメのオープニングテーマだよ？

モカが良くバイト中歌ってるの聞いたことあるなあ。

「皆、せーの！」

『そうさ！ 恐れなくて、みーんなの為にー！ 愛と勇気だけがとーもだちさー！』

「上手だねー！あ、もうこんな時間。そろそろおしまいにしよっか？」

「えー！アキ姉ちゃんもう少しだけ歌おーぜ！」

「そーだよ、お姉ちゃん！」

「だーめ、時間守らないともう歌えなくなっちゃうよ？」

『やだー！』

「じゃあちゃんと時間を守ろうね！また明日もお姉ちゃん、ちゃんと来るから」

『はーい！』

アキがそう言うと、皆はちゃんと同じ病室の子達で集まってグループになってか

ら自分の病室に戻っていく。

アキは車椅子を動かしてアコースティックギターを持ちながら、固まって見ているアタシ達に近付いてくる。

アタシは急いでアキの車椅子の後ろに回り、変わりに押すと「ありがとう」って少し申し訳なさそうに笑った。

もう、気にしなくていいのに。

「それにしても、小児科に怖い顔で走ってくる女子高生3人ってドラマみたい」

「もー、笑い事じゃないって」

「そうですよ、何かあったら遅いんですから」

「アキは抜けてるんだから、もう少し危機感を持ちなさい」

「あれ、何で私が怒られてるんだろ？」

アキは、あこと憐子にそう問いかけると2人も苦笑しながらも首を傾げる。

あつという間に病室に着いてアキをベッドに移動するために、Roseliaの
中でも力がある方である紗夜とアタシが前に出た時だった。

「あ、紗夜ちゃん」

「はい？」

「その場で立ってるだけでいいよ？リサもね」

「え、倒れちゃうじゃん！」

「いいから見ててって」

いつもならアタシと紗夜で抱きしめるように支えてベッドに座らせるのに、今日はその場で立ってるだけと言われてアタシと紗夜は困惑するしかない。

そして、アキは「…よっと」なんて言っ立ち上がってアタシと紗夜の肩に掴まってベッドまでの数歩を歩き出す。

ん？歩き出す？

「あ、アキ…!？」

「こ、転ぶから突然移動しないでよお姉ちゃん！」

「あ。ご、ごめん…!」

「ふう、どう？少しだけ歩けるようになったんだ、先生にも驚かれちゃった♪」

「予想外でした…この短期間で凄いですね……」

「凄いね、アキ姉！」

「凄い…です…！」

「ふふ、ありがとう」

アタシと友希那は驚き過ぎて声が出ない。

いや、だってまだ数週間だからそろそろ立てるかなーとは思ってたけど歩けるなんて言われてないし、知らされてないよ!?

アタシの気持ちを察したのか、アキはクスクス笑って口を開いた。

「立てるようになったのは先週ぐらい？で、歩けるようになったのはここ最近だよ。お母さんとお父さんも知ってるけど、リサ達を驚かせたかったから黙ってても

らったんだ！もちろん、お父さん達もすっごく驚いてたけどね」

「そりゃ驚くよ！だって、立てるって事も聞いてなかったんだから〜！」

「本当よ、今日は色んな意味で心臓に悪い事ばかり起きるわね……」

「あはは、ごめんね。サプライズ大成功だ♪」

嬉しそうに笑ってる姿を見たら、アタシ達は何も言えなくなる。

それから、あこがそわそわした様子でいるのにアキが気付いたみたいで普段のふにゃっとした笑顔を浮かべた。

「あーこちゃん、どうしたの？」

「あ、えっと……！その、アキ姉のギター聞きたいなって！」

「宇多川さん、無理を言っっては……」

「大丈夫だよ！じゃあ、Roseliaの曲でも弾く？」

「え!?!アキ姉弾けるの？」

「うん、ギターで指のリハビリって思って1曲だけ練習してたんだ。もちろん、ゆきちゃんからの許可は得てるよ」

「アキが弾くのは構わないと思ったのよ、それにこれからの私^{Roselia}達にアキは必要よ」

「だってさ、アキ☆」

アタシがそう言うと、楽譜を机に広げていたアキは少し困ったように笑うだけで

何も言わなかった。

あれ、何でだろう。今すぐは無理だろうけど、Roseliaにアキが入ってくれたら凄くいいんだけどなあ。

「…これって…『BLACK SHOUT』の…楽譜ですか…?」

「うん、歌詞は覚えてないから口ずさんでくれると嬉しいかな。ただ、ギターの所を弾くけど紗夜ちゃんとは全く違うから違和感はあると思うけど…」

「大丈夫だよ！アキ姉が入りやすいように、あこが抑えめでカウントするね！」

「ありがと！」

あこがスティックを取り出して、いつもより抑えめで簡単に叩きながらカウントを入れる。

アキは、ふうーっと目を瞑りながら深呼吸をする。いつも、これをやってスイッチを入れるんだって。

そして、あこのカウントが終わると同時に目を開いてアコースティックギターの弦をピックで弾き音を鳴らす。

紗夜のエレキギターで聞く音とはまた別に、かつこよくて深い音を出すアキのアコースティックギター。

ギター1本と演奏者で、ここまで雰囲気が違うんだ。

それに、ちらっと楽譜を見たら多分だけどアコースティックギター1本だけで曲が聞こえるように、スコア中に各楽器の音をアコースティックギターに戻した音が書かれてる。

その音を鳴らしてるから、キーボードやベース、ドラムのメインパートまでアコースティックギターで綺麗に聞こえる。

「んー、こんな感じ？」

「すごい、すごいよアキ姉！お姉ちゃんと同じぐらいかっこいい！」

「…凄かったです…感動しました……」

「ええ、アコースティックギターだけでここまで曲が変わるんですね……。私もまだです」

「流石ね、予想以上の出来だったわアキ」

「ありがとう、でもまだまだだよ……リサ？」

「あ……凄いな、流石アキだな。アタシじゃ足元にも及ばないや」

つい、ぼーっとしてしまってアキに呼ばれるまで気付けなかった。

アキはアタシの言葉に目を見開いて、手元から力なくピックが床に落ちる。

そんなアキに、友希那がピックを拾ってアコースティックギターを受け取りケースへとしまっていく。

「……ごめん、ちょっと疲れちゃった」

「…そうね、私達も練習に行きましょう。また来るわね、アキ」

「またね、アキ姉！」

「…ゆっくり、休んでください……」

「うん、ありがとう。来てくれたのにごめんね」

アタシは何故か今のアキに近付けなかった。

さっき、ピックを落とした時のアキの表情が頭から離れない。

喧嘩したわけでもないし、別に何かあったわけじゃないのにどうしてだろ？

「今井さん」

「…ん？」

「…リサさん、少し先に行ってもらっても宜しいですか？」

「え？」

「アキさんと少しばかり話すことがあるので」

「…うん、分かった。またねアキ」

「うん、来てくれてありがとうって伝えといてね」

アタシは、その言葉に頷いて病室を後にした。

でも、この時アタシが紗夜の行動を取らなきゃいけなかったんだ。

実の姉であるアタシではなく、アキの異変に気付いたのは友希那と紗夜だけだった。

*

リサさんが病室を出たのを確認してから、私は顔を伏せてるアキさんの隣に設置されている椅子に座る。

座った瞬間、ビクツとアキさんの肩が震えたが気が付かなかった風に装ってどう話そうか考える。

私達はお互い双子だからか、姉同士でリサさんと相談はしあったりはするから、

アキさんを少しだけ話を通して分かったのは日菜と違ってアキさんは気持ちを表に出さない。

自分が思ってる事を相手の立場を優先にしてしまうから、姉であるリサさんにも本音をあまり口にしないという事。

私自身、日菜はああいう性格をしてるから困った事がないけれど日菜がアキさんのように隠すタイプだったら今頃仲を戻すのは不可能だったと思う。

「アキさん、リサさんはここにいません。だから思ってる事を素直に言ってみてください」

「疲れちゃったぐらいかな？でも、急にどうしたの？」

そう笑って返すアキさん。でも、普段のリサさんが好きな笑顔ではない事ぐらい私にだって分かる。

リサさんの言うようにアキさんは演技が上手い、きっとさっきの異変が起こる瞬

間を目にしているも気が付かない人の方が多いと思う。

ただ、私と湊さんはすぐに分かった。多分、リサさんが気が付けなかったのはこの異変のスイッチが彼女自身の言葉だったから。

「では、私から言わせて頂きますがリサさんの『私じゃ足元にも及ばない』という言葉に何を感じたのですか？」

「何をもって、そんな事ないのになって思ったただだよ」

「嘘ですね」

「……どういう意味かな？」

「それなら、どうしてあの時『そんな事ないよ』の一言が無かったのですか？」

「……っ」

アキさんは私の言葉に開けかけた口を閉じ、また掛け布団へと視線を落とす。こうやって考えると、日菜とはまた違うがアキさんも妹なんだとしみじみ感じる。

「もう1度聞きます、あの言葉に何を感じたのですか？」

「……あはは、バレちゃった。ゆきちゃんにはバレてるって思ったけど、まさか紗夜ちゃんにまでバレるなんて思わなかったなあ。やっぱり姉だと分かるもの？」

「そんな事ありません、私もあの瞬間を見ていなければ分かりませんでした」

「……そっか、でもリサが悪いわけじゃない。多分、あれは口癖みたいなものだから私が気にしなければいい話な事だけど、それでも聞く……？」

「ええ、聞きますよ」

「……あの時、リサが言った言葉は前にリサがベースを止めるって言い出した言葉と同じなんだ」

アキさんの重い口が開かれ、まず最初に聞いた言葉は思っていた以上に重くのかかった。

確かに、リサさんはバンドを組んですぐの時に『ブランクがあるから初心者に近いんだ』なんて言っていた。

でも、実際に演奏してみれば彼女の技術は殆どブランクを感じなかった。

レベルは満足なものでは無いにしろ、技術面では圧倒的なものを持っていた。

何故、これほどの技術を持っておきながらブランクがあるのかと思っていたぐらいに。

「……私達、一緒にタイミングでベースを始めたんだけど人には努力の結果が出る

スピードってバラバラじゃん？ 私達の場合、私が先に結果が出ちゃってリサはなかなか出なかつたんだ。それでも、諦めずにずっと私達はお互いに『教えて！』って言い合って頑張ってた……けど」

「……リサさんは変わってしまった……？」

「……うん、変わったというか周りの環境もあったんだと思う。元々オシヤレが好きだったからネイルとかも始めて、ゆきちゃんとも色々あってリサは音楽から離れたかったんだ。私はバンドに入ってたからあれだったけど、バンドも入ってなかったりサは部屋にベースを置く日が続いて私が事故に遭った前日も触ってる気配は無かった」

「……そうですか」

「ずっと私が言ったの『お姉ちゃん、ベース一緒にやらない？』って。でも、リ

サが頷く事はなくていつも困った顔をして『ごめんね、アタシ用事があるから』って言われて断られてた。それから疎遠になって最後に『アタシじゃアキの足元にも及ばないからさ、このまま迷惑かけられないよ』って言ってベース止めちゃったから……ちょっとね」

正直、驚きしかない。

あのリサさんが、アキさんにそう言って疎遠になるような人には見えないから。ただ、前にアキさんの事を初めて話してくれたあの日のリサさんの顔を見たら何となく伝えようとしていた事が分かった気がする。

きつと、私と日菜に同じ道を進ませたくなかったのだろう。本当に彼女はお人好しだと思う。

「……ごめんね、暗い話しちゃってさ！バンド練習あるんだよね、遅れちゃうよ」

「アキさん、怖かったのでしょう？」

「……え」

「また、自分の大好きな姉から音楽を奪ってしまうのではと思ったから」

「……うん…お姉ちゃんの音、大好きだったから。本当はね、Roseliaに入ってってゆきちゃんに言われた時凄く嬉しかった。でも、またお姉ちゃんにベースを止めて欲しくない。だから…！」

そこまで言い切ったアキさんを私は自分らしく無いなんてどこかで思いつつ、抱き締める。

日菜が見たら羨ましいなんて言うのかしら、妹の気持ちって双子なのに案外分からないものね。

「……大丈夫ですよ、今は私達もいます。そうやって全てを一人で溜め込まないで

ください、本当に貴方達は似ていて困ります」

「…あはは、紗夜ちゃんも日菜ちゃんと似て優しいね。すっごく温かい心持ってる」

「…初めて言われました、そんな事」

「えー？……紗夜ちゃんも無理しないでね。お姉ちゃんの気持ちは私達妹には分からないけど、たとえ誰もお姉ちゃんの敵になっても一番の味方でいようとするのは妹の使命みたいなものだから」

「……ええ、覚えておきます」

それからアキさんに別れを告げ、私は病室を出ると廊下には壁に寄りかかっているリサさんの姿。

顔は伏せられていて、とても普段の明るい雰囲気ではない。きっと、中の話が聞

こえてしまったのだろう。

「……ありがとう、紗夜」

「いえ、以前貴方に救われましたからそれをしたままです」

「アタシ、お姉ちゃんなのに気付けなかった……」

「私もです」

「……え？」

「日菜の事を一番気付いていたのは今井さんでした、きっと私達は近すぎて気付けないのでしょうか。お互いがお互いの事を大切に思い過ぎて」

「……うん、そうだね」

私は彼女の肩をポンッと叩いて、腕を掴み廊下を歩き出した。

ああ、本当にこの双子に出会ってから私は柄にもないことばかりをしてる気がする。

でも、それを嫌だと思っている自分が居ないのだからこのままでもいいのかもしれない。

本当に困った双子だと、私は苦笑しながら思いつつもバンドメンバーがいるスタジオへと歩を進めた。

私の後ろを歩く彼女も溜め込んだ顔をせず、吹っ切れた顔をしていた。

第2章に突入しましたー！

第2章のテーマも無事に決まりましたので、またどんどん進めていこうと思います

ます。

それでは『From dawn to dusk』第2章を宜しく願います！

Battle of girls playing music

大変遅くなってしまい、申し訳ありません。

今回は、ほぼほぼネタのような回です。

そしてリサ姉誕生日おめでとぅ!!

ちゃんと、アキとの話を書くから待っていてくれ!

残り30分で授業が終わる。

授業内容は先生が出張でいないため、急遽自習に変わった今、アタシは1枚のルーズリーフにひたすら書いていた。

この後ある大切な事に失敗しないための準備。

そして授業が終わって飛び出したものの、廊下で待機していた風紀の先生に捕まる。

「今井、前々から言ってるのが分からんか？」

「あー、先生。今日はちょっと急がないといけないので、また今度じゃダメですか……？」

「その台詞を既に5回は聞いてるぞ？」

「……妹が入院してて行かなきゃ行けないんです!!」

「……なんだと!?! そういう事は早く言え!」

本当は少し違うけど、アキを理由にしたくなかったなあ……。

風紀の担当先生に捕まったのを何とか逃げて、アタシはすぐにチャックがしつかり閉まってなくて落ちた物を鞆の中に突っ込んで廊下を走り階段を駆け降りる。

時間を予想以上に取られたから、結構バスがギリギリだ。

後ろから誰かの声が聞こえるけど、今のアタシには止まって話を聞けるほどの余裕な時間はない。

本当は学校に行くのも躊躇うぐらいだったんだ、学校にちゃんと出た事を褒めて欲しい。

急いで下駄箱まで走り、投げるように上履きを下駄箱に入れてからローファーを地面のコンクリートに乱雑に投げて落下させる。

いつもならもう少し丁寧に扱うけど、今日だけは許して。

「リサ!!」

「あ、友希那!ごめん……!」

「私も行くから待ってと、さっきから言ってるじゃない……！」

肩で息をしながらも怒ってる友希那が、アタシに詰め寄ってくる。

風紀の先生に捕まって逃げた時に聞こえた声は、友希那だったんだ。焦ってたから聞き取れなかった。

普段のアタシなら「落ち着いて」の一言が言えるんだけど、本当に急いで向かいたいからそんな風に言える余裕もない。

申し訳ないけど、今日だけはマジで許して！

「友希那早く！」

「分かってるわ……！」

下駄箱を飛び出して正門を突っ切っていく。

走るのが苦手な友希那も、今日は頑張っつてついてきてるのをチラッと横目で確認しながら駅までひたすら走る。

駅には既にバスが停車していて、アタシ達と反対から走ってきた紗夜が列に並んでくれたから合流して一番後ろには行かずに済んだ。

「湊さん！今井さん！」

「紗夜ありがと！」

「礼は後でいいですから、早く乗ってください！」

3人でバスに乗り込み、とりあえず呼吸を落ち着かせる。

アタシはスマホを見て他のメンバーの状況を確認すると、既に目的地に着いたようではアタシ達だけみたいだ。

紗夜や友希那もアタシが言わなくても察したようで、奥に進んで空いている席に

座って一息つく。

「……疲れたわね」

「そうだね、まあでも良い運動になったでしょ？ 紗夜は運動じゃ済まない距離だけだね……」

「……ええ、学校から羽丘駅は反対ですから」

「…紗夜、お疲れ様」

「…湊さん、ありがとうございます」

友希那も流石に、反対から走ってきた紗夜の疲れには何とも言えないみたいで同情的な目を向けていた。

でも、本当に紗夜はよく間に合ったよね。確か風紀委員で少し残らないといけな
いから本来アタシ達が出るより遅い時間に学校を出たはずなのに、どれだけ早く
走ったら間に合うの!?

「…死ぬ気で走りましたよ、向こうの駅からではバスが出てませんから」

「アタシの心を読まないで、紗夜。でもさ、向こうから電車乗って来れば良かった
んじゃない?」

「……紗夜、貴方」

「…急いでて思い付きませんでした」

紗夜って意外と抜けてる時あるよね。日菜が言うには、そこが可愛いんだ! ー
ん♪ってする! って言ってたけど本人には言えない。絶対。

バスに揺られて、呼吸が落ち着いてきた頃にバス内でアナウンスが流れる。
アタシ達の目的の場所だ。

『次は羽丘総合病院、羽丘総合病院です。お降りの方はボタンを押してください』

「押しました」

「紗夜って結構負けず嫌いだよね、ボタンを押すのだっていつも一番早いし☆」

「ふふ、紗夜はボタンを誰よりも先に押したいのね」

「ち、違います！私はただ…その…！」

真っ赤な顔で言われても説得力無いよー。

まあ、最近紗夜も友希那も最初の頃のような棘が無くなった気がする。

前までの紗夜なんて、本当に氷だったもん。友希那も似たような感じだったけど最近はず人も良く笑う。

バスが停車したのを確認して、アタシ達は席から立ち上がってICカードをかざして降りる。

病院の中に入ると、受付の前で皆が待っていた。何か、凄い人がいるから看護師さん達も軽くパニックになってて申し訳なく感じる。

「ごめん、お待たせ！」

「あ、リサさーん。遅いですよ〜」

「私達も今来た所なんで大丈夫ですよ」

「モカは沙綾を見習うべきだと思う」

「らーんー、モカちゃん傷ついちゃーう」

Aftergrowの皆とPoppin Partyの皆、そして先に来ていた
燐子とあこと合流する。

本当はアタシと友希那も早く来れたんだけど、アタシが風紀委員の先生に捕まっちゃったから予想以上に遅くなっちゃったんだよね。

「そう言えば、氷川先輩は風紀委員で残ってたのは知ってますけどリサさん達はど
うしたんですか?」

「うっ……それは、ね。うん」

「リサさーん、何かやっちゃったんですかあ〜?」

「いや、何もやってないよ。うん」

そう、やってはいない。

ただね、ちょっと面倒な先生に捕まったってだけなんだ。

そう思って話題を変えようとしたら、隣にいる友希那がぼそつと呟いた。

「風紀委員の先生に怒られたのよ」

「……え」

「……あゝ、ピアスとかだゝ」

「……校則は破ってないもん」

「今井さん、貴方。私が風紀委員だって事を忘れたのかしら？」

「紗夜は花女だよね!？」

「ねえ、つぐみ。リサさんの格好ってアウトなの?」

「へ!? え、えーっと……ギリギリ……かな?」

つぐみの視線が一番辛い。

アタシは早くこの話題を変えたくて、今日集まった本来の趣旨を口にする事にした。

そう、アタシ達がここにいるのは他でもなくアタシ達全員のこれからの学校生活に関わる重要な話し合い。

「……そろそろ本題に入ろっか?」

「そうね、今井さんの風紀の乱れは後ほど話すとして。花女の皆さんは私の所に、

羽女の皆さんは今井さんに集まるでいいかしら？」

「アタシの話はもうしないからね!？」

それからアタシ達は綺麗に別れて、近くの空いている椅子に座って丸くなる。傍から見たら女子高生の集団が病院の受付で集まっているという変な光景だけど、気にしてられない。

「……さて、作戦会議するよ」

「名付けてく？」

「アキさんを羽女に迎え入れよう作戦!!」

「…ひまり、いくら何でもそのまま過ぎるぞ」

「あたしでも、もう少しマシな名前付けられるけど」

「ま、まあまあ巴ちゃんも蘭ちゃんも……」

「あこならー、ドーンバーンっとアキ姉奪還作戦って付ける！」

「いや、アキさんは別に誘拐されたわけじゃないからな!？」

「……貴方達、そろそろいいかしら？」

混乱し始めていた後輩達を友希那がピシヤリと鎮める。

作戦名はねー、アタシもそこまでネーミングセンスが良いか自信ないから皆に任せとこつと。

授業中に書いていたルーブリーフとノートを鞆から取り出して、シャーペンを手

に持ってすぐにメモ出来るようにする。

「黒崎先生の話だと、アキは尋常じゃない早さで回復してるらしいんだ。それで、そろそろ退院した後の事を考え始めようって今日先生からアキに言うんだって。アキは編入って形で高校に入るわけだけど、近くにある高校は羽女だけじゃない」

「花女ですね」

「そう、多分だけどアタシ達がアキと一緒に学校に通いたいと思ってるのと同じぐらいに花女の皆も思ってるはず」

「思ってますね、絶対」

「けど、決めるのはアキ自身。だからアタシ達はアキに入りたいと思わせるようなプレゼンをしなきゃいけない、ここまで質問ある？」

全員が首を横に振ったのを確認して、アタシは話を進めることにする。

この数週間で個人的に皆はアキと仲良くなって、それはもう交友関係なんて広がってる。

だからこそ、2つの高校に綺麗に皆分かれてるから高校生活を送るアキと共に送りたいと思う人は増えている。

「……何としてでもアキを羽女に迎え入れたい、実の姉であるアタシとしてもこれは絶対に諦めたくない」

「それに、秋には羽女と花女の対抗球技大会も控えていますからね！」

「つぐみ、今年の球技は？」

「バスケットボールとドッジボールだよ！」

「……アキがいるいないで大きく変わるわね、今年は」

「え？アキ姉ってバスケットボール上手なんですか？」

「あこ、上手どころかアキさんはバスケットボールで高校の推薦が取れるぐらい有名だったんだ。それも強豪から」

「ええ!?!じゃあじゃあ、花女にアキ姉が行ったら……」

「いくら日菜がいても厳しいね……」

「ええ、でも私達はまだ焦るほどじゃないわ。花女は逆にアキが羽女に来たら勝ち目がないもの」

「日菜先輩という天災とアキさんという天才」

「……わぁ、羽女凄い」

そう、花女はアキと学校生活を送りたい気持ちとは別で羽女と花女対抗の球技大会の勝敗が決まってしまう大きな選択が迫られてる。

アタシ的には、球技大会に関してはあんまり気にしてないんだけどね。楽しめればいいかな！

「とりあえず、プレゼン内容を決めよっか。花女には紗夜がいるから油断出来ない……！」

「つぐみ、頑張ってる」

「つぐみ、ここでこそ生徒会役員の務めを果たす時とき」

「蘭ちゃんとモカちゃん!？」

「蘭とモカも頑張らないと、アキさんと同じ学校に通うって夢叶わなくなるぞ？」

「そーだよ、2人とも！」

「あこも頑張るね！リサ姉！」

「うん、みんなで頑張ろ！」

それから暫く皆で意見を出し合い、なるべく高校生活がどういったもので羽女の特徴を捉えながらも分かりやすく纏められた。

あとは、アキがどうするかで決まる。

「……とりあえず分かりやすく纏められたわね」

「はい。あ、でも一つ忘れてました」

「え？ 蘭、どこどこ？」

「大好きなお姉ちゃんがいるっていう文が」

「そうね、忘れてたわ。美竹さんありがとう」

「いえ、重要事項ですからアキさんにとっては」

「……待って、アタシが恥ずかしいから無しにしようか」

「リサさーん、時には諦めも肝心ーって奴ですよ」

だって、そんなのアキにとっては重要なんかじゃないって。

もし、アタシがいるいないが重要なら中学だって同じ場所選んでるはずだし。

何より、アタシがプレゼンの時にその文が読まれるのが恥ずかしいんだけどね!?

「書けたわ、完成ね」

「待って待って、最後の文は消そうよ!？」

「どうして?」

「え、どうしてって……。アキの学校選びに必要ないから?」

「いやいやー、あのアキさんですよー? いますって〜」

「あこもそう思うよ！お姉ちゃんがいる学校って安心するもん！」

「ひまりも安心する？お姉ちゃんいるけど」

「うーん、私は学校が違うから分からないかな。でも安心感はあると思うよ！つぐはどう思う？」

「私!?一人っ子だから分からないよ！」

「えー。まあ、モカちゃんもわからないけど、蘭はー？」

「あたしも分かんない、一人っ子だし。でも、アキさんはリサさんの話ばかりするから安心すると思いますよ？」

うう、ここまで言われたら引き下がれないじゃん。

友希那は「諦めなさい」とでも言いたげに、お茶飲んでて助けてくれない。

アタシも姉だから実際どうかなんて分からない。

でも、親しい人がいるだけで安心するのは分かるからそういうのと一緒かな？

「ということでも、原稿はこれでー」

「…うう、アタシ本当に恥ずかしいんだけど」

「リサ姉頑張って!!」

「リサ先輩頑張ってください!」

あことひまりの応援が更に、あの文を自覚させる。

ええい!もうここまで来たら、アキと同じ学校に通うためなら何の手段でも許そうじゃん!?

開き直ってやるー！

「ああもう！アキと同じ学校に通うためなら、何だってやるんだからー！」

「リサさんが遂に壊れた〜」

「リサさん、投げ出しましたね」

「リサ、ここは病院よ。叫ばないで頂戴」

「何か皆リサさんへの態度急変してないか…？」

「あ、あはは……。そうだね、巴ちゃん」

「リサ先輩、アキ先輩が関係すると壊れるよね……」

「リサ姉大丈夫!？」

もう知らない！羞恥心なんて捨てるんだから！

アタシはそう叫んでると、何人かの看護師さんに注意されてしまった。

友希那がその度にジト目で睨んでくるけど、アタシだけのせいじゃないからね!？
そんなこんなでいたら紗夜達、花女組ものプレゼン内容が決まったみたいでアタシ達の元に来た。

紗夜は何故かお怒りのご様子。

「今井さん！貴方はいったいここをどこだと思ってるんですか!？」

「待って！少しでいいから話を聞いて紗夜…!」

それから、服装の乱れなどの説教が始まりかける。アタシは誰かに助けを求めよ

うと目を向けるけど、殆どの羽女の皆はアタシと目を合わせない。

そんな時、沙綾が助け舟を出してくれた。

「紗夜先輩、アキさんのところに行かないと……」

「そうでしたね、今井さんへのお話は後ほどにします」

「……もうしなくていいよお」

アタシの心からの言葉は紗夜に届かず、アキの病室へと歩を進めていった。

アタシはと言うと、沙綾とつぐみ、燐子とあここに慰められながら妹の病室に行くという何ともシュールな状態だった。

番外編を本日更新する予定です。

また訂正したりすると思いますが、宜しく願います。

The sky is always connected

——アタシはいつでも助ける。

だって、それがお姉ちゃんでしょ？

遂に目の前までやってきた。

さっきまでのダメージがまだ若干残ってるけど、アキの事を考えたら一瞬で回復出来るアタシは相当やばいのもかもしれない。

この扉を超えた先にいる私の妹に、私は満足のいくプレゼンを行えるのだろうか。もしかしたら、アキと共に学校へ行くという生活が送れなくなるかもしれない大

切なプレゼン。

扉を開ける自分の手が、微かに震えてるのは自覚済み。

大丈夫、不安がってどうするの今井リサ。

いつも通りに普段と同じように話せばいいじゃん、何を緊張してるのさ！

深呼吸して手にかけてる扉の持ち手を、思いつき開けた。

「アキ来た……よっ!？」

「……へ？……お姉ちゃんの、ばかあ!!」

扉を開けた先では、現在進行で着替えをしているアキの姿。

しかも、丁度上を着替えてみたいでいくら個室の病室でもアタシが開けた事によつて後ろにいる皆にも見えるわけで。

顔を真っ赤に染めて、涙目になってるアキは枕を握ると元バスケット部の腕力で投げ出された枕がアタシの顔面にヒットし、その衝撃でアタシの手から扉の持ち手が離

れてスーツと扉が閉まっていく。

そして、ガタンッと音がして扉は閉まってアタシの足元には投げ出されま枕が置かれる。

地味に顔が痛い。投げられたのが枕で良かった。

「……リサ、貴方ノックした？」

「……してない、かも」

「……リサさん、大丈夫ですか？」

「……はあ、何をやってるのよ今井さん」

と言いつつも、皆の顔が赤いのは突っ込まない方がいいよね。

アタシは触れないでおこうと思った瞬間、あこが本当に不思議に思ったのかアタ

シが思った事をそのまま口にしてしまった。

「あの、何で皆さん顔が赤いんですか？」

「あ、あこ…ちゃん…!?」

「あ、あこ！皆暑いんだよ！な!?」

隣子が慌てて、あこの視界から顔を赤くする皆の姿を外させて姉の巴がそう言いながら皆に目を向ける。

巴の言葉を聞いた皆はもう、それは必死に頷いていてアタシは「流石に無理やり過ぎない…？」なんて思いながら苦笑してしまう。

まあ、アキって2年眠ってたのか本当に疑いたくなるほどにしっかりした体付きだしね。

本人は「…バスケで鍛えたはずなのに」って落ち込んでたけど、2年も使わな

かったはずなのに残ってるのも凄いと思うけどね!?

「…こほん、気を取り直して。今井さん、お願いします」

「……また枕食らう気がする」

「ノックすれば問題ないんじゃない?」

「……それもそうだね。ふうー……、行くよ!」

アタシは今度こそと思って扉を開けたんだけど。

おかしいなー、アキの姿が映るはずなのに何か白い物で視界がいっぱいなんだけど。

それと同時に来るのは衝撃と痛みなわけで。

さっきのはアタシも悪かったとは思ってるよ?

ノックすれば着替え中だったのを避けられるわけだし、でも今回は何!?

「……っ、痛いんだけどなあ」

「お姉ちゃんが悪いんでしょ？またノックしないで扉開けて、妹相手に常識は無いの？」

「…だからって枕投げなくたっていいじゃん！」

「正当防衛です！」

「アタシを変態扱いしないでくれない!？」

「人の病室にノックせずに入ってきて、着替え中を覗いてきた人を変態と呼ばずになんて呼ぶのさ！」

「あれは事故だよ！」

「事故？へえ、事故なんだ？」

「アタシが自分からアキの裸なんて見たいと思うわけないじゃん！」

アキはベッドから立ち上がり、アタシも少しイライラしてお互いに間を詰める。アタシよりアキの方が大きいから、若干上目遣いになるけど今は気にしてなどいられない。

アキもイライラしてるのか、普段と全く違う雰囲気纏ってる。

「事故だったとしても、謝罪の一つぐらいあってもいいんじゃない？」

「謝るために中に入ったら枕が投げられたんですけど？」

「何それ、お姉ちゃんは私のせいだって言いたいわけ？」

「別にそうとは言っていないでしょ。それに、枕を投げて当たったのがアタシじゃなかったらどうするの」

「お姉ちゃん以外に当たるわけじゃないじゃん、これでもバスケット部でエースだったんだけど？」

アタシ達はお互いに睨み合い、苛立ちを隠しきれない。

アキと滅多に喧嘩をしない分、一度喧嘩すると長引くのがアタシ達の面倒な所だ。だってママ達は良く言ってた。

そんなの気にしてられるほど余裕ないけど。

「……あの、湊さん」

「2人は滅多に喧嘩しないけど、一度すると長引くのよ。不味いわね、このままだと……」

「あ、あのアキさん！落ち着きましたよよ、ね？」

「リサさーん、落ち着いて落ち着いて」

「^{アキ}リサだけは許さない」

『……え』

モカと沙綾が止めに来るけど、アタシ達は止まるどころかお互いに睨み合うまま。そして次の瞬間、アキにアタシの胸ぐらをガシッと掴まれたのにアタシは前にもあつたはずなのに、2年も前だからか少しだけ驚いてしまった。

不味い、今のアタシよりもアキは冷静さが保ててないかも。

「さっきからムカつくんだけど、ノック2回もしないし正当防衛で枕投げたらキレてくる馬鹿な姉さんには何すれば分かってもらえるわけ？」

「ちょ、離してよ」

「何、怖くなったの？」

「そういうわけじゃない！力任せに解決させるのは駄目って昔から言ってるじゃん！」

「……うっさいなあ」

これは本当に不味いかもしれない。

ここが家ならアタシも反撃するんだけど、病室にはアタシ達だけがいるわけじゃない。

しょうがない、アキを騙すように悪いけど。

アタシは深呼吸して臉を一旦閉じてからゆっくりと開けて、こうなった時にいつもとってるアタシの行動へと移す。

「何？やる気になった？」

「すぐ手が出るバカ妹を治すのも姉の仕事でしょ？」

「ふうーん、ならやってみれば？」

「リサさん！危ないですよ、今のアキさんは！」

蘭の声が聞こえて、アタシはそっちへと視線を向ける。

蘭は知ってるのかな、アキがキレたらどんな風になるのかとか。友希那だけかと思ってるけど、蘭の隣にいる沙綾も震えてるから知ってるのかも。

まあ、アキはいい子だけど一度ストッパーが外れると一気に間違った方向に進んじゃうから。

「大丈夫だよ、アタシはお姉ちゃんだしね☆」

「……どっちも怪我をしないで頂戴」

「そのつもりだよ、友希那」

アタシは視線を目の前でキレてるアキへと向ける。

正直アタシがアキに喧嘩で、しかも力でなんて元バスケ部のアキにダンス部のアタシが勝てるわけがないしね。

でも、口だけでの喧嘩ならいくらでも対処法はあったけどこうなるとマジで止め

なきや不味い。

「……アキ、アタシ本気で怒るよ？」

「怒れば？」

「へえ、アタシがキレていいんだ？」

「別に、今更お姉ちゃんが怖くて降参なんて言うわけないでしょ」

ふーん、昔はあんなにアタシを怒らすと怖いからって言ってすぐに謝ってきたのにね。

アタシ自身はよく分からないけど、友希那とアキ曰くアタシは本気で怒ると怖いらしい。

だから、アタシは本気で怒った時のようにアキを睨み付けければビクっとアキの肩

が震える。

あ、もちろん本気で怒ってないよ？ こうでもしないと、この子落ち着かないし。

「離して、アキ」

「…何逆ギレしてんの」

「離してって言うてるのが分からない？」

「……っ」

「ノックしなかったのはごめん、ただすぐに手を出すのは絶対ダメ」

「……はい」

「分かった？」

「……手を出してごめんなさい」

何とか収まったー。

アタシは笑って、「いいよ、もう気をつけてね？」と言って背伸びしてアキの頭を撫でる。

アタシは、大丈夫だと言うことを伝えようと後ろを振り向くと何故か友希那を壁にして殆どの皆が隠れてる。

え？何で??

「え、皆隠れてどうしたの？もう終わったよ？」

「……リサが怖かったのよ、私は昔から見てるから慣れてるけど」

「え、アタシ!?」

「…いや、リサさんだけは怒らしちゃダメだね。蘭」

「な、何であたしに振るの…!!」

「あ、あこ…絶対リサ姉とアキ姉を怒らせないよ…!!」

「い、今井さん…もう…怒らないで…ください…!」

「…今まで今井さんに失礼な事ばかり言って貴方を傷付けてごめんなさい、だから怒らないで…!」

「リサさん、やべえよ。私、怖すぎて帰りたくなってきた…。」

「アキさんが怖いから怖そうだとは思ってたけど、リサ先輩の方が……」

「ちょっとちょっと、アタシがそんなに怒っても怖くないでしょー！紗夜はキラおかしいよ！」

『怖いです!!』

ええ、何でこうなっちゃったの……。

友希那に視線を送るけど、困ったように笑うだけで後ろを振り返ってアキを見てアタシが怖かったのか涙目になってるし。

何か、これだけ見るとアタシが悪者みたいじゃん!!

「怒らないから！アタシはもう怒らないから、皆でここに来た本題に入ろうよ!？」

「……暗黙の了解が今出来たね、ぜったーい」

「モカ？」

「ごめんなさい、何でもありません」

名前を呼んだだけなのに、この返事。

何か、本当にアタシは怒ったらダメな気がしてきた……。

今度怒った時のアタシがどんな感じなのか、アキに真似してもらって見てみようかな。

それから何とか皆が動けるようになるのに、数十分かかりアタシはその間完全に反省して泣きそうなアキを励ますという状況に。

今、アタシの隣でアキは皆が隠しながら、コソコソ準備してるのを凄く不思議そうに見てる。

まあ、何も知らないで待ってたらそうなるよねー。

「ねえ、リサ。皆何やってるの？」

「んー、内緒かなー。ってさっきから言ってるじゃん☆」

「…ケチー」

いやいや、もうこの会話10回は繰り返してるからね？

そんなアキにアタシは思わず苦笑いしつつも、どうにか意識を皆から変えることが出来ないかなーなんて思いながらスマホをいじる。

すると、隣から視線を感じて何だろうと思えば何処か寂しそうな目をしてるアキ。やば、もしかしてスマホいじってたから不機嫌に…？

「……あ、アキ？」

「……引退しちゃうのかあ」

「はい？」

アタシは予想外の言葉に首を傾げる。

アキはアタシのスマホ画面を指で指すと、視線を向ければアキの大好きなアーティストさんの眩き。

引退ライブで販売されるグッズの画像が公開されたらしい。因みに、アタシ達は見事ライブチケット当選した。

あの時は本当に嬉しくて、はしゃぎまくったね。

「もう少しでライブだね」

「…本人が決めた事だから最後まで応援するって決めたけど、やっぱり辛いや。私の夢だったんだ、隣に立って同じ景色を見るの」

「……アキ」

「でもね、最後はちゃんと笑って送り出したい。私は沢山笑顔と勇気を貰ったもん、私が今度は送る番だから」

「…うん、アタシも笑って送り出さなきゃね！でも大丈夫だよ、お互い生きてたら何処かで会えるかもしれないじゃん？それに」

「それに？」

「案外、すぐ傍にいたりしてね？」

「え、どういう事!？」

「さあー？考えたまえ、アキくん！」

「お姉ちゃん!？」

何て言ったけど、正直分らないよ。

もしかしたら、何処か何でもない道やお店で隣を歩いていたりするかもしれない。イベントとかにもいるかもしれない。

ただ言えるのは、アキの大好きな色である群青色が広がる空は終わりが無い。ずっと続いている。

この一瞬だって、真上に広がる空を見てれば同じ景色を見ていることになるよアタシは思う。

「でもたとえ、遠く離れても。アタシ達の想いは届声いてると思うよ」

「…うん。やっぱり夢、諦めずに頑張ってみる」

「お！そのいきだ☆」

そう、同じ場所に立つことは叶わないかもしれない。

でも忘れずに追いかけて続ければ、もしかしたら奇跡が起きて立つことが出来るかもしれない。だって、この世界には沢山の奇跡と偶然が混ざりあっているんだから。アキとアタシが、今こうやって話せてるのも彼女の曲があつてこそだ。

アキが彼女のファンで無ければ、アタシがアキの部屋で流れる曲を聞かなければ繋がらなかった今。

ほら、もう沢山の奇跡と偶然が混ざりあっている。でも、アタシはそれが必然でもある気がするんだ。

「——出会えた事が奇跡であり、必然なんだよね」

「ん？何か言った？」

「んーん、何でもない！てか、皆準備終わったー？」

「もう少しです！」

「本当に皆、何しようとしてるの？」

「だから内緒だって！」

これから、アタシ達の目では見えない場所に行く人は絶対に増えると思うし止めるようがないと思う。それでも、アタシ達は前に進まなきゃいけない。

アタシは自分がRoseliaから引退する時、誰かが今のアタシやアキと同じような気持ちになってくれるようなアーティストになれるのかな。

でも、アタシはなりたい。Roseliaのベーシストは今井リサしか有り得ないって思って貰えるようなアーティストに。

いつの日か見せてくれた、アキが書いたファンレターの一文を思い出してアタシ

は窓から空を見上げる。

アタシも頑張ろ、まだまだこれからだから！

その一步として最初はアキと同じ高校に通いたいって夢を叶えよう。

♪今度は、私が沢山の人になるきっかけを作りたい♪

書いてる自分が泣きそうになった。(前代未聞)

Twitterで質問がありました。

【アキちゃんの声でイメージってありますか？】

A・マジで無いです。

この話が思いついた時が、ゆりしいが引退してからなんです。

なので、人によっては今作のリサ姉をゆりしいの声で、アキちゃんを中島さん（ゆっきー）演じるリサ姉の声と考えて読んでいる方がいるようですが別に強要しません。

皆さんの好きな声で読んでください。

読者様自身の声でも全然ありだと思いますので！

＊前回お話した重大発表です。

正直、重大発表でも何でもない気がしますが。

今作『From dawn to dusk』は、来年2019年8月25日である彼女達の誕生日に最終回を迎える予定です。

予定では残り1年ですが宜しくお願いします！

Misunderstanding between my sister

——人生に1度負けられない戦いがあるなら

アタシ私はこの瞬間瞬間だよ！

あれから何分経っただろうか。

そう思うほどに時間は経つてると思う、もうアキなんて聞いても意味無いと流石に思ったみたいで、誰かが「暇な時にでも」って持ってきたルービックキューブをカチャカチャと隣でやってる。

うわ、もう2面作ってる。アタシ、あれ難しくて途中で辞めちゃうんだよね……。。

「……アキ、良くそれ出来るよね」

「んー。まあ、慣れだよ」

「慣れで出来るもんだっけ……？」

「毎日作っては壊して、作っては壊してってやってたら出来るよ」

「……あー、うん。確かにそうだね」

流星に毎日やってれば出来るもの……らしい。

アタシも毎日やったら作れるようになるかな、なんて思いながら皆の方に視線を向ければ何やらプロジェクトを取り出す沙綾の姿。

ん？ プロジェクター！？

「……えっと、紗夜？」

「何ですか、今井さん。今忙しいのが見て分からないんですか？」

「あ、ごめん。じゃなくて、プロジェクターなんて出してどうするの？」

「プレゼンに使うんです、事前に白金さんをお願いしていたので」

花女全体の指揮を執っていた紗夜に、声をかけると不満げに返されながらも紗夜に言われて、燐子へと目を向けると恥ずかしそうにしながらはにかんで笑って頷く。

そうじゃん、燐子はゲームが得意でパソコンを良く使うからスライドとか作るの得意だったんだ……。

アタシ達の中じゃ、というか羽丘もそういうの得意な人いるにはいるけど今回の

プレゼンに参加してないんだよね。

日菜とか麻弥が得意だから頼めば良かったなあ……。。

「リサさん、どうします？うちも今から作っちゃいますか？」

「え、巴得意なの？」

「いえ！全く得意じゃないです！」

「……巴、馬鹿じゃん。リサさん、得意な人というかそういうのすぐに出来そうな人ならここにいますけど……」

巴の反応にアタシは思わず苦笑い。

アタシ達の会話を聴いていた蘭が巴に溜息を吐きながら指を指す方向に目を向ければ、何処から取り出したのか全く見当が付かないやまぶきベーカーリーの袋を片手

に持って、普段通りにパンを食べてるモカの姿。

……確かに、モカなら「あー、こんなの簡単ですよ。モカちゃんにお任せ」なんて言っていて出来そうな気がする。

「ねえ、モカ」

「ふあーい、ふあんですふあ〜？」

「……うん、パンを食べ終わってからでいいよ」

「……んっと、すみません。何ですか〜？」

パンをしっかり飲み込んで、鞆へと閉まってからもう1度首をこてんっと傾げながら聞いてくる。

これでモカが出来るって言うてくれれば、花女に劣らずに済むかも……しれない。

「モカって、ああいうスライドとか作るのって得意だったりする？」

「あー、パソコンで作るパターンの奴ですか？」

「そうそう」

「まあ、無理じゃないですけどー。今からは、流石の天才モカちゃんでもキツイですね」

「だよねー……、ごめん。アタシがもっと早く思いつけば良かった」

「リサ先輩！こっちは何とか纏まって友希那先輩達があとはやってくれらるみたいなので、一緒に考えますよー！」

「ありがとう、ひまり！」

まあ、そりゃそーだよね。こんな短時間で作れる人なんて、よっぽど機械とかパソコンが得意じゃなきゃ難しいはずだ。

うーん、とアタシ達と途中から一緒に考えてくれるひまりで考えているとモカがスッと何処かへ行ってしまう。

どうしたんだろ、何か思い付いたのかな？

「ねえー、つぐー」

「どうしたの？モカちゃん」

「何か、紙とか持ってないー？そこそこ大きいやつー」

「うーん、あ！このぐらいので良いなら、生徒会で使って余った物があるよ！」

「おー、流石つぐー。いいもの持ってるじゃーん」

何か、盛り上がってるけどモカが後ろを向いててつぐみが丁度隠れてるから何の話してるのか全く分からない。

蘭や巴、ひまりの3人と目を合わせるけど分からないみたいでアタシ達は首を傾げる。

すると、モカがドヤ顔をしながら手に持ってこちらに向かってきた。

「ふっふっふー。やっぱりモカちゃんって、天才だよね」

「モカ、あたし達全く話が見えないんだけど」

「ああ、何にもわからないな」

「説明してよ、モーカー！」

「アタシも説明欲しい…かな？」

「もー、リサさんも蘭達もダメダメですな〜？」

そう言って、ドンっと大きめの画用紙とモカは鞆からあのパンのペンケースを取り出した。

そこまで来ればアタシ達も、モカが何を思い付いて何をしようとしてるのが分かる。

あ、そういう事ね！モカはやっぱり天才かも！

「スライドを作る時間はないですけど〜。これにー、パパっと書いて作ればOKですよね〜？」

「モカ、流石だな！」

「それは思い付かなかった」

「良く、つぐも持ってたよねー！」

「モカとつぐみには感謝しかないよー！」

「いや、それほどでも？モカちゃんは天才ですからね」

それから急いで、つぐみやあこ、友希那を呼んで説明すれば原稿の方は仕上がってるから問題無いってことで全員で取り掛かる。

文は簡潔に、重要な部分だけを書いて、イラストは簡単だけど分かりやすいイラストに書く。

ここで助かったのは、つぐみと蘭が器用だった事。

つぐみは良く生徒会でこういうポスターを作ったりするから得意みたいで、蘭は不器用なのかな？と思ってたけど華道をやってるからか手先はとつても器用だった。

ただ、友希那がこういうの苦手なのはアタシ達は全員知ってるというか暗黙の了解なのでアキにバレないように仕向けてもらいう係になってもらった。

凄く不満そうで、機嫌悪かったけどね……。

アキが話しかけたらいつもの友希那に戻ってたから、ちょっと安心したのは内緒。

「で、出来た……！」

「凄い！こんなに早く出来るなんて！」

「さっすが、モカちゃん。褒め称えたまえ〜」

「アイディアはモカだけど、つぐみが持ってなかったら出来なかったでしょ。つぐ

みの方が凄かった」

「そんな事ないよ！皆凄かったよー！」

「うんうん！皆のお陰だよ、ありがとね☆」

何とかイラストが完成した頃には花女の方も終わったらしい。

花女はどうして時間がかかったんだろうと思ったら、沙綾の話だと「……紗夜さんが緊張しちゃって、間違えてスライドを何枚か消しちゃったんです」って苦笑いで教えてくれた。

紗夜の偶に出るポンコツな部分が出てくるとはねー……。
流石のアタシもフォロー出来ず、苦笑いしてしまった。

「……貴方達、そろそろ良いかしら？もう大分時間が経っているのだけれど」

「……ええ、お待たせしました。こちらは大丈夫です、今井さんの方はどうですか？」

「こっちも問題無いよ」

「それで、どっちから始めるとか決めてるの？」

あ、何にも決めてないや。

アタシと紗夜は友希那の言葉に思わず目を見開いて、お互い目を合わせる。

そんなアタシ達に、友希那は深い溜息を吐いて呆れてしまった。

いや、ね？大変だったんだよ、色々とお互いに。

「……今井さん、どうしますか？」

「……うーん、ここは公平にジャンケンとか？」

「そうですね、ジャンケンで決めましょう」

「りょーかい☆……それじゃあ、行くよ？」

「ええ、問題ないわ」

アタシと紗夜はお互いに右手で拳を作り、呼吸を整える。

このジャンケンで、もしかしたらアキの学校が決まるのに直接繋がるかもしれない。
い。

そう思ったら緊張してきて、どうすれば勝てるのかを必死に考えてしまう。

それは紗夜も同じなようで、眉間に皺を寄せて深呼吸している。

どうしよう、グーをだす？ いや、もしかしたら紗夜は緊張してるからそのままグーで来るかもしれない。

待って、あの冷静沈着なクールビューティーな氷川紗夜ならアタシがそう考えるのを読んでるかも……？

じゃあ、その裏を考えて敢えてグーを出せば紗夜はアタシが紗夜はグーを出すと予測するからパーだと思って、チョキで来るだろうから勝てるはず。

でも、その考えさえも読まれてたらアタシはパーを出さなきゃ負ける。

いや、もしかしたらもっと単純に紗夜はグーで決めるかもしれない。

ああー！もう、どれを出せば勝てるんだろ!?

「……リサ、紗夜。貴方達、お互いにお互いの手を見て悩んでるようだけどまだなの？」

「友希那湊さん、このジャンケンは全てを決める根本的な理由になるかもしれないの！」

「絶対ならないわよ」

友希那が睨んできてるのを視線で感じる。

だって、分からないじゃん!?

前半に聞いた方が人は選びやすいのかもしれないし、もしかしたら後半の方がインパクトがあって選びやすいかもしれない。

アキがどっちタイプか分からないけど、このジャンケンは大切なのは確かなんだ。かなり、いや凄く。ううん、物凄く大切だと思う。

だから——!!

「紗夜今井さん、これは譲譲れないわれない!」

「……紗夜さんって、アキさんの事好きだよな。沙綾」

「しーっ。有咲、全てはアキさんと通うためだよ、それなら私だってジャンケン一つも大事にする!」

「……沙綾も沙綾で、アキさんの事好き過ぎだな。りみ、これが普通なのか…!?!」

「え、えっと……どうなんだろう……!？」

「おたえー、リサ先輩。アキ先輩のことが大好きなんだね！」

「そうだね、私がオッチャンを好きなのと同じだと思う」

「ねえー、らーんー」

「……なに」

「リサさん、シスコン？」

「モカが、あのジャンケンする側だったらどうするの？」

「そりゃー、もちろんー。アキさんと通える方を……うん、リサさんは普通だったね」

「……ねえ、ゆきちゃん」

「……何かしら？」

「何の話で2人があんな燃えてるのは全く分からないけど、とりあえず馬鹿なのかな？」

「……貴方が絡むと皆バカになるのよ」

「え、私？何か言ったっけ？」

「やっほー、アキちゃん……って何これ？」

「あ、日菜ちゃん！」

「日菜、今日の事は紗夜から聞いてるとは思うけど全てを説明するからとりあえずこっち来なさい。あと、仕事の方は平気なの？」

「あ、うん。それは大丈夫だよ、偶々ここの近くでさっき終わったから！」

「そう、それでこの状況だけ……」

そんな会話が聞こえる気がするけど、アタシは今踏み切るには大きな壁がある。日菜も来てくれたっぽいけど、ごめん。挨拶とかは後でするね。

紗夜は目の前の壁に集中し過ぎて日菜が来たことに気づいてないっぽい、その壁をどう乗り切るかを考えてるんだと思う。

やば、アタシは変な汗までかいてきた。

「……今井さん」

「……紗夜」

アタシと紗夜は目を合わせて、お互いに深呼吸をして一旦瞼を閉じる。

落ち着け、どっちに転がっても大丈夫なように準備はしたはずなんだ。

皆とギリギリまで試行錯誤してきた、たとえこれで先行になろうと後行になろうとする事は同じ。

いかにアキへ印象をつけられるか、そして羽丘に通いたいと思わせるかだ。

その為にアタシは恥ずかしいけど『大好きなお姉ちゃんがいる』という文を承諾したんだから。

アタシと紗夜は、声を揃えることもなくお互い同時に目を開けて握りしめる右手を準備する。

勝っても負けても1度きりのプレゼン、アタシは何としてでもアキと学校に通いたい。

それがたとえ、バンドメンバーである紗夜や憐子、妹のような存在である沙綾と討論という戦いをしても！

右手を大きく振りかざせば、紗夜も同時に振りかざす。

そして口を開けて、大きな声で言葉を発する。

「最初は、グー！」

もう一度、自分の元に拳を戻してからアタシは頭に瞬時に浮かんだグー・チョキ・パーの一つを頭の中で想像して決めて、瞼を一瞬閉じてから一気に見開いて拳を紗夜へと突き出す。

紗夜も同時に目を見開いて、アタシの拳とぶつかるかぶつからないかの距離に向かって手を伸ばす。

ゴクリと、その場にいる全員と言っても友希那とアキ以外の全員が息を呑む。

アキと通うためなの、これだけは譲れない!!

「ジャンケン——!!」

そして、お互いに握りしめていた手を。

「——ポン!!」

紗夜が出したのはパー。

アタシが出したのは——。

「……勝っ……た……?」

「……リサさんが」

「リサさんが勝ったー！」

後ろからモカや巴、蘭やひまり、つぐみに抱き着かれる。

アタシも嬉しくなって皆に答えるように抱き着く、勝った！紗夜に勝ったんだ！
紗夜は落ち込んで、自分のパーをずっと見つめてる。そんな紗夜を沙綾と燐子で
慰めてるのが視界の端に映る。

うう、何か申し訳ない気がしてくる……。

でも、とりあえず勝った事を友希那にそれを伝えようと友希那に視線を向ける
と、そこには完全に呆れてる友希那。

「ゆうきな！何でそんな呆れてるの？」

「…リサ、貴方勘違いしてないかしら？」

「え？何が？紗夜に勝ったんだよ!？」

「……はあ、紗夜に勝ったからと言ってアキと同じ学校に通うと決まっていな
しょう？紗夜も何を落ち込んでるのよ、ただ先にプレゼンするか後にプレゼンす
るかを決めただけじゃない」

「……………」

言われてみればそうじゃん。

アタシと紗夜は、お互いに情けない声を出すとアタシに抱き着いていたA f t e
r g r o w メンバーも固まる。

沙綾や隣子も固まっついていて、香澄とおたえちゃんは話が見えないのか首を傾げて
る。りみちゃんは苦笑いで、有咲も友希那と同じように呆れてる。

「……………はあ、貴方達は馬鹿なの？」

「お姉ちゃん、それに紗夜ちゃんも良く分からないけどドンマイ？」

「おねーちゃん、それにリサちゃんも。ほんとに面白いね〜！」

あはは、と苦笑いを浮かべてるアキの姿と大笑いしてる日菜の姿を見てアタシ達勘違いしていた組は完全に肩を落とした。

アキが持っていたルービックキューブは既に完成されて、机の上に置かれている。それと同時に、アタシと紗夜はきつと同じ事を思った気がする。

ううん、これは思ったが正しいかな。

（何故でしょう何だろう、双子の片割れとして何か負けた気がするわね負けた気がする……。）

大変遅くなりました…！

何とか落ち着く事が出来、時間が取れ次第少しずつ書いていたのですが思った以上に時間がかかってしまい、大変申し訳ございませんでした。

更新出来ない間も沢山の方にお気に入り追加して下さいたり、評価を付けて下さった方々もいて本当に嬉しく思います。

そして、遅くなりましたがチケットが当選しましたが身内の不幸事で行けないかもと思っていた《Roselia Fan Meeting》昼の部ですが何とか無理矢理参加してきました。

次の日は本当に声を出しすぎて、授業中当てられても答えられないという事件が発生しましたが、何とか今は喉も治りました。

番外編で、りんりんと絡みも書こうかなと思っています。

そして、この度長らくお待たせしてしまったのでリクエストがありましたので前回出した番外編『The secret spring begins』の夜Ver.を活動報告の方で載せようと思います。

R'18に触れるかもしれないので、活動報告の方に載せさせていただこうかと思

います。

苦手な方は、多分ブラウザバックオススメです。(まだ私がどんな物を書くかを決めてないのと、そもそもそういう知識が少ないので↑)

それでは、また次回も宜しくお願いします(ゝ・ω・ゝ)

(夜Ver.も今日中に載せられるように頑張ります)

The curtain of the gamer rises

——アタシ達のプレゼン、開幕!!

じゃんけんの結果、アタシ達~~と~~羽女グループ~~と~~からのプレゼンになった。

原稿を読むのは、アタシとモカ、つぐみ、巴の4人でさっき作ったばかりのイラストは友希那とあこ、蘭、ひまりの4人になった。

日菜も参加したい! って凄いいピールされたけど、紗夜の鋭い視線に「あははは、もうおねーちゃん冗談だよ?」とそそくさとアキの隣へと逃げていった。

アタシ達としては全然OK なんだけど、紗夜の何かが許せなかったらしい。

これには、アキや花女グループも苦笑い。

「それでリサ、何をやるの？」

「ん？ほら、アキさ黒崎先生に何か言われなかった？」

「え？黒ちゃんに？」

『く、黒ちゃん…？』

「黒崎先生のあだ名、白石先生っていう優しい女の先生と桜井先生っていう面白い女の先生がいるんだけど、その桜井先生に「あいつは友達として扱うのが普通だからあだ名作ってあげなよ！」って言われてね」

「……黒崎先生ってアキさんの恩人ですよ、主治医ですし」

「うん、そーだよ。えーっと、有咲ちゃんで名前はあってるよね？」

「は、はい！」

「ねえ、有咲また猫かぶってる」

「ほんとだー」

「おたえと香澄、うっせえ！」

あらら、有咲やっちゃったなあ。

今の一言でアキがポカーンっと、口を開けて有咲を見る。

有咲もアキの視線を感じたのか、「しまった…！」と口元に手を持って行って焦ってる。

そんな有咲の姿を見たアキは、クスツと笑ってからどんどん大笑いして行ってそ

んなアキを見ていたら、他の皆も笑った。

あの友希那や紗夜も笑ってるんだよ？

もちろん、アタシも面白くて笑っちゃうよね。

「あはは！有咲ちゃん面白すぎ！」

「え、あ、ちよ、笑わないでくださいよ……！」

「ぷっ、ダメ堪えられない！だって、あれは！」

「ちよ、アキさん!? あー、もー！おたえと香澄のせいだー！」

「えー！何で私達なのー！」

「そうだそうだー、オツチャンだってそんな事言わないよ」

「オッチャンは兎だから元々言わねーよ!!」

「ぷっ、あはは！ツッコミのセンスありすぎ…！」

「市ヶ谷さん、貴方。戸山さんと花園さんの3人で、お笑いコンビ組めるんじゃないかしら？」

「ええ、私もそう思います。……クスッ」

「ちょ、湊先輩と紗夜先輩!? 冗談を真面目な顔で言わないでください！てか、紗夜先輩笑わないでください！」

「あら？ 私は至って本気なのだけど……」

「それはそれで困ります!!」

ちよ、あの友希那にまでツツコミを的確に入れる有咲面白すぎ!

アタシもたまーに、天然でボケてくる友希那にツツコミを入れるけど、あんなに的確に入れられない。

紗夜なんて笑いを堪えてないし、本当にお笑い芸人のセンスがあるんじゃない?
?

アキも笑いが止まらなくて、「あー、笑いすぎてお腹痛いー! あはは!」ってずっと笑ってるし。

「いやー、有咲ちゃん。本当に面白いね、ギュイーン! って感じで、るん♪ってする!」

「ギュイーン! ってなんですか!?!」

「市ヶ谷さん、日菜相手に真面目にツツコミを入れても此方が疲れるだけですからオススメしませんよ」

「紗夜先輩、日菜先輩に冷たくないですか!?!てか、オススメってなんですか!」

「待って待って、有咲ちゃん本気で面白すぎ…!」

「とりあえず、有咲一旦落ち着こ?本来の目的から思いっきりズレてるから」

「…:沙綾、これは絶対私のせいじゃねえ。絶対私じゃねえ」

「うん、分かってるけど落ち着こ?ね?」

沙綾が一旦、有咲を落ち着かせてる間にアタシ達も本来の目的を思い出してプレゼンの最終準備に取り掛かる。

アキの横に設置されてる小さめのテーブルを移動させて、アキに見えるようにベッドの前に持ってくる。

その上に、まだ表が見えないように裏面を上にしてイラストを置いて原稿を背中に隠す。

よし、準備オッケー！

「えーっと、話が凄いズレたけど……」

「あー、うん。私のせいだよ、ごめん皆。特に有咲ちゃん」

「…いえ、大丈夫です。少し疲れただけなんで」

「有咲、ホントにお疲れ様。話を最初に戻すけど、黒ちゃん？に何か言われなかった？」

『(リサ先輩^{さん}まで遂に黒ちゃん呼び!?)』

「うーん……、あ、学校？」

「そう！アタシ達さ、羽女と花女でお互いに別々の学校に通ってるのは知ってるよね？」

「うん、沙綾や紗夜ちゃん、凄い面白い有咲ちゃん達が花女でリサやゆきちゃん、モカ達が羽女でしょ？」

「……凄い面白い……」

「有咲、あれは褒め言葉だから！」

沙綾、毎回有咲のフォローに回ってるけど、他の皆は笑ってるだけなんだ……。

あ、でもりみちゃんって子も沙綾と一緒にフォローしてるから違うか。

まあアキもアキで、あれを無自覚で言ってるから困るんだよね。

でも、本当に面白かったからアタシも否定しないけどね！

「あってるよー。それで、お互いに自分達が通ってる学校についてプレゼンしてアキがどっちに通いたいか決める手助けじゃないけど、決められるように伝えよう！
みたいなのが今回の目的なんだ」

「なるほどね！だから、沙綾がプロジェクター出したりモカが筆箱とか画用紙を広げたりしてたんだ。何かライブでやるために、作業してるのかと思ったよ」

「それなら、わざわざアキの病室でやらないわよ……」

「あ、そっか」

「じゃんけんもしないと思うよ、あんなに熱くなってるおねーちゃん見たの初めてだったしね！るん♪ってした！」

「日菜！貴方は一言余計なのよ！」

「あ、あはは。紗夜も落ち着こうね？そのじゃんけんで、アタシが勝ったから羽女からプレゼンしまーすって事だよ、纏めちゃうとね」

「おっけー、じゃあ私はここで聞いてればいいのかね？」

「そういう事☆」

「リサさーん、始めちゃっていいですかー？」

「いいよー！じゃあ、最初はモカ&あこペア！よろしくー☆」

と、言ったものの。

正直、モカが何かをやらかしそうで怖いなんて言えないよねー。そう思ったのが顔に出てたのか、隣にいた蘭がモカに視線を向けながらぼそっと呟いた。

「大丈夫ですよ、リサさん」

「え？」

「モカ、やる時はやるんで。Afterglowのギタリストって事を忘れないでください」

そう、優しく微笑んでアタシに言った蘭。

アタシはライブのステージ上で、普段のふにやっとしたモカではなくギターをカッコ良く弾いて、普段とは全く違う雰囲気にいるモカの姿を思い出す。

うん、そうだよね。

それに、コンビニでいつもバイトしてる時だって良くわからないチャレンジをやってるけど、やる時はやってくれる子じゃん。

「そうだね、ごめん蘭」

「謝らないでください。正直、あたしもあことペアって時点で何かやらかさないかとは思ってるんで」

「……やっぱりそこは思うんだね」

「……なかなか無いじゃないですか、あのペア」

「……何も無いことを願おう」

「……ですね」

アタシと蘭は、お互いにお互いのバンドメンバーの普段を思い出してつい苦笑しながら頷く。

あこもちょっと中二病発言があるけど中学3年生なのに、しっかりしてるんだけどやらかしちゃう時はやらかしちゃうからなー。お姉ちゃんが巴って事もあって、しっかりしてるんだろーな。

まあ、でもそれを全て笑いに変えちゃうのがモカとかあこの凄い所だったりするからアタシは好きなんだけどね。

「それじゃあー、あたし達から始めます」

「モカちゃん！あこは準備完了だよ！」

「はいはい、それじゃあ一発目〜。どーん」

「はい、ドーン!!」

……どーん？

アタシ達というか、蘭とアタシは流石に予想外なやり方で思わずポカーンと固まる。

他の羽女の皆知っていたのか、普通に聞いている。

いや、え？これが普通なの??

「羽女の魅力、一つは何と言ってもバスケット部が全国レベルです」

「全国!？」

「はい、その全国レベルのバスケット部を支えるために学校は大きなそれもパンを何十万個も置けちゃうほど広い体育館を作っちゃいました。これは流石のモカ

ちゃんもびっくり、それじゃあ次に行っちゃおう」

「はい！ドン、バーン！」

……ドン、バーン??

待って、もうこれツツコミとかは置いて当たり前って考えるべきなの？

アタシは無意識に蘭へと視線を向けると、蘭も同じ事を思ってたのかアタシと視線が合う。

あ、もうこれ当たり前って思うべきなんだ。あ、あはは。

「羽女の魅力2つ目、これは忘れちゃダメですな？あたしがこよなく愛する、アキさんの舌も絶対に一目惚れしてしまうやまぶきベーカリーにも負けない購買部のパン！！！」

「……っ、うちのパンに負けないなんて……！」

「え、沙綾そこ!？」

「オススメは何と言っても1日20個限定でしか売られない、この中にバターを入れてあるフランスパン!!ほんのりと香るバターと、中はしっとり、外はサクッとしたパン屋さんでしか食べられないようなパンが購買部で買えちゃうのです!!」

「……な、何だって!？」

「パン好きであり、モカちゃんのパン友であるアキさんにこのパンを知らずに高校生活なんて送って欲しくないですねー。これは、どの高校にも負けないパンなのですから!!」

「た、食べたい…!!」

「あ、あのアキがやまぶきベーカリー以外のパンには目もくれなかったのに反応してる…!？」

「いや、アキさん沙綾ん家のパン好きすぎじゃね!？」

「いやー、照れるなあ〜」

「沙綾を褒めてるわけじゃねえーよ!!」

有咲のツッコミがここにも炸裂するけど、沙綾は自分の家のパンがアキに気に入られてたことが嬉しすぎるのか全然聞こえてない。

いや、本当に驚きなんだけど、モカさん。全国レベルのバスケット部を説明してた時より熱が入ってるのは気のせい？

それから、あこで言うドーンバーン！っと説明されて今度は友希那&つぐみに交代。

うん、ここは安心だよね！てか、アタシは誰とペアなのか誰にも教えてもらってないんだけど誰なんだろ。

「次は私から行事について説明しますね！友希那先輩お願いします！」

「分かったわ、はいどーん。」

『(……………え?)』

「ゆ、ゆきちゃん…?」

「何かしら、進めたいのだけど」

「いや、あのね？多分だけど、ドーンバーン！って……………」

「?あれはプレゼンでは言うべき言葉なのでしょう?あこと青葉さんに言われたわ」

「……えーっと、うん。何でもないや、あはは〜…」

「……モカ、あこ」

「いやー、湊先輩って素直なんですね〜」

「ダメ…だった…?」

そんな目で見ないで、あこ!!

巴なんて、「良くやったぞ、あこ!」って褒めちやってるからアタシから言えるわけない。

てか、モカもモカでニヤニヤしてないで友希那とあこにちゃんと正しい事を教え

てよね!?

「……やっぱり、ろくな事しない」

「らーんー、酷いなあ〜? モカちゃん傷ついちゃーう」

「勝手に傷付いてなよ」

「ひっどーい」

「……貴方達、進めていいわよね?」

「あ、はい。どうぞ」

友希那の気迫に負けたモカが、アタシ達の代表として友希那に伝える。

あとで友希那に伝えようかな、いや何も言わない方が良いかも。うん、そうだね。

「アキさんが編入する時期は、なんと羽女と花女の合同で行われる対抗球技大会です！今回は、バスケットボールとドッジボールが種目なのでアキさんもとっても楽しめると思います！冬休みが明けたら百人一首大会が開かれて、上位5名には豪華な景品付きです！」

「……対抗球技大会……バスケットボール……ドッジボール……百人一首大会……！景品！！」

「景品は毎年豪華なので、ぜひアキさんにも参加してほしいです！友希那さん、次お願いします！」

「ええ。ドン、バーン。」

友希那が言うのと凄いシユールなんだよね。

もう、アタシ笑いをこらえるので必死だよ!?

アキも凄い我慢してるし、これは後で問い詰められるぞ??

「そして、3年生に上がれば体育祭や文化祭もありますが、メインはなんと行っても10泊12日のイギリス修学旅行!!」

「い、イギリス!? 10泊12日!?!」

「語学研修の一環で3年生の春に行くんです! もちろん、お姉さんであるリサ先輩や友希那先輩と映画のロケ地やシャーロック・ホームズの家なども回れますよ!」

「……最高かも」

つぐみナイスー!!!

つぐみの一言とアキの一言を聞いた、アタシ達羽女グループは皆で小さくガッツポーズをする。

いや、本当にイギリスに10泊12日は強いと思うんだよね。それに、あの子は元々イギリスに行きたがってたし☆

「このようにたくさんの行事があるので、ぜひ羽女に通って欲しいなと思います
!では、次に巴ちゃんとひまりちゃん!」

「はいはいーい!巴やっちゃうよー!」

「お、おう!……やべえ、緊張してきた……!」

「次は、なになにー!」

「おー、アキちゃん。めっちゃ楽しんでるじゃん！」

「もちろん！日菜ちゃんは向こうに立たなくていいの？」

「うーん、立ちたいけどおねーちゃんが怒っちゃうからね〜……」

「あたし達からは、何と言っても羽女にはお姉さんであるリサさんがいることです
!!」

「ふえ!?そこでアタシの名前出すの!？」

「リサ、少し静かにしてちょうだい。重要なところなのよ」

「え、そ、そうなの……？」

友希那の目にアタシは、そう答えることしか出来ない。

ひまりが元気に、「どーん！」と言いなながらイラストを出して巴がいつもの元気でどんどん原稿を読んでいくんだけど。

内容が凄い恥ずかしくて、アタシは今すぐこの場から立ち去りたい。

「やっぱり、姉妹で同じ学校っていいと思うんですね。あたしは、あこと歳が離れてますけどアキさんはリサさんと双子ですからどの行事も一緒に出来るのがオススメですね！」

「……リサと……出来る……！」

「アキさんは、中学で別の学校だったのであまりそういう事がリサさんと出来なかったんじゃないと思うので、羽女にリサさんと友希那さんの3人で通ったり、モカとパンについて語ったり、あたし達と一緒にお昼食べる事だって出来ます！」

「……楽しそう」

「日菜さんもいますから、バスケで勝負したりも出来ますね。更に、リサさんの部活で頑張る姿も生で見れます。写真ではなく、目の前で」

「……リサ、何部？」

「へ、ダンスとテニス部掛け持ちだけ……？」

「……うん、良い」

「何が!？」

「やっぱり、アキさんなら良いと思うてました！なので、今回あことひまりに協力してもらって特別に用意しました！」

「はい、どーっーん!!」

「ちよ、何でアタシの部活姿の写真が!？」

「ごめんね、リサ姉。友希那さんとお姉ちゃんから頼まれたの!」

「リサ先輩、無許可でごめんなさい……」

「ちよ、え……!？」

ひまりが出したのは、タオルで汗を拭きながら腕まくりしてるダンス部でのアタシの写真とラケットを振ってラリーをしている最中であろうアタシの写真。

いや、これは聞いてないんだけど!？」

「……ひまりちゃん、あこちゃん」

「…アキさん？」

「アキ姉？」

「最高、ありがとう」

「いやいや、何も最高じゃないからね!? 戻ってよ、アキ!!」

「今回はこの2枚だけですが、羽女に来ればいつでも見れます! どうですか! アキさん!」

「リサのあの姿を…いつでも……」

「お願いだから、それを理由で学校に通わないでね!」

『(リサ^{今井}先輩、気の毒に……)』

花女の皆から凄く同情の眼差しを受けるけど、他校だけどお願いだから助けて欲しいんだけどな!?

アタシの心からの叫びは誰にも届かず、まだまだ羽女グループのプレゼンは続くのでした。

因みに、ひまりがこっそりその2枚の写真をアキに渡していたのをアタシは知るよしもなかった。

大変お待たせいたしました。

なかなか、納得のいくものが書けず時間がかかってしまいました。(期末テスト

4日前)

今回はテスト後か、テスト期間中でも書く可能性はあるので近々に投稿すると思います。

それでは、また次回も宜しくお願いします！

P.S. 12/31のコミケに行きますので、もし行かれる方はお互いに楽しみましょう！

エンカなどについてはTwitterにてお願いします。

From sunny doll to ultramarine.

——伝われ、アタシの本当の気持ち!!

それから、何とか暴走しかけたアキを止めてアタシは一息つく。

いや、もう妹の暴走を止めるのだけは何歳になっても大変なんだなと改めて思う。

沙綾なんてこれが2人でしかも歳が離れてるんだよね、アタシには無理だ。うん。

偶になら可愛くてしょうがないのかもしれないけど……。

そう思いながら、アタシは事前に渡されていた原稿に目を通す。アタシが紹介するのは通ってる羽女について、簡単に言えばアタシが普段どんな事をしてるかとかそんな感じらしい。

隣で蘭もイラストに目を通して、アタシのペアは蘭だとは思わなかった。てっきり、つぐみとかモカと組みそうだもん。

「……あの、リサさん」

「うん？」

「全部、声に出ています」

「……………え」

「…聞かなかった事にしときます、でも私は自分からリサさんとペア組みたいって

言いましたよ」

「……ええ!？」

声に出たただけでも恥ずかしくて、一気に顔が熱くなったのに蘭が突然顔をプイって逸らして照れながら言うのなんて予想外だったわけで。

アタシや傍にいたモカ達も驚きで固まってたんだけど、アタシ達を動かしたのは暴走していたアタシの妹。

「あれ？リサ達終わりなの？」

「ま、まだ終わってない！」

「終わってないです！」

「え、あ、そうなんだ……？」

「……美竹さん、始めるわよ」

「……あ、はい。じゃあ、リサさん原稿貰います」

「……うん？」

原稿、今持ってきたらアタシ何も出来ないんだけど。

そう思って首を傾げると問答無用で、アタシの手にあった原稿は蘭に取られてしまいい友希那に手渡される。

え、あの、ちよっと？

アタシのそんな反応に蘭は特に気にせず、そのまま進めようとイラストを手につからアタシは急いで蘭の腕を掴んで止める。

「待って待って、アタシ原稿持ってないよ」

「はい、要らないですから。あれ」

「…えーっと、ごめん。全然意味が分かんないんだけど……」

「リサ、貴方に渡した原稿は偽物よ」

「ええ!？」

「リサさーん、ごめんなさーい。リサさんは、ここでリサさんの気持ちを発表して貰うって予定なんですよ」

聞いてない聞いてない。

アタシは目でそう訴えるけど、意味が無いのは目に見えてる。友希那が向こう側

にいる時点でアタシが勝てる確率も全部下がってるんだもん。

アタシはムツとしながら、友希那に目を向けるけど友希那は全くもって悪いと思っ
てないらしい。普段と同じように平然と立ってるからそうだと思う。

「……私、リサの気持ちを聞くの？」

「ええ、本当は羽女に通ってる私達がどんな風な毎日を過ごしてるかを話す予定
だったのだけれど、姉であるリサの気持ちを伝えないのは不味いって話になったの
よ」

「そうなんだ。何か、聞く私も少し緊張するな……」

アキは本当にそう思ってるらしく、さっきまで楽しそうに聞いてたのに全体的に
力んでるのか肩が上がってる。

そんなアキを見てたら、何だかアタシは緊張してるが逆に解れて少し余裕が出来

た。

聞く側も緊張するんだ、ちょっと意外かも。

「それじゃあ、アタシの番だね」

「ええ、別に堅苦しくなくていいのよ。リサ自身の言葉で伝えるだけよ」

「うん！ありがとね、友一希那☆」

「…何もしてないわよ」

プいっと顔を逸らされるけど、アタシはクスツと笑ってアキへと視線を向ける。アタシの思い。もし、アキと学校に通うとなったら中学は違ったから小学生ぶり。5年も前なのカー、と思いつつも小学生の時も何だかんだ同じクラスになっても全然会話しなかった。

あの時のアタシとアキは、本当に双子なの？って思われるぐらいに反対だったから。

「……………ねえ、アキ？」

「…うん？」

「アタシね、本当は中学もアキと同じ学校に通いたかったんだ」

「……………。」

「でも、変にアタシ頑固で素直になれなくてさ。アキはアタシと友希那のために中学、わざと学校を別にする事を選んだよね」

「……………それは」

「当時のアキは羽女の中等部ぐらい余裕のはずだもん、それなのにアキは中学を別にしてアタシ達に勉強を教えてくれた。それ以外にも理由があるのも知ってる」

知ってるけど、もう一つの理由はここで話すべき事ではないと思うから口には出さない。

だってその理由は、アタシと友希那のためにアキが道を踏み外した事だから。

アキは、ただただ静かに黙ってアタシの話を聞いている。

アタシは深呼吸して自分が今何を思ってるのかを、ゆっくりと言葉に、声にした。

「だからこそ、アタシは高校は同じ所にアキが受けるって決めてくれた2年前は
凄く嬉しかった」

「……リサ」

「理由は正直何でもいいときえ思った、リボンよりネクタイが良いやバスケットが強いとか、パンが美味しいとか何でも良かった。ただアタシはアキともう1度、思い出を作るチャンスが欲しかったから」

本当は、アキと一緒にバンドを組んでる沙綾が羨ましかった。アタシには出来ないことで、願っても叶わない事だから。

アキとパン友のモカが羨ましかった、当時のアタシ達はアタシの一方的な勘違いと感情のせいでの今のような仲良しではなかったから。

正直、上げだしたらキリがないくらいに沢山の人に嫉妬したし羨ましいと思ってた。

「……アタシ、本当に最低な姉だと思ってる。小学生の時も中学生の初めも、ずっと酷い事ばかりしてきたよね」

「……そんな事ない、私が勝手にやってた事だよ」

「…でも、それを止めるのがお姉ちゃんでしょ？」

「……………」

「けど、結局アキを止めたのもアタシじゃない。だから、普通はこんな事言うの間違いだと思ってる。でもアタシ、これだけは譲れないんだ」

「……リサさん」

「アタシ、アキと学校通いたい。ずっと……！」

謝りたかった、アタシ達を守るためにずっと一人で戦ってくれてた妹にアタシは何もしてあげられなかった。

それどころか追い詰めるような事ばかりしてた。

アタシの思いが伝わったのか、アキはふにゃつと微笑んでからすぐ近くまで歩いてきた。

ほんと、アタシは何やってるんだろ。アタシの方が妹みたいじゃん。

「謝らないで、リサ」

「…え？」

「謝らないといけないのは私だから」

「…アキ？」

「…私さ、リサのためとか言っておきながら殆ど自分のためにやってた。悪い事だって分かってたのに、情けないよね」

「…そんな事！」

「優しいなあ、本当に。リサ、リサはチャンスが欲しいって言ったけどそんなの要らないよ」

何故、と聞く前にふわっと懐かしい匂いと温もりに包まれる。何が起こったのか全く頭が追いつかず、アタシは固まっていたらポンポンと背中を撫でられてアキに抱き締められてる事に気付いた。

「リサの気持ち、届いてる。ありがとう、私のお姉ちゃんできてくれて」

「……ア……キ」

「それだけで十分だよ！」

何か、アキのためにプレゼン開いたのに何でアタシが救われてるんだろ。そう思ったら笑っちゃって、友希那も微笑みながらグサツと来るような一言をお見舞してきた。

「貴方達、バカップルごっこは他所でやりさない」

「はい!？」

「アキ、貴方は天然たらしなの？リサもリサよ、何照れてるのよ」

「……天然たらし……？」

「……照れて……ないもん」

「ねえ、らーんー」

「…何？」

「なーんもやってないね、蘭」

「…うるさい」

「と、とりあえず！アタシの気持ちは全部伝えたから紗夜達にバトンタッチ!!」

アタシはもう半ば投げ付けるように紗夜へと視線を向ければ、紗夜は物凄く不機嫌そうというか「何でこの状況で渡してくるんですか」って言いたげにアタシを睨んでくる。

いや、あのね。もうこれ以上口を開いて何かを話したら、何かはわからないけどボロが出そうだし、とりあえずアタシがいっぱいいっぱいになるから無理。

紗夜はため息を吐きながらも、何とかアタシの気持ちを汲み取ってくれたようで

香澄とたえちゃんにプロジェクターを持つように支持してる。

まあ、天井から吊るすわけにも行かないし貼るにも壁はキツそうだからそうなるよねー……。

「牛込さん、例の方のスタンバイは宜しいですか？」

「はい、もう廊下に居てRAINでさっきから『まだ？ねえ、まだ入っちゃダメ？』って訴えてます……」

「……大変失礼な事をしたわね、後で私から謝罪しておきます」

「そんな、大丈夫ですよ……！」

「紗夜せんぱーい！準備終わりましたあー！」

「流石ですね戸山さん、では牛込さんお願いします」

全くもって話についていけないアタシ達だけど、誰かを連れてきたのかな？

え、そしたら日菜の参加を認めて欲しかったなあ……。

それからすぐにガチャッと扉が開く音がして、全員で目を向けるとそこには誰も
が知ってる人であり、逆に何でここに？って人が立っていた。

その人は——。

「……ゆり……さん……？」

「……アキ、久しぶりだね」

「ええ!？」

羽女組であるアタシ達は完全に口を開ける事しか出来ない。

え、いや、だって、グリグリギターボーカルでりみちゃんのお姉さんである先輩のゆりさんだよね？

アタシも関わりはないけど、今って期間的に大学受験だし時間的に平気なの!?
というか、アキと関わりがあったんですね！

「あのー、花女グループの私も良くわかんね……じゃなくて良くわからないんですけど……」

「あー、有咲は知らないよね。アキさんって、CHISPAに入る前はゆり先輩達のグリグリに助っ人としてライブに出てた時があったんだよ」

「え、マジで？沙綾、それマジな話なのか？」

「じゃあ、りみも関わりあったの？」

「う、うん。ちょっとだけ、お姉ちゃんがギターを習ってる時に私もベースを教え
て貰ったの」

「えー！りみりん、いいなー！」

「リサさーん、知ってましたー？」

「全然。全く、何も」

「即答……」

それから、ゆりさんは微笑んでからゆっくりと扉を閉めてから誰もが見惚れるん
じゃないかって思うぐらいに優雅に入ってきてアキに近付く。

アキはと言うと、少し申し訳なさそうに目を右往左往してどこを見ればって迷っ
てる感じ。

何でそんな顔してるんだろ、普通なら仲良かった先輩と久しぶりに会ったら嬉しいはずなのに。

そう思ったのはアタシだけじゃなかったみたいで、殆どの皆がキョトンっとしていたんだけど、その謎もすぐにわかった。

「アキー！アキがいるー！」

「わぁ!? やっぱりこうなりますよねー!!」

「お、お姉ちゃん!？」

「ちよ、ゆりさん!？」

いや、だってさっきまで凄い優雅に歩いて誰もが見惚れるような人が突然アキに抱き着いてるんだよ？

しかも、アキは分かっていたって言わんばかりに苦笑しながらどうにか離そうと頑張ってるけど、心を許した人に強く出来ないから離すに離せない。

紗夜も予想外だったのか、ポカーンとして隣に立ってる隣子はパニック状態。更に隣を見れば、沙綾が笑ってるけど目が笑ってなくてそんな沙綾を有咲が頑張ってる。

「お姉ちゃんお願いだから、アキさんから離れてー！」

「いくらりみのお願いで、それは無理！」

「ゆりさん！ここ病院！私一応、患者!!」

「……有咲」

「耐えろ沙綾ー！頼むから耐えろー！ゆりさんは先輩だからな、マジでお世話に

なってる人だから!!」

本気で収集がつかなくなってきた、これどうするのさ。

アタシはそう思っていたら、紗夜も思ったらしくて目線がパチッと合う。

あー、紗夜も予想外過ぎて何にも策が無いんだね。うん、その目を見れば何となく分かったよ。

アタシの隣にいるモカと蘭も、まるでお気に入りの玩具を取られた子供みたいな顔をしていてメンバーに抑えられてる。

これ、本当にどうするの。

「え、えーっとゆりさん？」

「リサちゃん何かかな？」

「アキとの関係を教えて貰っても大丈夫ですか…？その、ちょっとついていけな

くて……」

「んー、関係……。初恋の人？」

『は？』

多分、殆どの皆が言ったと思う。

流石のアタシもフォローするとか置いといて、マジで反応しちゃったもん。

え、何ということ。初恋の人？

全員が思った事は同じようで、全員でアキへと目を向ければアキはブンブんと首を横に振ってから口を開いた。

「わ、私じゃないから！確かに、ゆりさんに告白されたけど……！」

「……そんな、アキは私で遊んだの……？」

「へ!?遊んでないです!というか付き合っていないですよね!」

「…酷いよ、あんなに私の事好きって言うてくれたのに」

「ゆりさん、これ以上捏造しないで!」

「…これ、どうするのさ」

「…流石の私でも予想外です」

とりあえず、ゆりさんとアキを離れさせようというのがアタシ達の中で決まっ
て何とか離す。

りみちゃんが「お姉ちゃん!恥ずかしいからやめて!」って、怒ってるからゆ
りさんの事は任せる事にする。

アタシはアキへと詰め寄って、事実確認。

「アキ、今ならお姉ちゃん許してあげるから全部吐きだして」

「いやいや！待って、落ち着こ!?話せばわかるよ！」

「お姉ちゃん、アキをそんな風に育てた覚えはないよ……」

「お姉ちゃんは私のお母さん!？」

「っていう冗談は置いといて、実際はどーなの？」

「……冗談って。実際も何も付き合っていないよ」

「……ふーん」

「信じてないよね、その反応」

「そりゃ、まあアキにそういう浮いた話聞いたことないから」

「だって恋愛とか興味無いし」

アキの一言に全員が固まる。

一応、眠ってはいいたもののアキは現役女子高生。

恋愛に興味無いというのは、姉として些か心配になる部分があるにはある。

いや、だからと言ってアキが『この人が私の彼氏だよ』なんて連れてきた日にはアタシは笑えるかどうか不安で仕方ないけど。

「あ、アキさん……それ、本当ですか？」

「え、うん。だって、男とか興味無いもん。私より強い人じゃなきゃ、そもそも
論外☆」

「……かなり難しいですよ、それ」

「そう？男の人なんでもん、女の私より弱かったら駄目だよ。あ、でも」

「おお、アキさんにも好きな人がー？」

「女の子は私が守るから、彼女はアリかな☆」

ホントに無自覚の天然たらしだよねー……。

アタシは思わずため息を吐きながら、頭を抱える。

アキの一言で今まで何人の女の子を勘違いさせてきたのか、この子は全くもって
知らないし全て無意識なのだから怒るに怒れない。

中学とか、バレンタインの時期は本当に大変な事になってた。

アキの帰りがその日だけ異常に遅いのは毎年の事で、何で遅いの？って前に聞いたら「告白されてた」の一言。

男の子かなと思えば、異性もだし同性からもと聞いた時は本当にどうしようかと悩んだ。

ママは大爆笑してたけどね。

「……無自覚の天然たらしね」

「え？」

「……何でもないですよ」

「ねえ、アキー？」

「何ですか？ゆりさん」

「アキって彼氏か彼女、いた事ある？」

「お姉ちゃん!？」

「ごめんね、ちょっと気になっちゃって。目的は忘れてないから、この質問に答え
てもらったらちゃんとやるよ」

「まあ、いましたけど……」

『はあ!？』

「アキ！アタシ、それ聞いてない！」

「…………え、嘘でしょ」

「沙綾ー！マジで、お前しっかりしろおおお！」

「あ、アキさん！どっちですか!? 彼氏ですか、彼女ですか!？」

「いつ付き合ってたんですか!？」

香澄とあこがノリノリで、完全に身を乗り出して聞いている。

あの紗夜と友希那でさえ耳を傾けてるのだから、全員が知りたがってると言っても過言じゃないと思う。

アキの口が開かれる、そう思ったと同時に息を呑む。

「…………答えなきやダメだよ。彼女だよ、付き合ってたのは中学2年の春まで」

「えー！アキさんすごーい！」

「アキ姉モテモテなんだねー！」

「モテモテなのかな〜……」

「……お前か、沙綾」

「有咲!?もし私なら絶対に別れてない！」

「ちょ、本気で答えんなよ!？」

「……アキ、ここまで来たんだから吐き出そうか」

「……リサ、すっごくその笑顔怖いんだけど」

「言いましょか、アキさん」

「…あの、紗夜ちゃん。その手に持ってるものを降ろして」

原稿だったはずのものを紗夜は既に丸めて、棒状にしている。見てるアタシもちょっと怖い。

すると、アキの事を横から抱き締めようとしてる手が見えてアタシは詰め寄るのを止める。

「ねえ、アキ？先輩の私に教えてくれない？」

「…ゆりさん、真面目に怖いので落ち着いてください。それに相手に聞かないと別れたとはいえ、不味いですし……」

「秘密にしとくから、だめ？」

「うっ……」

「アタシも聞きたいな〜？」

「……………さん」

「ごめん、聞き取れなかった。もう1回言って？」

アキは、アタシの言葉に嘘でしよって顔をしてから本当に顔をアタシ達から逸らして小さな声で、本当に聞き取れるか分からないぐらいの音量でその人の名前というか、特徴を答えた。

けど、アタシには全くわからない。

「…………今の…花女の生徒会長…さん」

「七!?!」

「ま、まじかよ…!?!」

「な、七ちゃんが…………」

「…………もう無理」

「沙綾、生きて。辛いのはわかるよ」

「七先輩とお!?!」

「び、びっくり…です…」

「……何と言うことでしょう、あの鰐部先輩と……」

「呼んだかしら？」

『うわぁ!?!』

こんな修羅場に本人？が登場。

え、もうこれどうなるの。

アキによる爆弾発言。

グリグリとの絡みは、主に第1・5章の方で書くので宜しくお願いします。

It l a u g h s b y m y s i d e a t a n y t i m e .

——お姉ちゃんは優しさの輪に自分をいれない
だからその分、私が優しさを向ける。

今、アタシの目の前というかアキの病室は世に言うカオス状態になってる。
アキの元カノだったらしい鰐部先輩の参加によって、あの紗夜でさえ目を見開いて固まってるよ。

正直、中学2年の春まで付き合ってたと聞いた時は驚いたし、アタシ何も聞い

てないんだけど!?!なんて思ったけど話せるような状態じゃなかったなって冷静になった今なら分かる。

小学5年ぐらいからアタシとアキは仲が悪くなったって言うのは大袈裟かもしれないけど、あまりこうやって話すことは無かった。

アタシが一方的に距離を置いてたのもあるけど、アキもアキであまりアタシに干渉しなくなったのもある。

会うとすれば、それこそ朝ご飯の時と夜ご飯の時だけ。

少し前の紗夜と日菜みたいな感じなのが3年ぐらいあった。今考えれば、本当にアタシは何やってるんだって当時の自分に怒りたいほどに大失敗をした過去。

多分、アキと鰐部先輩が付き合ってたのはその時期なんだと思う。

「アキ、良くわからないから説明してくれる？」

「…あー、その私と七先輩が付き合ってた時があったって話を少しだけ」

「あー。あの時の話ね」

「七！私、何も知らないし聞いてないよ!？」

「ええ、ゆりに言っていないもの」

「…何で言ってくれなかったのー…」

「色々と理由があったから話せなかったのよ、でもあれは付き合ってたと言うのかしら？」

「うーん、今考えれば微妙ですよね」

「七ちゃん、どういう事…？」

鰐部先輩とアキはお互いに苦笑いしながら、りみちゃんの言葉にどう返そうか悩んでるようだ。

付き合ってたんじゃないのかな、微妙って事は多分ワケありなんだろうけど……。なんて思っていたら、アタシは鰐部先輩と目が合った。

あ、やば。どうしよう、挨拶でもしとく？

妹のアキがお世話になってますって、あれこの場合はなりました？どっちだろ。

「貴方がアキのお姉さんであるリサさんかしら？」

「は、はい！アキがお世話になってます！」

「ふふ、そんなに緊張しなくても大丈夫よ。それに貴方が知らなかったのも無理も無いから」

「…やっぱり、あの時なんですな」

「ええ、あまりここでは話す内容ではないけれど。当時を知ってるゆりと山吹さん、そして湊さんがいるから言うけれど付き合ってたというより引き止めてたの方があつてるわ」

『っ!?!』

その言葉にアタシだけでなく、当時を知ってる友希那と沙綾、ゆりさんが反応する。

引き止めてた、それはアタシにとってはとても重たい言葉。

アキはと言うと何も言わずに、視線を下に落として静かにしてる。

もしかして、アキも付き合ってたというより引き止められてたって感覚があつたって事…?」

「…だから、付き合ってたとは言えないわね。恋人らしい事なんて何もしてないも

の」

「……七先輩、あの時は……」

「お礼と謝罪の言葉は要らないわ、結局私には何も出来なかったから」

「……お姉ちゃん、沙綾ちゃん……?」

「……友希那さん、リサ姉……?」

りみちゃんとあこの声だけが病室に響く。

この内容を簡単に話すことなんて出来ない、アキにチラッと目を向ければアキはベッドから立ち上がっていた。

何をするんだろうと想着、少しでも様子を見ていたら窓を開けて一気に外から入ってくる風で髪の毛が靡く。

アキは何処か遠い場所を見るように空を見てからアタシ達の方へと振り返ると、ふにゃつと微笑んでから口を開いた。

「換気しないとね」

「……そうね」

「んー！気持ちいい風ー！」

「ちょ、香澄！お前空気読めって！」

「確かに……気持ちがいい……風です……」

「燐子先輩、奇遇ですね。モカちゃんもそう思いました」

「ちょ、モカ……！」

「もちろん、アキさんってこういう事を何も言わずにやっちゃうからカッコイイと思っただよね〜」

「は、はあ……？」

「もー、鈍いなあ〜。アキさん」

「んー？」

「換気、ありがとーございまーす」

「ふふ、どういたしまして。せっかくの花女の演説が始まるからね、空気を交えて始めなきゃ！」

ああ、アタシの妹は本当にカッコイイ。

アタシ達の間で漂ってた悪い雰囲気壊すために、誰も言っていないのにやってくるんだから。

アキの過去が絡むってのもあるんだろうけど、これを他の皆に聞かせるのはアタシも少し嫌だった。

鰐部先輩やゆりさんも、すぐにアキの意思が分かったみたいで紗夜の元へ行ってるからもう問題は無いと思う。

それから、アキは窓から離れてアタシの傍に歩いてきた。

「……アキ」

「リサ、もう大丈夫だから。気にしないで？」

「……うん、ごめん」

「もう、リサは謝り過ぎ！沙綾もだけど、お姉ちゃんだと謝りやすくなるのかな」

「アキさん、それなら香澄はどうなるんですか……」

「香澄ちゃん？香澄ちゃんは……謝りやすいってより、猪突猛進……？」

「ホントですか!?アキさん、ありがとうございますー！」

「今の褒めてねえよ!!」

「おー、有咲ちゃんナイスツッコミ！」

「アキさんも感心しないでツッコミしてください!？」

一気に病室に笑いが溢れかえる。

ああ、本当にアタシは情けないなあ。妹に頼りきりで、アタシよりもアキの方が全然しっかりしてるし周りが見えてる。

何でアタシが姉なんだろう、アキとこうやってまた話せるようになったあの日『アキにとって、一番のお姉ちゃんであられるように』って誓ったばかりなのに。アタシは何をやっても上手くいかない、Roseliaのベースリストだってアキの方が良いだろうなあ。

アキの方が技術面じゃ上だし、何よりアタシよりも経験とかは圧倒的に勝ってるんだもん。

「リサ」

「…アキ？」

「私にとってのお姉ちゃんはリサだけだよ、Roseliaのベースリストだってリ

サ以外に有り得ない」

「……え」

「何で分かったのって顔してる、私だっけずっとリサの隣にいたんだよ？リサが私の事分かるように私だっけ分かるよ」

「……アタシ」

「あー、もー！リサは、私にとってたった一人のお姉ちゃんなの！言うておくけど、お姉ちゃんにどれだけ頼まれたって私はRoseliaのベーシストになる気なんて無いからね！」

「……ええ!?!」

花女の皆には聞こえてないけど、羽女には聞こえてるであろうアキの言葉に驚く。いや、考えてたこととかがバレてたのは勿論驚いたんだけど Roselia のベーシストはアタシよりもアキの方が良いに決まってるじゃん……。

アタシはアキから視線を外して、床へと向ければすぐに頬を両手で抑えられたかと思えば無理矢理アキと視線を合わせられる。

「ええ!?!じゃない、Roseliaのベーシストはリサでしょ? Roseliaに加入したいと決めたのも、Roseliaのベーシストになりたいとも思ったのも私じゃなくてリサの意思」

「:でも」

「何弱気になってんのさ!!」

「っ!?!」

「私の知ってるお姉ちゃんは、皆のお姉ちゃんみたいで助けを求めている人には、すぐに手を差し伸べて自分の事なんて考えない人！……Roseliaの人達はそんなリサと一緒にバンドしたいって思ってくれたんじゃないの？」

「……あ」

「ね、あこちゃん？」

「そうだよ！あこ、リサ姉のベースが好きだもん!!」

「…あこ」

「そうよ、リサは何か勘違いしてるみたいだけど私は貴方を認めてRoseliaのメンバーに迎え入れたのよ。Roseliaのベースリストとして堂々としなご

い」

「：友希那」

「お姉ちゃん、これでもまだ Roselia のベーシストは私の方がいいと思う？」

アタシはこれ以上声を出したら、本当に泣きそうで首を横に振って否定する事しか出来なかった。

だって、ずっと足を引く張ってると思ってたからアタシはblankがあるし何よりアキから教えて貰った技術が無ければ、それこそこんな未来になってなかった可能性だってあるんだ。

アタシ一人ではここに立てなかったし、こんな幸せな未来になんてならなかった。

あこの付き添いで Roselia のオーディションに行って、友希那と紗夜に見てもらったために人数合わせと都合の関係で急遽ベースを弾いて、友希那に気持ちを

伝えて認めてもらって。

キーボード候補であこが燐子を連れてきてくれて、5人が揃ってライブをした。それから、アキとの繋がりで偶然にもバイト先の後輩であるモカを通してAfft ergrowの皆と繋がった。

そしてPoppin'Partyの子達が、まりなさんの僅かな手がかりの中でアタシ達を探して《ガールズバンドパーティ》に誘ってくれて、そこでずっとアキから話を聞いていた沙綾にも出会って、今では普通に話すようになった麻弥や花音、千聖がアキの友達だったり命の恩人だったり。

5バンド全員が協力してくれたお陰で、アタシは今こうやってアキと話せてる。何もかも、アタシがアキとの思い出の一つであるベースを握ったから歩けた軌跡、出会えた奇跡。

そっか、アタシはRoseliaのベーシストだって胸を張っていいんだ。

「ねえ、リサ？」

「…うん？」

「また聞かせてよ、リサのベース。Roseliaのベースストの音を」

「……うん、絶対に聞かせるからアタシの音☆」

「やった、楽しみだな」

アキはそう笑って、アタシから離れるとベッドに座り直して紗夜達の方花女の皆へと視線を向ける。

よし、アタシも切り替えなきゃ。なんて思っていたら、背中にポンッと誰かに触れられてるのに気付いた。

誰だろうと思えば羽女の皆で優しく笑ってる。

「リーサ先輩っ！絶対大丈夫ですよ！」

「そうですよ、リサさん！こっちは負けないですから！」

「…大丈夫です、あたしも信じます」

「蘭、珍しく正直だね。まあ、あたしも負ける気ないですけど」

「リサ先輩、きっと大丈夫ですっ！」

「リサ姉！あこもいるからね！」

「何もしてないけど、あたしだっているからね！リサちー！」

「大丈夫よ」

「……皆、うん。ありがとう！」

「紗夜ちゃん、花女の準備は整ったー？」

アキの言葉でアタシ達は紗夜達の方へと視線を向ければ、準備が整ったのか紗夜はアタシへと視線を合わせてくる。

譲れない物があると人は変わるって言うけれど、普段全く表情を変えたりしない紗夜があんなにも真剣な顔をしてるのはギターを握ってる時以外に見たことが無いかもしれない。

何か、聞くのが怖い。もしかしたら、アタシ達よりも全然いいものになってるかもしれない。

紗夜や沙綾達は、さっきまでこんな気持ちだったんだ。

「リサさん」

「…何かな、紗夜」

「あの時の言葉、私はまだしっかりと理解していなかったようです」

「…え？」

「私にくれたアドバイスです」

「…覚えててくれたんだ」

「ええ、貴方には沢山の事を気付かされたから覚えているわ。私は貴方よりも姉として未熟な部分が沢山ある、双子の姉として経験は圧倒的にリサさんの方が私よりも上でしよう」

「……………」。

「本来なら今までの感謝を含めて、ここはアキさんに羽女に通うべきだと言うべきなのかもしれない。貴方に貰ったアドバイスを本当の意味で理解出来ていると思えないけれど、きつとそれが正しいのかもしれない」

「……紗夜」

「でも、それは貴方に失礼。何より、行く学校を決めるのはアキさんの意思で決めてほしい。だから私は全力で貴方を倒すプレゼンをします」

「……もちろん、そのつもりで来て。アタシもそのつもりでぶつけたから」

「ええ、こちらも本気で行くわ。山吹さん、行けるかしら？」

「はい、大丈夫です」

紗夜に呼ばれた沙綾は、有咲と一緒にアキの前へとゆっくり進んでからアタシへと視線を向けてきた。

沙綾の目は、今までで見たことが無いぐらいに綺麗な空色。

アキが好きな色がアタシを捉えた。

「リサさん」

「うん？」

「私にとってアキさんと同じぐらいリサさんはお姉さんの存在です、だからこそ私は全力でアキさんに花女の良さを伝えます」

「沙綾」

「はい」

「相手に不足なし、だよ」

アタシの言葉に沙綾は一瞬驚いていたけど、すぐに微笑んで頷いてからアキへと目を向ける。

アキは何処か楽しそうに、ウズウズしたような様子で沙綾を見つめてる。

始まる、花女のプレゼンが。聞く側ってこんなにも緊張するんだね、アタシ知らなかった。

「アキさん、花女のプレゼン始めますね」

「うん、最初は沙綾と有咲ちゃん？」

「はい、私からは花女の魅力についてです。まずは花女の文化祭、今年はもう終

わっちゃったんですけど咲祭と呼ばれる文化祭があります。そこでは全学年が飲食店OKで、私のクラスではやまぶきベーカリーのパンを小さめに作ってそれをカフェのメニューとして売りました。これがその時の写真です！」

有咲が燐子から受け取ったであろうリモコンを使ってパソコンを操作し、燐子達を作ったスライドを香澄とたえちゃんが持つてるプロジェクターに映す。

そこには小さめに作られたパンと飲み物の写真、その隣にはそれを食べる有咲の写真。

「このように、各学年各クラスで好きなようにお店を考えて作れます。咲祭は私が高中生の時から大人気で、前にアキさんを招待したのでアキさんは分かるかもしれないんですけどレベルは凄く高いと思います！」

「やまぶきベーカリーの…パンが食べれる…！」

「……ううー。さーや、強い…」

「も、モカ！しっかりしろ！」

「モカ、パンに釣られすぎ」

「…やまぶきベーカリーのパンは強いんだよ？さーやはパンの創造主様だもーん」

「……さっきまで負けないとか言ってたくせに」

「もちろん、文化祭だけじゃありません。体育祭も盛り上がります、有咲写真お願い」

「おう。……てか、ほんとに私の写真使ったのかよ」

あはは……、有咲どんまい。

きつと、頬を赤く染めながら文句を口にしたのが聞こえたから有咲はギリギリまであの写真を使われる事に納得いかなかったんだらうなあ。

アタシなんて無許可で恥ずかしい写真が2枚使われたから凄く気持ち分かるよ、後で飲み物1本奢ってあげよう。

お姉さんからの奢りってことで。

有咲はリモコンのボタンを押して、沙綾へと目で変えたから進めろって言いたげに訴える。

「有咲、怒らないで。写真の事は謝るから」

「お前だったのかよ!? おたえか香澄かと思ってた……」

「えー、有咲酷いよー！ 私が出した写真は、有咲がお姫様の格好してるのだもん

！」

「香澄の方がタチ悪いじゃねえか！何でよりもよってそれなんだよ！つか、私ばっかじゃん！」

「酷いよ有咲、私が出したのは兎を追いかけてスカートが……」

「おたえはそれ以上喋んな!!」

「……有咲、進めていいかな？」

「あ、悪いって元はと言えばお前だから沙綾!!」

「あはは、ごめんね。……え、何で私が走ってる写真？ここはアンカーの紗夜先輩じゃなかった？」

「あー、それか。それ私がりにみに渡した奴で、話し合った結果綺麗に撮れてるから採用ってなった」

「え、有咲だって人の事言えないじゃん！」

「沙綾ちゃん……！落ち着いて……！」

有咲のキレっキレのツツコミがあったかと思えば、サラッと沙綾への一撃を言う有咲にアキは大爆笑してる。

何だろう、お互いプレゼンする時はこうなるのかななんて思ったのが紗夜にバレたらしくジト目で見られた。

いや、まるで私達は違いますって感じにアタシに訴えてくるけど大して変わらなような気がしなくもないけど……。

まあ、アキが楽しそうだからいっか！

「沙綾、原稿読むの忘れてる」

「……もう」

「ねえ、りみ。やっぱりポピパの子達面白いね」

「うん、皆面白いよ」

「さーやー、はやくうううう」

「沙綾、腕がつっちゃう」

「ごめん、再開するね」

「……あのなあ、お前ら何でその係をやるって最初に言ったんだよ」

「こうなるとは思わなかったんだもん。ね、おたえ？」

「うん、びっくりしてる」

「……マジかよ、真っ先に手を挙げてたから予想はついたけど。……はあ、沙綾進めようぜ」

「うん。アキさん、おまたせしました。続きは体育祭です」

「沙綾大丈夫だよー、香澄ちゃん達腕が辛かったら無理しないでね」

「はい！おたえ、壁に貼ろ！」

「うん、そうしょ。香澄天才だ」

「香澄ちゃん、おたえちゃん……」

「……有咲、これ進まないかも」

「……香澄とおたえ、とりあえず黙ってろ」

とりあえず、花女のプレゼンが始まった。でいいんだよね、これ。

アタシは思わず苦笑しながらポピパの子達の会話を聞きながら、そんな事を思っていた。

最近スローペースの投稿ですみません。

次回はアキの過去編と本編の同時投稿の予定です。
宜しくお願ひします！

ト
ト
Call my name with your voice. 《リクエス

初のリクエスト？を頂きましたので書きました。

アキ視点のお話です。

今日は初めて野球の試合を観に行く。

私がルールを知っているスポーツは、バスケットボールとサッカーぐらいで野球はあまり詳しくないから観ても分からないかなとは思っただけど、『せっかく生で見れるんでしょ？行ってきなよ！』とリサに言われたのもあって、今さっき返事を返した所だった。

何を着ればいいのだろう。

バスケの試合だと冬でもコート内は室内なのもあって、薄着でも別に問題ないしサッカーは逆に外だから少し厚着をしなければ寒かったりする。

でも、野球も外だから軽く厚着をしておけばいいのだろうか？

何も分らない。

「アキー？すっごい悩んでるけど、どうしたの？」

「……お姉ちゃん、野球観戦って何着ればいいの？」

「え!? うーん、アタシもアキがバスケやってたからバスケの試合ぐらいしか分からないなあ。サッカーの試合を見に行った時はどうしたの？」

「普通にフード付きパーカーと紺のジーンズで上着を羽織ったよ」

「野球も外だし、同じように温かい格好でいいんじゃないかな？アタシも分かん

ないから何とも言えないけど……」

「うーん、どうしよう」

「……偶には、こんなのかな？」

「絶対やだ」

リサが手にしていたのは、何処から持ってきたのかわからないスカートと合わせて下に穿く用の黒のタイツ。

リサが好きそうな服だと思う、という事は私が着るような服ではないってこと。沙綾とかが着れば可愛いとは思うけど、私はなあ……。

「そ、即答……」

「私がそういう服着ないの知ってるでしょ、お姉ちゃん」

「知ってるよー？でもさ、偶にはアキもこういう女の子らしいもの着た方がいいと思うんだよな」

「そういうのは、お姉ちゃんみたいな可愛い子が着るからいいの。私は似合わないよ」

「まーた、そうやって男の子みたいな服ばっか着て……。確かにアキはボーイッシュな服似合うけど、せっかく女の子として生まれたんだから……」

「はいはい、何言われても着ないからねー。んー、今日は青色のパーカー着ようかな」

「……もう！沙綾に可愛い姿を見せても誰も怒らないと思うけどー？」

「…………お姉ちゃん」

リサの言葉に、私は取ろうとしていたジーンズの手を止める。
さて、この勘違いしてるお姉ちゃんになんて言おうかな。

「…アキ？」

「私は、別に沙綾に可愛い姿を見せたいわけじゃないよ」

「え？」

「——可愛いよりもカッコイイ姿を見せたい。だよ」

「っ……、ほんっとアタシの妹は既に充分カッコイイと思うんだけどなあ？」

「そう？」

「……無自覚って罪だよね」

「え？」

「何でもなーい、それと沙綾もう下にいるよ」

「え!?!それ早く言ってよ!!」

「今言ったから許して☆」

「お姉ちゃん!!」

どっちが罪深いのさ!! なんて言ってる場合じゃない、沙綾を待たせてるなんて知らなかったから何も用意できてないし準備も出来てない。

お姉ちゃんの事だから家の中に入れて、多分だけど飲み物出して何か話してるとは思うけど待たせるなんてしたくない。

急いで近くに広げてた服の山から白い長袖のTシャツを着て、黒いジーンズを穿いてから青色のパーカーを羽織って最後に十字型のネックレスを首にかける。

それから鏡の前で軽く髪の毛を直して、サブバッグを手にとって中に財布を突っ込んで机の上に置きっぱなしにしてたスマホを手取る。

階段を降りれば、リサと沙綾の話し声が聞こえて慌ててリビングの扉を開けたせいなのか中にいた2人は驚いていて、リサは苦笑いを浮かべてる。

「…ちよーっと、アキ？」

「な、何？」

「こっちおいで」

「……メイクはしない」

「違うから！メイクしないから、アタシの方に来て？」

メイクをされるのかと思ったけど本当に違うみたいで、私は首を傾げながらもリサの所へ行けば「少し屈んで？」と言われてリサの目線に合うように屈む。

元々、身長的にリサの方が小さいなら私が屈むのは普段からある事だけどころろ。

なんて思っていれば、髪の毛に触れられる。

「クセが取れてないよ。はい、取れた」

「あ、ありがとう。慌てて出てきたから直ってなかったみたい」

「もう、アタシが急かしちゃったから何も言えないけど……。あ、帽子かぶってく？」

「あ、被ろうかな。って、夏用の帽子しか持ってない」

「……………今、アタシの冬でもかぶれる帽子でアキの服に合うやつ取ってきてあげる」

「…ごめん、何か」

リサは苦笑しつつも、「どういたしまして☆」と言って自分の部屋へと歩いていった。

何か、本当にお世話になりっぱなしだなあ。少しぐらい服への関心を本当に持った方がいいかもしれない。

……………いや、絶対にわかんない。

「ふふ、アキさんって家だとこんな感じなんですね」

「……沙綾、今の忘れて」

「あはは、忘れるのは難しいですけど新鮮なアキさんを見ました」

「…マジで恥ずかしいんだけどなあ」

クスクスと笑ってる沙綾から視線を外して、私は頬を掻く。

情けない所ばっか今日は見せてる気がする、家にいると完全にスイッチがオフに切り替わっちゃうから外で会う沙綾にもリサに頼ってる所はあんまり見せてない。それからすぐにリサが戻ってきて、黒いキャップを持ってきてくれて私に渡してきた。

「はい、お待たせ。これなら合うでしょ？」

「うん、ありがとう。……あれ、これ」

「アキさん？どうかしたんですか？」

「……ふーん。お姉ちゃん、モカとお揃いで買ったんだ？」

「!？」

「え？モカとお揃い？……あー、なるほど」

「ちよ、ちょっと！アキと沙綾、絶対に勘違いしてる！」

「いやー、最近ずーっとモカの話ばかりするから仲良いんだなあとは思ってたけ

ど、まさかねー？」

「ち、違うから！アタシ告っ………あ」

「アキさん、これ借りちゃって大丈夫なんですか？」

「んー、やめとこっか」

「お、お願いだから普通に借りて!？」

「あはは！お姉ちゃん、顔真っ赤だよ！」

へえ、まさか2人がそういう関係になってるなんてね。

モカもやるじゃん。

沙綾はニコニコしてリサを見て、リサもリサで沙綾が私のようにいじってくる

わけでもないから何も言えずに口をパクパクしながら否定してる。

そんなリサが面白くて笑っていけば、チラッと視界に入った時計を覗いて時間が結構経ってる事に気づく。

これはそろそろ色んな意味で不味いかな。

「沙綾、そろそろ行こっか？多分、お姉ちゃんこの後予定があるだろうし」

「あ、そうですね。リサさん、楽しかったです！」

「アタシも楽しかったよ！今度はゆっくりおいで！アキは帰ってきたら覚えといてね☆」

「……全力で忘れるね、それじゃあ行ってきます」

リサの背後には嫌なオーラが見えて仕方が無いので、私は沙綾の手を引っ張って

玄関から外へと出る。

帰ってくる時は覚悟しないと……、いや今日はもう帰らないって選択をしたい。それよりも意外と暑いな。着る服を間違えたかも。

「アキさん」

「ん？」

「今日は私の我儘に付き合ってくれてありがとうございます」

「我儘に入らないって、野球に関しては殆ど分からないけれど観てみたいとは思ってたから」

「それなら良かったです、野球観戦って凄く楽しいんですよ？バスケの観戦ももちろん好きですけど、野球も好きなんです」

「昔から沙綾って野球観戦好きだったよね、私ができるの基本的な事ぐらいだけど大丈夫…かな？」

「大丈夫ですよ、少し分かりづらい事とかがあったら私が教えます！」

「おー、これは頼もしい先生がいる」

「ふふ、今日は私を頼ってください！」

嬉しそうに胸を張って言う沙綾を見てみると、普段のお姉さんな沙綾じゃなくて年相応な沙綾を見れてる気がする。

そんな姿を見たら、何だか私には気を許してくれてるんだとか私の前では無理してない沙綾でいてくれるんだとか思ってた嬉しくなっていた笑ってしまう。

そんな私を見て不思議に思ったのか、それとも何か気に障ったのか頬を少し膨ら

ませて機嫌を悪そうにした沙綾が、私の目の前で足を止めて見てきた。

まあ、不機嫌そうにしても私の方が身長が高いから上目遣いで凄く可愛く見えてしまうのだけれど。

「…アキさん、何笑ってるんですか」

「あはは、ごめんごめん。ちょっとね」

「…………ア、キ、さ、ん？」

「違う違う、あのね可愛いなーって」

「…へ？」

「自慢するように胸を張って言う所とか、私が突然笑った事に対して不機嫌そうに

頬を膨らませてるのとか。年相応な所を私に見せてくれてるって事は、私に気を許してくれてるんだなって思ったの」

「……っ、ずるいですよ」

「えー、そう?」

「——アキちゃん」

「ん?」

「ばーか。私はずっと、アキちゃんに気を許してるよ」

「……ずるいのはどっちさ」

前を向いてしまったから怒らせちゃったかなって思ったけど、すぐに振り返って頬を赤く染めながら昔の呼び方で沙綾がそんな事を言うんだから私だって恥ずかしくなってくる。

こんな可愛い所を私は2年も見れなかったと思うと、ちょっと嫌だなあ。

「あのね、アキさん」

「なーに？」

「今日だけ、昔みたいに呼んでもいい……ですか？」

「もちろん、今日だけじゃなくてもいいよ？」

「それはダメですよ、皆に怒られちゃいます」

「そうかな、でも急にどうして？」

「——アキちゃんとかうやってお出かけするのが、私の楽しみで幸せな時間だったから！」

そう、満面の笑みで昔の沙綾が良く私に向けてくれていた笑顔で言われる。

突然そんな顔を向けられて私は何も言えず、沙綾の群青色の瞳に映ってる私は目を見開いて固まってる。

クスツと微笑んだ沙綾は、私の右手に手を伸ばして握り締めれば指を絡めて恋人繋ぎしてくる。

「それに……寂しかったから」

「……沙綾」

「ずっと夢だったの、アキさんといつか野球観戦に一緒に行くのとか海に行くのとか……他にも沢山」

「そっか、じゃあその夢を叶えていこうよ」

「え？」

「今日は野球観戦、今度は夏に海にでも行こう？それから沙綾が行きたかった場所に沢山行こう、あの日を消す事は出来ないけどこれからなら叶えられるからさ！」

「っ、うん！じゃあ、行こっ！」

沙綾は驚いた顔をしたけど、すぐに笑顔を浮かべて恋人繋ぎをした私の手を引って張りながら駆けへと走る。

楽しそうに笑ってくれるなら、君が無理をせずに自分の気持ちを伝えてくれると

いうのなら。

私は何だっつするよ、それこそお出かけなんて何処にでも行こう。

昔のように過ごしたいと言うのなら、私は学校が終わって沙綾が店番してる日は毎日お店に通おう。

それだけでは足りないほど私は君に支えられたから。

救われたから、間違ってしまった私を正しい道へと戻してくれたから。だから今度は私がしてあげる番。

「——ありがとう」

「アキさん？何か言いました？」

「なーにも！ほら、急いで行くよ！沙綾ちゃん！」

「うわあ!?アキちゃん足早すぎ！」

「あはは！急げー！」

駅に向かって、私は沙綾の手を引っ張りながら思いつきり走る。

私が今日する事はいつもと変わらず、沙綾に変な男の人が寄り付かないように彼氏役をする。

でも、そこに昔と同じを含めなきゃね。

「よっと、着いた〜」

「アキ…ちゃん！早すぎ…！！」

「あ、ごめん。でも、野球観戦楽しみなんだ」

「…ふふ、良かった。えーっと、電車はあの時間です…あ」

「あはは！敬語は無しだって！」

「つい癖で……、よし。あれに乗ろう、アキちゃん！」

「りょーかいっ」

ICカードを改札で通して、電車に乗り込むためにホームへと行く。

その間も繋がれた手は離さない。

通る人や学生さんがコソコソと何か話してるから、きっとカップルとでも思われてるんだろう。

沙綾もそれに気付いたのか、前までなら気まずそうにしていたのに今は横でクスクス笑ってる。

「アキちゃん、勘違いされてるね」

「だねー、何なら本当に彼氏になっちゃおう？」

「んー、アキちゃんが彼氏かあ。そしたら私、幸せだな」

「沙綾が…照れなかった……」

「ふふ、私だってそういう風に見てる……かもね？」

「…え、今のって」

「なーいしよ」

私と手を繋いでない方の手で、口元に人差し指を持っていくと小さい子に良く静かになって教える時のようにしながらウインクを向けてくる。

……ああ、もう。可愛すぎ。

ちよつとぐらいやり返しても……ね？

「きゃっ」

「他の奴なんて見るなよ、私だけを見て」

「……あ」

「可愛い、本当に私のものだけにしちゃうよ？そんな顔してると」

繋いでた手を離して、すぐに沙綾の肩を掴んで私の方へ引き寄せてから耳元でそ
う囁く。

傍から見ればキスしてるようにでも見えるのかな、周りにいる女子高生や女子大
生から黄色い悲鳴らしきものが聞こえる。

沙綾はと言うと、顔を真っ赤にしている私が顔を離して手も肩から離せばせめてもの対抗なのか私の右腕を掴んでギュッと抱き着いてくる。

「あはは、やり過ぎた？」

「…ばか、ほんとにバカなんですか」

「酷いなあ、沙綾も結構恥ずかしい事したよ？」

「……………っ」

「あー、ごめんごめん。でも、これだけ許してね」

「…?」

私は自分がかぶっていた帽子を取って、優しく沙綾にかぶせてあげる。

何でかなんてわからない、ただ今の沙綾を誰にも見せたくないんだ。

——私だけ見てればいいかな。って思っちゃった。

「……他の人に見せたくないから」

「……そういう所……ですからね」

「え？」

「っ、私ばかり……」

そこからは聞き取れなかった。

丁度、乗ろうとしていた電車が着いたことで電車の通る音が沙綾の声をかき消した。

今の声、聴き逃しちゃいけなかった気がするけど沙綾はすぐに電車の扉が開いた瞬間に私の腕を掴んだまま電車に乗り込む。

私もつられて一緒に乗って、いつものように扉の端へ沙綾にしようとしたら空いている席に座らされる。

もちろん、隣には沙綾が座る。

「……空いてるから座ろ？」

「うん、いいよ。手は繋いだままにする？」

「…だめ？」

「ううん、ダメじゃない」

「…良かった」

そう言った沙綾は、凄く嬉しそうに微笑んだ。

大切なものを見るように、大事なものを触れる時のように目を細めて本当に嬉しそうに微笑む。

その姿に思わず思ってしまった。

—— 凄く綺麗、だと。

「アキちゃん」

「え、あ、何？」

「私、綺麗？」

「え!？」

「ふふ、声に出たよ」

「…嘘でしょ、恥ず」

「それで私は綺麗かな？」

「…うん、綺麗だよ。可愛いし」

「そっか、ありがとう！」

今日の沙綾、めちゃくちゃグイグイ来てる気がする。

普段なら私がちょっとからかえば、すぐに顔を真っ赤にするのに何か今日は全然少ない。

まるで、私が普段握っているペースが今日は沙綾のビートペースに変わってる気がする。そう思ったら、何を言えいいのか分からなくなって私は顔を伏せるけどその先

には沙綾と繋がってる手。

それを改めて自覚にしたら一気に鼓動が早くなる。

これ、沙綾に伝わってないよね？聞こえてないよね？

そう思ってチラッと横目で沙綾にバレないように顔を覗けば、沙綾も顔を伏せていて顔は見えないけど髪の毛でさっきまで隠れていた耳が見えて真っ赤に染まってる。

今更だけど、今日の沙綾は髪の毛を普段とは違って上ではなく斜め下で紺色のリボンで纏めてる。

服装は暖かそうなコートと、中は白いニットを着ていて下はスカート。

うん、普通に可愛いんだけど今は言える状況では無いから後で伝えよう。

電車で揺られて野球の試合が行われてるスタジアムまで、私達は一言も話すことは無かったけれど手が離れる事は無かった。

「んー、着いたね。うわぁー、人が多い」

「今日の試合はどっちも結構人気のチームなので、多分多いんだと思います」

「さーやー？また、敬語に戻ってるけどー？」

「癖が抜けない……」

「あはは！まあ、とりあえず席は決まってるんだよね？」

「うん、決まってるよ。だから飲み物とか買いに行こ？」

「さーんせい。おお、やっぱり人が多いね」

会場に入ってスタジアムの中は、ライブなんかよりも人が多くてちょっと驚く。バスケの試合も人は多いけど、ドームほどの広さじゃないからあまり大人数が入れるわけじゃないから私は慣れてない。

沙綾は慣れてるみたいで、すぐに私を飲み物などが売ってる場所へと案内してくれる。

もちろん、人は多いけれど列に並んで2人で話してあげればすぐに私達の番が回ってきた。

沙綾は昆布茶、私はアイスコーヒーを選んでお金を払う。

と言うか、野球の試合会場に昆布茶なんて売ってるんだ……。

「沙綾渋いね、昆布茶って」

「あはは、有咲にも前に言われたよ。なかなか会場で売って無いけど、飲みたいなーって思ったから。あ、後でお金返すね」

「お金はいいよ、奢りってことで」

「え!? ダメですよ!」

「また敬語、じゃあ沙綾が敬語を使うたびに私が奢るってことで！」

「ええ!?それは難しいですって!……あ」

「はい、アウト」

「もう、アキちゃん！」

私は笑いながら席に向かって歩いていき、すぐに復活した沙綾に案内してもらいながら席に座る。

おお、こって結構いい席なのかな？

チーム名が分からないけど、何処かのチームのベンチの上ら辺に座ってるから多分いい席…のはず。

野球観戦はした事がないから分からないけれど。

それから暫くして試合開始のブザーが鳴ったと同時に、沙綾から応援に使う道具を手渡される。

これって手で叩くヤツだよな？

「これ使っていいの？」

「うん、私はこっちがあるから！」

「……ガチ勢って凄いね」

「ふふ、このチームが特に好きなの。だから、全力で応援するんだ！」

完全にフル装備と言っても過言では無いんじゃないかな？

マフラータオルを首に巻いて、コートを脱いで軽く腕まくりをして、そして私に来る途中で貸した帽子のつばを後ろにしてかぶり直した沙綾を見て私はそう思っ

た。

でも、私のバスケの試合の時も本気で応援してくれてるのを知ってるし、沙綾は応援するって決めたらとことん応援する子だと知ってるから別に変には感じない。逆に私も今日からこのチームを応援するためにも、家に帰ったら少し調べて詳しくなるうと思った。

「アキちゃん！ 4番のエース、冴島選手!!」

「4番ってことは、バッターで確実に打てる人になる所だっけ？」

「そう！ 冴島選手はバッターもポジションであるピッチャーのどっちも成績も良くて、エースなんだ！」

「おー、凄い人なんだね。あ、打った！」

「伸びてー！」

試合から目を離すことはせず、分からない私に必死に教えながらも試合に夢中の沙綾。

冴島選手が売ったボールは綺麗に飛んでいき、いわゆるホームランとなった。その瞬間、沙綾は勢い良く立ち上がって喜ぶと私に抱き着いてきた。

「やったー！ホームランだよ！」

「おっと……、やったね！」

「うん！」

危うく後ろに落ちるところだった。

何とか堪えて沙綾を支えれば、目の前には沙綾の満面の笑み。

すっごく嬉しいのは伝わるけど危なかったよ……。

それから順調に試合は進んで、9回裏で沙綾が応援してる側のチームが満塁、次のバッターは4番の開始早々にホームランを打ち放った冴島選手。

沙綾はと言うと、ギョツと私が応援グッズを持っていない方の手を握りしめて試合を見ている。

遂に、相手選手のピッチャーがボールを投げた。

視力がいいからなのか、それともバスケで培った動体視力のお陰かボールは早いけどストレートなのか、それともストレートでは無いのかだけは判断出来るようになった私は、そのボールを目で追う。

ボールの軌道が変わることはなく、ただただ真っ直ぐにキャッチャーのミットに向かっていく。

——真っ直ぐでの勝負、ストレートだ。

冴島選手が、思いっきりバットをボールに合わせて振ればボールは勢い良く飛んでいく。

「行っけー！」

誰かがそう叫んだ。

そのままボールは吸い込まれるように、電光掲示板へと真っ直ぐに飛んでいきガタンッとぶつかる。

満塁サヨナラホームラン。

初めての試合で、まさかこんなものが見れると思っていなかったから私は固まっ
てしまう。

「やったー！アキちゃん勝ったよ！」

「……凄い、凄いね！」

「うん！やったー！」

冴島選手に沢山のチームメイトが抱き着いてるのが見えるが、観客席も大盛り上がりだ。

隣に座っていた知らない男性や女性とハイタッチを交わし、後ろの席などに座っていた男性からは熱いハグを交わされた。

多分、男だと思われたんだろうな。

それから私と沙綾は、選手が観客席に礼をしたのを拍手で見送ってから帰りの電車に乗るために駅へと向かっていく。

もちろん、手は繋いで。

「はぁー、楽しかった〜」

「うん、初めてだったから分からない事だらけだったけど沙綾が教えてくれたから凄く面白かったよ！」

「ふふ、私はプレーする事は出来ないけど頑張ってる人を見るの好きなんだ」

「そうなの？」

「うん、だからアキちゃんがバスケしてるって聞いて試合を見に行った日の夜は寝れなかった。すっごく楽しかったし、興奮しちゃって全然寝れなかったんだよ？」

「うそ、私はすぐ寝ちゃったかな」

「ほんとほんと、だから今日も寝れない気がする」

「確かに今日の試合は凄かったもんね」

「それもあるけど、それだけじゃない」

「え？」

「——アキちゃんに見れた、アキちゃんところやって手を繋げれた。ギュッと抱き締めてくれた、こんなに幸せなのに寝れないよ」

「……沙綾」

駅に着いて改札を通ろうとした時に、私の手をギュッと離さないとはかりに握ってくる沙綾。

そんな言葉を聞いたら帰れなくなるよ、手を離したくなくなるじゃん。だから、私は改札を通らずに一旦駅の人気が無い方へ沙綾の手を引く。

「…アキちゃん？」

「ねえ、沙綾」

「うん？」

「……………私さ」

「うん」

「……………時間、大分遅いし本当は沙綾を家に送って帰るべきなのもわかってる」

「……………うん」

「……………でも、帰りたくないんだ。まだ沙綾と……………一緒にいたい」

「……………っ……………」

「……………だから」

「この辺だと何処にあるかな？」

「…え？」

「私もアキちゃんと離れたくない、だから…：…ね？」

本当に良いのだろうか。

でも、私も帰りたくなくて沙綾も帰りたくない。

意見は一致していて、お金にだって多めに用意していたから余裕は普通にある。一瞬、そう迷ってしまっただけで沙綾が目を逸らして頬を赤くしながらもチラッと私を覗いてるのを見たらそんな悩みはすぐに消えた。

お姉ちゃん、お母さん、お父さん。ごめんね。

私は我慢が出来ない悪い子だったみたい、今日だけは許してね。

「……沙綾」

「……うん？」

「好きだよ」

「……え」

「沙綾の事が一人の女の子として好き、誰にも渡したくないし誰にも沙綾の隣に立たせたくない。……迷惑だよね」

「……っううん、私も……好き……！」

勢い良く私に抱き着いてくる沙綾を受け止めて、ギュッと抱き締める。

あー、私なんで気づかなかったんだろ。

今日の私、ずっとおかしいなって思ってたのに自分が沙綾の事を友達ではなく一人の女の子として意識してた事にさえ気付かないなんて。

「沙綾」

「…アキちゃん」

「今日は、一緒にいたい」

「ぷ、あはは！かぶったね」

「ふふ、うん。……アキちゃん」

「…ん？」

「……私、まだまだ子供だから一人じゃ分からなくて登らないから一緒に階段登ってほしいな」

「……いいの？」

「アキちゃんじゃなきゃ、私は登らないよ」

「……そっか」

「うん。…どうかな？」

「…いいよ、私も一緒に登る。だって、私じゃなきゃ登れないんでしょ？」

「登れないよ、大人じゃないもん」

「足りないところ半分こ、だっけ？」

「あはは！うん、そういう事」

コツんつと私と沙綾は額をぶつけて笑う。

そして陽が傾いて夕日で包まれる中、私達は人気が無い野球の試合を見ていたスタジアムが見えるこの場所で、どちらが先とかではなく互いに近付いて――

「……しちゃったね」

「…うん、ねえアキちゃん」

「ん？」

「私の名前、呼んでほしい」

「いいよ、沙綾。愛してる」

「っ!?! ……アキ、愛してます」

「あ、また敬語」

「もう！ムード壊さないでよ！」

「ご、ごめん。じゃあ敬語使ったからホテル代は私が払うね」

「え!?!」

——アキ、か。呼び捨てもいいなあ。

後でお姉ちゃんに連絡しとこ。

可愛い彼女と過ごすから、家に帰るのは明日になりますってね。
愛して人から呼ばれる名前、少し特別に感じた。

あのあとのバイトへ行ったりリサ。

リサ「アキ遅いなあ、もう18時になるけど……」

モカ「どうしたんですかー？」

リサ「あ、モカ。アキがね、今日沙綾と野球観戦デートに行ってるんだけど全く連絡こないんだよね……」

モカ「んー、もしかして〜お互いに気持ち伝えて、帰って来なかったりして〜？」

リサ「えー、あのアキがー？沙綾なら有り得るけどって、連絡来た……うそ」

モカ「んー？……わーお」

Aki「可愛い彼女と過ごす事になったー。明日まで帰らないからご飯とか大丈夫だよ」

リサ「……マジかぁ」

モカ「……リサさん、うち来ます？」

リサ「……行く(昼間の勘違い、無くしたかったんだけどなあ……)」

F r o m d a w n t o d u s k .

著者 蒼井 綾

発行日 2019 年 3 月 23 日

ハーメルン -SS・小説投稿サイト-

<https://syosetu.org/novel/160860/>

本書の内容を無許可で転載・複写・複製することは、禁じられております。
